

【I類】

ウ冠の字形の下部が「ワ」の形になっているもの。

【II類】

ウ冠の字形の下部が「つ」の形になっているもの。



【III類】

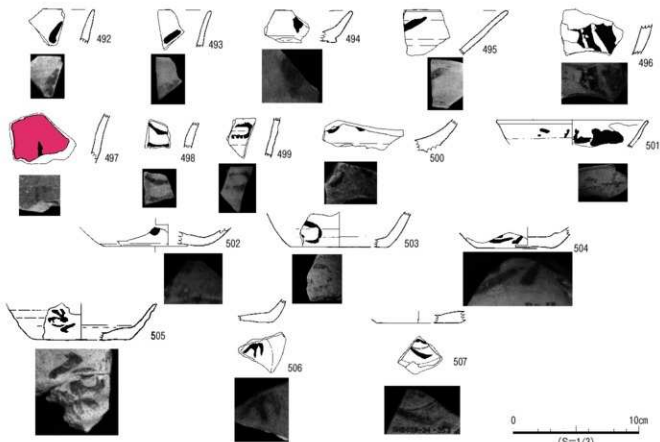
草書体で墨書されたもの。ウ冠の左側が巻く形状のものもある。



【IV類】

ウ冠が「千」とつながり、「巾」の形になっているもの。

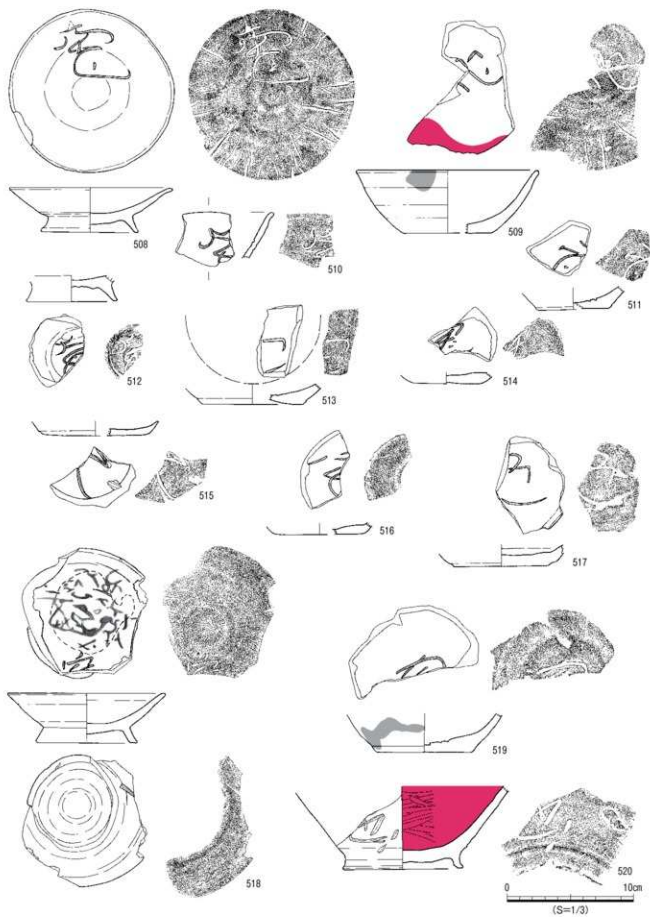
第86図 墨書・「宅」の分類



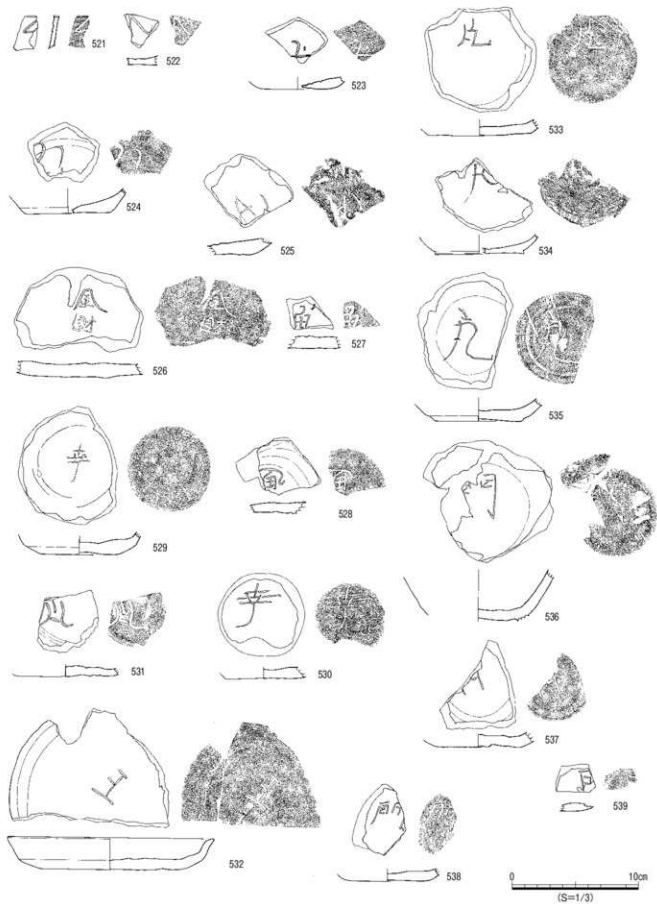
第87図 墨書土器3

529・530は「幸」と読めるもので、左下に撥ねる特徴がある。530は丸く整形された土師器杯の底部内面にヘラ

書きを施されている。531・532は「山」と読めるものである。533～535は「凡」と読めるもの、およびその一部



第88図 ヘラ書き土器 1



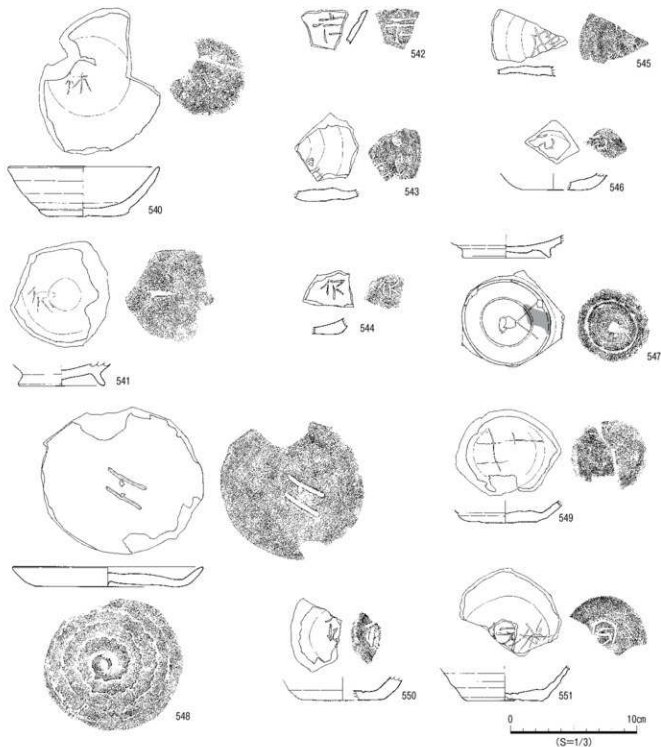
第89図 ヘラ書き土器2

と考えられるものである。536～539・641は「門」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。540は「林」と読めるものである。541～545は「作」と読めるもの、およびその一部と考えられるものである。546～549は記号と考えられる。550～640はヘラ書き・刻書の一部残存するもので判読ができないものである。552・553・555・557は、須恵器の壺外面に556・558～560・562・563・566・567・571・572・583は体部内面に、593

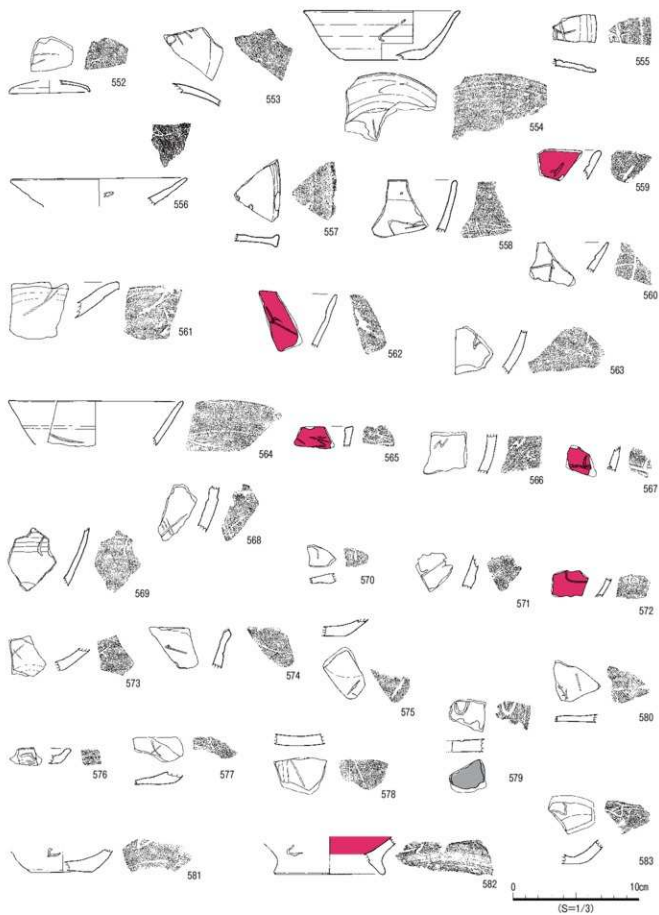
は底部内外面に、ヘラ書きが施されている。529・547・549・551・578・580・594・615は刻書が施されている。615は、317と同器形である。635は溝15号から出土している。

スタンプ文土器 (第94図642)

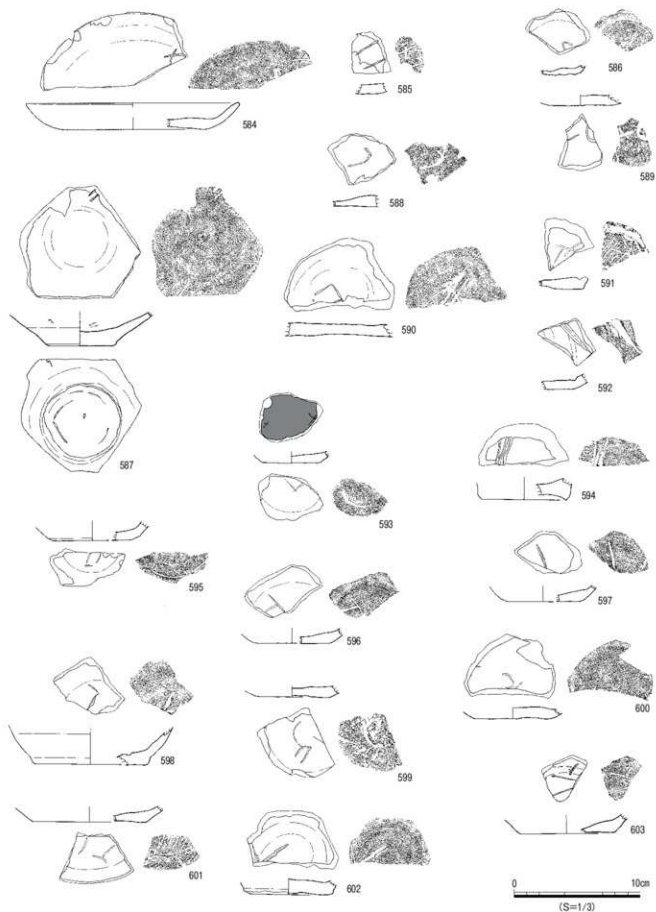
642の1点のみ出土した。底部内面に焼成前に押印したものである。端部が残存するもので判読できない。



第90図 ヘラ書き土器3



第91図 ヘラ書き土器4



第92図 ヘラ書き土器5



第93図 ヘラ書き土器6



第94図 ヘラ書き土器7

土師器・黒色土器・赤色土器（一般）

採掘 番号	調査 番号	出土区	層位	種類	器種	部位	質量 (g)			断面形状		胎土の色調	備考	
							口径	底径	高さ	内側	外側			
72	720	B-20	Ⅲ	土師器	甗Ⅱ Aa	口縁～底部	16.0	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	721	B-20	Ⅲ	土師器	甗Ⅱ Aa	口縁～底部	16.8	8.0	7.2	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	722	B-33	Ⅲ	土師器	甗	口縁～底部	18.0			横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	723	C-31	Ⅲ	土師器	甗Ⅱ	口縁～底部	13.2	7.2	2.8	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	724	C-33	Ⅲa	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	11.4	6.4	4.8	横ナデ	横ナデ	淡黄色		
	725	A-31	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.0	6.4	4.2	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	726	B-26-37	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	12.6	6.0	3.9	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	727	B-16	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.4	7.6	4.3	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色	内側入ス付着	
	728	C-33	Ⅲb	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	12.8	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色		
	729	B-24	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	14.2	7.0	6.1	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色		
	730	B-33	Ⅲb	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	12.6	5.3	4.5	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	731	A-28	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	12.8	6.4	4.0	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	732	B-18	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.2	6.4	4.4	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	733	E-25	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.2	6.0	5.3	横ナデ	横ナデ	にがい黄褐色		
	734	F-11	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.4	7.0	4.6	横ナデ	横ナデ	にがい黄褐色		
	735	B-33	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.2	6.6	3.9	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	736	D-32	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	13.0	7.1	4.5	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	737	C-18	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	14.4	6.2	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	738	C-31	Ⅲ	土師器	坪皿 Aa	口縁～底部	12.4	6.4	4.1	横ナデ	へラナデ	淡黄褐色		
	739	C-34	Ⅲb	土師器	坪皿 Ab	口縁～底部	12.8	6.3	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
740	B-33	Ⅲ	土師器	坪皿 Ab	口縁～底部	14.0	7.6	5.1	横ナデ	横ナデ	黄褐色			
741	C-34	Ⅲ	土師器	坪皿 Ab	口縁～底部	14.0	8.0	4.8	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
742	A-25	Ⅲ	土師器	坪皿 Ab	口縁～底部	13.2	7.4	4.6	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
743	C-37	Ⅲb	土師器	坪皿 Ab	口縁～底部	13.0	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
744	C-B-33	Ⅲ・Ⅲa	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.8	7.0	3.5	横ナデ	横ナデ	にがい黄褐色			
745	B-20	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.8	8.0	4.7	横ナデ	横ナデ	(内)淡黄褐色			
746	A-20	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.0	6.0	4.7	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
747	B-18	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.2	7.6	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色	又ス付着		
748	C-24	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.8	5.6	4.8	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
749	D-23	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.8	6.0	4.3	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
750	C-32	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.5	6.4	3.9	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
751	A-23	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.0	6.4	4.6	横ナデ	横ナデ	にがい黄褐色	又ス付着		
752	A-21	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.0	6.4	4.2	ミガキ	横ナデ	淡黄褐色			
753	C-36	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.8	6.6	3.4	ミガキ	横ナデ	淡黄褐色			
754	B-16	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.0	7.6	3.1	ミガキ	横ナデ	淡黄褐色			
755	B-33	Ⅲb	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.8	6.6	4.4	横ナデ	ミガキ・横ナデ	(内)淡黄褐色 (外)にがい黄褐色	外側入ス付着		
756	C-33	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.3	7.0	4.2	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
757	A-29	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	12.2	6.0	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色			
758	C-33	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	14.6	6.6	4.7	横ナデ	横ナデ	(内)淡黄褐色 (外)にがい黄褐色	外側入ス付着		
74	740	C-34	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	7.0	5.0	4.1	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	741	B-20	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	13.0	8.0	4.3	横ナデ	横ナデ	黄褐色		
	742	B-33	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	11.8	6.6	3.8	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	743	F-11	Ⅲ	土師器	坪皿 Bb	口縁～底部	10.0			横ナデ	横ナデ	(内)にがい黄褐色		
	744	F-8	Ⅲ	土師器	甗Ⅱ	口縁～底部	11.8	6.0	5.2	横ナデ	横ナデ	黄褐色	内側入ス付着	
	745	B-24	Ⅲ	土師器	坪Ⅱ	口縁～底部	5.2	5.2	3.1	横ナデ	横ナデ	にがい黄褐色	内側入ス付着	
	746	C-33	Ⅲb	土師器	坪Ⅱ	口縁～底部	13.0	6.6	2.7	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	747	B-28	Ⅲ	土師器	坪Ⅱ	口縁～底部	14.0	4.5	3.2	横ナデ	ナデ	(内)淡黄褐色 (外)にがい黄褐色		
	748	E-22	Ⅲ	土師器	甗	甗				ナデ	ナデ	淡黄褐色		
	749	B-33	Ⅲ	土師器	高台付皿Ⅱ	口縁～底部	12.8	6.6	4.2	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色		
	750	B-19	Ⅲ	土師器	高台付皿Ⅱ	口縁～底部	13.2	7.0	3.9	ナデ	ナデ	淡黄褐色	内側入ス付着	
	751	D-32	Ⅲ	土師器	高台付皿Ⅱ	口縁～底部	12.6	6.0	3.0	ナデ	横ナデ	淡黄褐色	内側入ス付着	
	752	C-32	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	14.6	9.4	2.3	ナデ	横ナデ	にがい黄褐色		
	753	C-19	D-19	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	13.4	10.3	1.6	横ナデ	横ナデ	黄褐色	
	754	C-24	Ⅲ	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	17.0	8.0	7.8	ナデ・ケズリ・指環底	ナデ・ケズリ・指環底	(内)淡黄褐色 (外)淡黄褐色		
755	B-20	Ⅲ	土師器	鉢Ⅲ	口縁～底部	16.2			ナデ	ナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色			
756	C-30	Ⅲb	土師器	鉢	口縁～底部	13.8	2.0	8.4	ハケメ	へラナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色			
75	726	A-23	Ⅲ	土師器	甗	甗部～底部	3.5	14.6		ナデ	へラナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色		
	727	B-20	Ⅲ	土師器	甗Ⅱ	口縁～底部	32.0			ナデ	ナデ・ケズリ	ナデ	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色	
	728	-	黒色土器Ⅰ	横椀Ⅱa	口縁～底部	15.2	8.2	5.6	ミガキ	ナデ	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色			
	729	D-25	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	横椀Ⅱa	口縁～底部	16.7	7.0	6.3	ミガキ	ミガキ・ナデ	(外)淡黄褐色		
	730	A8-11	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	横椀Ⅱa	口縁～底部	17.2	7.1	5.5	ミガキ	ミガキ	(内)黄褐色		
	731	C-31	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	6.6			ナデ	ナデ	(内)黄褐色 (外)にがい黄褐色		
	732	C-30	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	7.0			ミガキ	ミガキ	黄褐色		
	733	B-31	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	6.6			ミガキ	横ナデ	黄褐色		
	734	D-27	Ⅲ	黒色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	8.8	4.0	1.9	ミガキ	ミガキ	黄褐色		
	735	-	黒色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	9.8	7.8	1.5	ミガキ	ミガキ	黄褐色			
	736	D-32	Ⅲa	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.6	8.2	6.5	ミガキ	ナデ	(内)黄褐色 (外)にがい黄褐色		
	737	B-20	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.8	7.2	5.9	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色	横Ⅰ部 90前半	
	738	A-23	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.0	8.2	5.9	ミガキ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色		
	739	D-37	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.0	7.4	5.5	ミガキ	ミガキ	(内)黄褐色 (外)淡黄褐色		
	740	C-24	D-24	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.4	8.6	6.0	ミガキ	横ナデ	淡黄褐色	
741	B-19	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Ab	口縁～底部	15.4	8.3	6.4	ミガキ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色			
742	D	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Bb	口縁～底部	15.0	8.2	5.7	ミガキ・ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)にがい黄褐色	内側入ス付着		
743	B-19-20	D-19	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗Ⅱ Va	口縁～底部	15.8	8.2	5.3	横ナデ	横ナデ	(内)にがい黄褐色 (外)黄褐色		
744	B-24	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	甗	口縁～底部	15.6			ミガキ・ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色	内側入ス付着		
745	C-2	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	高坪	口縁～底部	7.6			ミガキ	ナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色			

赤色土器・須恵器（一般）

種別 番号	前期 番号	出土区	層位	種別	器種	部位	高さ (cm)			断面形状		胎土の色調	備考	
							口径	底径	器高	内側	外側			
	346	E-20	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	高坪	胴部				ヒガキ	ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色		
	347	C-32	Ⅲ	赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.0	8.0	3.8	ナデ	ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色 (特)にない黄褐色		
	348	C-34		赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.0	8.0	3.5	ナデ	ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色 (特)黄褐色		
	349	-		赤色土器Ⅰ	高台付皿	口縁～底部	13.4			ナデ	ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色		
	350	D-21	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	高台付皿	口縁～底部	13.6	6.2	36.9	ナデ	ナデ	透黄褐色 (特)黄褐色		
	351	B-37	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	坪Ⅰ	口縁～底部	18.8	5.8	4.9	ヒガキ・ナデ	ヒガキ	黄褐色 (内)黄褐色 (外)黄褐色	五郎九郎 80cm 坪0	
	352	C-33	Ⅲb	赤色土器Ⅱ	坪Ⅰ	口縁～底部	18.0	5.8	4.5	ヒガキ・ヒガナデ	ヘラウズ	(内)黄褐色 (外)黄褐色	坪0手法	
	353	B-37	Ⅲ	赤色土器Ⅱ	坪Ⅰ	口縁～底部	14.2	8.0	3.8	ヒガキ	ナデ	透黄褐色 (特)黄褐色		
	354	F-4	Ⅳ	赤色土器Ⅱ	皿	口縁～底部	14.2	9.4	2.4	横ナデ	横ナデ	(内)にない褐色 (外)黄褐色		
	355	D-31	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部～縁部				ナデ	ナデ	(内)透黄褐色 (外)にない黄褐色	底縁はつまみ縁	
	356	E-30	Ⅰb	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部～縁部				横ナデ	横ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	357	A-30		須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部～縁部				ナデ	ナデ	灰色 (内)にない黄褐色	底縁はつまみ縁	
	358	C-24	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部～縁部				横ナデ	横ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	359	D-9	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	黄灰色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	360	G-14	Ⅱ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	灰褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	361	D-27	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	362	G-7	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部				ナデ	ナデ	透黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	363	B-20		須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部				ナデ	ナデ	にない黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	364	F-8	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部				ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	365	E-31	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	366	D-25	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	灰褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	367	E-21	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部				ナデ	ナデ	にない黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	368	D-14	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	369	D-5	Ⅲ	須恵器	蓋Ⅱ	つまみ部				ナデ	ナデ	透黄褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	370	-		須恵器	蓋Ⅳ	つまみ部				ナデ	ナデ	(内)灰色 (外)にない黄褐色	底縁はつまみ縁	
	371	CO-2		須恵器	蓋	体部	13.1			ナデ	ナデ	にない黄褐色 (外)黄褐色		
	372	E-29	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	14.0			横ナデ	横ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	373	D-22	Ⅰb	須恵器	蓋	体部	14.0			横ナデ	横ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	374	B-30	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	15.0			横ナデ	横ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	375	D-7	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	13.0			横ナデ	横ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	376	B-28	Ⅲ	須恵器	蓋	体部				横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)にない黄褐色		
	377	D-20	Ⅲ	須恵器	蓋	体部	13.4			ナデ	ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色		
	378	D-28	Ⅲ	須恵器	蓋	体部				ナデ	ナデ	透黄褐色 (外)黄褐色		
	379	D-2	Ⅲ	須恵器	蓋	体部				ナデ	ナデ	透黄褐色 (外)黄褐色		
	380	CO-7	Ⅲb	須恵器	蓋	体部	15.8			横ナデ	横ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	381	A-28	Ⅲ	須恵器	小片蓋皿	体部	8.3	2.3	2.1	ナデ	ナデ	明褐色 (外)黄褐色	底縁はつまみ縁	
	382	B-27	Ⅲ	須恵器	覆Ⅰ Bb	口縁～底部	11.1	7.0	5.1	横ナデ	横ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	大ス付着	
	383	-		須恵器	覆Ⅰ	口縁～底部				横ナデ	横ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	384	-		須恵器	覆Ⅰ	底部				ヒガキ	ナデ	(内)灰褐色 (外)黄褐色	大ス付着	
	385	E-11	Ⅲ	須恵器	覆Ⅰ	第一面				ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	底縁黄褐色	
	386	B-27	Ⅲ	須恵器	覆ⅠV	胴部～底部				横ナデ	横ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	387	B-37	Ⅲ	須恵器	覆ⅠV	底部				横ナデ	横ナデ	(内)褐色 (外)黄褐色		
	388	E-28	Ⅲ	須恵器	覆Ⅰ	底部				横ナデ	横ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色	底縁黄褐色	
	389	F-1	Ⅲ	須恵器	覆Ⅰ	口縁～底部	14.0	9.4	3.9	横ナデ	横ナデ	黄褐色 (外)黄褐色		
	390	C-31		須恵器	坪ⅡAa	口縁～底部	12.0	8.8	4.1	横ナデ	横ナデ	にない黄褐色 (外)黄褐色		
	391	D-32	Ⅲb	須恵器	坪ⅡBb	口縁～底部	13.0	8.0	4.2	ナデ	ナデ	(内)黄褐色 (外)にない黄褐色		
	392	A-36	Ⅲ	須恵器	坪ⅡAa	口縁～底部	12.2	8.4	3.7	ナデ	ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	393	C-33	Ⅲa	須恵器	坪ⅡBb	口縁～底部	13.4	8.0	3.9	ナデ	ナデ	(内)黄褐色 (外)にない黄褐色	内面、大ス付着	
	394	F-10	Ⅲ	須恵器	坪ⅡBb	口縁～底部	14.8	8.8	4.4	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)黄褐色		
	395	D-19	Ⅲ	須恵器	坪ⅡAa	口縁～底部	9.0	5.8	3.0	ナデ	ナデ	黄褐色 (外)黄褐色	大ス付着(ナデ)	
	396	-		須恵器	皿	口縁～底部	18.2	11.8	2.1	横ナデ	横ナデ	透黄褐色 (外)黄褐色		
	397	C-22	Ⅰb	須恵器	皿	口縁～底部	14.8	11.8	1.9	横ナデ	横ナデ	黄褐色 (外)黄褐色		
	398	A-24	Ⅲ	須恵器	皿	口縁～底部	15.5	10.2	2.1	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)にない黄褐色		
	399	G-9	Ⅲ	須恵器	皿	口縁～底部	15.8	11.4	1.8	横ナデ	横ナデ	(内)黄褐色 (外)にない黄褐色		
	400	B-29	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	30.4			同心円状タタキ	平行タタキ	灰褐色		
	401	D-30	E-31	Ⅰb・Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	30.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色	
	402	D-22	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	10.8			平行タタキ	平行タタキ	灰黄色		
	402	-		須恵器	蓋	口縁部	20.4			同心円状タタキ	平行タタキ	(内)黄褐色 (外)黄褐色		
	403	C-24	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁～胴部	13.8			同心円状タタキ	平行タタキ	灰褐色		
	404	E-24	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	13.1			同心円状タタキ・ナデ	平行タタキ	黄褐色		
	405	G-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	10.2			同心円状タタキ	平行タタキ	黄褐色		
	406	D-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	20.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色		
	407	C-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	20.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色		
	408	D-24	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	17.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰白色		
	409	A-23	Ⅲ	須恵器	蓋	胴部～底部	15.0			同心円状タタキ	平行タタキ	灰色		
	410	C-31	D-32	Ⅰ・Ⅲ	須恵器	大蓋	口縁部	46.0			同心円状タタキ・ナデ	ヘラナデ	灰白色	
	411	A-31	C-27	Ⅱ・Ⅲ	須恵器	鉢Ⅰ	底部			13.6		指頭圧痕 平行タタキ	灰白色	底縁同心円状タタキ
	412	B-20	Ⅲ	須恵器	鉢Ⅰ	底部				9.0		ヘラナデ・指頭圧痕 ナデ・指頭圧痕	灰褐色	
	413	B-20	Ⅲ	須恵器	鉢Ⅰ	胴部～底部	14.4			ナデ・指頭圧痕	平行タタキ	黄褐色		
	414	C-30	Ⅲ	須恵器	小蓋	口縁部	8.3	9.0	8.0	ナデ	ナデ	灰褐色 (外)黄褐色		
	415	E-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁～胴部	12.8			指頭圧痕・黄褐色	平行タタキ	黄褐色		
	416	D-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	16.8			横ナデ	横ナデ	黄褐色 (外)にない黄褐色		
	417	B-20	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部	18.0			指頭圧痕・ナデ	ナデ	灰色		
	418	D-31	Ⅲ	須恵器	蓋	口縁部				指頭・ナデ	大工ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	419	C-36	Ⅲ	須恵器	蓋	胴部	4.8			ナデ・指頭圧痕	ナデ	(内)にない黄褐色 (外)黄褐色		
	420	D-31	Ⅱ・Ⅲ	須恵器	蓋	胴部				指頭圧痕・黄褐色	平行タタキ	黄褐色		
	421	E-30-31	Ⅲ	須恵器	蓋	胴部				大工ナデ・指頭圧痕	大工ナデ	灰褐色		
	422	B-33	Ⅲ	須恵器	蓋	胴部				大工ナデ・ナデ	大工ナデ	灰褐色		

須恵器 (ほか (一般))

種別 番号	掲載 番号	出土区	層位	種別	器種	部位	質量 (cm)			基準位置		胎土の色調	備考
							口径	底径	高さ	内面	外面		
81	423	A-30 C-31 D-32	II・III	須恵器	壺	胴部~底部	10.8			ナデ・隆縁圧痕・タタキ	平行タタキ	灰黄色	
	424	A-17 C-31・32	II・III	須恵器	壺	胴部~胴部				隆縁圧痕	平行タタキ	灰黄色	
	425	A-24C-29	III	土製品	壺	胴部~底部	16.0			隆縁圧痕	平行タタキ	灰黄色	
	426	F-20	II	土製品	水甕?	口~肩	12.2			ナデ	ナデ	淡黄色	
	427	D-25	II	土製品	水甕?	口~肩	13.6	8.8	4.1	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	
	428	-	II	土製品	水甕?	口~肩	12.2	5.2	8.1	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄色	
	429	A-30	III	須恵器	円蓋種	蓋部					ナデ	にぶい褐色	
	430	-	III	須恵器	文字種	蓋部						反褐色	
	431	F-19	II	須恵器	壺	体部				ナデ	ナデ	灰白色	

紡錘車・円形土製品 (一般)

種別 番号	掲載 番号	出土区	層位・遺構	器種	種別	質量 (cm)		胎土の色調	備考
						最大径	最大厚		
82	432	C-32	II	土製品	紡錘車			浅黄褐色	
	433	F-9	II	土製品	紡錘車	6.1	1.05	黒色	
	434	B-33	III	土製品	紡錘車		0.8	にぶい黄褐色	
	435	A-28	III	土製品	紡錘車		0.85	浅黄色	
	436	C-37	III	土製品	紡錘車		0.8	にぶい黄褐色	
	437	D-6	III	土製品	紡錘車	5.1	1.0	褐色	
	438	-	-	土製品	紡錘車	6.2	0.8	にぶい黄褐色	
	439	A-30	III	土製品	紡錘車	6.0	0.8	浅黄褐色	
	440	C-33	II	土製品	紡錘車		0.85	灰色	
	441	C-33	IIIb	土製品	紡錘車		0.6	淡黄色	
	442	C-32	IIIb	土製品	紡錘車	6.5	0.95	浅黄褐色	
	443	F-25	II	土製品	紡錘車	6.6	1.1	浅黄褐色	
	444	A-30	III	土製品	紡錘車		0.8	浅黄褐色	
	445	C-32	II	土製品	紡錘車		0.9	浅黄褐色	
	446	B-33	II	土製品	紡錘車		0.8	黄褐色	
	83	447	C-33	IIIa	土製品	紡錘車		0.7	浅黄色
448		C-33	-	土製品	紡錘車		0.8	褐色	
449		-	-	土製品	紡錘車		1.0	浅黄色	
450		A-31	III	土製品	紡錘車		0.6	浅黄褐色	
451		A'-31	-	土製品	円形土製品		1.2	浅黄褐色	
452		AA'-17・18	-	土製品	円形土製品	6.7	1.1	黄褐色	
453		-	-	土製品	円形土製品	7.6	1.0	灰色	
454		C-30	III	土製品	円形土製品	7.0	0.9	浅黄色	
455		E-30	II	土製品	円形土製品		1.25	浅黄褐色	
456		A-30	-	土製品	円形土製品	6.5	0.85	黄褐色	
457		B-32	II	土製品	円形土製品		0.75	黒色	
458		C-27	II	土製品	円形土製品	3.0	0.9	浅黄褐色	
459		B-36・37	II	土製品	円形土製品		1.0	浅黄褐色	
460		B-30	III	土製品	円形土製品		0.7	浅黄褐色	
461	D-35	-	土製品	円形土製品	6.8	0.9	明黄褐色		

墨書土器 (一般)

種別 番号	掲載 番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	質量 (cm)			備考
								口径	底径	高さ	
84	462	B-20	II	須恵器	赤色土器 I 類	体部外周	宅	13.2	6.8	4.9	逆位 宅 II 類
	463	-	II	須恵器	土師器 环	体部外周	宅	12.4	6.4	4.4	逆位 宅 III 類
	464	B-14	II	須恵器	黒色土器 I 類	体部外周	宅	14.5	7.6	6.2	正位 宅 IV 類
	465	B-20	II	須恵器	須恵器	体部外周	宅	13.0			右側位 宅 II 類
	466	C-33	III	須恵器	須恵器 环	底部外周	宅	13.6	7.8	4.4	宅 I 類
	467	D-27	III	須恵器	土師器 环	体部外周	宅a	11.3	7.0	3.8	
	468	D-21	III	墨書への書付	須恵器 壺	内面・体部外周	■宅a		9.4		
	469	C-34	IIIb	須恵器	土師器 环	底部外周	宅		6.7		宅 I 類
	470	D-25	III	須恵器	土師器	体部外周	宅				右側位
	471	D-20	V	須恵器	土師器	体部外周	宅a				

墨書土器 (一般)

編目 番号	掲載 番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	流量(cm)			備考	
								口径	底径	高さ		
85	472	C-32	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	口縁部外流	福	152	7.6	5.5	正位	
	473	C-32	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ 高台付皿	口縁部外流	福	12.5	7.0	3.6	左側位	
	474	C-32	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ	口縁部外流	福				左側位	
	475	B-22	Ⅱ	灰青	土師器	口縁部外流	福				左側位	
	476	D-21	Ⅲ	灰青	土師器 坏	体部外流	有	142	5.8	4.6	正位	
	477	D-15	Ⅲ	灰青	土師器 坏	体部内流	中	137	7.5	4.7	正位	
	478	D-20	Ⅱ	灰青	土師器	体部外流	方				正位	
	479	C-13	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	方				左側位	
	480	D-2	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	作				正位	
	481	-	-	灰青	土師器	口縁部外流	作				正位	
	482	D-15	Ⅱa	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	体部外流	記号	162	9.2	5.5	三角形	
	483	-	-	灰青	土師器 坏	体部外流	記号・乙	130	6.4	4.4	四角形・右側位	
	484	B-20	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	六				正位	
	485	B-5	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ	体部外流	■					
	486	B-15	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	■	132				
	487	D-21	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	■	7.6				
	488	C-33	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ	体部外流	■					
	489	C-2	Ⅲ	灰青	土師器	口縁部外流	■	11.6				
	490	-	-	灰青	褐色土器Ⅰ 鉢	体部外流	■					
	491	B-23	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	■					
	492	E-14	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	■					
	493	G-7	Ⅱ	灰青	土師器	体部外流	■					
	494	C-6	Ⅲ	灰青	土師器 皿	体部外流	■					
	495	C-32	Ⅱ	灰青	褐色土器Ⅰ	体部外流	■					
	496	B-34	Ⅲ	灰青	土師器	体部外流	■					
	497	-	-	灰青	褐色土器Ⅰ	体部内流	■					
	498	E-14	Ⅱ	灰青	土師器	体部外流	■					
	499	-	-	灰青	褐色土器Ⅰ	体部外流	■					
	500	-	-	灰青	褐色土器Ⅰ	体部外流	■					
	87	501	E-21	Ⅲ	灰青	土師器	内面・体部外流	■・■	12.0			
		502	C-37	Ⅲa	灰青	土師器 坏	体部外流	■	8.6			
		503	F-30	Ⅱ	灰青	土師器 坏	体部外流	■	7.6			
		504	C-37	Ⅲa	灰青	土師器 坏	体部外流	■	6.0			
		505	C-16	Ⅲ	灰青	土師器 坏	体部外流	■	7.7			
		506	B-21	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部外流	■	11.4			
		507	B-34-35	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部外流	■	4.0			
		508	C-3	Ⅲ	灰青	土師器 高台付皿	体部内流	■	13.0	7.6	3.5	室置類
		509	C-33	Ⅲ,Ⅲa	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	14.4	7.0	4.9	室置類・外流久付着
		510	A-28	Ⅲ	灰青	土師器	体部内流	宅				正位・室置類
		511	B-27	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	5.8			室置類
512		C-32	Ⅲb	灰青	土師器 坏	底部外流	宅	7.2			室置類	
513		-	-	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	底部内流	宅	8.0			室置類	
514		C-32	Ⅲb	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	底部内流	宅	5.6				
515		D-27	Ⅲ	灰青	土師器 鉢	底部内流	宅	8.0				
516		A-20	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部外流	宅	7.0			室置類	
517		-	-	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	7.4			室置類	
518		-	-	灰青	土師器 鉢	底部内面・体部外流	宅・■	12.4	8.0	3.9	室置類	
519		E-27	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	7.6			室置類・外流久付着	
520		F-24	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	底部外流	宅	9.5			正位・室置類	
88	521	C-30	Ⅲa	灰青	土師器	体部内流	宅					
	522	D-21	Ⅲ	灰青	土師器	底部内流	宅					
	523	C-32	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	6.2			室置類	
	524	C-27	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	宅	6.8			室置類	
	525	-	-	灰青	土師器 皿	底部内流	宅					
	526	C-27	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	倉財					
	527	B-33	Ⅲ	灰青	土師器	底部内流	倉					
	528	B-36-37	Ⅲ	灰青	土師器	底部内流	倉					
	529	B-20	Ⅲ	灰青	土師器 小皿	底部内流	奉	6.0				
	530	A-23	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	奉	6.4				
	531	C-29	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	山	8.0				
	532	C-29・30	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	山	16.3	9.0	2.5		
	533	B-33	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	凡	8.4				
	534	B-37	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	凡	7.0				
	535	B-36-37	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	凡	6.8				
	536	B-36	Ⅲ	灰青	土師器 斝	底部内流	門					
537	B-32	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	門	8.6					
538	D-34	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	門	7.0					
539	B-34	Ⅲb	灰青	土師器 坏	底部内流	■	6.0					
90	540	C-28	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	林	12.0	7.0	3.9		
	541	F-11-12	Ⅲ	灰青	土師器 鉢	底部内流	作	6.7				
	542	C-30	Ⅲ	灰青	土師器	体部内流	作					
	543	B-31	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	作					
	544	B-20	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	作					
	545	C-21	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	作	9.0				
	546	-	-	灰青	土師器 坏	底部内流	■	6.0				
	547	B-28	Ⅲ	灰青	褐色土器Ⅰ 罎	底部外流	記号	7.0				
	548	D-37	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部内流	記号	152	7.0	1.6		
	549	C-32-33	Ⅲ,Ⅲa	灰青	土師器 坏	底部内流	記号	6.0			九字	
91	550	C-29	Ⅲ	灰青	土師器 坏	底部内流	■	7.0				
	551	-	-	灰青	土師器 坏	底部内流	記号	6.0				
	552	B-21	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部外流	■	6.4				
	553	-	-	灰青	土師器 皿	底部外流	■					
	554	C-33	Ⅲb	灰青	土師器 坏	体部内流・底部外流	■・■	12.4	6.8	3.9		
	555	E-13	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部外流	■					
	556	-	-	灰青	土師器 坏	体部内流	■	14.0				
	557	E-24	Ⅲ	灰青	土師器 皿	底部外流	■					
	558	D-24	Ⅲ	灰青	土師器	底部内流	■					

墨書土器 (一般)

編目 番号	規格 番号	出土区	層位	種別	器種	記載部位	文字	注量(cm)			備考
								口径	底径	高さ	
91	559	-	-	へろ壺	赤色土器 I	体部内面	■				
	560	E-28	Ⅱ	へろ壺	土器	体部内面	■				
	561	D-31	Ⅱ	へろ壺	土器	体部外面	■				
	562	B-32	Ⅱ	へろ壺	赤色土器 I	体部内面	■				
	563	A-17・18	-	へろ壺	土器	体部内面	■				
	564	-	-	へろ壺	土器	体部外面	■				
	565	E-28	I b	へろ壺	赤色土器 I	体部内面	■	13.8			
	566	D-31	Ⅱ	へろ壺	土器	体部内面	■				
	567	D-28	Ⅱ	へろ壺	土器	体部内面	■				
	568	-	-	へろ壺	土器	体部外面	■				
	569	-	-	へろ壺	須臾	体部外面	■				
	570	C-32	Ⅲb	へろ壺	土器	底部内面	■				
	571	C-27	Ⅲ	へろ壺	土器	体部内面	■				
	572	B-27	Ⅲ	へろ壺	土器	体部内面	■				
	573	D-33	Ⅲ	へろ壺	土器	体部外面	■				
	574	C-33	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■				
	575	C-33	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■				
	576	E-37	Ⅱ	へろ壺	土器	底部外面	■				
	577	D-32	Ⅲa	へろ壺	土器	底部内面	■				
	578	B-32	Ⅲ	別書	土器	底部外面	■				
	579	C-27	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■				
	580	-	-	別書	土器	底部外面	■				
	581	D-23	Ⅲ	へろ壺	土器	体部内面	■	4.8			
	582	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■	8.6			
	583	D-21	I c	へろ壺	土器	底部内面	■				
	584	B-33	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■	16.8	11.3	2.1	
	585	D-31	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■				
	586	C-20	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■				
	587	F-10	Ⅲ	へろ壺	土器	体部内面・外面	■	5.6			
	588	D-23	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■				
	589	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■	6.4			
	590	F-28	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■				
	591	-	-	へろ壺	土器	底部内面	■				
592	-	-	へろ壺	土器	底部内面	■					
593	B C-31	-	へろ壺	黒色土器 I 坏	底部内面・底部外面	■	4.8				
594	-	-	別書	土器	底部内面	■	6.6				
595	E-28	Ⅱ	へろ壺	土器	底部外面	■	6.0				
596	C-32	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	6.0				
597	C-33	Ⅲa	へろ壺	土器	底部内面	■	5.8				
598	B-33	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	5.8				
599	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■	6.0				
600	C-20	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	5.8				
601	C-25	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	9.0				
602	C-27	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	6.2				
603	C-32	Ⅲa	へろ壺	土器	底部内面	■	7.4				
604	A-28	Ⅱ	へろ壺	赤色土器 I 坏	体部内面	■	4.4				
605	D-32	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	5.8				
606	C-32	Ⅲa	へろ壺	土器	底部内面	■					
607	D-30	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■					
608	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■					
609	A-30	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■	8.8				
610	E-21	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	7.2				
611	F-28	Ⅱ	へろ壺	土器	底部内面	■	6.0				
612	B-33	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	6.2				
613	F-11・12	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	7.8				
614	B-32	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	7.0				
615	C-32	Ⅲa	別書	土器	底部内面	■					
616	B-34	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	5.8				
617	C-33	Ⅲb	へろ壺	土器	底部内面	■					
618	C-34	Ⅲa	へろ壺	土器	底部内面	■	8.0				
619	C-27	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■	5.8				
620	C-28	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■					
621	E-24	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	7.0				
622	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■	7.5				
623	W-6	-	へろ壺	土器	底部外面	■	6.2				
624	-	-	へろ壺	土器	底部外面	■	5.4				
625	D-28	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	7.6				
626	A-28	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	8.0				
627	D-27	Ⅲ	別書	土器	底部内面	■	7.6				
628	D-28	Ⅲ	へろ壺	赤色土器 I 坏	底部外面	■	5.6				
629	B-15	Ⅲ	へろ壺	赤色土器 I 坏	底部外面	■	7.8				
630	A-28	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	+	12.8	6.4	4.2		
631	D-31	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■					
632	D-25	Ⅲ	へろ壺	赤色土器 I 坏	底部外面	■	7.0				
633	D-30	Ⅲ	へろ壺	黒色土器 I 坏	底部外面	■	7.0				
634	E-21	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	6.6				
635	C-16	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	14.2	4.4	4.3		
636	A-31	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	4.8				
637	B-33	Ⅲ	へろ壺	黒色土器 I 高台付皿	底部外面	+	13.0				
638	D-28	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	7.4				
639	E-30	Ⅲ	へろ壺	土器	底部外面	■	10.0				
640	E-30-31	I b	へろ壺	土器	底部外面	■	6.0				
641	C-29	Ⅲ	へろ壺	土器	底部内面	■					
642	B-33	Ⅲ	スタンプ文	土器	底部内面	■	7.6				

2 中世の調査

(1) 調査の概要

調査は中世の調査においても、10m四方のグリッドを基本に、調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区内は河川敷という立地もあり、層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握、出土遺物の層認定に非常に苦慮した。また、多数のピットが検出されたため、掘立柱建物跡の認定作業は困難を極め、整理作業において図上での復元も試みた。遺構の時期認定は、出土遺物を中心に記録層位、埋土を検討して認定を行った。

(2) 出土遺物の分類方法

中世の出土遺物については、11世紀後半(平安末)から16世紀初頭の資料について、中世の遺物として報告する。土師器は、底部の切り離しが糸切りの資料を、中世土師器として取り扱った。越州窯系青磁については、青磁の分類上、中世の青磁のなかで報告する。また、1580年代から17世紀初頭に相当する青花については、時代が近世と重なるが、中世の遺物として取り扱った。

分類方法については、土師器、輸入磁器、輸入陶器、国内産陶器、瓦、土師質土器、滑石製品、石製品・砥石、古銭に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して細分類をした。(以下参照)

土師器	小皿、坏、土錘
輸入磁器	青磁(碗、皿、浅形碗、小碗、坏、盤) 白磁(碗、皿、坏) その他の青磁白磁 青白磁(坏、壺、合子、小皿) 青花(碗、皿、大皿、その他)
輸入陶器	中国陶器(天目碗、盤、鉢、水注、四耳壺、壺、甕、その他) 朝鮮陶器 ベトナム陶器 その他
国内産陶器	瓦器 中世須恵器(東播系・カムイヤキ・棒万丈産) 中世陶器(瀬戸、美濃、常滑、備前) 瓦質土器(播鉢、茶釜、火鉢) 土師質土器 その他
瓦	
土師質土器	(播鉢、茶釜、火鉢)
滑石製品・石製品	
砥石	
銭貨	

なお、主な陶磁器の分類、年代や編年にあたっては、下記の文献を使用した。また、遺物指導を山本信夫氏に

依頼し、御指導・御教示を得た。

山本信夫ほか「大宰府条坊跡X V陶磁器分類編」『大宰府条坊跡X V』2000太宰府市教育委員会

森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」

小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」

森田勉「北部九州出土の高麗陶磁器」『貿易陶磁研究No.5』1985

乗岡実「中世備前焼(壺)の編年案」『第2回中近世備前焼研究会レジメ集』2000

乗岡実「中世備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会レジメ集』2000

陶磁器の年代については、8世紀末から14世紀中頃までのものは大宰府編年を使用し、A～G期で区分した。それ以降はH～K期で区分した。これらの年代については観察表の中に記載した。各期の対応年代は以下の通りである。

A期	8世紀末～10世紀中頃
B期	10世紀後半～11世紀中頃
C期	11世紀後半～12世紀前半
D期	12世紀中頃～後半
E期	13世紀初頭前後～前半
F期	13世紀中頃～14世紀初頭前後
G期	14世紀初頭～14世紀中頃
H期	14世紀後半～15世紀前半
I期	15世紀中頃～後半
J期	15世紀末～16世紀前半
K期	16世紀中頃～17世紀前半

(3) 遺構

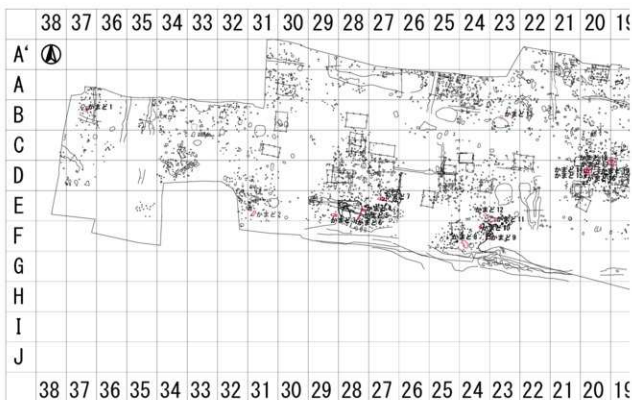
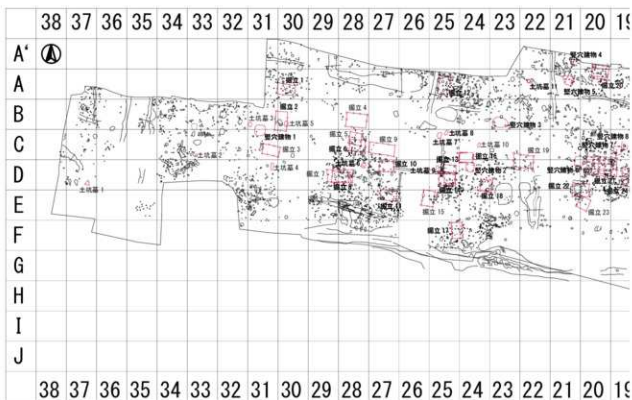
中世の遺構は、掘立柱建物跡33棟、竪穴建物跡11基、かまど跡29基、製鉄関連遺構6基、土坑23基、土坑墓18基、窯・土器集積遺構1カ所、溝24条が検出された。ピットは多数検出され、根石などの構造物が確認できるもの以外は、掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡(第121区～第141区)

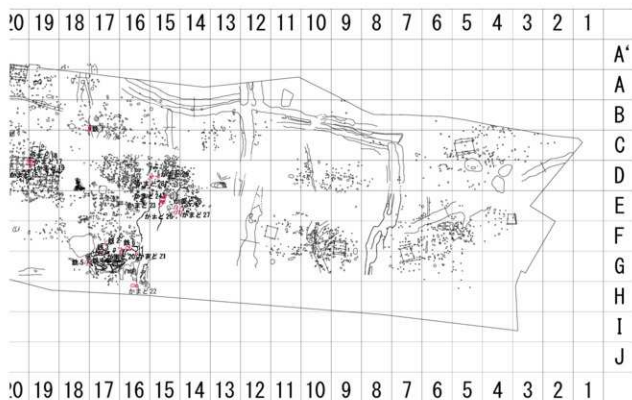
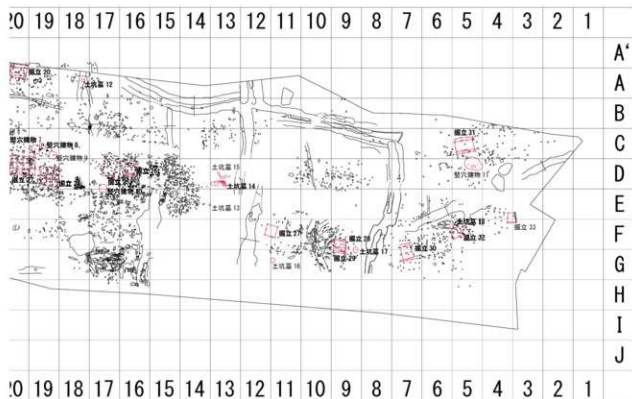
掘立柱建物跡は、A～C-30・31区、B～E-27～29区、C～F-22～26区、C～E-16～21区の4カ所にある程度のまとまりをもち、残りは点在する。形状は2間×3間が主体を占め、2間×2間、1間×1間、総柱、壁立のものが少数みられる。

掘立柱建物跡1号(第121区)

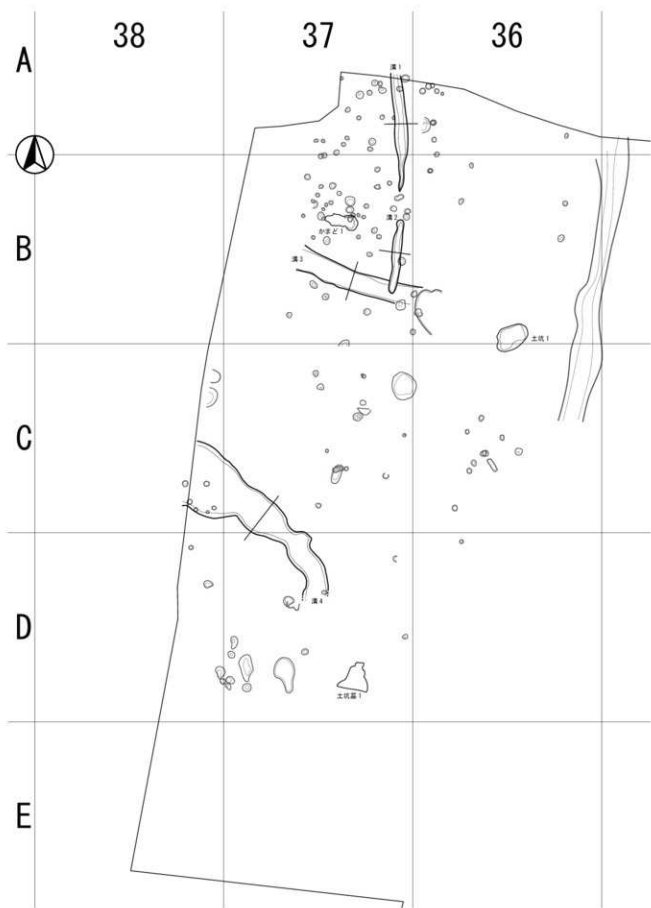
A-30・31区で検出された。規格が2間×3間の建物で奥行約3.6m、桁行約5.8mの規模をもち、床面積



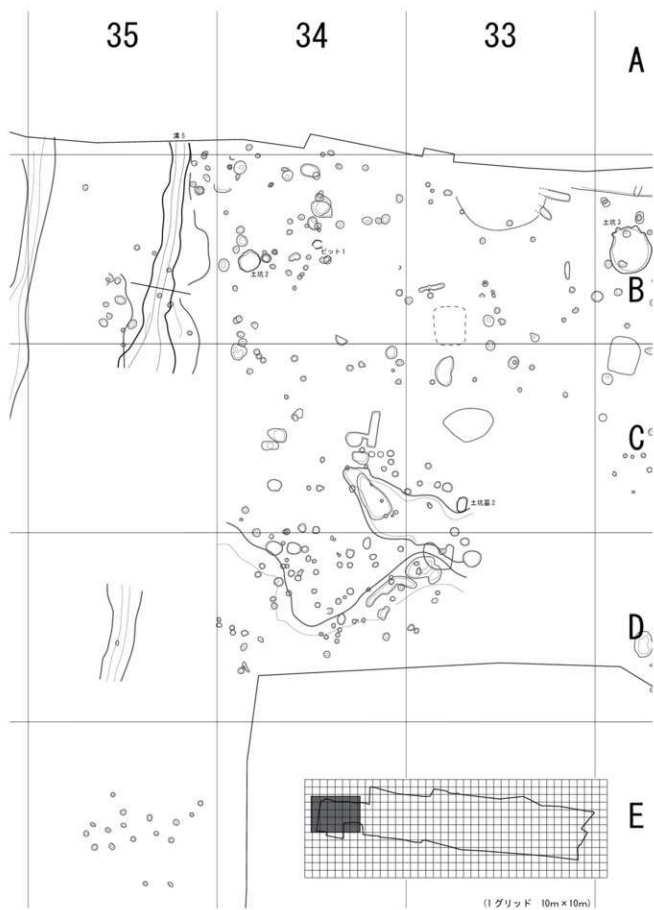
第95图 中世全体遺構図 1



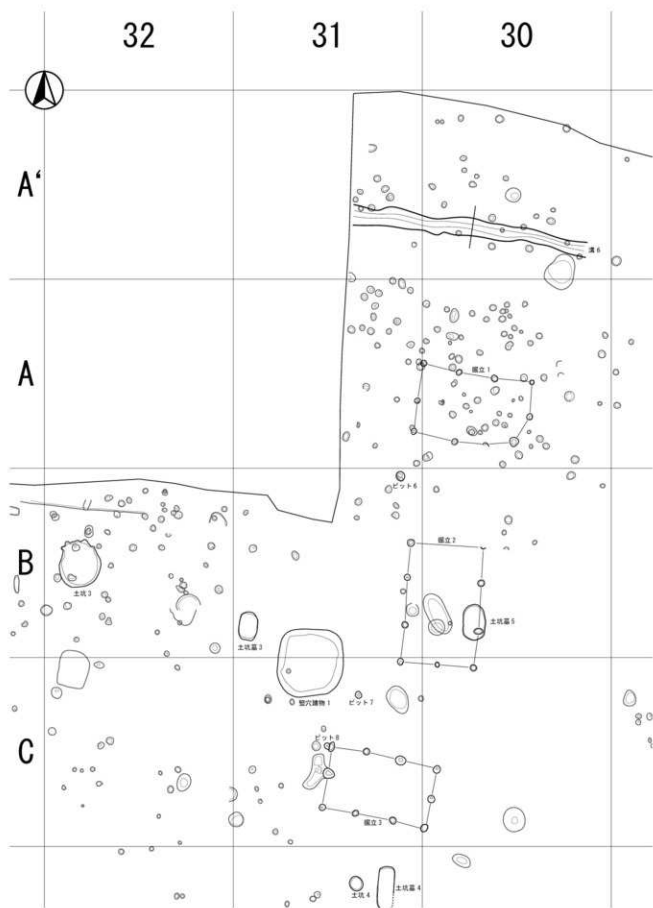
第96图 中世全体遺構図2



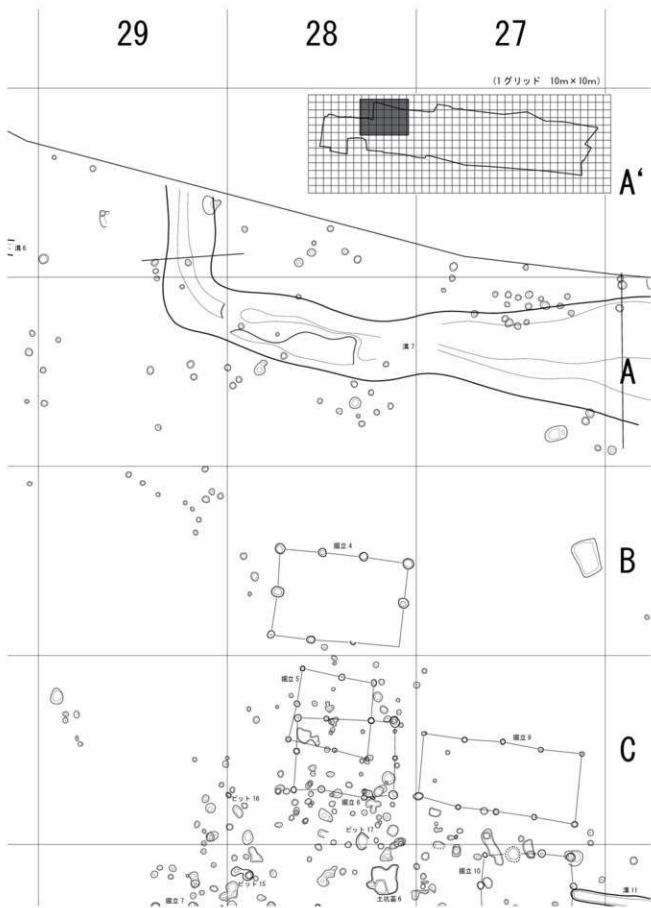
第97図 中世遺構配置図1



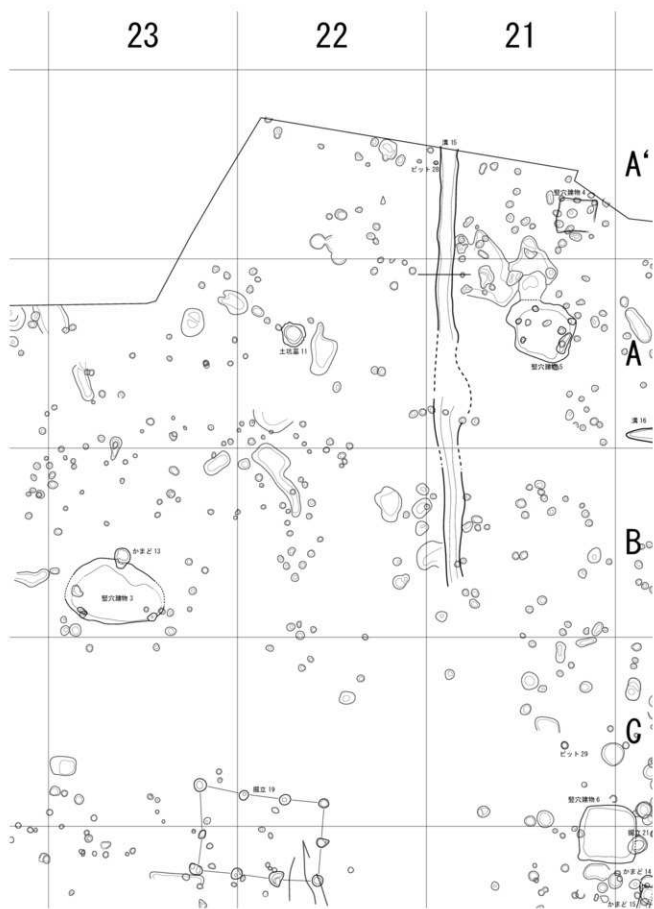
第98図 中世遺構配置図2



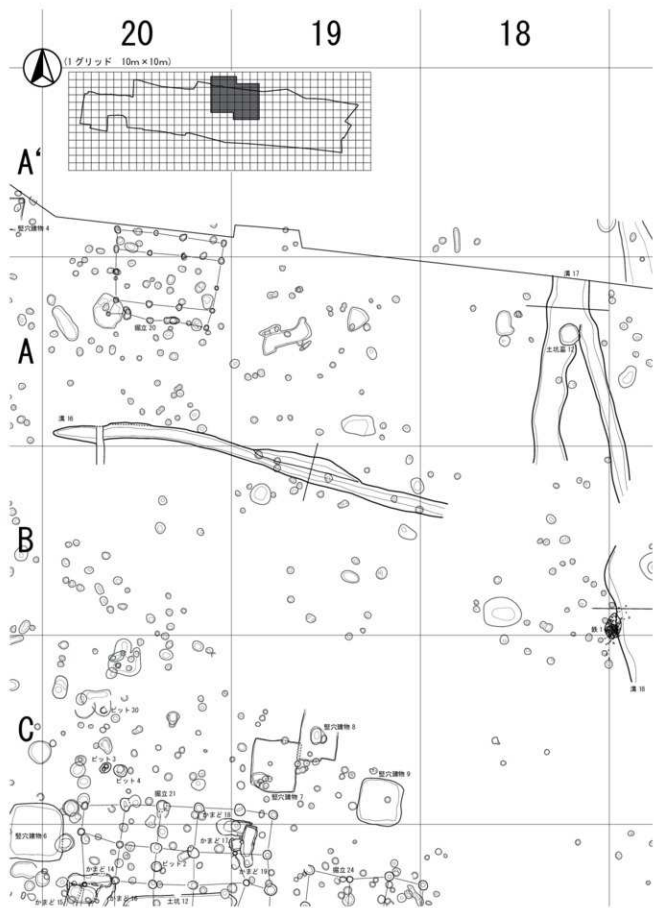
第99図 中世遺構配置図3



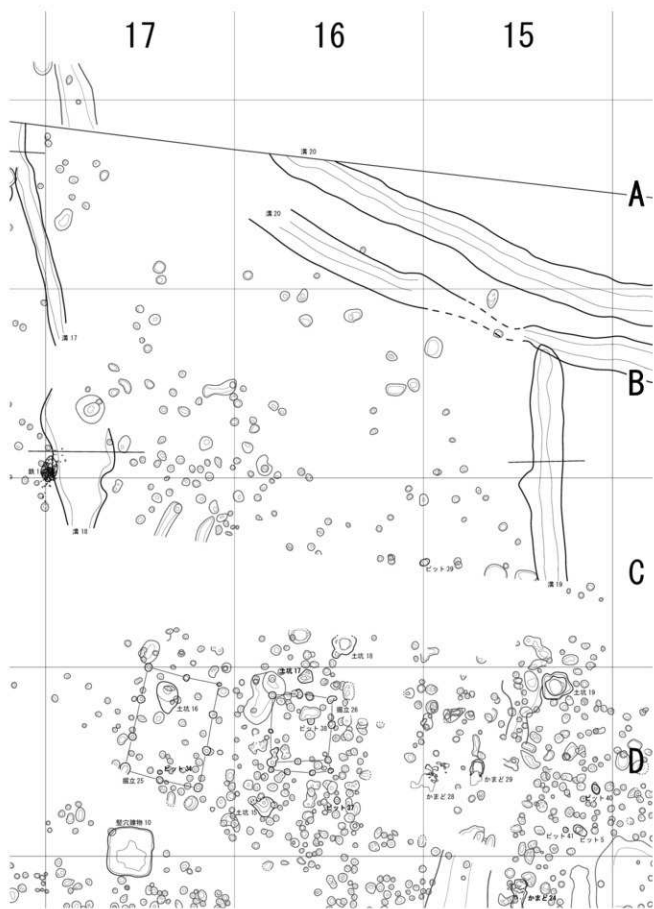
第100図 中世遺構配置図 4



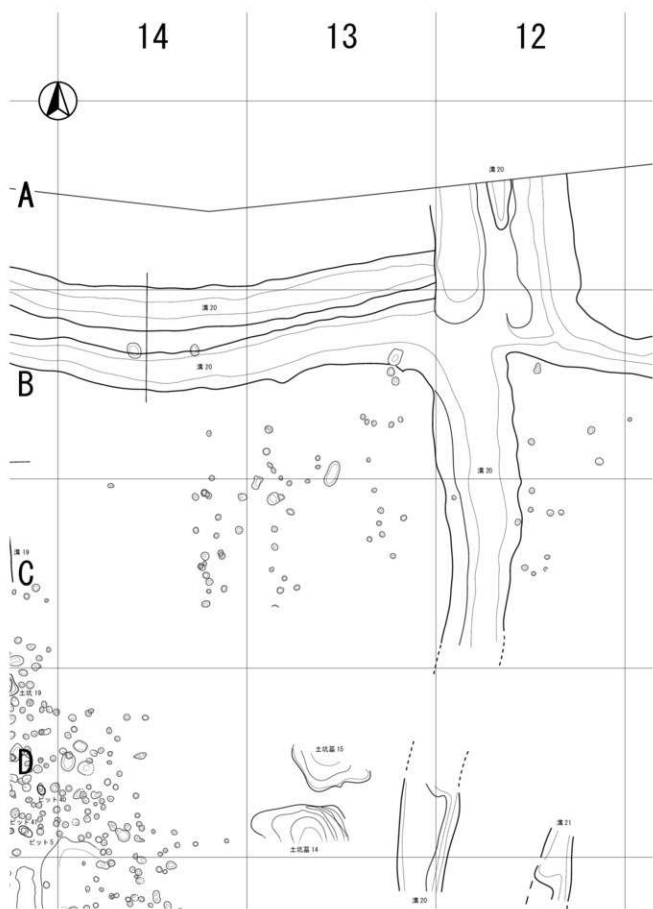
第102図 中世遺構配置図6



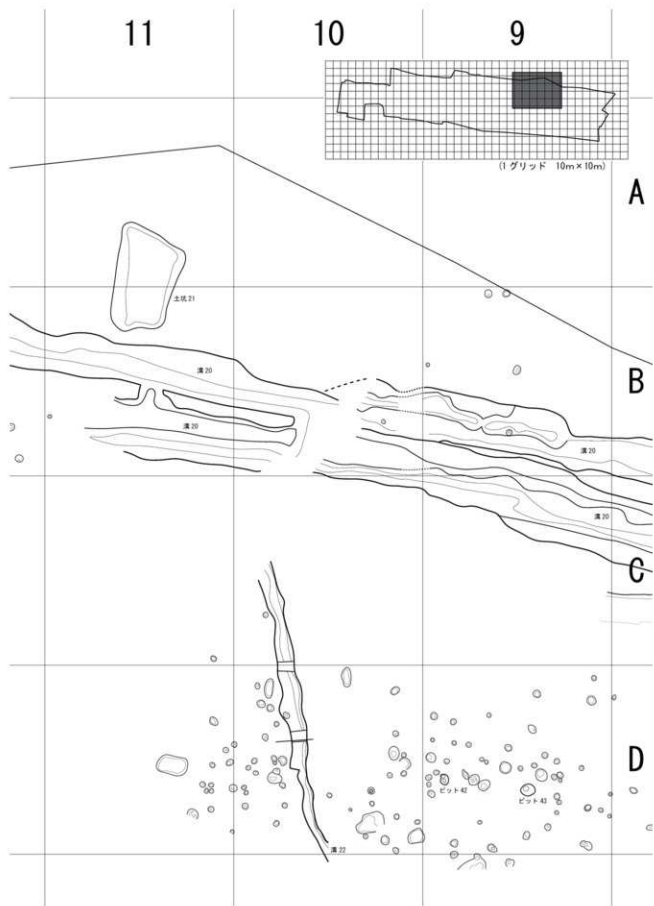
第103図 中世遺構配置図7



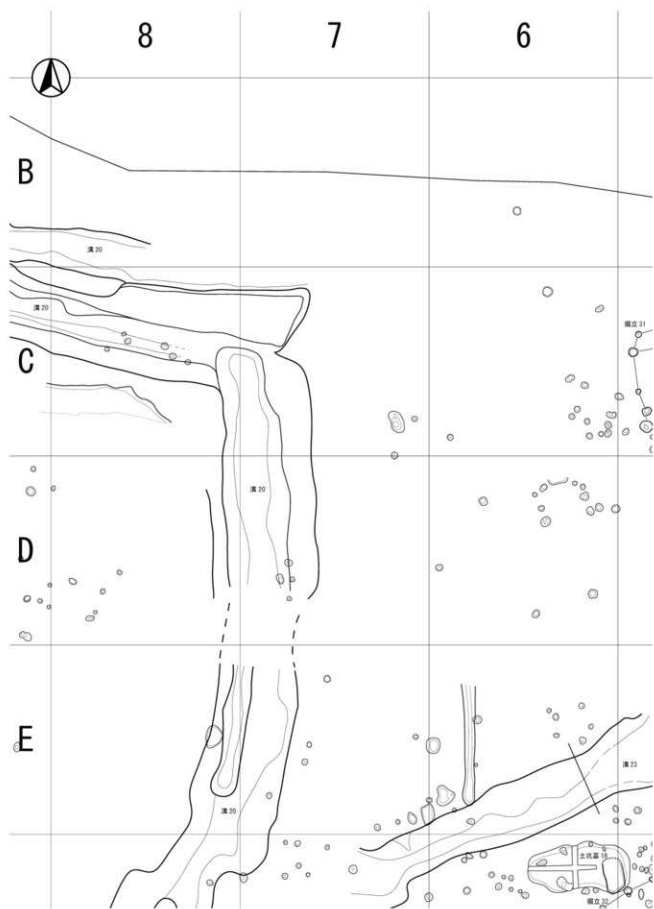
第104図 中世透構配置図8



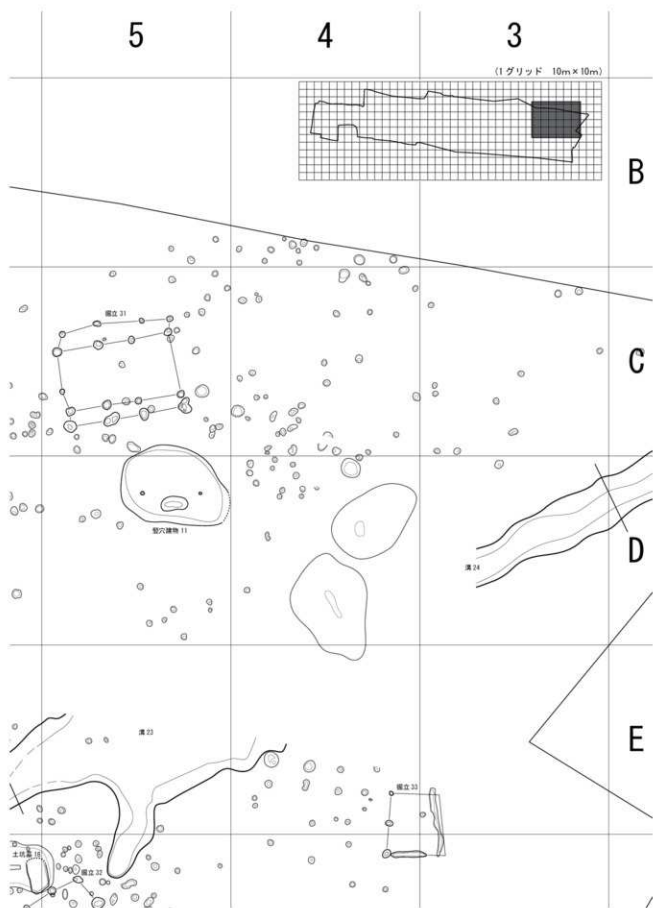
第105図 中世遺構配置図9



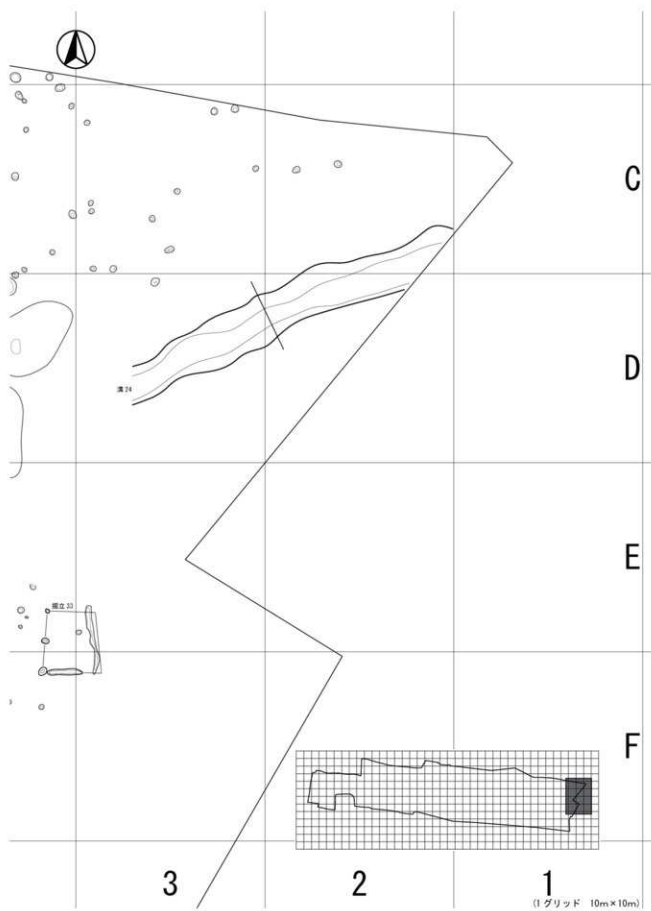
第106図 中世遺構配置図10



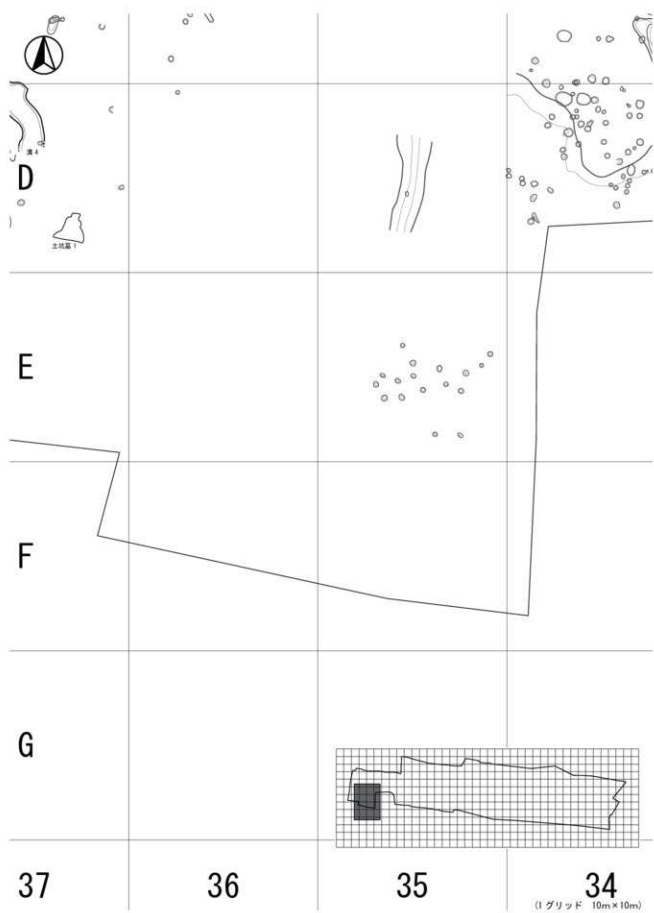
第107図 中世遺構配置図11



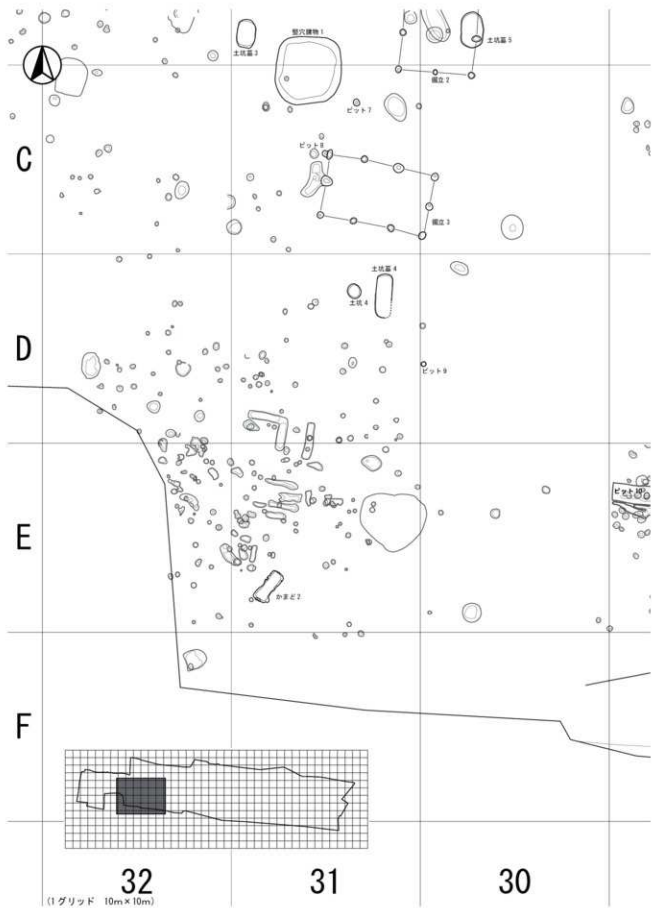
第108図 中世遺構配置図12



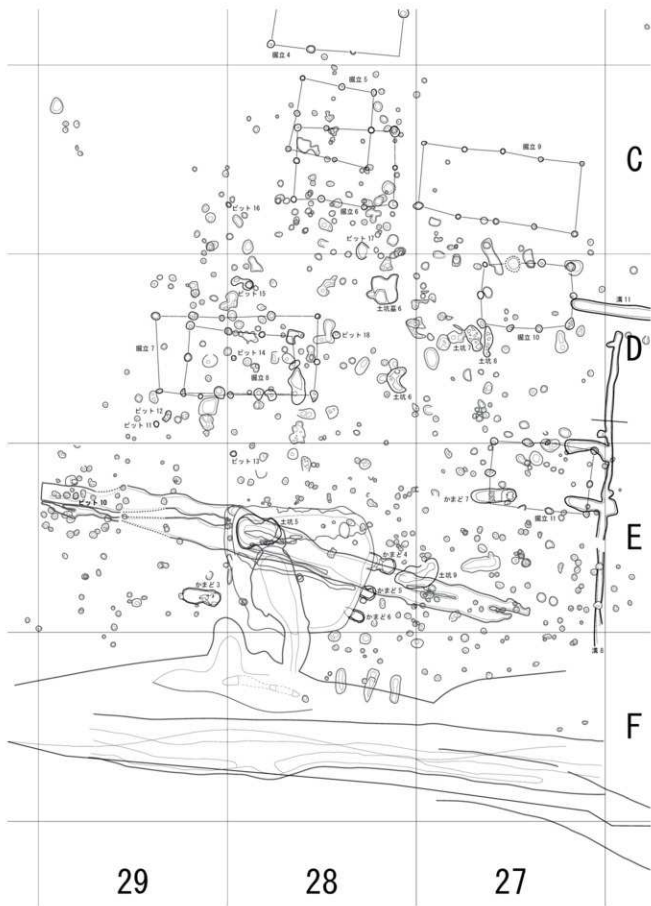
第109図 中世遺構配置図13



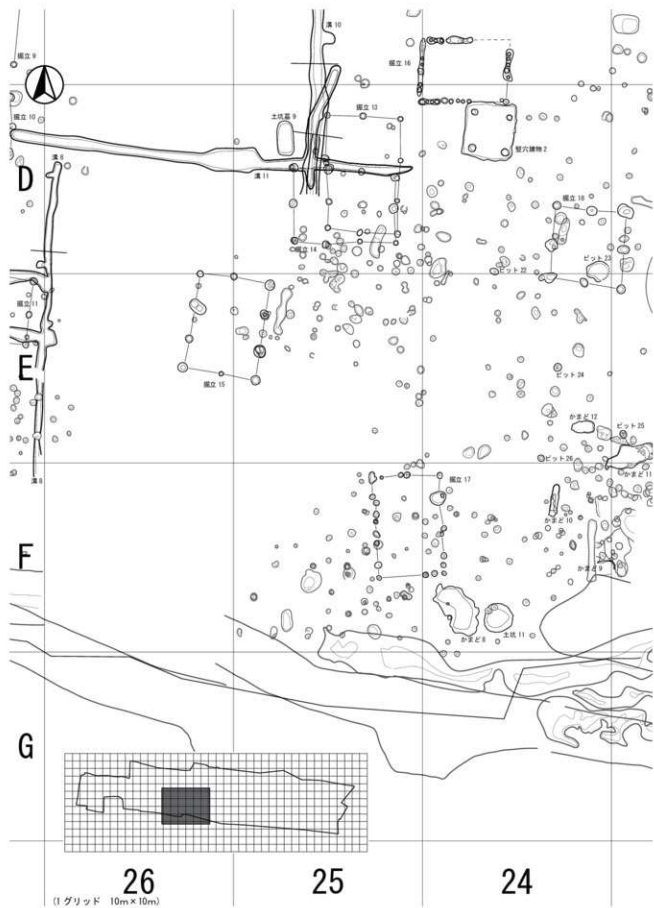
第110図 中世遺構配置図14



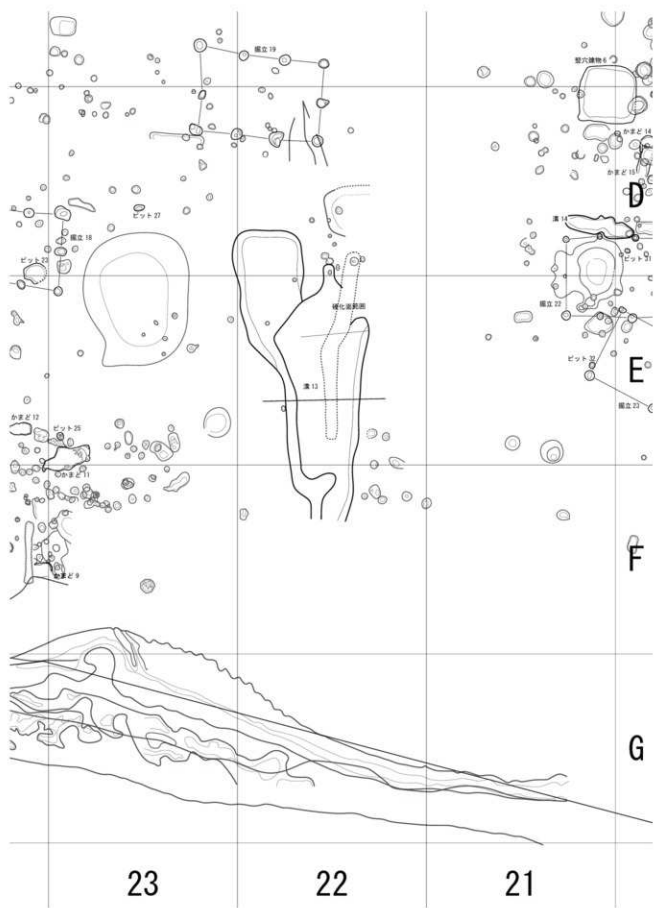
第111図 中世遺構配置図15



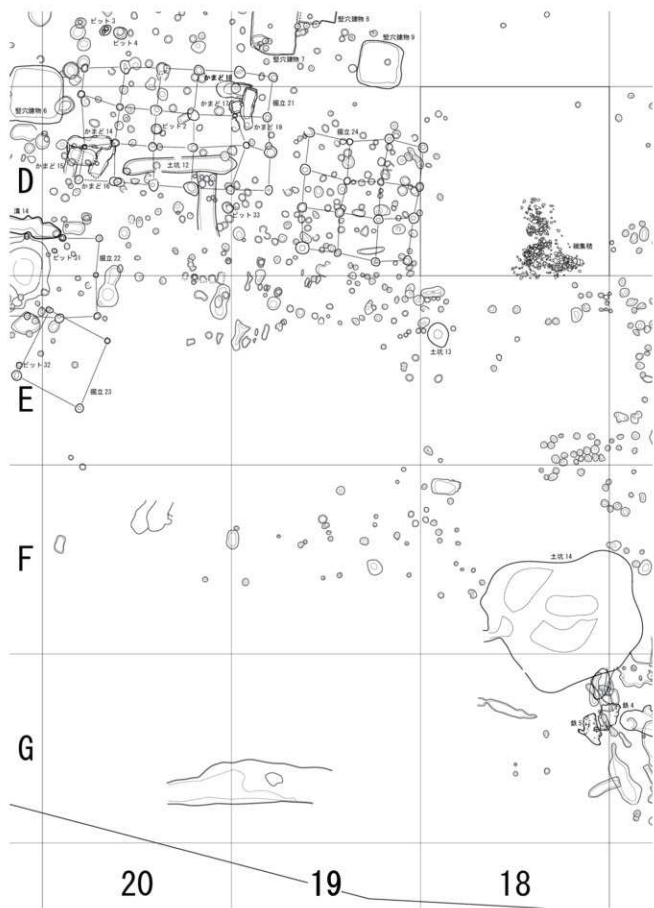
第112図 中世遺構配置図16



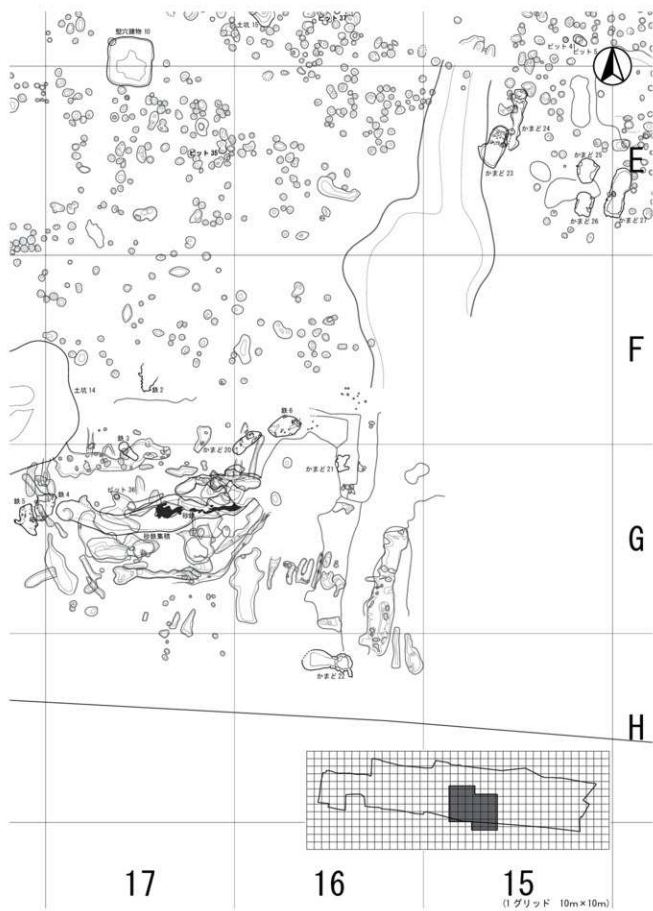
第113図 中世遺構配置図17



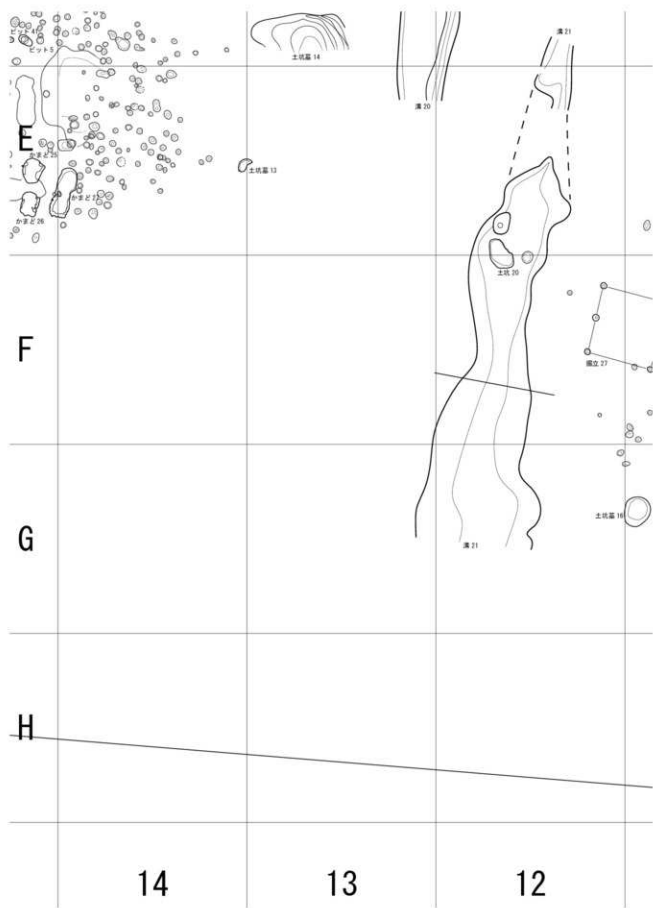
第114図 中世遺構配置図18



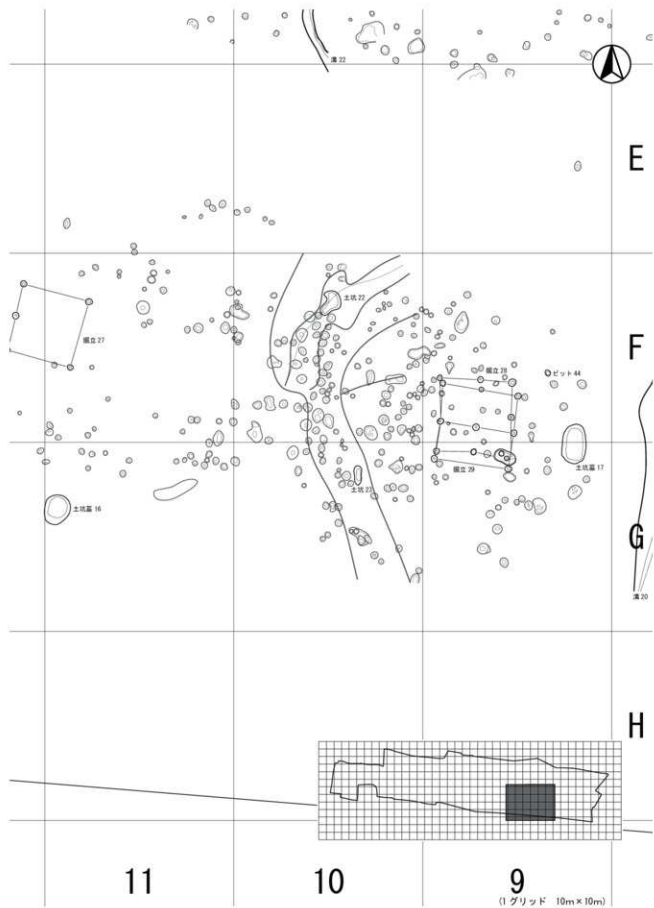
第115図 中世遺構配置図19



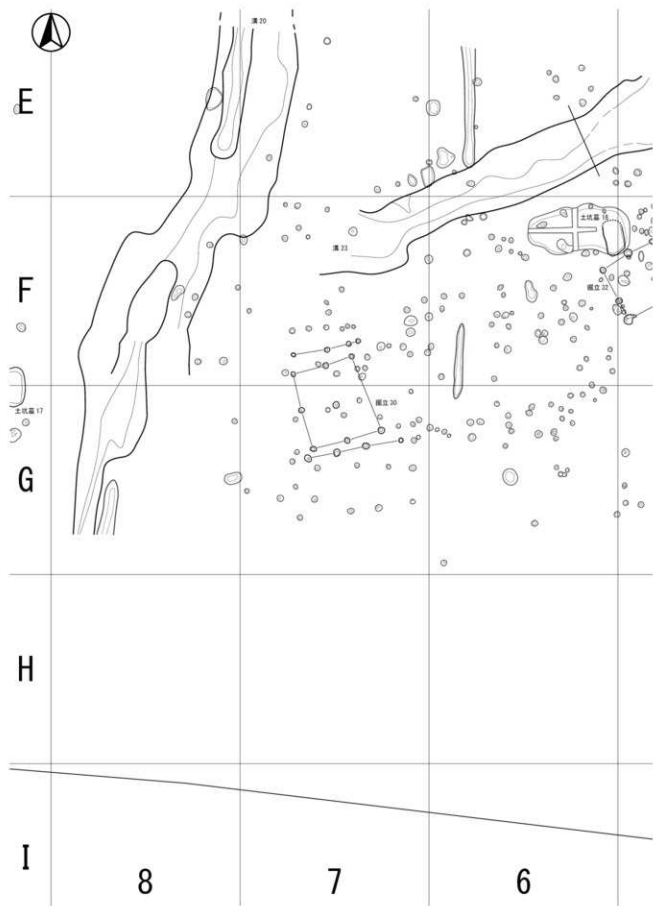
第116図 中世遺構配置図20



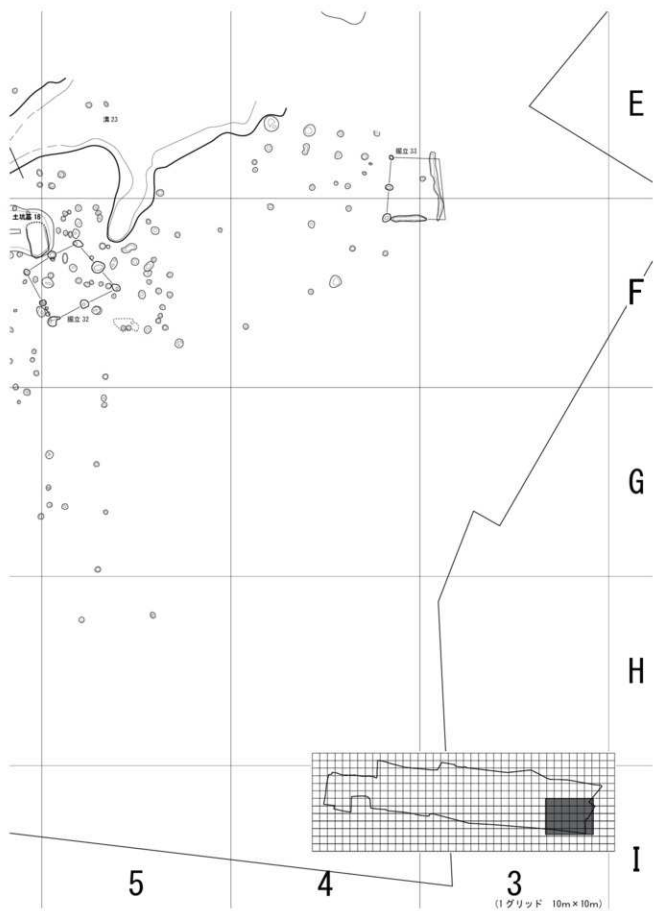
第117図 中世遺構配置図21



第118図 中世遺構配置図22

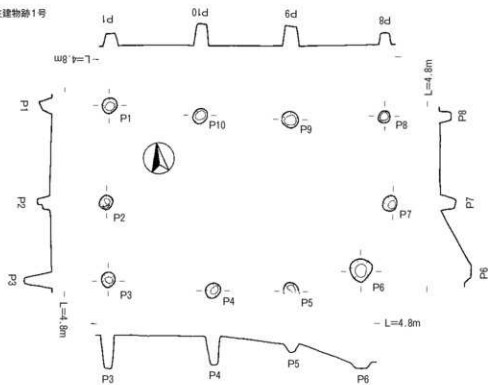


第119図 中世遺構配置図23

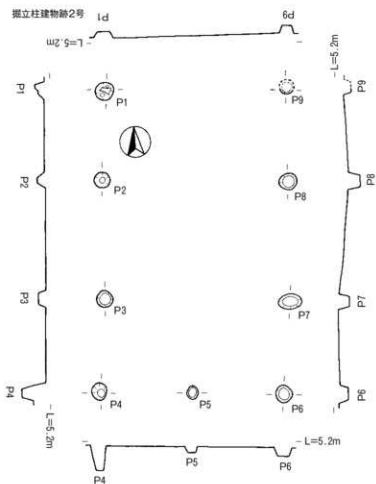


第120図 中世遺構配置図24

掘立柱建物跡1号



掘立柱建物跡2号



掘立柱建物跡1号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅径	深さ
1	32	32	29
2	30	30	19
3	33	28	70
4	32	32	60
5	33	33	19
6	30	48	13
7	32	30	33
8	34	24	23
9	35	35	44
10	33	34	48

柱穴番号	実行柱間 (m)	柱穴番号	実行柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	2.2
2-3	1.8	4-5	1.8
6-7	1.5	5-6	1.5
7-8	1.8	8-9	2.0
		9-10	1.9
		10-1	2.2

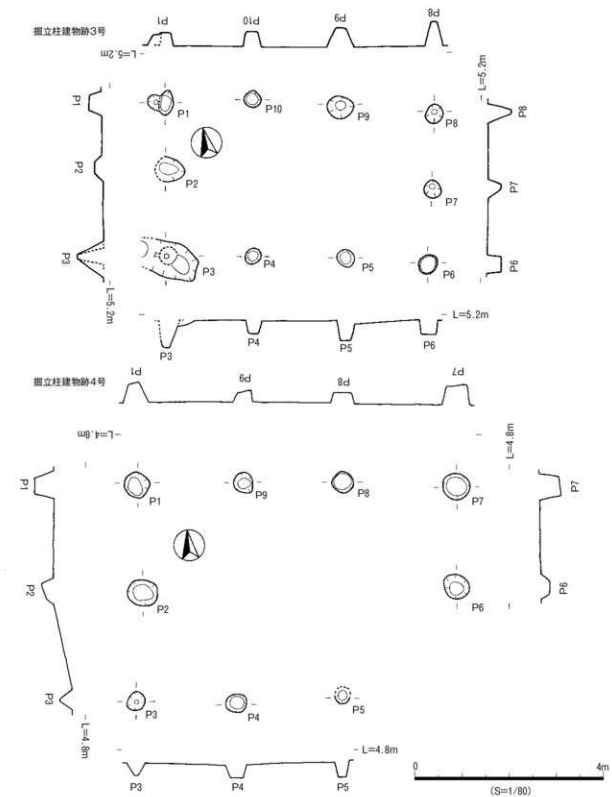
掘立柱建物跡2号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅径	深さ
1	31	31	18
2	30	30	17
3	34	31	1.6
4	34	32	23
5	27	29	17
6	34	34	18
7	48	32	38
8	32	34	29
9	19+	19+	16

柱穴番号	実行柱間 (m)	柱穴番号	実行柱間 (m)
4-5	1.9	1-2	1.9
6-7	1.9	2-3	2.5
9-1	3.85	3-4	2.0
		6-7	1.9
		7-8	2.5
		8-9	2.0



第121図 掘立柱建物跡1, 2号



独立柱建物跡3号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	高さ
1	34	30	2.3
2	45	54	1.6
3	33	33	2.9
4	33	33	2.9
5	38	35	3.6
6	39	34	3.1
7	39	37	2.6
8	41	37	2.6
9	34	33	3.0
10	34	34	3.1

柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
1-2	1.6	3-4	1.8
2-3	1.8	4-5	2.0
6-7	1.6	3-4	1.7
7-8	1.6	8-9	2.0
		9-10	1.9
		10-1	1.8

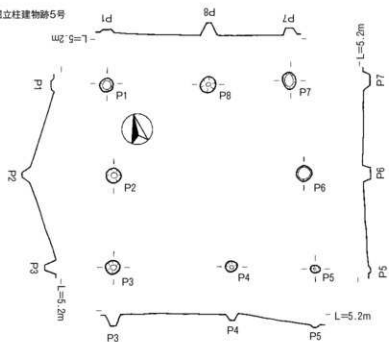
独立柱建物跡4号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	高さ
1	55	53	4.1
2	61	55	2.9
3	60	58	2.6
4	43	38	2.1
5	31	-	3.3
6	52	-	2.2
7	58	55	4.3
8	48	-	2.1
9	51	-	2.3

柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
1-2	2.2	3-4	2.1
2-3	2.3	4-5	2.2
6-7	2.5	7-8	2.3
		8-9	2.1
		9-1	2.3

第122図 独立柱建物跡3、4号

掘立柱建物跡5号

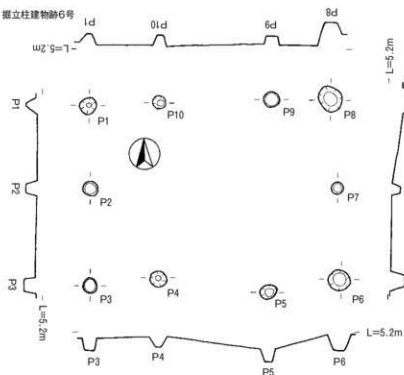


掘立柱建物跡5号

柱番号	直径	高さ	深さ
1	28	28	7
2	32	26	18
3	26	25	25
4	24	23	12
5	26	17	6
6	33	33	19
7	28	24	17
8	34	34	25

柱穴番号	梁行間隔 (m)	柱穴番号	桁行間隔 (m)
1-2	1.9	3-4	2.5
2-3	1.9	4-5	1.8
2-6	2.0	7-8	1.7
6-7	2.0	8-1	2.1

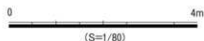
掘立柱建物跡6号



掘立柱建物跡6号

柱番号	直径	高さ	深さ
1	37	37	23
2	33	33	24
3	30	28	26
4	28	33	24
5	35	29	28
6	32	49	34
7	25	23	20
8	52	51	44
9	33	33	43
10	27	27	23

柱穴番号	梁行間隔 (m)	柱穴番号	桁行間隔 (m)
1-2	1.8	3-4	1.4
2-3	2.1	4-5	2.3
6-7	1.9	5-6	1.4
7-8	1.8	8-9	1.6
9-10	2.4	10-1	1.5



第123図 掘立柱建物跡5、6号

20.88㎡となる。柱穴は径30cm強のものが大半を占める。柱穴6は梁行、桁行の直線上からやや内側にずれる。

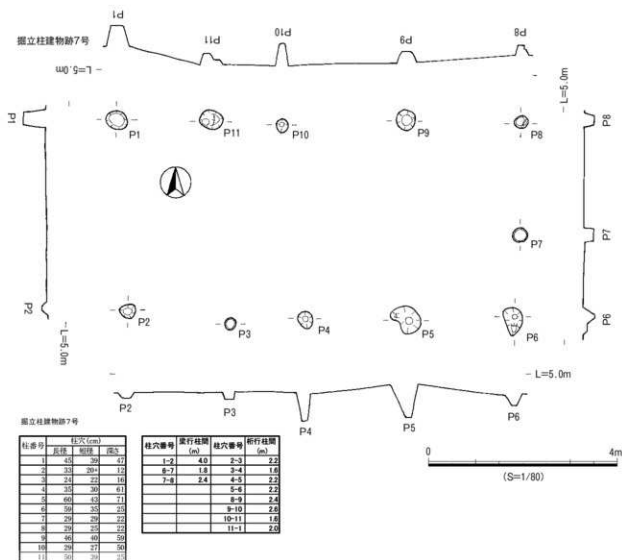
掘立柱建物跡2号 (第121図)

B・C-30・31区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.88m、桁行約6.6mの規模をもち、床面積25,608㎡となる。柱穴は径34cm前後のものが大半を占め

る。なお、遺構北側の梁行間の柱穴を1本欠く。

掘立柱建物跡3号 (第122図)

C-30・31区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.1m、桁行約5.6mの規模をもち、床面積17.36㎡となる。柱穴は径40cm前後のものが多く、柱穴3は古代の溝が埋まった後に掘られている。



第124図 掘立柱建物跡7号

掘立柱建物跡4号 (第122図)

B-28区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約4.6m、桁行約6.9mの規模をもち、床面積31.74㎡となる。柱穴は径40～50cmのものがほとんどである。南東隅の柱穴は確認できなかった。

掘立柱建物跡5号 (第123図)

C-28区で検出された。規格が2間×2間の建物で、梁行、桁行約3.9mの規模をもち、床面積15.21㎡となる。柱穴は径約30cm前後のものが大半を占める。また、掘立柱建物跡6号と切り合い関係にある。

掘立柱建物跡6号 (第123図)

C-28区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.9m、桁行約5.2mの規模をもち、床面積20.28㎡となる。柱穴は径約30～40cm前後のものが多く、

掘立柱建物跡7号 (第124図)

D-28・29区で検出された。規格は2間×4間の建物

で、梁行約4.2m、桁行約8.2mの規格をもち、床面積34.44㎡となる。柱穴は径30cm前後のものから60cm程度のものであり、ばらつきがある。西側梁行間の柱穴を1本欠いている。また掘立柱建物跡8号と切り合い関係にある。

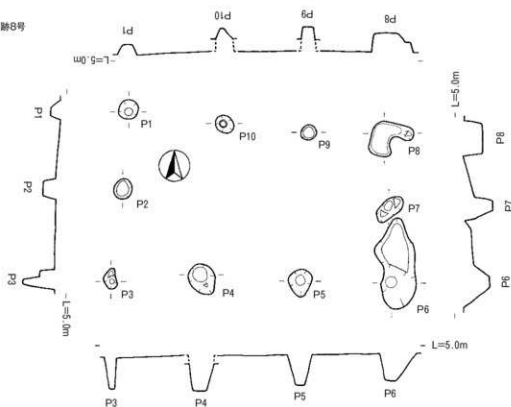
掘立柱建物跡8号 (第125図)

D-28・29区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.6m、桁行約5.8mの規模をもち、床面積20.88㎡となる。柱穴は径40～50cm程度のものが多い。柱穴6は浅い凹みと切り合っており、平面形は崩れている。

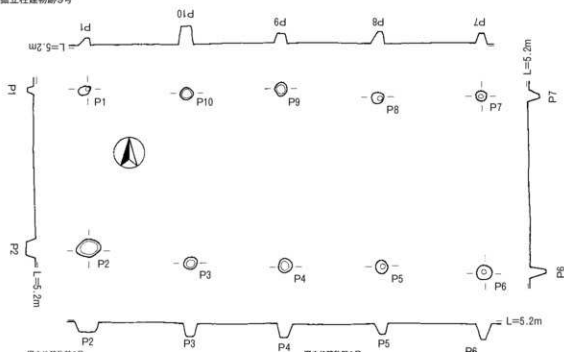
掘立柱建物跡9号 (第125図)

C-27区で検出された。規格が1間×4間の建物で、梁行約3.6m、桁行約8.4mの規模をもち、床面積30.24㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが多い。

獨立柱建物跡8号



獨立柱建物跡9号



獨立柱建物跡8号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅	高さ
1	44	40	27
2	42	36	27
3	42	27	52
4	68	52	57
5	99	94	62
6	192	65	96
7	67	34	41
8	52	27	26
9	31	31	26
10	45	37	23

柱穴番号	基行柱間 (cm)	柱穴番号	基行柱間 (cm)
1-2	1.7	3-4	1.8
2-3	2.1	4-5	2.1
6-7	1.8	5-6	2.0
7-8	1.2	8-9	2.0
		9-10	1.8
		10-1	2.0

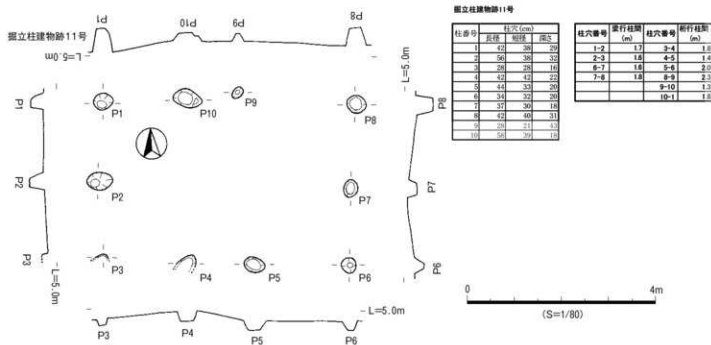
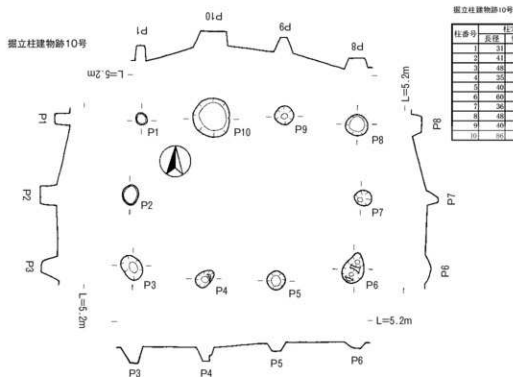
獨立柱建物跡9号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅	高さ
1	29	19	11
2	53	40	22
3	28	28	26
4	31	31	26
5	29	26	25
6	33	31	43
7	23	23	23
8	21	25	26
9	29	27	22
10	25	25	15

柱穴番号	基行柱間 (cm)	柱穴番号	基行柱間 (cm)
1-2	3.4	2-3	2.2
6-7	3.7	3-4	2.0
		4-5	2.1
		5-6	2.1
		7-8	2.1
		8-9	2.1
		9-10	2.0
		10-1	2.1

0 4m
(S=1/80)

第125図 獨立柱建物跡8, 9号



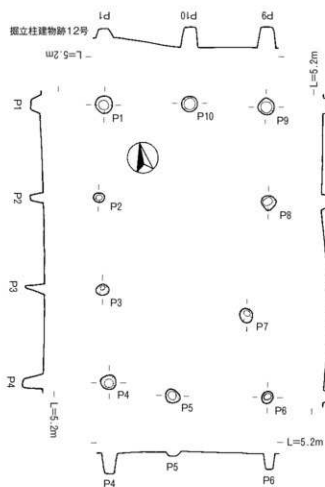
第126図 掘立柱建物跡10, 11号

掘立柱建物跡10号 (第126図)

D-27区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.2m、桁行約4.6mの規模をもち、床面積14.72㎡となる。柱穴は径40cm程度のものが中心で、86cmの大きさのものもみられる。

掘立柱建物跡11号 (第126図)

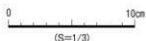
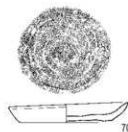
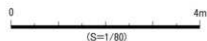
D・E-27区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.4m、桁行約5.3mの規模をもち、床面積18.02㎡となる。柱穴は径40cm前後のものが中心となる。北側桁行間の柱穴9がやや西方向へずれており規格性を乱す。



掘立柱建物跡12号

柱番号	柱穴 (cm)	
	長径	短径
1	36	36
2	24	19
3	27	23
4	33	26
5	32	26
6	25	23
7	26	26
8	32	22
9	34	24
10	31	23

柱穴番号	掘立柱跡 (m)	柱穴番号	掘立柱跡 (m)
4-5	1.4	1-2	2.0
5-6	2.0	2-3	1.9
6-10	1.6	3-4	2.0
10-1	1.8	6-7	1.8
		7-8	2.4
		8-9	2.0



第127図 掘立柱建物跡12号・出土遺物

掘立柱建物跡12号 (第127図)

A-25区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.4m、桁行約6mの規模をもち20.4㎡となる。柱穴は30cm前後である。東側桁行間の柱穴7が西側へずれた柱配列が乱れている。柱穴6から土師器小皿が出土した。

出土遺物 (第127図)

柱穴6内より土師器の小皿が1点、完形で出土した。701の体部は、丸みを帯びながら短く立ち上がる。内面には器面調整の痕跡が輪状に残る。

掘立柱建物跡13号 (第128図)

D-25区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.9m、桁行約6mの規模をもち、床面積23.4㎡となる。柱穴は径35cm前後のものが中心である。また掘立柱建物跡14号と切り合い関係にあるが、時間的前後関係については不明である。

掘立柱建物跡14号 (第128図)

D-25区で検出された。規格が2間×3間の建物で、西側梁行約4m、東側梁行約3.5m、桁行約5.4mの規模

をもつ、平面形がわずかに台形状を呈する。床面積20.25㎡となる。柱穴は径40~50cmのものがほとんどである。

掘立柱建物跡15号 (第129図)

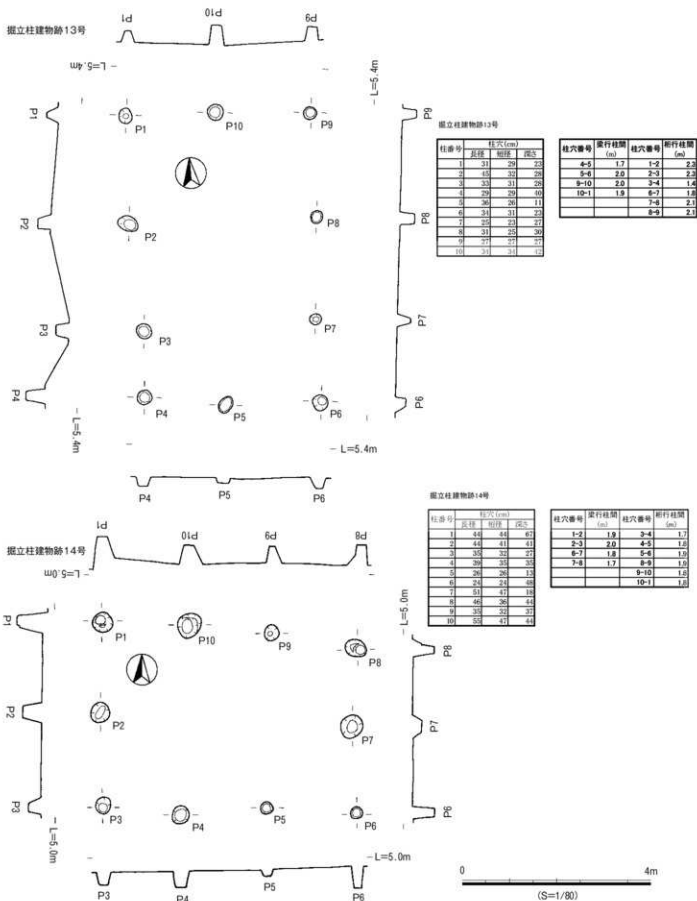
E-25・26区で検出された。規格が2間×3間の建物で、梁行約3.9m、桁行約5.1mの規模をもち、床面積19.89㎡となる。柱穴は径35~50cmのものが大半を占める。対をなす柱穴2と柱穴8から銭貨が出土しており、地鎮の可能性を示している。

出土遺物 (第129図)

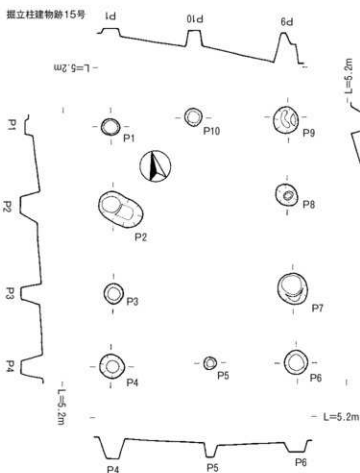
柱穴2から703が、柱穴8から702が出土している。ともに錆のため文字判読が不能で、種別はわからなかった。さらに、柱穴6からも銭貨片が出土したが、小片のため図化できなかった。

掘立柱建物跡16号 (第129図)

C・D-24区で検出された。浅い溝状の掘り込みの中に連続した柱穴列が確認でき、梁行約3.2m、桁行4.5mの規模をもち、床面積14.4㎡となる。竪立ちの建物が想定される。南東側で竪穴建物跡2号と切り合っている。



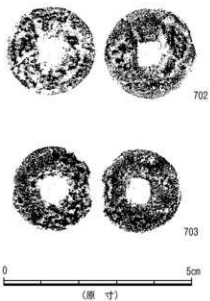
第128図 掘立柱建物跡13、14号



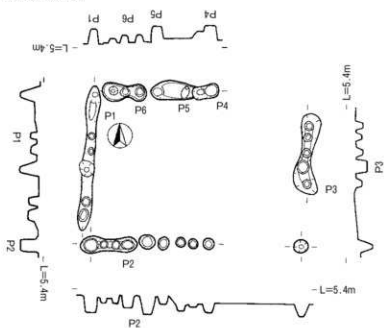
掘立柱建物跡15号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅深	深さ
1	36	33	10
2	96	58	34
3	41	41	43
4	51	51	46
5	24	24	31
6	48	48	23
7	66	61	46
8	49	42	26
9	53	51	43
10	30	20	13

柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
4-5	2.1	1-2	1.7
5-6	1.8	2-3	1.8
9-10	2.0	3-4	1.5
10-1	1.7	8-7	1.6
		7-8	2.0
		8-9	1.7

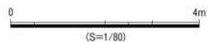


掘立柱建物跡16号

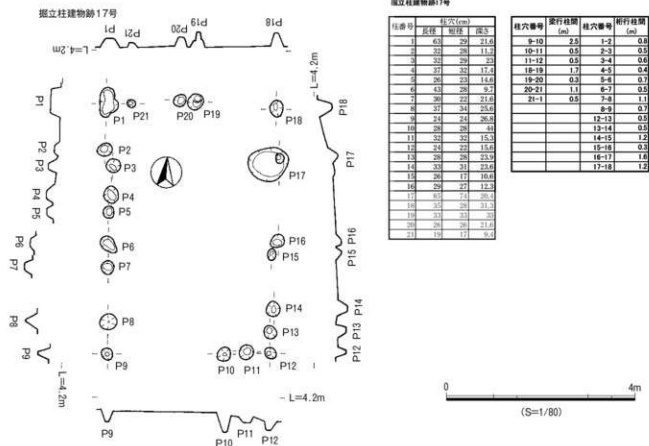


掘立柱建物跡16号(壁立)

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	幅深	深さ
1	305	177	45
2	244	309	41
3	162	208	28
4	93	24	31
5	80+	309	33
6	89	198	20



第129図 掘立柱建物跡15、16号・15号出土遺物



第130図 掘立柱建物跡17号

掘立柱建物跡17号 (第130図)

F-24・25区で検出された。直線的に連続した柱穴が確認された。梁行約3.6m、桁行約5.3mの規模をもち、床面積19.08㎡となる。壁立ちの建物が想定される。柱穴径は30cm前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡18号 (第131図)

D-E-23・24区で検出された。規格は2間×2間の建物で、梁行約3.8m、桁行約4mの規模をもち、床面積15.2㎡となる。柱穴は径60cm前後のものが多く、

また柱穴1、3、5、7、8から銭貨が1枚ずつ出土しており、地鎮の可能性を示している。

出土遺物 (第131図)

柱穴1から704が出土した。開元通宝である。柱穴3からは708が出土した。天啓通宝である。柱穴5から707が出土した。元祐通宝である。柱穴7からは706が出土した。天聖元宝である。柱穴8から705が出土した。祥符通宝である。

掘立柱建物跡19号 (第132図)

C-D-22・23区で検出された。規格は2間×3間の建物で、梁行約4.3m、桁行約6.6mの規模をもち、床面積28.38㎡となる。柱穴は50cm~70cmのものが主体である。

掘立柱建物跡20号 (第133図)

A'-A-20区で検出された。規格は2間×3間の建物で、梁行約2.7m、桁行約5.4mの規模をもち、床面積14.58㎡となる。南北に庇の付く2面庇の建物が想定される。南面庇の柱穴は建物本体の柱数に比例せず、5本確認されている。

掘立柱建物跡21号 (第134図)

C-D-19・20区で検出された。規格は3間×5間で、梁行約6m、桁行約10mの規模をもち、床面積60㎡となる総柱の建物である。柱穴は径40cm~60cmのものが大半を占める。柱穴7、24など柱配列に乱れが見られるものも確認できる。

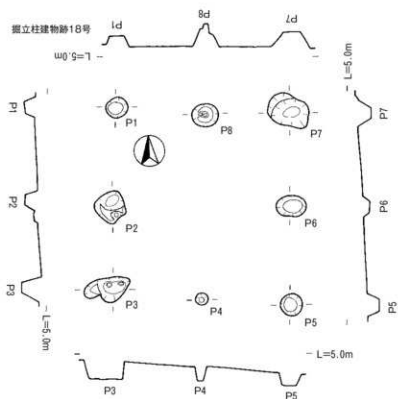
掘立柱建物跡22号 (第135図)

D-E-20・21区で検出された。規格は2間×3間で、梁行約4m、桁行約5.6mの規模をもち、床面積22.4㎡となる建物である。柱穴は30cm~40cmのものが主体である。西側の梁行間の柱穴が1本欠いている。

また建物南側で掘立柱建物跡23号と切り合い関係にある。時間的前後関係は不明である。

掘立柱建物跡23号 (第136図)

E-20・21区で検出された。規格が1間×1間で、4m



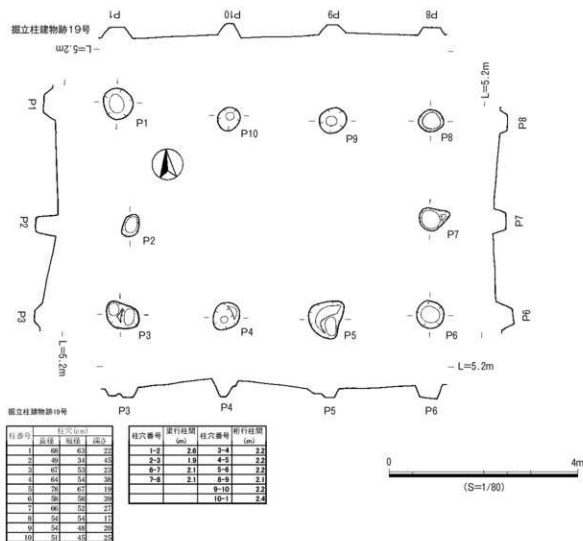
掘立柱建物跡18号

柱番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	48	44	22
2	59	49	31
3	99	27	66
4	24	24	23
5	43	45	24
6	62	45	19
7	39	53	34
8	50	50	43

柱穴番号	掘立柱間 (m)	柱穴番号	掘立柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	1.8
2-3	1.8	4-5	1.9
5-6	2.1	7-8	1.8
6-7	2.0	8-1	1.9



第131図 掘立柱建物跡18号・出土遺物



第132図 掘立柱建物跡19号

四方の正方形の平面形を示す。床面積16㎡となる建物である。ほかと比較して柱穴間が広い。柱穴は径30cm～50cmである。

掘立柱建物跡24号 (第136図)

D-19区で検出された。規格が3間×3間で、6.2m四方の正方形の平面形を示す。床面積38.44㎡となる総柱の建物である。柱穴は径40cm～60cm前後のものが大半を占める。

掘立柱建物跡25号 (第137図)

D-17区で検出された。規格が2間×3間で、梁行約4m、桁行約5.6mの規模をもち、床面積22.4㎡となる建物である。柱穴は径40cm強のものがほとんどである。

掘立柱建物跡26号 (第137図)

D-16区で検出された。規格が2間×2間で、3.2m四方の正方形の平面形を示す。床面積10.24㎡となる建物である。かつ南側に庇をもつ一面庇建物である。此の柱

穴は、建物本体の柱数に比例せず、4本確認された。柱穴の径は20cm～40cmのものがほとんどである。柱穴9から銭貨片が出土したが、小片のため図化できなかった。

掘立柱建物跡27号 (第138図)

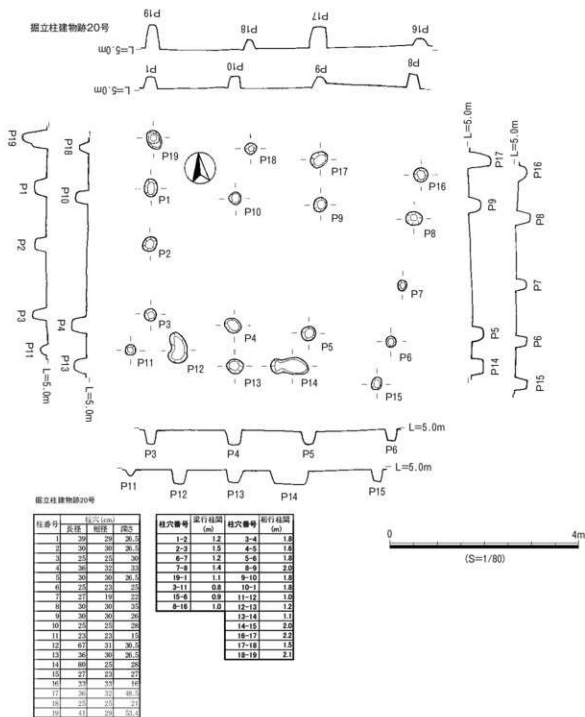
F-11・12区で検出された。規格が2間×1間で、3.6m四方の正方形の平面形を示す。床面積12.96㎡となる建物である。建物東側の中間柱を欠いている。柱穴の径は35cm前後である。

掘立柱建物跡28号 (第138図)

F・G-9区で検出された。規格は2間×2間で、4m四方の正方形の平面形を示す。床面積16㎡となる建物である。柱穴は径30cm～40cmである。掘立柱建物跡29号と切り合い関係にある。また柱穴2を共有している。時間的前後関係については不明である。

掘立柱建物跡29号 (第139図)

F・G-9区で検出された。規格は2間×2間で、4m四



第133図 据立柱建物跡20号

方の正方形の平面形を示す。床面積16㎡となる建物で、建物南側の中間柱を欠いている総柱建物と考えられる。柱穴は径30cm前後である。

据立柱建物跡30号（第139図）

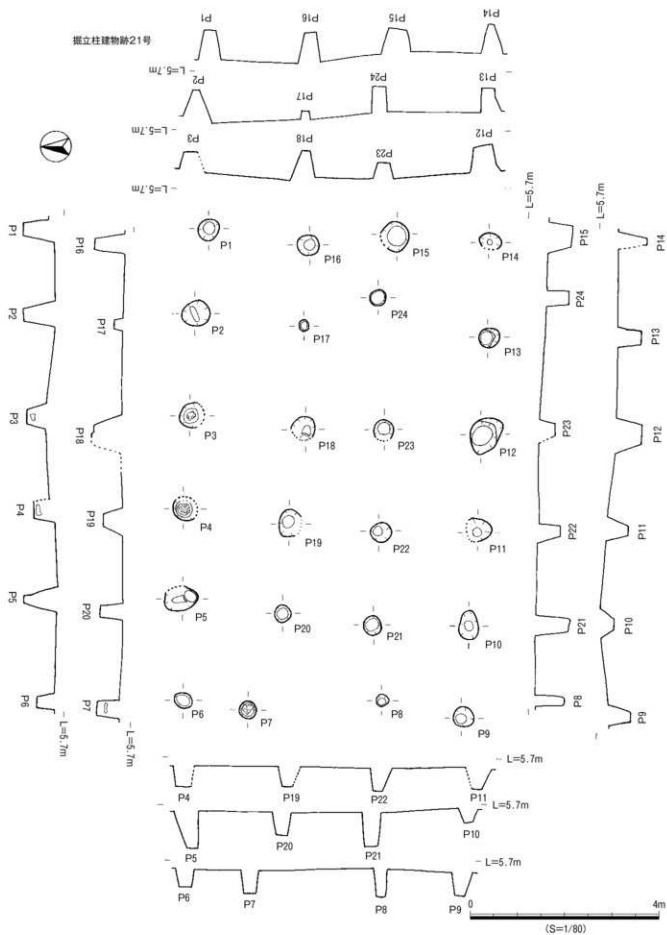
F・G-7区で検出された。規格は2間×2間で、北側梁行3.3m、南側梁行3.8m、桁行4mのわずかに台形の平面形を示す。床面積14.2㎡となる総柱になると思われる建物であるが東側桁行間の柱穴が欠けており、明言は出

来ない。また建物北側、南側の両面に庇、もしくは構と思われる柱穴列が並ぶ。

出土遺物（第139図）

柱穴10内より、土師器の小皿とカムイヤキの甕の胴部が出土したが、カムイヤキは流れ込みと判断した。

709は土師器の小皿である。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。口縁部の一部に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。



第134図 掘立柱建物跡21号

掘立柱建物跡21号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	埋深	深さ
1	51	44	66
2	62	55	73
3	52	52	27
4	51	51	55
5	72	54	80
6	42	34	28
7	31	27	29
8	29	29	9
9	45	45	50
10	63	36	29
11	56	52	46
12	86	63	62
13	45	42	49
14	59	37	62
15	41	62	54
16	48	48	56
17	29	29	18
18	53	53	56
19	69	47	42
20	29	29	28
21	44	37	9
22	44	44	30
23	46	44	34
24	53	33	48

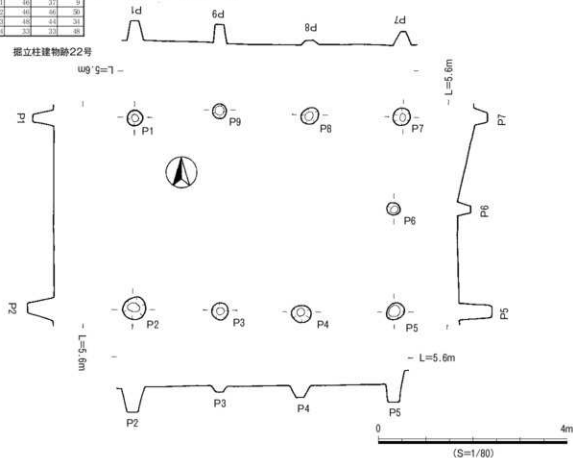
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
6-7	1.8	1-2	1.8
7-8	2.4	2-3	2.1
8-9	1.8	3-4	1.7
14-15	2.0	4-5	2.1
15-16	1.8	5-6	2.2
16-1	2.2	9-10	1.9
5-20	1.9	10-11	2.0
20-21	1.9	11-12	2.0
21-10	2.0	12-13	2.1
4-19	2.2	13-14	2.0
19-22	1.9	16-17	1.7
22-11	2.1	17-18	2.2
3-18	2.5	18-19	2.0
18-23	1.7	19-20	2.0
20-19	2.1	20-7	1.9
22-11	2.1	17-18	2.2
17-24	1.7	22-23	2.8
24-13	2.4	21-22	2.1
		23-24	2.8
		24-18	1.4

掘立柱建物跡22号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	埋深	深さ
1	33	33	43
2	69	47	53
3	35	33	11
4	41	35	25
5	41	35	43
6	29	29	29
7	36	36	27
8	36	34	8
9	29	29	20

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-2	4.1	2-3	1.8
5-6	2.2	3-4	1.7
6-7	1.9	4-5	2.0
		7-8	1.9
		8-9	1.9
		9-1	1.8

掘立柱建物跡22号



第135図 掘立柱建物跡22号

掘立柱建物跡31号 (第140図)

C-5区で検出された。規格は2間×3間で、梁行3.2m、桁行6mの規模をもち、床面積19.2㎡となる建物で、南北に庇をもつ建物である。東側の梁行間の柱穴を1本欠いている。柱穴は径40～50cm程度が平均である。柱穴1から銭貨が出土しており、地鎮の可能性を示す。

出土遺物 (第140図)

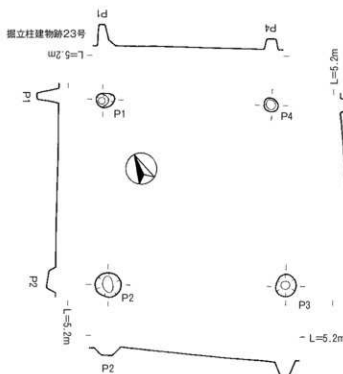
柱穴1から710、711が出土した。710は政和通宝、711は洪武通宝である。

掘立柱建物跡32号 (第141図)

F-5・6区で検出された。規格は2間×2間で、梁行3m、南側桁行4m、北側桁行3mの規模をもち、床面積10.5㎡となる。若干台形状を呈する建物である。柱穴は径40cm前後のものがほとんどである。

掘立柱建物跡33号 (第141図)

E・F-3・4区で検出された。規格は、西側南北方向の3柱穴列と南側の溝状の掘り込みからは推定できない。建物の一部が壁立ちであった可能性が伺える。



獨立柱建物跡23号

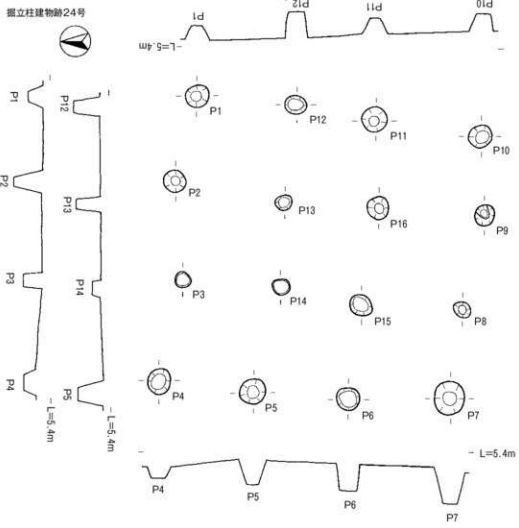
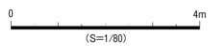
柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	形状	高さ
1	39	27	42
2	41	41	35
3	53	49	21
4	26	26	27

柱穴番号	縦行柱間 (m)	柱穴番号	横行柱間 (m)
1-2	3.8	2-3	3.7
3-4	3.8	4-1	3.8

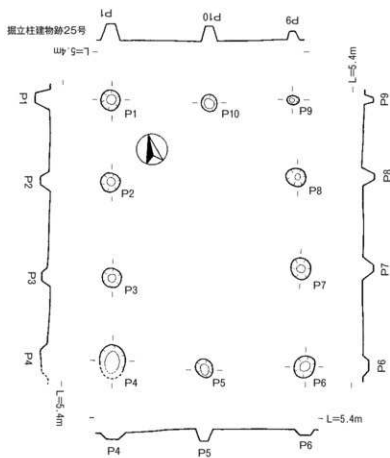
獨立柱建物跡24号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	形状	高さ
1	51	48	31
2	47	47	41
3	53	53	40
4	55	48	23
5	56	53	53
6	51	48	59
7	49	42	71
8	41	33	33
9	46	41	48
10	73	39	36
11	54	54	34
12	46	38	55
13	84	19	53
14	39	34	36
15	52	44	22
16	45	44	32

柱穴番号	縦行柱間 (m)	柱穴番号	横行柱間 (m)
1-2	1.9	4-5	2.0
2-3	2.1	5-6	2.0
3-4	2.2	6-7	2.2
7-8	1.9	10-11	2.3
8-9	2.1	11-12	1.7
9-10	1.8	12-13	2.1
12-13	2.1	3-14	2.1
13-14	1.8	14-15	1.7
14-5	2.3	15-9	2.2
11-18	1.4	2-13	2.1
18-15	2.1	12-16	2.0
15-8	2.0	18-9	2.2



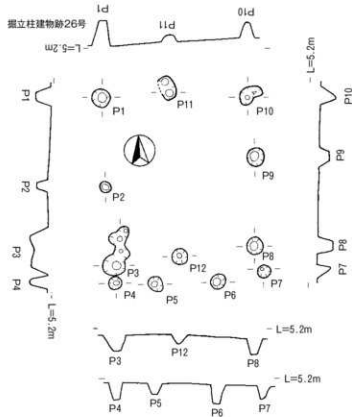
第136図 獨立柱建物跡23、24号



獨立柱建物跡25号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	前後	高さ
1	43	37	33
2	48	40	33
3	39	39	19
4	51+	53	13
5	36	33	27
6	44	41	13
7	45	42	23
8	42	35	26
9	25	19	18
10	34	31	33

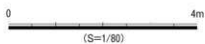
柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
4-5	1.9	1-2	1.7
2-3	2.1	2-3	2.1
9-10	1.7	3-4	1.7
10-1	2.1	6-7	2.1
		7-8	2.0
		8-9	1.8



獨立柱建物跡26号

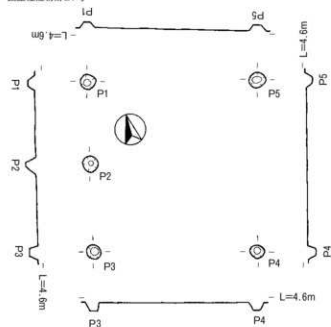
柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	前後	高さ
1	36	36	33
2	25	22	26
3	39	47	33
4	28	26	38
5	33	28	23
6	33	28	18
7	29	27	27
8	36	33	33
9	37	36	23
10	51	27	41
11	49	34	21
12	32	32	20

柱穴番号	並行柱間 (m)	柱穴番号	並行柱間 (m)
1-2	1.8	4-5	0.8
2-3	1.7	5-6	1.3
8-9	1.8	6-7	1.0
9-10	1.3	10-11	1.7
		11-1	1.8
		3-12	1.3
		12-8	1.8



第137图 獨立柱建物跡25、26号

掘立柱建物跡27号

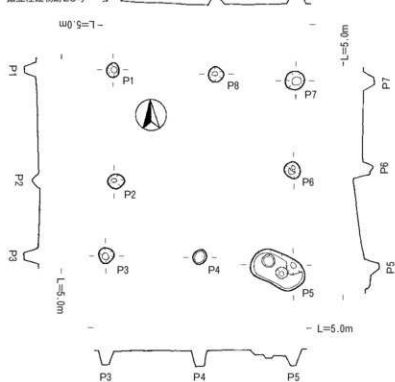


掘立柱建物跡27号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	縦径	高さ
1	34	34	15
2	35	35	23
3	33	29	19
4	30	28	19
5	30	33	18

柱穴番号	実行経路 (m)	柱穴番号	実行経路 (m)
1-2	1.8	3-4	3.5
2-3	1.6	5-1	3.6
4-5	3.8		

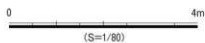
掘立柱建物跡28号



掘立柱建物跡28号

柱番号	柱穴 (cm)		
	直径	縦径	高さ
1	31	27	27
2	34	34	26
3	33	31	31
4	33	28	34
5	116	64	30
6	33	33	23
7	39	37	21
8	33	32	18

柱穴番号	実行経路 (m)	柱穴番号	実行経路 (m)
3-4	2	1-2	2.3
4-5	1.9	2-3	1.6
7-8	1.7	1-4	3.5
6-1	2.1	6-7	1.9



第138図 掘立柱建物跡27, 28号

竪穴建物跡 (第142図～第151図)

竪穴建物跡は11基検出された。調査区内西側には検出されず、東側の1基を除き、ほとんどが調査区中央付近で検出された。

竪穴建物跡1号 (第142図)

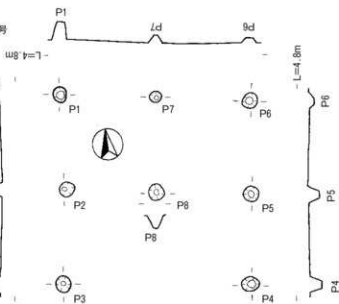
B・C-31区で検出された。形状は1辺が3.5mのやや崩れた隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約40cm程度で壁の立ちあがりは緩やかである。埋土内からは遺物も多数出土している。

掘立柱建物跡29号

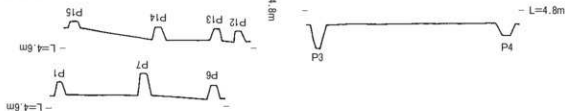
柱番号	柱穴(cm)		
	直径	距縁	深さ
1	211	251	235
2	341	36	26
3	341	36	51
4	36	261	21
5	352	251	26
6	351	36	11
7	26	211	18
8	321	321	26

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-2	2.0	3-4	4.0
2-3	2.0	6-7	2.0
4-5	1.9	7-1	2.0
5-6	2.0	2-8	1.9
7-8	2.0	8-5	1.9

掘立柱建物跡29号



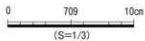
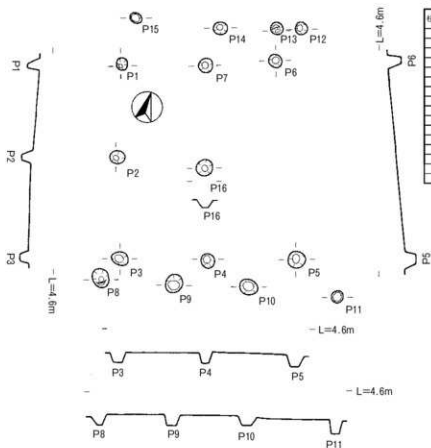
掘立柱建物跡30号



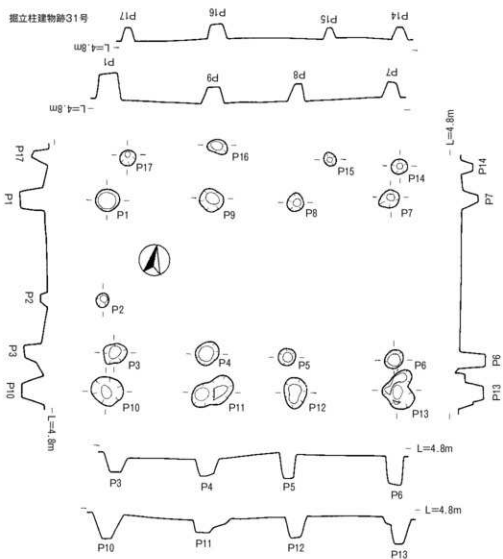
掘立柱建物跡30号

柱番号	柱穴(cm)		
	直径	距縁	深さ
1	217	223	226
2	203	236	214
3	266	227	229
4	311	229	214
5	36	36	25
6	224	226	229
7	266	227	229
8	464	223	21
9	389	34	24
10	326	221	229
11	211	225	21
12	212	221	24
13	26	36	26
14	229	221	226
15	211	221	11
16	311	221	24

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
3-4	1.8	1-2	1.9
4-5	1.9	2-3	2.1
6-7	1.5	2-6	4.4
7-1	1.8		



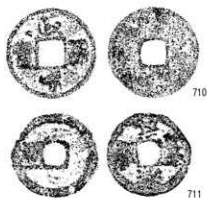
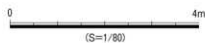
第139図 掘立柱建物跡29、30号・30号出土遺物



掘立柱建物跡31号

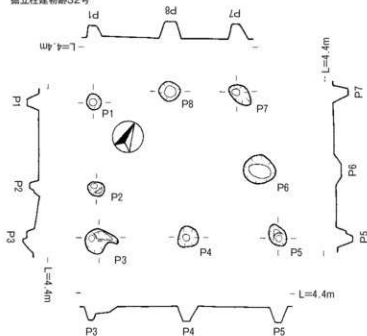
柱番号	坑口	高さ	深さ
1	56	47	54
2	36	36	13
3	51	42	36
4	52	45	46
5	35	35	49
6	42	35	69
7	45	35	37
8	41	35	46
9	52	47	39
10	65	37	44
11	94	52	33
12	68	44	43
13	83	37	57
14	34	24	36
15	28	24	22
16	52	29	21
17	52	52	39

柱穴番号	掘行範囲 (m)	柱穴番号	掘行範囲 (m)
17-1	1.0	3-4	1.9
1-2	2.1	4-5	1.7
2-3	1.2	5-6	2.2
3-10	0.9	7-8	2.0
13-6	0.7	8-9	1.8
6-7	3.4	9-1	2.2
7-14	0.7	10-11	2.2
		11-12	1.9
		12-13	2.2
		14-15	1.5
		15-16	2.4
		16-17	1.9



第140図 掘立柱建物跡31号・出土遺物

掘立柱建物跡32号

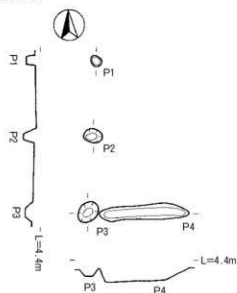


掘立柱建物跡32号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	374	308	326
2	396	300	119
3	270	149	499
4	422	422	325
5	488	326	214
6	270	600	114
7	54	34	32
8	44	41	35

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-2	1.6	3-4	2.0
2-3	1.1	4-5	1.9
5-6	1.5	7-8	1.4
6-7	1.8	8-1	1.7

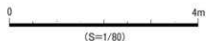
掘立柱建物跡33号



掘立柱建物跡33号

柱番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	25	20	19
2	40	30	29
3	50	38	14
4	109	27	13

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-2	1.6	3-4	
2-3	1.6		



第141図 掘立柱建物跡32, 33号

出土遺物 (第142図)

遺物は青磁、白磁、土師器、東播系須恵器等約20点出土したが、ほとんどは流れ込みと思われる。該期のものと考えられる遺物から2点を図化した。712は白磁の皿で、口唇部の軸が削り取られる口禿げである。713は青磁の椀である。開弁がしっかりしたもので、進弁の中心は稜を有する。714は、滑石製品底部の転用品で中央に穿孔を施す。未製品である。

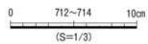
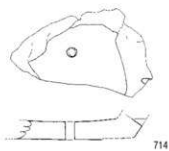
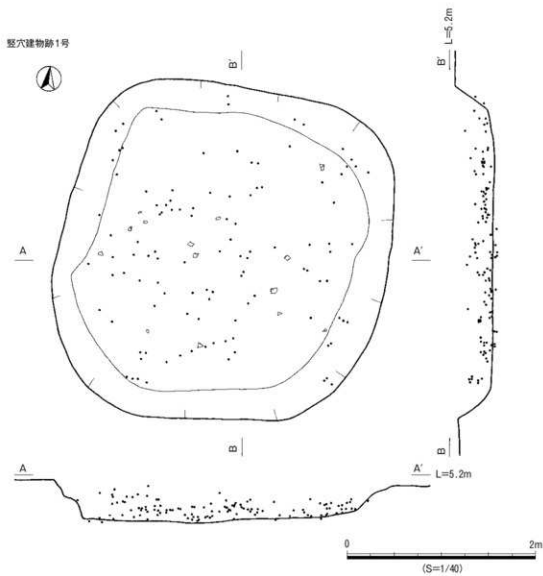
竪穴建物跡2号 (第143図)

D-24区で検出された。形状は長軸2.9m、短軸2.7m

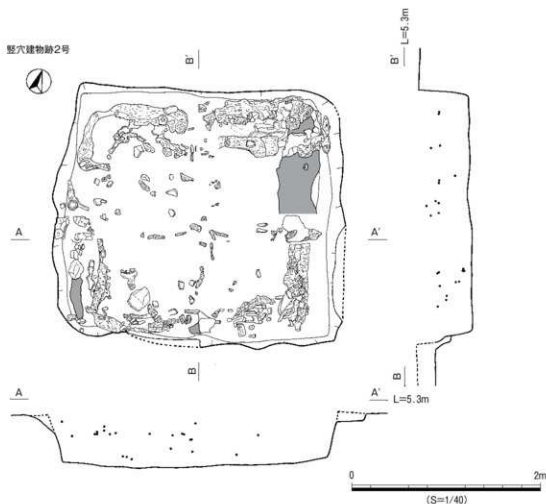
の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約61cmで、壁の立ちあがりはほぼ直角で直線的にしっかり立ち上がる。この遺構は、建物使用中に火災にあったと考えられ、遺構内埋土中から建築部材とおぼしき炭化物が大量に出土した。また、建物の4隅に径60~80cmの比較的大きな柱穴が確認された。

出土遺物 (第144図)

遺物は、土師器の坏、白磁の椀・皿、同安楽系の青磁皿、天目碗、瓦質土器、櫛万丈産と思われる甕の胴部等が出土した。家屋が焼失した後の流れ込みによる遺物も



第142図 竪穴建物跡1号・出土遺物



第143図 竪穴建物跡2号遺物出土状況

多く、この遺構が焼失したと考えられる時期の遺物の中から3点を図化した。715は土師器の坏である。底部と体部の境はナデ調整が施される。716は白磁で、口禿げの皿である。717は天目碗である。胎土は暗灰黄色を呈し、微細な白色砂粒を含む。釉は黒褐色の光沢の弱い天目釉が、外面腰部までかかる。中国産のものと思われる。以上のことから家屋が焼失した時期は、13世紀後半から14世紀初頭頃と考えたい。

竪穴建物跡3号 (第145図)

B-23区で検出された。形状は長軸4.7m、短軸3.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約25cmで、壁の立ちあがりは極端に緩やかであることから当時の建物平面形態は現在とは異なっていた可能性も考えられる。また、建物北側には、かまどが付帯しており、かまど床面と建物床面はほぼ同じ高さである。かまどの詳細については後述する。

竪穴建物跡4号 (第145図)

A-21区で検出された。形状は、南東隅のコーナー部を消失しているものの、長軸2m、短軸1.7mの隅丸長方

形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約20cmで壁面の立ちあがりはほぼ直角でしっかりとした立ち上がりである。柱穴は確認できなかった。

出土遺物 (第145図)

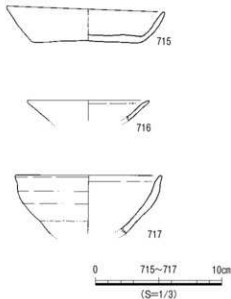
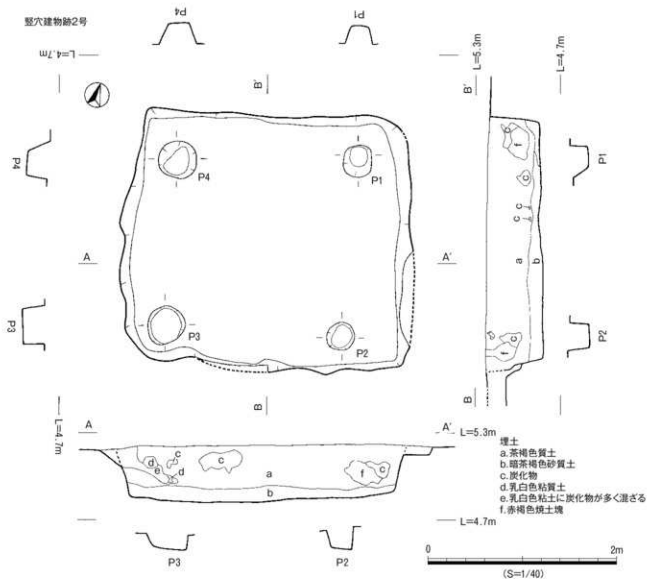
遺物は、完形の土師器の坏と青磁碗の小片が出土した。そのうち土師器の坏1点を図化した。718は口径13.0cm、底径10.0cm、器高2.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。口縁部内外面に煤が付着する。

竪穴建物跡5号 (第146図)

A-21区で検出された。形状は長軸3.6m、短軸3m隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは15cmと非常に浅い。床面には5か所の柱穴が確認された。柱穴は径30~40cmほどである。また東側、側壁下部に長さ1.2m程の浅い溝が確認できる。

竪穴建物跡6号 (第147図)

C・D-20・21区で検出された。形状は長軸3.1m、短軸3mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約65cmと比較的深い。また壁の立ち上がりもほぼ直角でしっかり



第144図 竪穴建物跡2号完掘状況・出土遺物

している。建物内部南側にかまど跡が確認された。かまどは、長軸短軸80cmで残存高25cmであった。床面には炭化物の集中箇所がみられた。柱穴等の痕跡は確認できなかった。

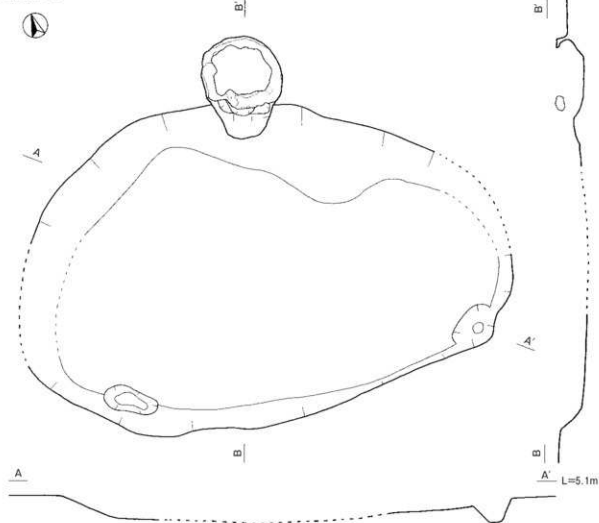
出土遺物（第148図）

遺物は、底部が糸切りの土師器の皿や杯等が出土しているが、小片で図化できなかった。719・720は埋土内から出土した銭貨である。719は大・通・宝の文字が読める。720は小片のため種別は不明である。721は厚さ8mm程の鉄片である。

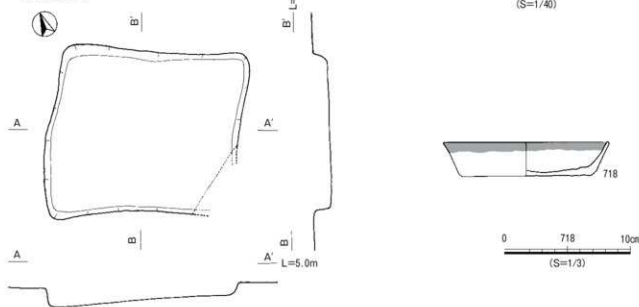
竪穴建物跡7号（第149図）

C-19区で検出された。北東隅で竪穴建物跡8号と切り合っているが、前後関係は不明である。形状は長軸2.8m、短軸2.4mの方形を呈する。検出面からの深さは約35cmで、壁はほぼ直角に立ち上がりしっかりしている。床面から柱穴は確認できなかった。遺構内南西隅に長軸

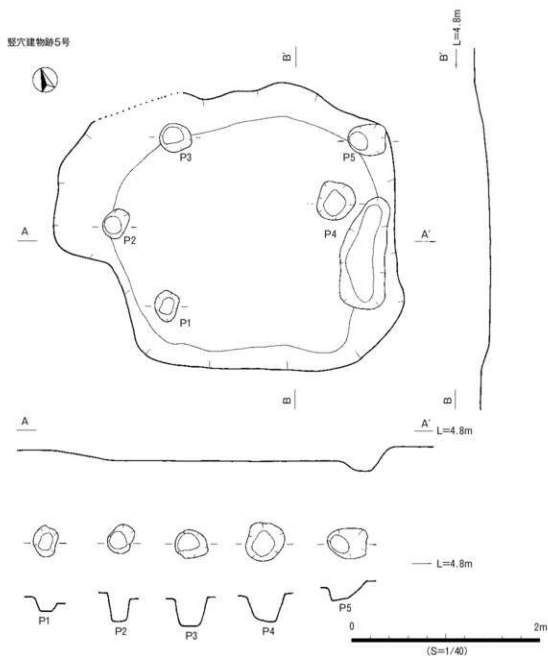
竪穴建物跡3号



竪穴建物跡4号



第145図 竪穴建物跡3、4号・4号出土遺物



第146図 竪穴建物跡5号

90cm、短軸60cm、深さ10cmほどの浅い掘り込みが確認された。遺構内から銭貨が出土している。

出土遺物 (第149図)

722は埋土中から出土した銭貨で、天・通・宝の文字が読める。

竪穴建物跡8号 (第149図)

C-19区で検出された。南西隅で竪穴建物跡7号と切り合っている。また、遺構北側はカクランにより消失している。遺構中央に浅い掘り込みがみられるが、後世の掘り込みの切り合いによるものである。遺構現存部で、長軸2.5m、短軸1.9mの長方形の形状を示す。検出面か

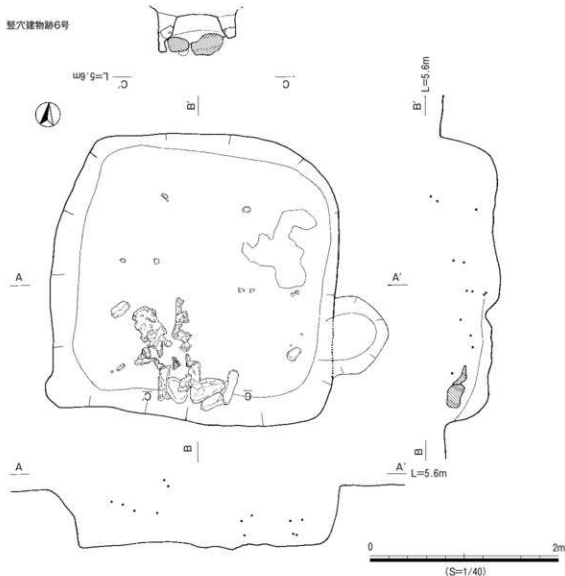
らの深さは約50cmと比較的深く壁の立ち上がりも、ほぼ直角でしっかりしている。柱穴等は確認できなかった。

竪穴建物跡9号 (第150図)

C-19区で検出された。形状は長軸2.5m、短軸2.3mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さ約30cmで、壁面は、ほぼ直角のしっかりとした立ち上りをみせる。柱穴等は確認されなかった。

出土遺物 (第150図)

遺物は、青磁、中国陶器、常滑焼の甕、東播系の埴輪、土師器の皿・杯等約30点出土した。小片が多く、該期の遺物として図化できたものは1点であった。723は土師



第147図 竪穴建物跡6号遺物出土状況

器の小皿である。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がる。外底面は亲切りである。

竪穴建物跡10号（第150図）

D・E-17区で検出された。形状は長軸2.5m、短軸2.3mの隅丸方形である。検出面からの深さ約65cmで比較的深い。最下面には一部、硬化面が確認でき床面と推測される。柱穴等は確認できなかった。

出土遺物（第150図）

724は埋土中から出土した銭貨で、皇宋通宝である。

竪穴建物跡11号（第151図）

C・D-5区で検出された。形状は長軸5.5m、短軸4mの楕円形である。検出面からの深さは約40cmで壁面はやや緩やかに外向きに立ち上がる。床面から径約20cmの柱穴が2か所検出された。また遺構内南側に長径1.4m、

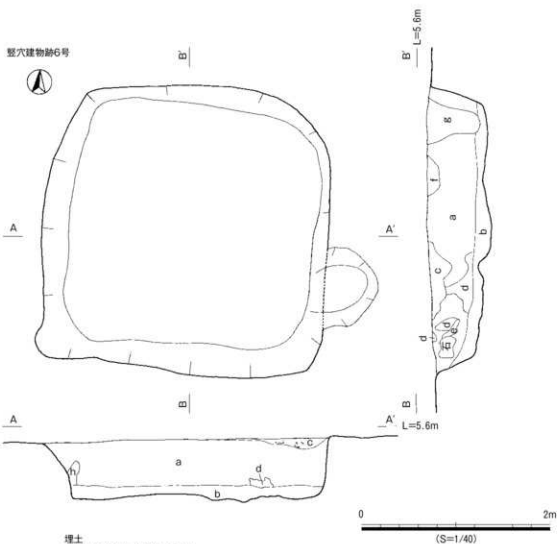
短径0.7m、深さ7cmの浅い掘り込みも確認できる。

かまど跡（第152図～第171図）

かまど跡は29基確認されている。遺構に付帯するものは別として、単体で検出される場合は少なく、数基が集中中、もしくは切り合って検出される傾向にある。

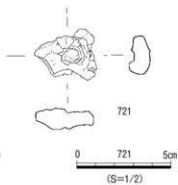
かまど跡1号（第152図）

B-37区で検出された。主軸は西に79°振れ、焚き口は西に開く。全長1.6m、全幅0.6mである。平面形はかまど本体が焚き口でくびれ灰溜まりへと広がるひょうたん形を呈する。かまど本体は幅約60cm、奥行き約50cmで、燃焼により橙色に変色した本体壁の立ち上がりは、ほとんど失われ一部が高さ9cmほど残存する。かまど本体下部にはわずかに炭化物の層が確認できる。

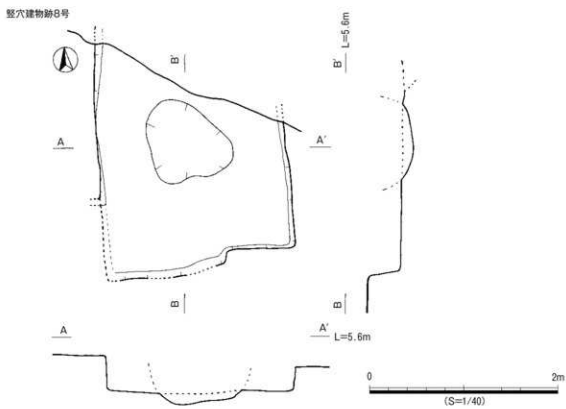
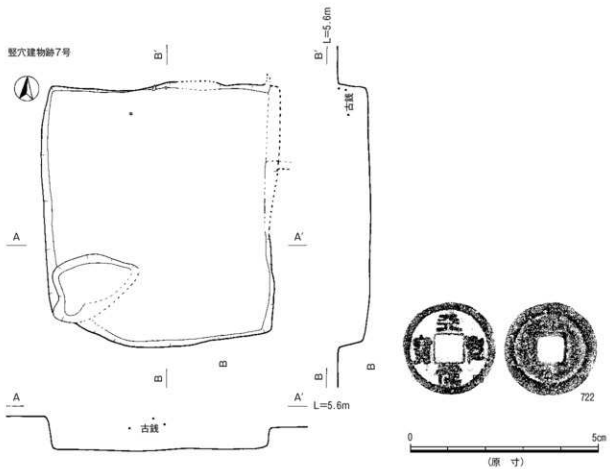


埋土

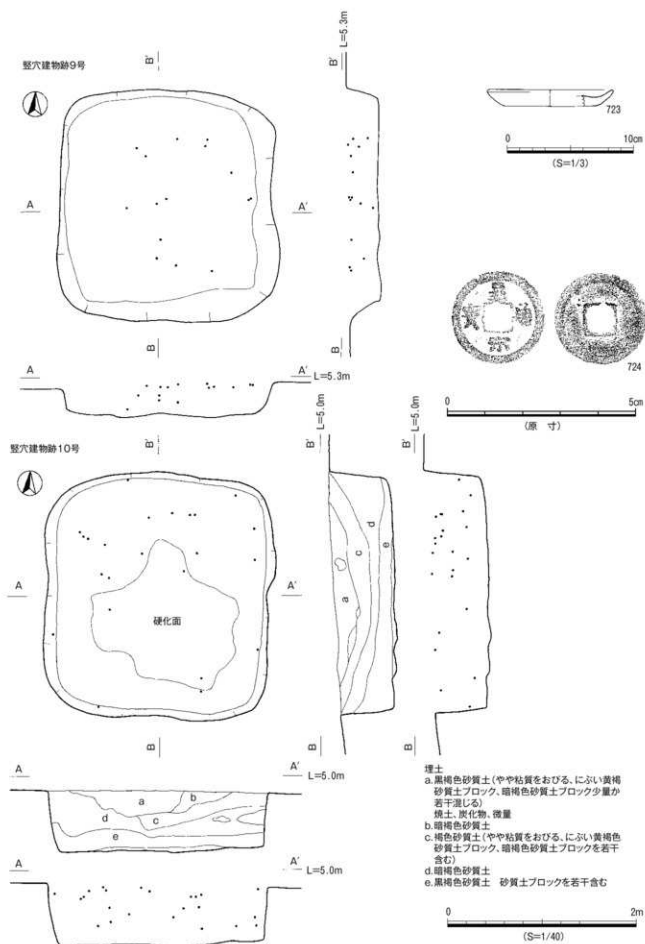
- a. 黒褐色砂質土、やや粘性あり
 b. 暗褐色～黒褐色砂質土
 c. 暗褐色砂質土、やや粘性あり、aより粘性が強く硬い
 炭化物片を少量含む、赤褐色極微細小ブロックをわずかに含む
 d. 黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。橙～明褐色の粘土ブロック
 やや硬い
 e. 橙～明褐色粘土ブロック
 f. 暗褐色～黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。
 g. 暗褐色～黒褐色砂質土、やや粘性を帯びる。
 (竪穴を切るビットの埋土)
 h. 黒褐色砂質土、やや粘質を帯びる



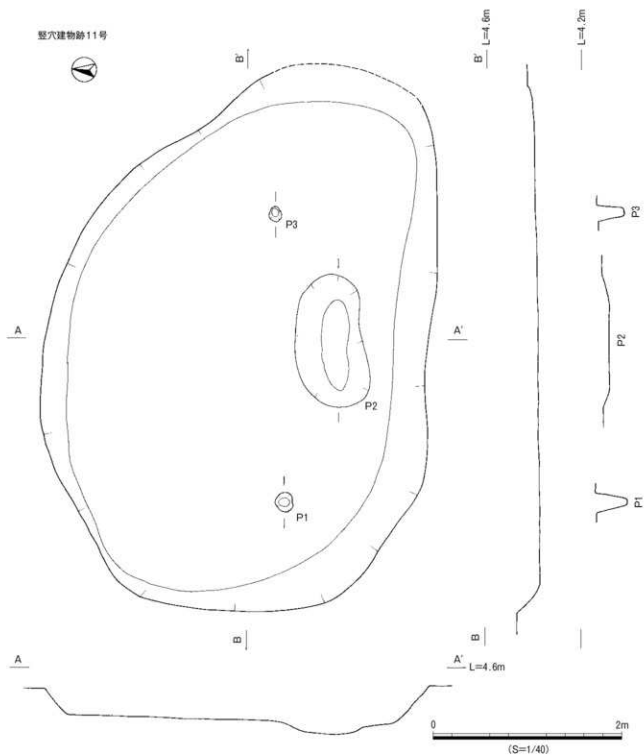
第148図 竪穴建物跡6号完掘状況・出土遺物



第149図 竪穴建物跡7, 8号・7号出土遺物



第150図 竪穴建物跡9、10号・出土遺物



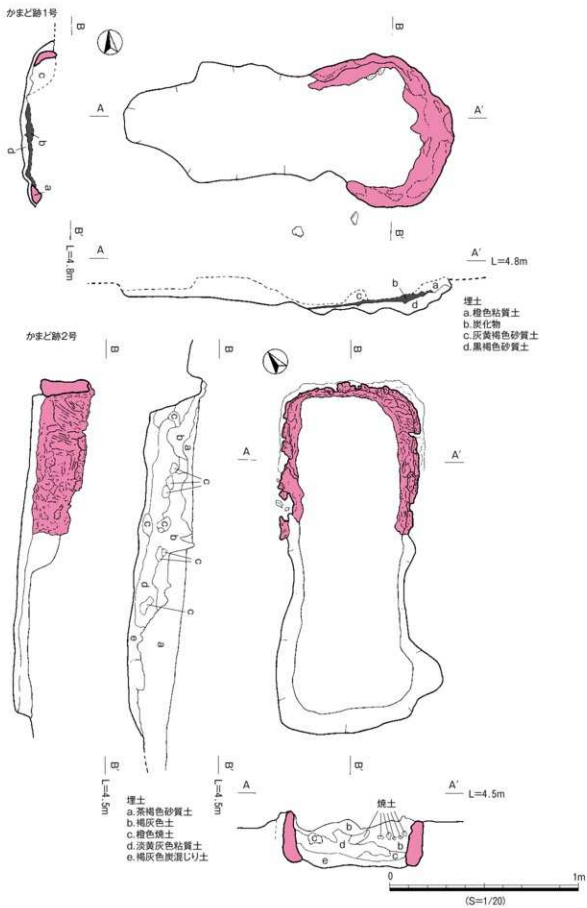
第151図 竪穴建物跡11号

かまど跡2号 (第152図)

E-31区で検出された。主軸は東に39° 振れ、焚き口は南西に開く。全長1.7m、全幅0.9mである。平面形は、かまど本体から灰溜まりへとそのまま続く長方形を呈する。かまど本体は幅約60cm、奥行き約90cm、燃焼により強く焼けた高さ約25cmの本体壁がコの字型に残存する。

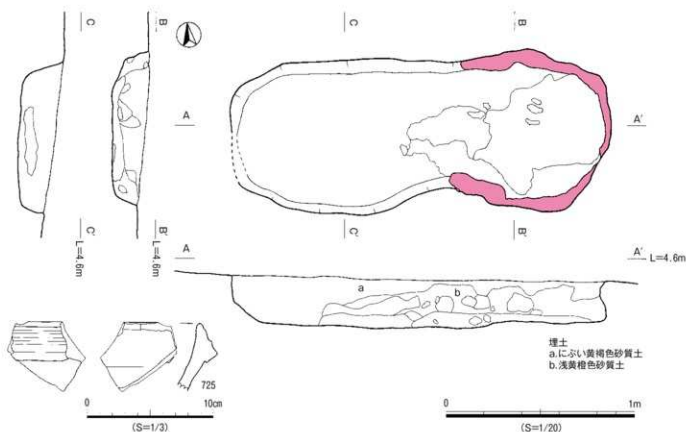
かまど跡3号 (第153図)

E-29区で検出された。主軸は西に82° 振れ、焚き口は西に開く。全長2m、全幅0.8mである。平面形は、かまど本体焚き口部でわずかにくびれる、楕円形を呈する。かまど本体は幅約80cm、奥行き80cmの円形を呈すると思われる。本体壁の残りはよくないが、一部14cmの高さで



第152図 かまど跡1、2号

かまと跡3号



第153図 かまと跡3号・出土遺物

残存する。

出土遺物 (第153図)

遺物は備前産の播鉢が1点出土した。725は口縁部を外側に折り返して断面三角形につくるものである。内面の襷目は破損して観察できない。

かまと跡4号 (第154図)

E-28区で検出された。かまと跡4号～6号はE-28区に形成された浅い凹み状地形の縁辺部に構築されている。主軸は西に74° 振れ、焚き口は西北西に開く。灰溜まり末端は凹みにより形成されないため、灰溜まり痕跡までの全長が約1.5m+α、全幅0.9mである。平面形は、かまと本体が焚き口部でくびれ、灰溜まりへ広がるひょうたん形を呈すると思われる。かまと本体は幅約80cm、奥行き80cmの円形を呈する。本体内部には崩壊した本体壁の破片が散在していた。燃焼により赤化した本体壁は、高さ16cmほど残存している。

出土遺物 (第154図)

かまとが設置された地から銭貨が出土したのでここに記す。726は照寧元宝である。

かまと跡5号 (第155図)

E-28区で検出された。主軸は西に69° 振れ、焚き口は

西北西に開く。全長は断面から1m強、全幅0.8mである。平面形はかまと本体部分しか確認できないがU字形を呈し、焚き口部で若干くびれるものと推測される。かまと本体は幅約68cm、奥行き約55cmで、燃焼により赤化した本体壁が高さ約14cmほど残存している。

かまと跡6号 (第156図)

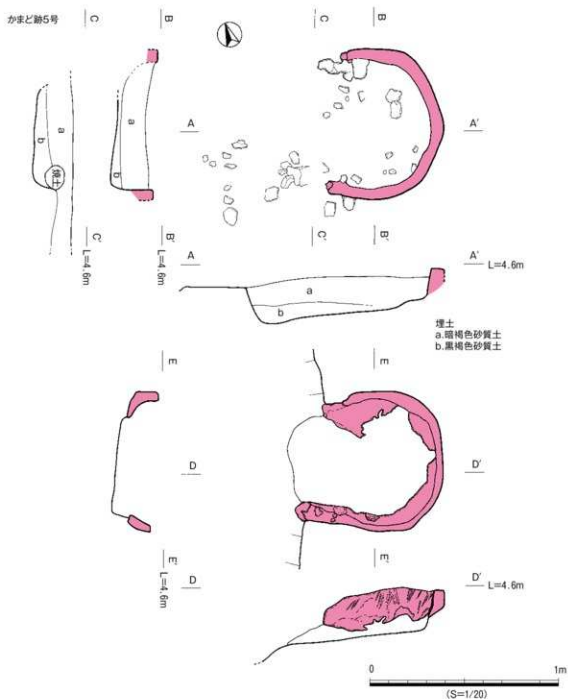
E-28区で検出された。主軸は西に65° 振れ、焚き口は西北西に開く。灰溜まりがはっきりせず、全体の平面形、全長、全幅は不明であるが、かまと本体は幅50cm、奥行き1mのU字形を呈する。燃焼により赤化した本体壁が高さ25cmほど残存している。かまと本体内部埋土には、崩壊した本体壁が混じっている。

出土遺物 (第156図)

遺物は、白磁2点と青磁1点出土し、白磁碗1点を図化した。727は口縁部が外反し、腰部が張る形状を呈する碗である。胎土は灰褐色を呈し、釉も灰色味がかかる。

かまと跡7号 (第156図)

E-27区で検出された。主軸は東に87° 振れ、焚き口は西に開く。全長2.2m、全幅0.7mである。灰溜まりを含む全体的な平面形は、長楕円形を呈し、かまと本体は円形を呈する。かまと本体は幅約70cm、奥行き75cmである。



第155図 かまど跡5号

本体、灰溜まり部の掘り込みは約30cmほどである。灰溜まり部にピットが確認できるが、後世のものと考えられる。

さらに、かまど7号は掘立柱建物跡11号の内部に本体が位置し、かまど長軸と掘立柱建物跡桁行方向が平行関係にある。

出土遺物 (第156図)

遺物は青磁が2点出土した。そのうち1点を図化し

た。728は龍泉窯系青磁の碗である。外面には蓮弁文が細線と剣頭部に分かれた線描蓮弁文が描かれる。剣頭部は蓮弁の単位を意識して描かれる。

かまど跡8号 (第157図)

F-24区で検出された。主軸は、かまど本体、灰溜まりの形状が不明のため特定することは出来ない。焼土塊、炭化物の広がり長軸2.8m、短軸1.4mと比較的広範囲に広がる。焼土塊、炭化物混じりの層の厚さは20cm程で

ある。

かまど跡9号(第158図)

F-23・24区で検出された。主軸は東に81°振れ、焚き口は西に開く。灰溜まりが確認できず、全長、全幅は特定できない。かまど本体の平面形は、南西側壁が失われているが、コの字状を呈していると考えられ、本体幅70cm、奥行き80cmの規模をもつ。燃焼により焼けた本体壁は高さ17cmほど残存し、本体内部の埋土中には崩壊したかまど壁塊が大量に混ざる。

かまど跡10号(第158図)

F-24区で検出された。主軸は東に8°振れ、焚き口は北方向に開くと推測される。全体の形状は全長1.7m、全幅0.4mの長楕円形を呈する。遺構断面、かまど本体の記録が確認できず詳細は不明である。

かまど跡11号(第159図)

E・F-23・24区で検出された。主軸は東に65°振れ、かまど本体の崩壊が激しいが、焚き口は西南西方向に開くと思われる。先述の通りかまど本体の形状は不明であるが、全体の形状は全長2.6m、全幅0.9mの崩れた楕円形を呈する。かまど奥側の本体壁が一部、高さ20cmほど残存する。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物(第159図)

729・730ともに7枚重なる銭貨で、表裏が裏面のため種別については不明である。

かまど跡12号(第160図)

E-24区で検出された。主軸は東に88°振れ、焚き口は西方向に開く。全長1.1m、全幅0.6mで楕円形の形状を示す。かまど本体は幅60cm、奥行き50cmのコの字状を呈する。かまど壁は良好なところで5cm程度、最奥部は最下面がわずかに残るのみである。埋土中には炭化物や、かまど本体壁と思われる焼土塊が混ざる。

かまど跡13号(第160図)

B-23区で検出された。竅穴建物跡3号に伴うかまど跡である。建物北側に位置し、焚き口部が丁度、建物壁付近に位置する。主軸は東に13°振れ、焚き口は南南西方向に開き、灰溜まりは形成されていないが、建物床とはほぼ同じ高さとなる。形状は幅90cm、奥行き110cmのほぼ円形を呈している。焚き口部上面がブリッジ状に残存しているように見えるが、崩壊した本体壁の塊がのっているだけである。

かまど跡14号(第161図)

D-20区で検出された。かまど跡15号・16号と切り合い、3基の内でも最も新しいものであることが確認できる。主軸は東に90°振れ、かまど本体は後世の掘り込みなどで、かなり崩壊しているものの、焚き口は西方向に開くことが確認できる。全長約2.2m、全幅約50cmで、全体形状は、かまど焚き口部でややくびれるひょうたん形を呈している。かまど本体は、幅50cm、奥行き約100cmのコの

字状を呈し、焚き口付近が若干狭まる。燃焼を受け赤色化した本体壁は高さ約17cmほど残存する。かまど本体付近の埋土には、崩壊した本体壁や炭化物が大量に混ざる。

かまど跡15号(第162図)

D-20区で検出された。かまど本体部分はかまど跡14号の灰溜まり部に切れられ、失われている。また灰溜まり部にも後世の土坑が切り合い、ほとんど原形を留めていない。全長は、1.7m以上で、全幅は0.7mほどと想定される。

かまど跡16号(第163図)

D-20区で検出された。かまど跡14号の本体部分で、一部を切られる。主軸は東に37°振れる。全体の形状は、全長1.8m以上、全幅0.8mの隅丸長方形を呈する。かまど本体は完全に破壊されており、かまど本体がどこに存在したか不明である。掘り込みは良好なところで深さ18cmほど残存しており、掘り込み内埋土に崩壊したかまど本体壁塊が多量に混ざっている。

かまど跡17号(第164図)

D-19・20区で検出された。かまど跡19号と切り合い、かまど本体の一部と、灰溜まりを消失している。主軸は東に82°振れ、焚き口は東方向に開く。かまど本体の形状はコの字状を呈していると考えられ、現存部で幅50cm、奥行き50cm以上ある。

かまど跡18号(第164図)

C・D-19・20区で検出された。かまど跡19号と切り合い、かまど本体の一部を消失する。主軸は西に83°振れる。全体の形状は、全長約1.7m、全幅0.9mの砲弾型を呈する。焚き口は西方向に開く。かまど本体はコの字状を呈し、幅60cm、奥行き50cm以上とみられる。燃焼により赤化した本体壁は高さ5cmほど残存している。掘り込み内には崩壊した本体壁塊が多量に混ざる。

かまど跡19号(第165図)

D-19区で検出された。かまど跡17号・18号と切り合う。切り合い関係から3基の内19号が最も新しいものと判断できる。主軸は東へ12°振れる。全体形状は、全長2.1m、全幅0.7mの略長方形を呈し灰溜まり部に若干の張り出しをもつ。焚き口は南に開く。かまど本体はコの字状を呈し、幅50cm、奥行き90cmである。燃焼により赤化した本体壁は高さ約10cmほど残存する。

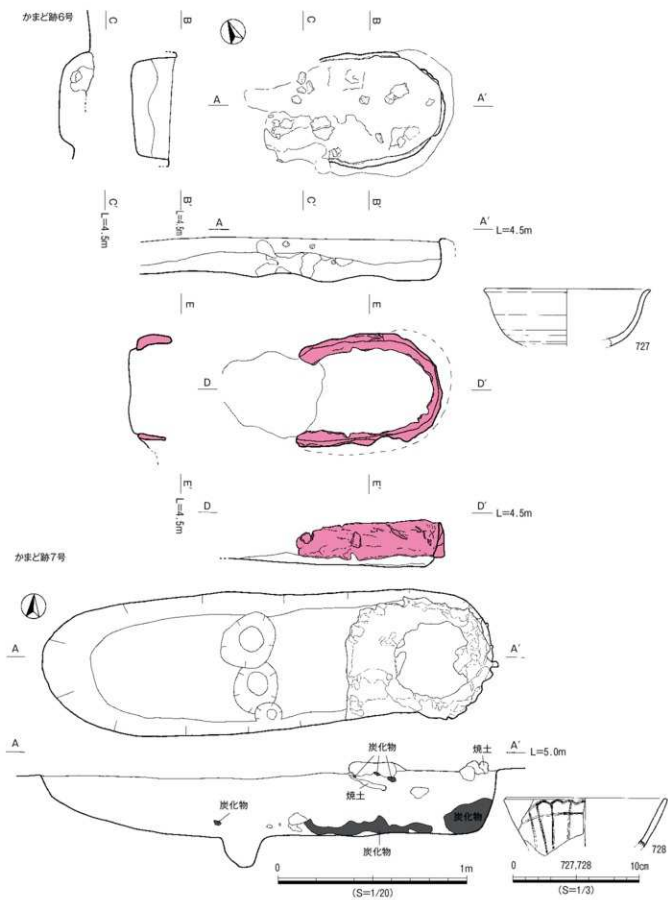
かまど跡20号(第166図)

F・G-16・17区で検出された。主軸は東に53°振れる。全体の形状は、全長約1.7m、全幅約0.6mの楕円形を呈する。かまど本体壁と思われる焼土塊と炭化物が多量に出土したが、本体と灰溜まり部の確認には至らなかった。

出土遺物(第166図)

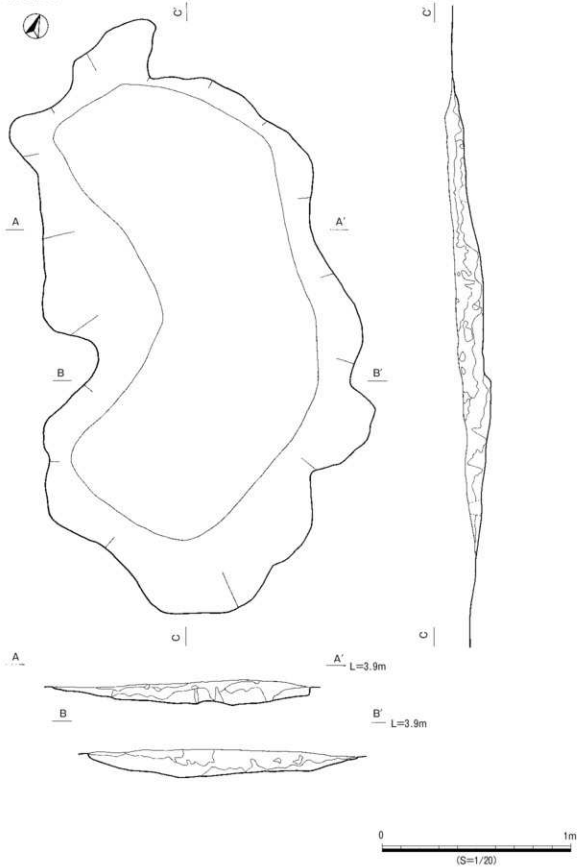
土師器7点、白磁2点、瓦質土器1点等が出土した。そのうち8点を図化した。731～733は土師器である。

731・732は小皿である。731は口径8.5cm、底径5.6cm、

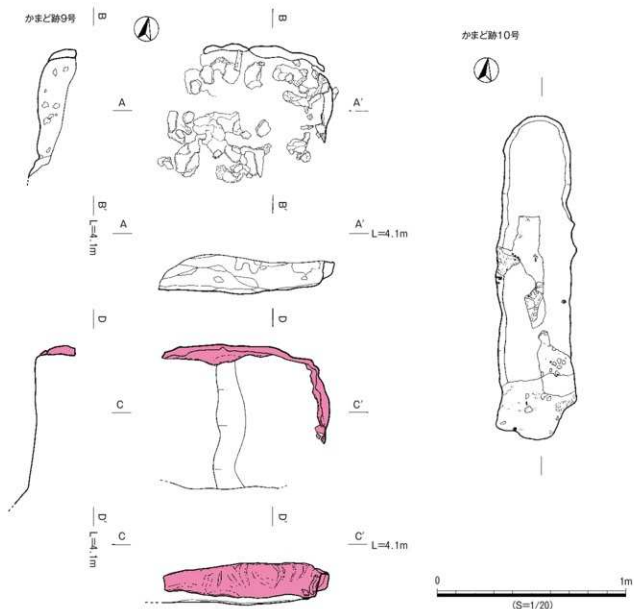


第156図 かまど跡6、7号・出土遺物

かまと跡8号



第157図 かまと跡8号



第158図 かまど跡9、10号

器高1.6cmを測り、内面はやや盛り上がる形状を呈する。体部は丸みを帯びながら立ちあがる。732は口縁部のみの資料である。口径8.8cmを測る。733は口径12.7cmを測る。内面は摩滅が激しく、器壁の剥落部分が観察される。734～736は坏である。734は口径13.5cmを測る。体部はまるみを帯びながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。735・736はどちらも内面中央部が盛り上がる形状を呈する。737は白磁の椀である。口唇部の軸が剥ぎ取られる口売げの資料である。738は瓦質土器の播鉢である。流れ込みの可能性が考えられる資料である。

かまど跡21号（第166図）

G-16区で検出された。長軸70cm、短軸50cmの範囲に、

わずかにかまど本体壁と思われる焼土塊が確認された。焼焼により赤化した本体壁のごく一部が高さ13cmほど確認できた。

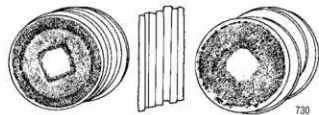
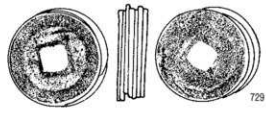
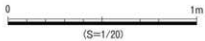
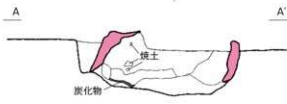
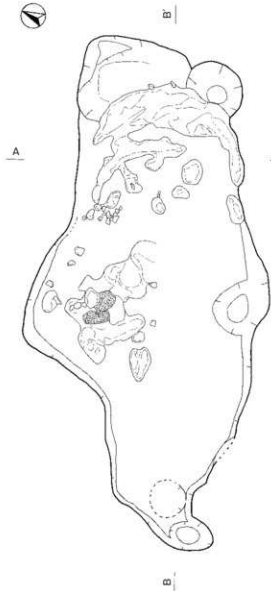
出土遺物（第166図）

遺物は、青磁2点、備前播鉢1点、瓦質土器2点、土師器1点が出土した。そのうち土師器の坏1点を図化することができた。739は、底径6.4cmを測る。体部は丸みを帯びながら立ち上がり、内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施される。

かまど跡22号（第167図）

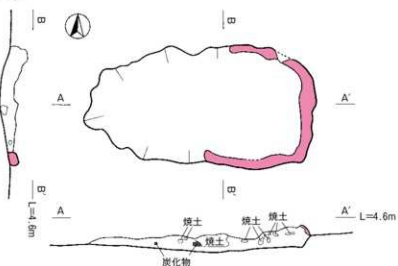
H-16区で検出された。主軸は西に82°振れる。全体の形状は、全長2.4m、全幅約1mで焚き口部でくびれる、

かまど跡11号

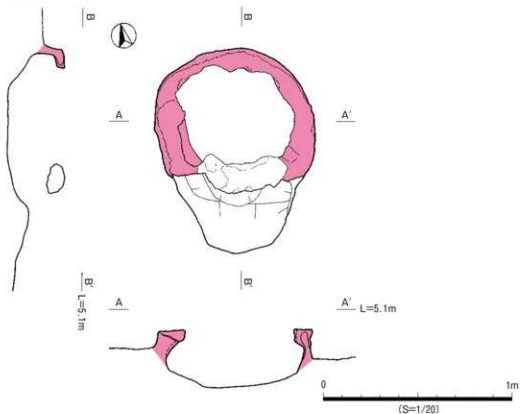


第159図 かまど跡11号・出土遺物

かまど跡12号



かまど跡13号



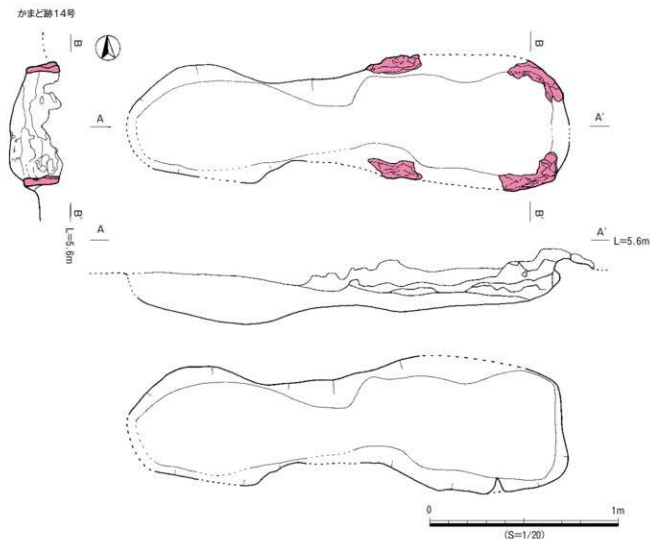
第160図 かまど跡12、13号

ひょうたん形を呈する。焚き口は石臼を転用し、西方向に開く。かまど本体は幅60cm、奥行き60cmで円形を呈している。燃焼により赤化したかまど本体壁は高さ20cmほど残存し、灰溜まりは深さ40cm程度ある。かまど本体下部、床面付近には炭化物が層をなして残存している。

かまど跡23号（第168図）

E-15区で検出された。かまど跡24号と切り合っ

り、23号の方が新しいことが確認できる。主軸は東に24°振れる。全体の形状は全長2.2m、全幅1.3mである。崩壊したかまど本体壁と思われる焼土塊が遺構北側に集中し、本体は北側にあり、焚き口は南南西方向に開いていたと考えられる。本体部分は大きく損壊しているが、幅70cm前後、奥行き90cm前後と考えられる。燃焼により赤化した、かまど本体壁が高さ約14cmほど残存している。



第161図 かまど跡14号

かまど跡24号 (第169図)

E-15区で検出された。かまど跡23号に灰溜まり部を切られている。全体の形状は、全長3.3m、全幅0.7mの長楕円形を呈している。かまど本体の立ち上がりは掘り込みの北側から約55cmのところに確認でき、幅40cm前後、奥行き60cm前後のコの字状を呈すると推測される。主軸は東に11°振れる。焚き口は南方向に開き、かまど内部の埋土には炭化物が集中する。また、かまど本体の北側にみられる掘り込みの埋土中には、炭化物が集中しており、かまど24号以前にかまどが存在した可能性を示唆している。

かまど跡25号 (第169図)

E-15区で検出された。かまど本体部のみを検出である。主軸は東に20°振れる。幅約80cm、奥行き約80cmのコの字状を呈する。焚き口は南南西方向に開く。燃焼により赤化したかまど本体壁の立ち上がりは、約10cmほど

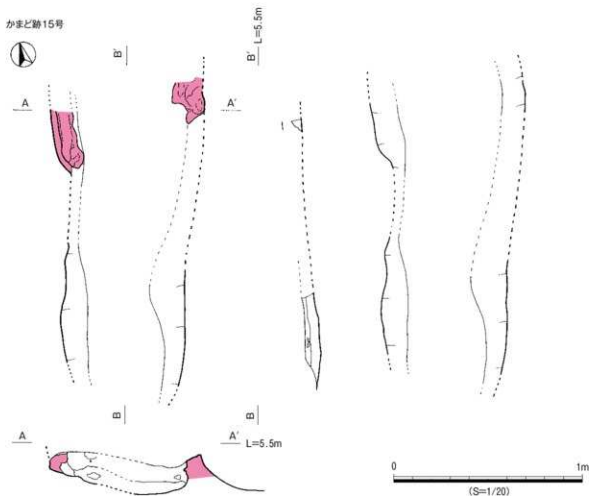
確認できる。

かまど跡26号 (第169図)

E-15区で検出された。かまど本体部のみを検出である。主軸は東に13°振れる。幅約60cm、奥行き約70cmのコの字状を呈すると考えられる。焚き口は南南西方向に開く。燃焼により赤化したかまど本体の立ち上がりは、約10cmほど確認できる。

かまど跡27号 (第170図)

E-14・15区で検出された。主軸は東に15°振れる。全体の形状は、全長2.6m、全幅1mで焚き口部で若干くびれ、わずかにひょうたん形を呈する。かまど本体は幅約80cm、奥行き約100cmで焚き口が北北東方向に開く、コの字状を呈する。燃焼により赤化したかまど本体部の立ち上がり良好で、高さ22cmほど残存する。かまど本体から灰溜まりの埋土中には、崩壊したかまど本体壁と思われる焼土塊や炭化物が多量に含まれる。



第162図 かまど跡15号

かまど跡28号 (第171図)

D-15区で検出された。主軸は東に20°振れる。灰溜まり部は消失し、かまど本体最奥部のみが残存する。本体部分は推定で幅約60cm、奥行き約80cm程度と考えられ、焚き口が南南西方向に開くコの字状を呈すると考えられる。遺構周辺に崩壊したかまど本体と思われる、焼土塊が散乱していた。

出土遺物 (第171図)

遺物は青磁椀1点、盤1点、備前播鉢2点、瓦質土器の播鉢2点、土師器小片25点、鉄滓小片2点等、約33点出土し、そのうち1点を図化した。

740は龍泉窯系青磁で、外面に雷文帯とラマ式蓮弁が描かれる椀である。

かまど跡29号 (第171図)

D-15区で検出された。主軸は東に8°振れる。かまど本体と、灰溜まりの一部が残存する。本来の形状は隅丸長方形を呈すると思われる。かまど本体は幅約50cm、

奥行き約70cm程度で、焚き口が南方向に開くコの字状を呈する。燃焼により赤化したかまど本体壁の立ち上がりは、20cmほど残存する。本かまど跡は、140cm×110cmの範囲で遺構切り取りを行い、移送保存を行った。現在、埋蔵文化財センターにて普及活動に利用している。

製鉄関連遺構 (第172図～第174図)

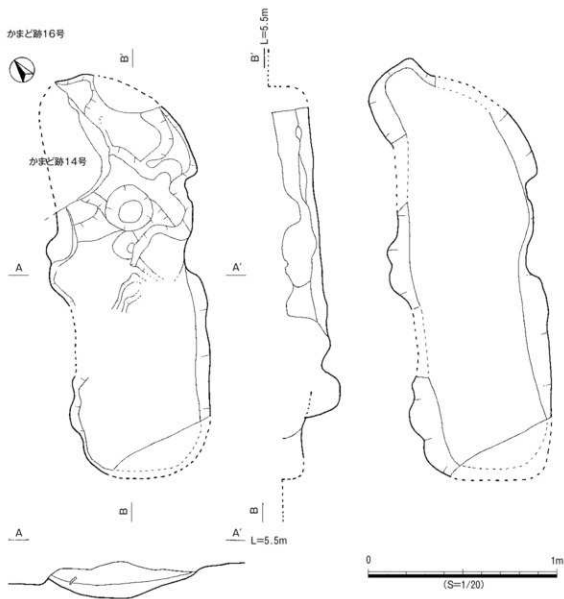
製鉄に関連すると思われる遺構は、B・C-17・18区、F・G-16～18区で6カ所確認された。

製鉄関連遺構 1号 (第172図)

B・C-17・18区で検出された。鉄滓、礫の集積遺構である。径約80cmの範囲に鉄滓と礫が集中して確認された。また、輪の羽口片や赤化した焼土塊も含まれており、鉄に關係する作業を行った後の、残滓や不要物を集積した排滓場と捉えた。

製鉄関連遺構 2号 (第172図)

F-17区で検出された。非常に強い熱を受けたと考えられる。赤褐色、橙色の焼土ブロックの広がりである。



第163図 かまど跡16号

焼土中に小割りにされた様な、炭化物がみられ、このほかにも近辺に製鉄に関連すると思われる遺構が集中することから、製鉄関連の炉と判断した。炉の中心部がどこかは不明である。検出面からの深さ20cmほどの掘り込みがみられる。

製鉄関連遺構 3号 (第173図)

G-17区で検出された。直径55cm、検出面からの深さ10cmほどの皿状の掘り込みがあり、埋土中に炭化物片と、細かな鉄滓が含まれている。さらに輪の羽口片も出土した。これらから、鍛冶炉と判断した。炭化物は掘り込み南東側にも広がりをみせ、鍛造屑片が多量に混じる。

出土遺物 (第173図)

遺物は土師器が2点(1点は完形の小皿)と輪の羽口

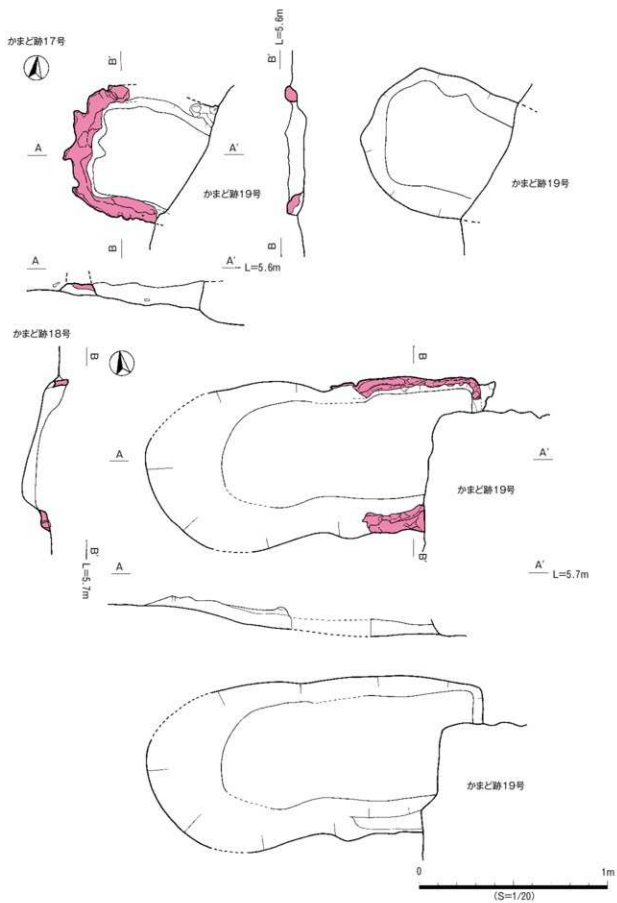
が1点出土し、完形の小皿1点と羽口を図化した。741は口径7.6cm、底径5.2cm、器高0.75cmを測る。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がる。内外面は丁寧な回転ナデ調整が施される。742は羽口である。大形のもので、外径約9.5cm、内径約2.5cmを測る。外面はへた状工具によるナデ調整が施される。

製鉄関連遺構 4号 (第173図)

G-17・18区で検出された。長軸1.5m、短軸1mの広がりをもせる焼土跡である。鉄滓と軽石が埋土に混ざる。断面の記録が無いため掘り込みの状況は確認できなかった。鍛冶関係の跡もしくは廃棄場と考える。

製鉄関連遺構 5号 (第173図)

G-18区で検出された。軽石と鉄滓が混じる焼土の広



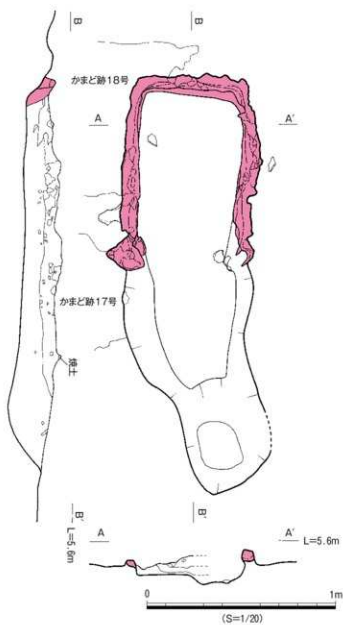
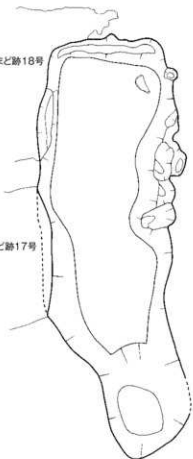
第164図 かまど跡17、18号

かまど跡19号



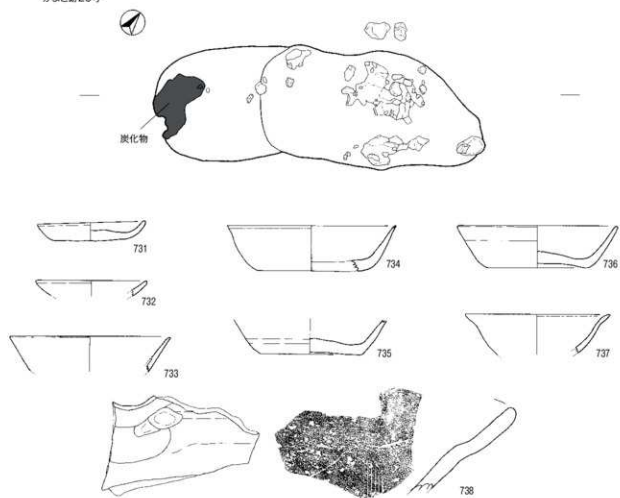
かまど跡18号

かまど跡17号

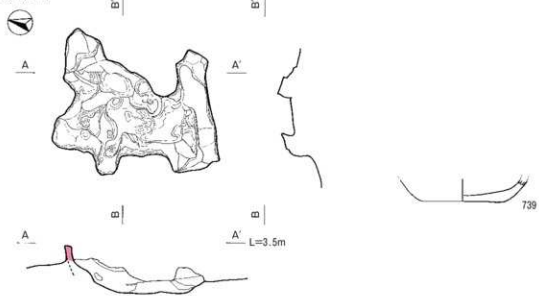


第165図 かまど跡19号

かまど跡20号



かまど跡21号

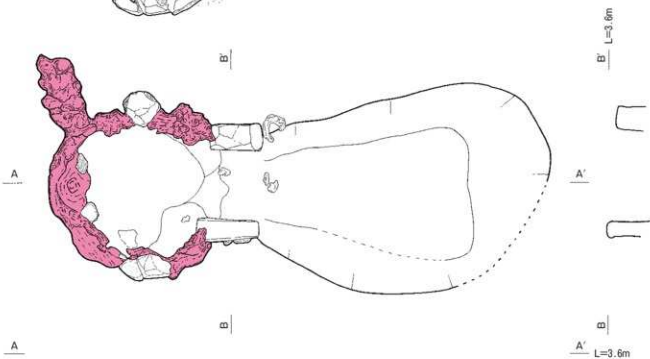
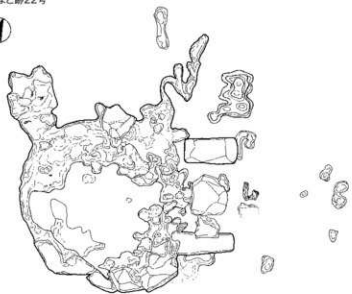


0 かまど跡20, 21号 1m
(S=1/20)

0 10cm
(S=1/3)

第166図 かまど跡20, 21号・出土遺物

かまど跡22号



埋土

a. 黒色灰わずかに茶褐色含む

b. 褐色砂

c. 暗赤褐色砂に炭化物混り

d. 赤褐色砂(ブロック状)に炭化物を含む

e. 白濁色灰(粘質あり)

f. 黒色土

g. 茶褐色砂

h. 茶褐色砂と赤褐色砂の混土(炭化物混り)

i. 暗茶褐色土

j. 炭化物を含む茶褐色土

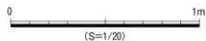
k. 暗茶褐色土(白濁色灰を含む)

l. 暗茶褐色土(炭化物多く含む)

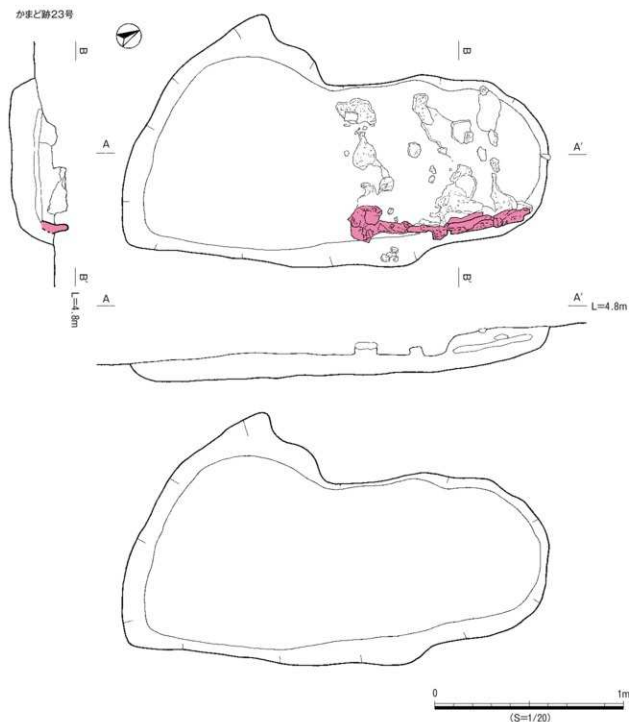
m. 暗赤褐色砂

n. 炭化物混り暗茶褐色土

o. 赤褐色砂



第167図 かまど跡22号



第168図 かまと跡23号

がりである。焼土範囲の記録が無いため規模については確認できない。4号と同じく、鍛冶関係の跡もしくは廃棄場と考える。

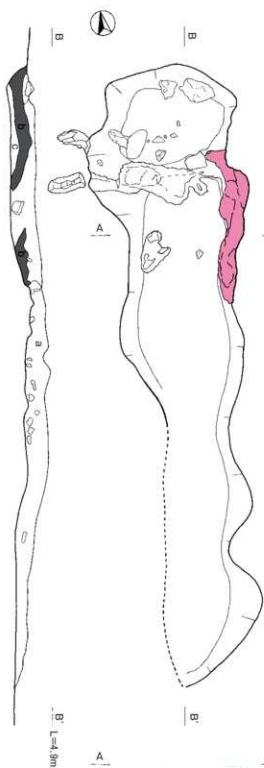
製鉄関連遺構6号(第174図)

F-16区で検出された。焼土ブロックの集中域である。長軸1.7m、短軸1.1mの広がりを持ち、集中域内には鉄滓も含まれている。断面の記録が無く、掘り込みの有無は確認できない。鍛冶関係の廃棄場と考える。

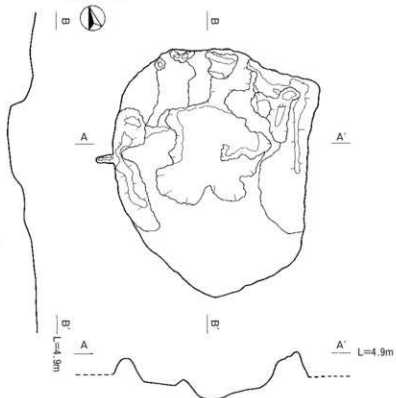
出土遺物(第174図)

遺物は、土師器小片59点、羽口2点、土錘1点、常滑焼の甕1点が出土し、2点を図化した。743は土師器の小皿である。口径7.6cm、底径5.4cm、器高1.1cmを測る。体部は丸みを帯びながら立ち上がり、内底はやや盛り上がる。内外面は回転ナデ調整が施される。744は輪の羽口である。

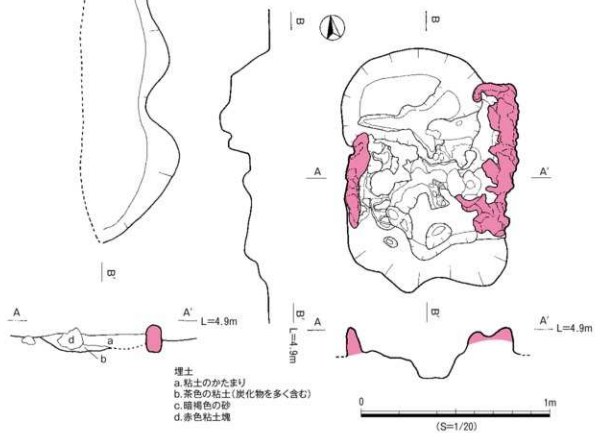
かまど跡24号



かまど跡25号

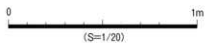
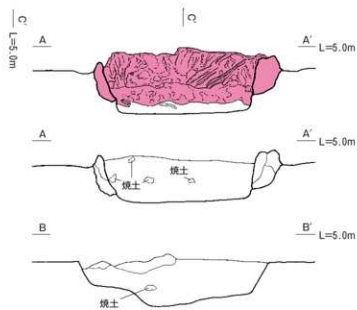
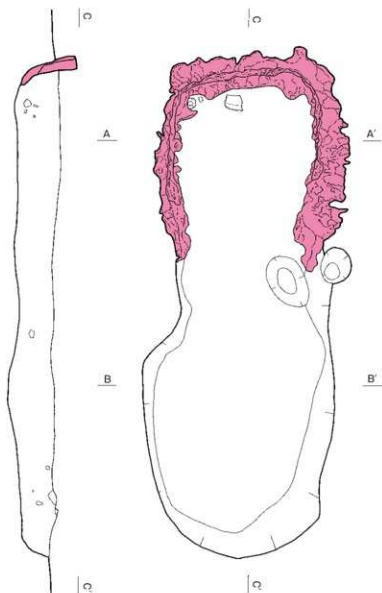
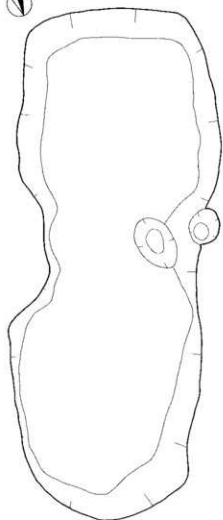


かまど跡26号



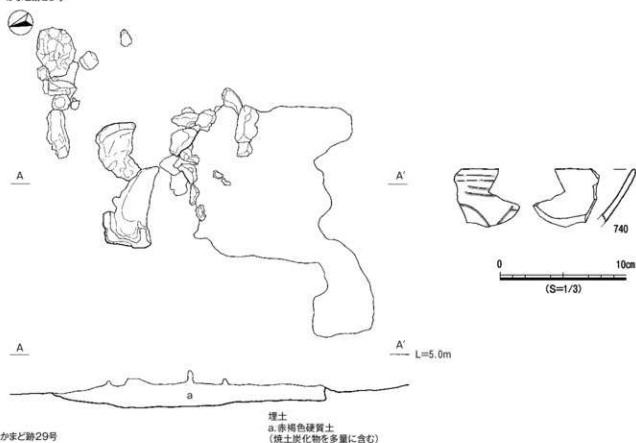
第169図 かまど跡24~26号

かまど跡27号

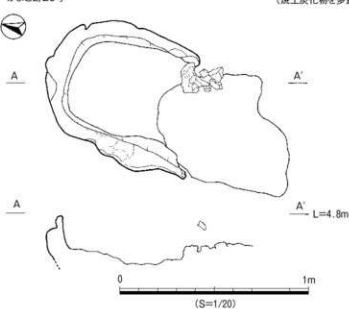


第170図 かまど跡27号

かまと跡28号



かまと跡29号



第171図 かまと跡28、29号・28号出土遺物

土坑 (第175図～第182図)

土坑は23基が検出された。概ね長軸、短軸1m以上のもの、遺構内から遺物が出土したものを、基本的に扱った。調査区内に広く散在するが、一部D・E-27・28区やD-15～17区に多少のまとまりもみられる。

土坑1号 (第175図)

B・C-36区で検出された。平面形は、長軸1.8m、短軸1.2mの略楕円形を呈する。検出面からの深さは51cmで、底面はほぼ平坦である。埋土中に遺物も出土したが図化には至らなかった。

土坑2号 (第175図)

B-34区で検出された。平面形は、直径約1.2mの円形を呈する。検出面からの深さ約24cmで底面はほぼ平坦である。埋土には、焼土・炭化物が混じる。

土坑3号 (第175図)

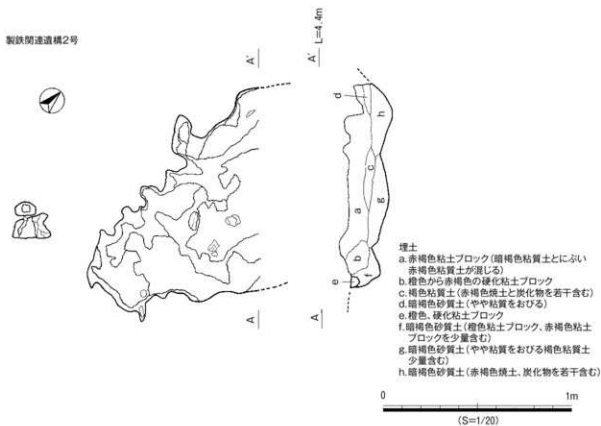
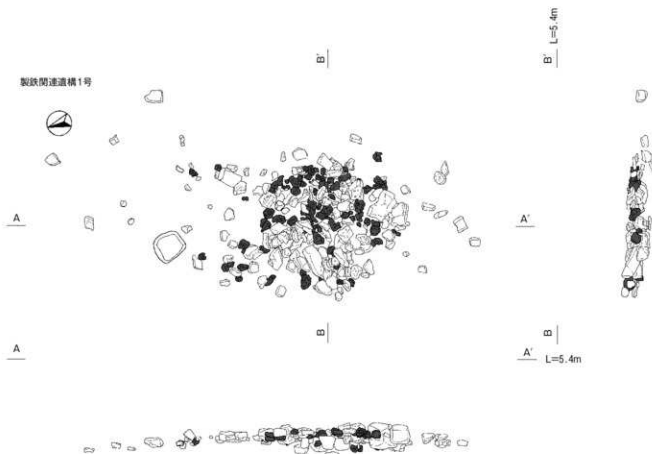
B-32区で検出された。平面形は、長軸2.5m、短軸2.2mの大型の円形を呈する。検出面からの深さは約13cmで底面はほぼ平坦である。遺物が多量に出土した。

出土遺物 (第175図)

745は白磁の碗の底部である。見込みには段を有し、外面残存部にはヘラ削りが施され、露胎する。

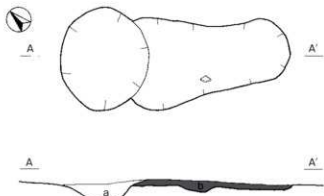
土坑4号土坑 (第175図)

D-31区で検出された。平面形は、径70cmの円形を呈

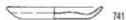


第172図 製鉄関連遺構1, 2号

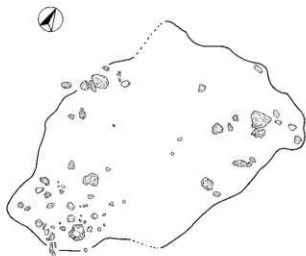
製鉄関連遺構3号



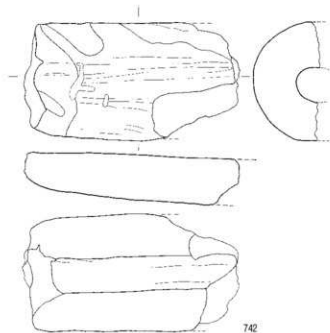
埋土
 a. 黒色炭化物として細かな鉄滓が含まれる。
 b. 茶褐色土(炭化物混ざり)



製鉄関連遺構4号



製鉄関連遺構5号

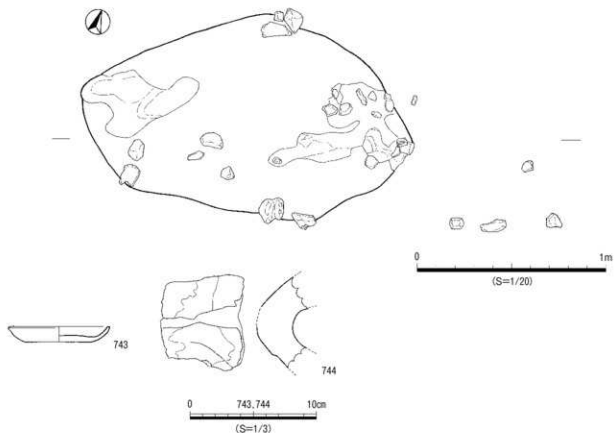


0 741.742 10cm
 (S=1/3)

0 1m
 (S=1/20)

第173図 製鉄関連遺構3～5号・3号出土遺物

製鉄関連遺構6号



第174図 製鉄関連遺構6号・出土遺物

する。検出面からの深さは約22cmで、底面はほぼ平坦である。埋土中から土錘が出土した。

出土遺物 (第175図)

746は土錘である。長さ3.8cm、太さ1.65cm、穿孔径約4mmである。

土坑5号 (第176図)

E-28区で検出された。かまど4～6号を東側に検出した凹地内にあたる。平面形は、長軸2.4m、短軸1.84mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約90cmで、底面はほぼ平坦である。

土坑6号 (第176図)

D-28区で検出された。平面形は、長軸1.7m、短軸1.2mの不定形を呈する。検出面からの深さ約80cmで底面はほぼ平坦であるが、一部に後世のビットと思われる落ち込みがみられる。

出土遺物 (第176図)

遺物は土師器の小皿が1点出土した。747は底面に糸切りの痕跡と、板目が残る。

土坑7号 (第176図)

D-27区で検出された。平面形は、長軸1.3m、短軸0.8

mのひょうたん形で、後世のビット2本が切り合っている。本来の底面は検出面から20cmほどであったと考えられる。埋土中から天目茶碗などの遺物が出土した。

出土遺物 (第176図)

遺物は、龍泉窯系青磁の皿と中国産の天目碗が出土した。748は青磁の皿の底部である。見込みに櫛状工具による花文が描かれる。749は天目碗である。胎土は鈍い棕色を呈し、暗褐色の天目軸が外面腰部までかかる。腰部は削りにより段案有する。

土坑8号 (第176図)

D-27区で検出された。平面形は、長軸1.6m、短軸0.4mの不定形で、後世のビット3本に切られている。本来の底面は、検出面から約50cmほどであったと考えられる。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物 (第176図)

750は埋土中から出土した銭貨であるが錆のため文字の判別は出来なかった。

土坑9号 (第177図)

E-27・28区で検出された。平面形は、長軸2.4m、短軸1.1mの不定形を呈する。検出面からの深さ約25cmで、

底面はほぼ平坦である。埋土中から銭貨が出土したが小片で図化できなかった。

土坑10号（第177図）

B-25区で検出された。平面形は、長軸7m、短軸4.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは、最深部で1.2mの巨大なものである。わずかであるが人骨片が検出されており、墓の可能性もある。

出土遺物（第177図）

遺物は、土師器の小片2点、青磁5点、中国陶器1点、カムイヤキ1点、東播系埴鉢1点、備前播鉢1点、瓦質土器1点が出土した。そのうち1点を図化することができた。751は東播系須恵器の埴鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、外面は黒色に焼される。

土坑11号（第177図）

F-24区で検出された。平面形は、直径約1.5mの円形を呈し、検出面からの深さは約16cmである。遺構北側を2本の後世のビットで切られている。埋土中から銭貨が出土した。

出土遺物（第177図）

752は埋土中から出土した。元豊通宝である。

土坑12号（第178図）

D-20区で検出された。平面形は、長軸6m、短軸0.9mの溝状の細長い形状をしている。掘立柱建物跡21号と重なっており、土坑長軸が、建物の長軸方向と平行する。建物との関連性も考えられるが、掘り込みは検出面から13cmと非常に浅い。

出土遺物（第178図）

753は埋土中から出土したキセルの吸い口である。

土坑13号（第178図）

E-18区で検出された。平面形は、直径約1.2mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは、約45cmで、底面は平坦である。

出土遺物（第178図）

遺物は、土師器小片3点、青磁の小片3点、白磁の1点、瓦質土器の火鉢3点、備前播鉢等が出土した。そのうち図化できたものは白磁の皿と瓦質土器の火鉢であった。754は景徳鎮窯系の白磁で、皿の底部である。口縁部は欠損しているが、外反するものと思われる。貫付の軸は軸剥ぎされる。755は瓦質土器の火鉢の胴部である。内面にはハケ目状の調整痕が残る。

土坑14号（第179図）

F・G-17・18区で検出された。平面形は、長軸8.2m、短軸6.9mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約1.5mで底面はボール状でほとんど平坦面をもたない。

土坑15号（第179図）

D-16区で検出された。平面形は、推定長軸約1.3m、短軸1mの不定形を呈し、最深部は検出面から約37cmである。3本の後世のビットに切られている。

出土遺物（第179図）

遺物は、土師器45点、青磁5点、瓦質土器5点、常滑焼の甕3点が出土した。そのうち該期の資料と考えられる1点を図化した。756は土師器の甕である。口径13.0cm、底径8.0cm、器高3.6cmを測り、内外面は丁寧なナデ調整が施される。

土坑16号（第180図）

D-17区で検出された。平面形は、長軸1.7m、短軸1.1mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約85cmである。掘り込み壁の立ち上がりは鋭角であるが、南側は途中で緩やかな立ちあがりに変化する。

出土遺物（第180図）

遺物は、土師器小片18点、瓦質土器2点、銭貨1点が出土した。そのうち3点を図化した。757は土師器の甕である。口径12.0cm、底径8.8cm、器高2.8cmを測る。758は瓦質土器の埴鉢である。内面にはへら状工具による調整痕が斜位に入る。759は祥符元宝である。

土坑17号（第180図）

D-16区で検出された。平面形は、径80cm程度の略円形を呈する。遺構中心部付近に、後世のビットが切り合っている。本来の掘り込みは、検出面から18cm程度と考えられる。

出土遺物（第180図）

760は、土師器甕で、口径8.1cm、底径5.0cm、器高2.0cmを測る。

土坑18号（第180図）

C-16区で検出された。平面形は約1.2m程の円形に35cm程度の張り出しをもつ柄杓状を呈する。張り出しで浅い段をもち、本体掘り込みは、検出面からの深さ、約1.5mである。断面形状は掘り込み途中でくびれをもつ、フラスコ状である。

出土遺物（第180図）

遺物は、土師器の小片8点と青磁1点が出土し、1点を図化した。761は龍泉窯系青磁で、椀の底部である。高台は角高台で、高台から高台内面は露胎する。外面には蓮弁文が描かれる。

土坑19号（第181図）

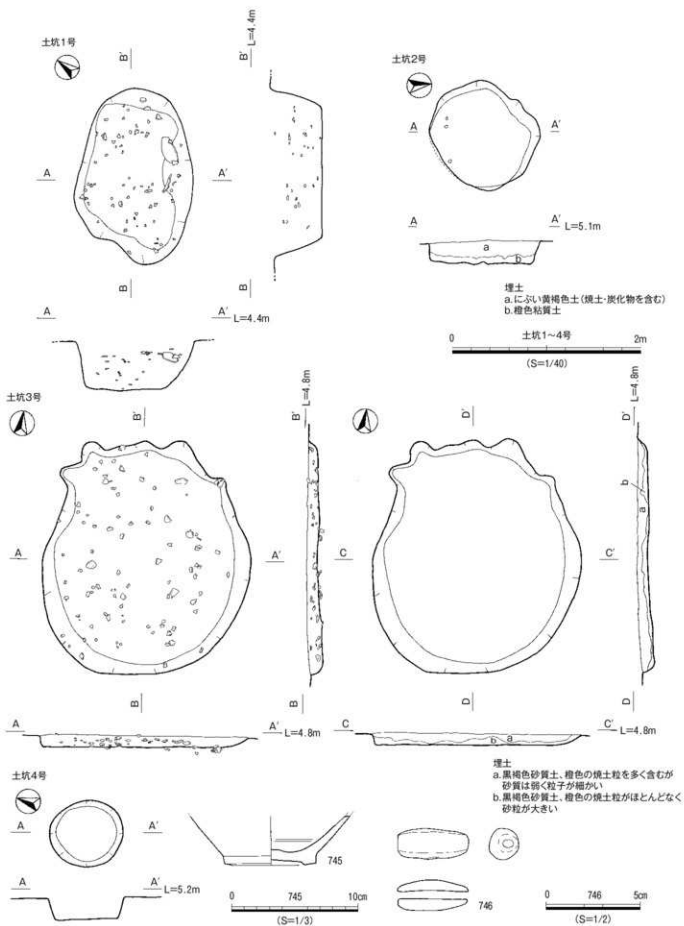
D-15区で検出された。平面形は、長軸1.5m、短軸1.3mの略方形を呈し、底部付近では円形となる。掘り込み途中でわずかに段を有し、検出面からの深さ約1.5mに達する。化学分析の結果、土坑内に人骨等のあった可能性が指摘されている。

出土遺物（第181図）

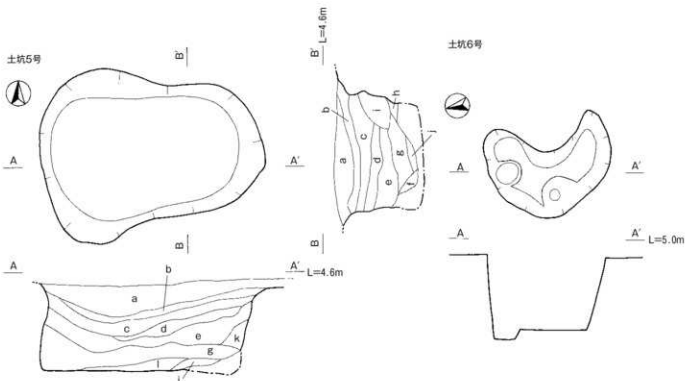
遺物は1点出土した。762は白磁の皿である。灰白色の胎土に白濁した透明釉がかかり、外面腰部以下は露胎する。

土坑20号（第181図）

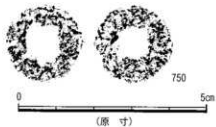
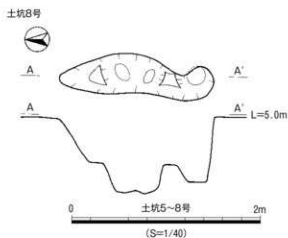
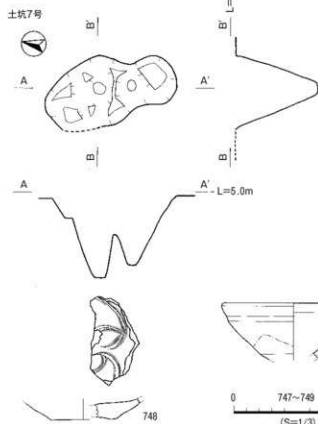
E・F-12区、溝21の下部で検出された。平面形は、長



第175図 土坑1~4号・3, 4号出土遺物

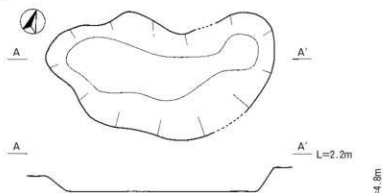


- 埋土
- a. 灰黄褐色粘質土
 - b. 明黄褐色砂質土
 - c. 褐灰色土
 - d. 灰黄褐色粘質土
 - e. におい黄褐色粘質土
 - f. におい黄褐色粘質土 (eと比べてやや赤みがある)
 - g. 褐灰色粘質土
 - h. におい黄褐色粘質土
 - i. 灰黄褐色粘質土 (黄褐色混じり)
 - j. 灰黄褐色粘質土
 - k. におい黄褐色粘質土
 - l. におい黄褐色粘質土 (kと比べてやや赤みがある)

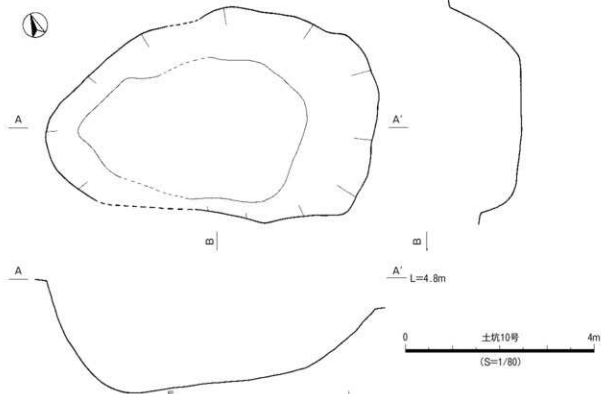


第176図 土坑5～8号・6, 7, 8号出土遺物

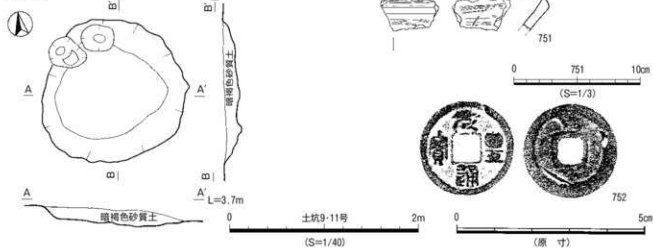
土坑9号



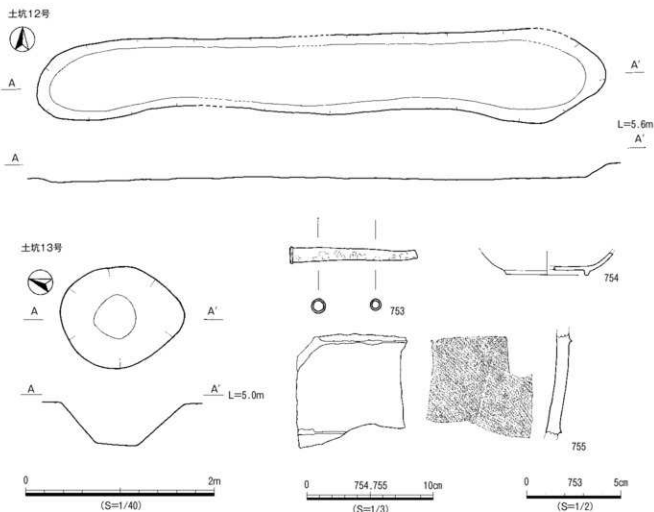
土坑10号



土坑11号



第177图 土坑9~11号·10、11号出土遗物



第178図 土坑12、13号・出土遺物

軸約1.7m、短軸約1mの略楕円形を呈する。検出面からの深さは約20cmで、底面は皿状になる。遺構中央部付近に、完形の青磁碗、皿が伏せた状態で、床面から20cm浮き上がって出土した。近辺に土坑墓が数基確認されており、墓の可能性が非常に高いと思われるが、人骨等が確認されていないため、土坑として取り扱った。

出土遺物 (第181図)

遺物は、龍泉窯系の青磁碗と皿が出土した。どちらも完形品である。763は外面に雷文帯とラマ式蓮弁が描かれたもので、見込みには花文がスタンプされるが、軸が厚くかかるため不明瞭である。壺付から高台内面にかけは露胎する。764は稜花皿である。内外面に唐草文が描かれるが、軸が厚くかかるため不明瞭である。高台内面の軸は輪状に軸剥ぎされる。

土坑21号 (第182図)

A・B-11区で検出された。平面形は、長軸約5.7m、短軸約3.5mの台形状を呈する大型の土坑である。検出面からの深さは30cmで、底面は平坦である。堅穴建物跡の

可能性も否定できないが、土坑として取り扱った。

土坑22号 (第182図)

F-10区で検出された。平面形は、長軸1.4m、短軸0.7mの不定形を呈し、検出面からの深さ約20cmである。底面は平坦である。

出土遺物 (第182図)

遺物は、龍泉窯系青磁の碗が2点出土し、そのうち1点を図化した。

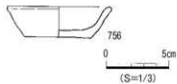
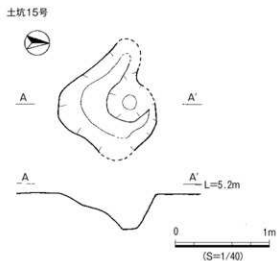
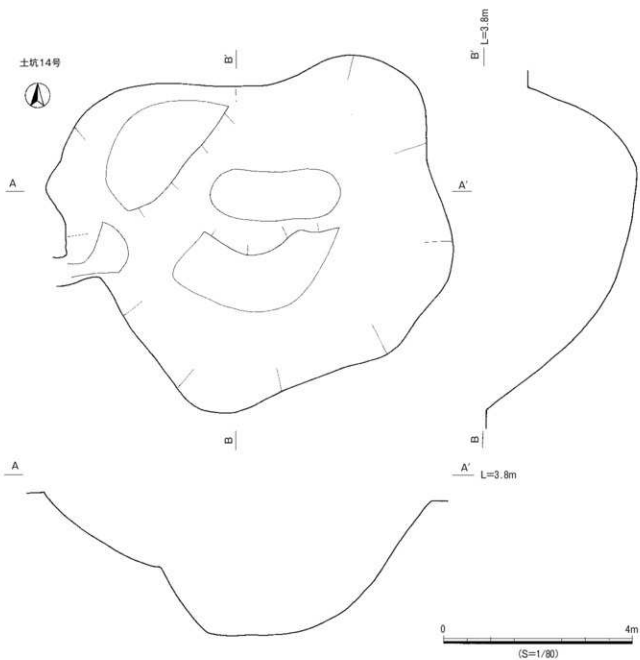
765は口縁部で、外面に幅の狭い蓮弁文が描かれる。

土坑23号 (第182図)

G-10区で検出された。平面形は、長軸約1m、短軸約0.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さ約30cmである。底面は平坦である。

出土遺物 (第182図)

遺物は龍泉窯系青磁の碗が出土した。766は底部である。見込みに片彫りの割花文が観察される。壺付から高台内面は露胎する。



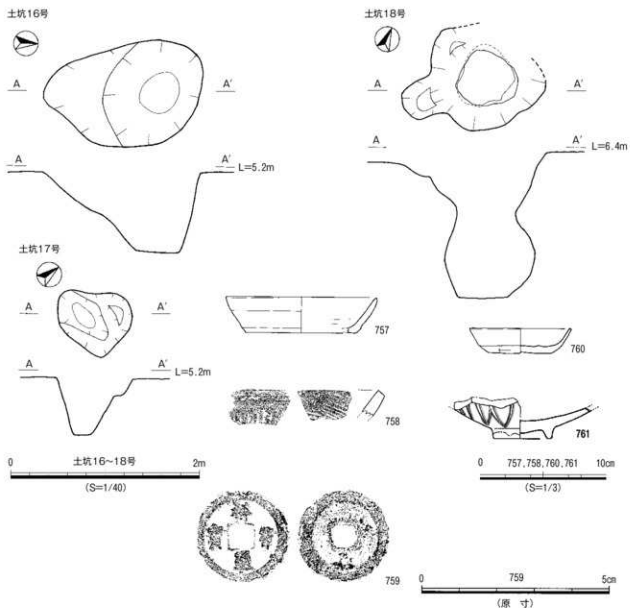
土坑墓（第183図～第196図）

土坑墓は、18基検出された。土坑墓は、D・E-13・14区に3基並ぶようなかたちで確認されたものがあるものの、墓域と考えられるような集中はみられず、調査区内に点在する。

土坑墓1号（第183図）

D-37区で検出された。検出時点がほぼ床面で、断面の記録は残されていない。遺構南側は、河川の流水作用

第179図 土坑14、15号・15号出土遺物



第180図 土坑16~18号・出土遺物

で擾乱されており消失している。平面形は台形状を呈しているが、本来、南北方向を長軸とする隅丸長方形であったと考える。遺構内からは、銭貨と角釘が出土しており、土坑墓と判断した。

出土遺物 (第183図)

767~769は洪武通宝である。

土坑墓2号 (第183図)

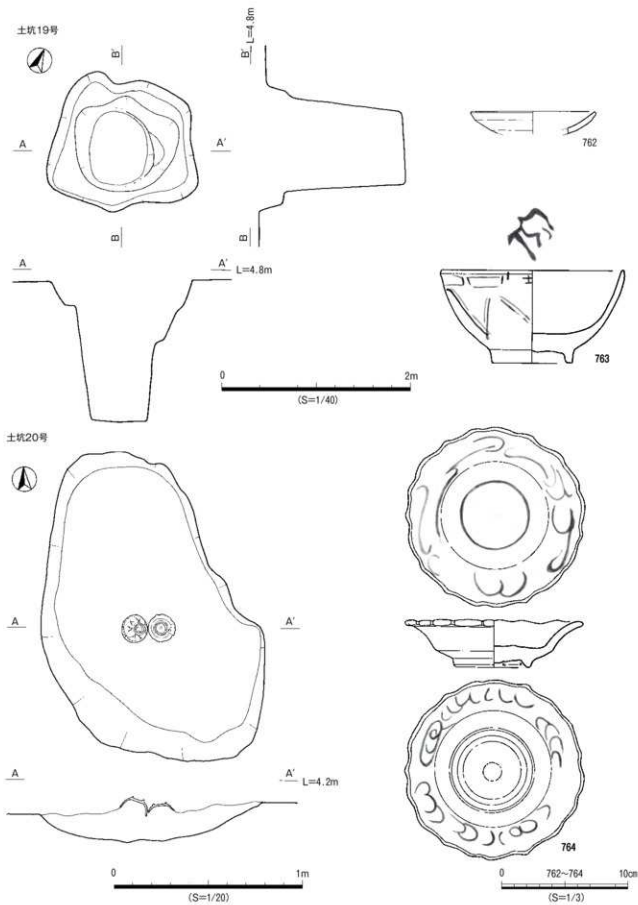
C-33区で検出された。平面形は、長軸0.8m、短軸0.5mで隅丸長方形を呈する。主軸は東に12°振れる。検出面からの深さは13cm、で上面はかなり削平されていると思われる。埋土内からは銭貨と釘、わずかに人骨片が出土した。木棺墓と判断した。

出土遺物 (第183図)

770は2枚重なった状態の洪武通宝で、背に治と読める加治木銭である。また圓化できなかったが、同様の小片も出土している。

土坑墓3号 (第183図)

B-31区で検出された。平面形は、長軸1.5m、短軸1mの隅丸長方形を呈する。主軸は東に7°振れる。検出面からの深さは30cm、で上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは、床付近で銭貨、釘、人骨が出土した。人骨の残りはよくない。中央寄りに集中し、頭骨はやや北寄りに、大腿骨は南側に位置することから、座棺であった可能性が高い。



出土遺物 (第183図)

771は7枚重なった状態の洪武通宝で、背に治と読める加治木銭である。

土坑墓4号 (第184図)

D-31区で検出された。平面形は、長軸2.3m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈する。主軸は東に3°振れる。検出面からの深さは40cmで、上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは、銭貨と釘、白磁皿、人骨が出土した。頭骨は北側に、下肢骨が南側に位置し、その周りにはほぼ長方形に並ぶように釘が検出された。銭貨は首から、胸付近と考えられる位置に検出され、木棺内に伸展の状態で見つかったものと考えられる。また、白磁皿は、東側釘列と、墓坑壁の間に位置し、木棺外に副葬された可能性が高い。

出土遺物 (第184図)

副葬品は、白磁の輪花皿が1点、銭貨が2点出土した。772は産地不明である。内側面には、先端の丸い棒状工具により花びらを描く。見込みは輪状に輪割ぎされる。銭貨773は錆のため不明である。774は2枚重なった状態の洪武通宝で布付着痕がみられる。

土坑墓5号 (第185図)

B-30区で検出された。平面形は、長軸1.9m、短軸1.2mの楕円形を呈する。主軸は東に3°振れる。検出面からの深さは約20cmで、上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは、土師皿2枚と被葬者と考えられる骨粉が検出された。土師皿が遺構内北側に位置することから、北頭位であったと思われる。

出土遺物 (第185図)

副葬品は、土師器が2点出土した。775は小皿である。灯明皿であったのか、口縁部の一部にすずが残る、776は坏である。

土坑墓6号 (第186図)

D-28区で検出された。平面形は、長軸約1.5m、短軸約1.3mの略方形に若干の張り出しをもつ不定形を呈し、遺構内南側に径80cm前後の掘り込みをもつ。主軸は西に7°振れる。検出面からの深さは35cm前後で、最深部は50cmほどである。埋土内からは人骨を含め、青磁、滑石製品等が出土したが図化には至らなかった。人骨は北頭位で膝をやや屈曲した姿勢と考えられる。

土坑墓7号 (第187図)

C-25区で検出された。平面形は、長軸2.2m、短軸1.3mの楕円形を呈する。主軸は東に22°振れる。検出面からの深さは約50cmで、上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは、人骨と白磁皿、銭貨が出土した。頭骨は北寄りに位置し顔が下を向く状態で、下肢骨は膝が屈曲した状態であった。埋葬姿勢はうつ伏せで膝を軽く折り曲げた状態であったと考えられる。

出土遺物 (第187図)

副葬品は、白磁の輪花皿が1点と銭貨が出土した。777は口縁端部が外側へ折れるもので、先端は細く尖る。外底面は露胎する。778は洪武通宝で、背に浙と読める。779は洪武通宝で5枚重なった状態での出土である。表以外の4枚は、種別不明である。

土坑墓8号 (第188図)

C-25区で検出された。平面形は長軸1.7m、短軸0.8mの隅丸方形を呈する。主軸は東に28°振れる。検出面からの深さは約50cmで、上面は削平を受けていると思われる。埋土内からは、人骨と銭貨が出土した。頭骨は遺構内北側に位置し、北頭位である。副葬された銭貨には縦襷状のものが付着し袋のようなものに入れていた可能性がある。埋葬姿勢については側臥埋葬と考えられる。

出土遺物 (第188図)

780は7枚が重なった状態で出土した。表裏の1枚ずつは洪武通宝と確認できるが、残り5枚については確認できなかった。

土坑墓9号 (第189図)

D-25区で検出された。平面形は長軸1.8m、短軸0.9mの隅丸方形を呈する。主軸は西に4°振れる。検出面からの深さは約60cmで、上面は若干削平されていると思われる。埋土内からは人骨、銭貨、釘が出土している。釘が人骨の周囲に長方形のかたちにならぶことから木棺であったと考えられる。頭骨が北側、下肢骨が南側に位置する、北頭位である。埋葬姿勢は寝台内に仰向け、腕と膝を折り曲げた状態である。

出土遺物 (第189図)

781~786は洪武通宝で、781は背に文字が書かれるが明瞭でなく、判読が出来ない。782~784は背に治と読める。加治木銭である。785~786は洪武通宝で、786は2枚重なった状態である。

土坑墓10号 (第190図)

C-24区で検出された。平面形は長軸1.5m、短軸0.8mの楕円形を呈する。主軸は東に10°振れる。検出面からの深さは約30cmで、上面は削平されていると思われる。埋土内からは人骨、銭貨が出土している。頭骨は遺構内北側に位置する。北頭位である。下肢骨は膝を曲げた状態であると考えられる。

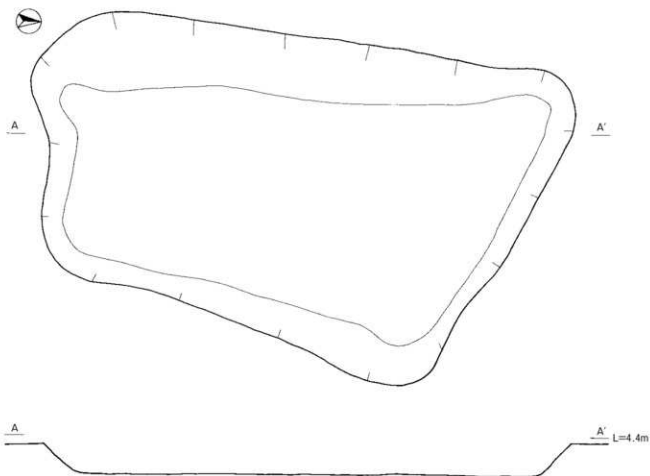
出土遺物 (第190図)

787は、表裏が、洪武通宝、朝鮮通宝で真ん中の1枚は不明で、3枚重なった状態で出土した。788~790は洪武通宝で、789は2枚重なった状態である。

土坑墓11号 (第191図)

A-22区で検出された。平面形は、径約1.3mの円形を呈する。検出面からの深さは約70cmである。埋土内からは、床面から35cmほど上位で銭貨が出土した。人骨は検出されず、埋葬姿勢などは不明である。

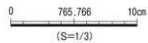
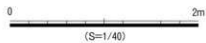
土坑21号



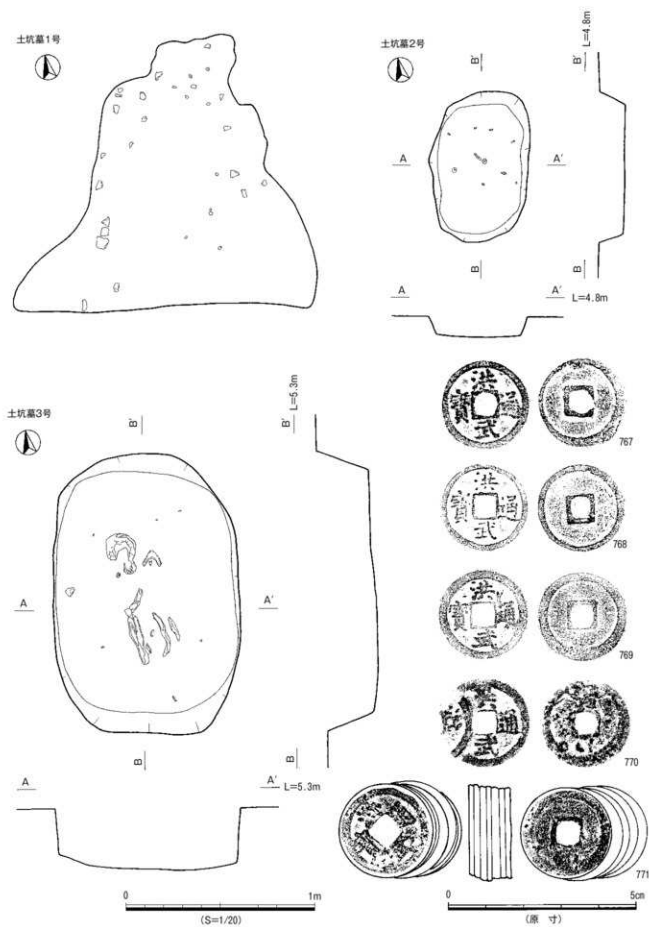
土坑22号



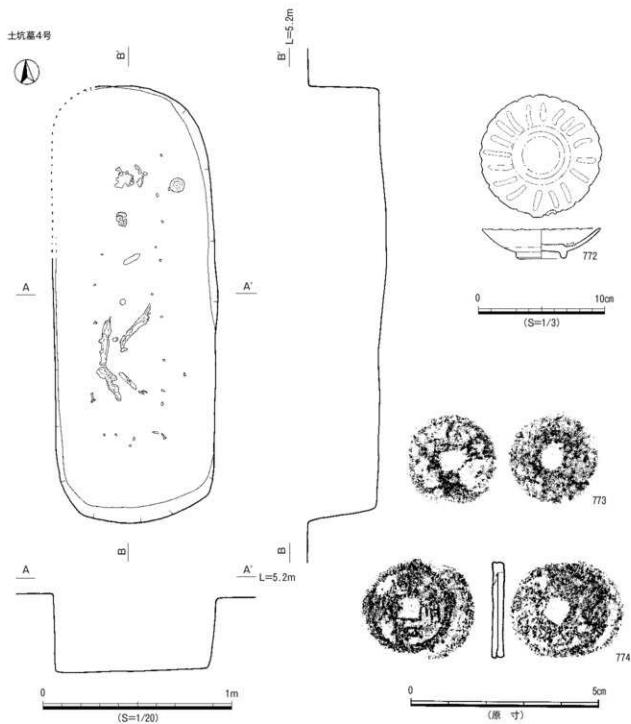
土坑23号



第182图 土坑21~23号·22、23号出土遺物



第183图 土坑墓1~3号·出土遺物



第184図 土坑墓4号・出土遺物

出土遺物 (第191図)

銭貨は全部で12枚出土し、内10枚を掲載した。792を除き洪武通宝と確認できる。792は3枚重なり、表裏が背のため確認できない。

土坑墓12号 (第192図)

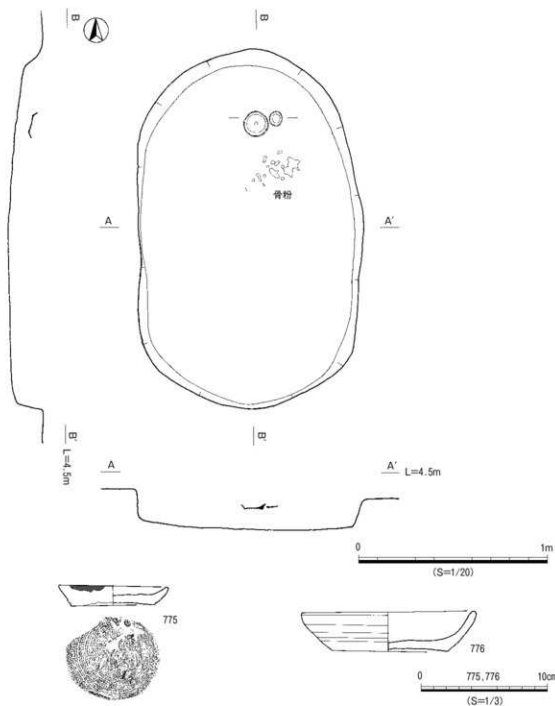
A-18区で検出された。平面形は、径約1.1mの略円形を呈する。検出面からの深さは40cm前後である。上面は

溝17により削平されている。埋土内からは人骨と銭貨が出土した。頭骨が遺構内中心付近に位置する。埋葬姿勢については不明である。

出土遺物 (第192図)

6枚の銭貨が出土した。801は鉄銭で3枚が重なっている。802・803は洪武通宝である。1点は小片のため図化できなかった。

土坑墓5号



第185図 土坑墓5号・出土遺物

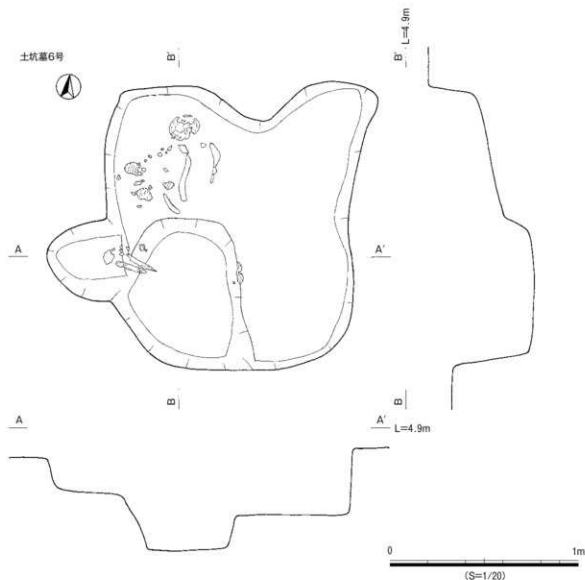
土坑墓13号（第192図）

E-14区で検出された。遺構は攪乱により南側の大部分を消失している。残存部で長軸75cm前後、短軸65cmで、南北方向が主軸と考えられる。遺構内北側に頭骨が位置することから、南北方向に延びる楕円形の平面形が想定される。検出面からの深さは30cm程度である。上面についても削平されていると思われる。埋土内からは、人骨

のほかに、銭貨が出土している。

出土遺物（第192図）

7枚の銭貨が出土した。804は2枚重なったもので、表裏が背のため種別は不明である。805は4枚重なっており表の朝鮮通宝のみ確認できる。806は洪武通宝である。



第186図 土坑墓6号

土坑墓14号 (第193図)

D-13区で検出された。近世の溝7の下から検出され、遺構上面は流失している。半裁調査したため遺構半分の記録は残っていない。残存部で長軸約5m、短軸1.9m、深さ1mで、遺構平面形は想定できない。埋土内からは銭貨、青磁坏が出土した。人骨は遺構上面約30cmから検出された。後世の流水作用により浮き上がった可能性が考えられる。

出土遺物 (第193図)

副葬品2点出土した。807は龍泉窯系青磁の坏で、口縁端部は外方向に短く屈曲し、上面はやや凹むが、施軸により平坦となる。808は政和通宝である。

土坑墓15号 (第193図)

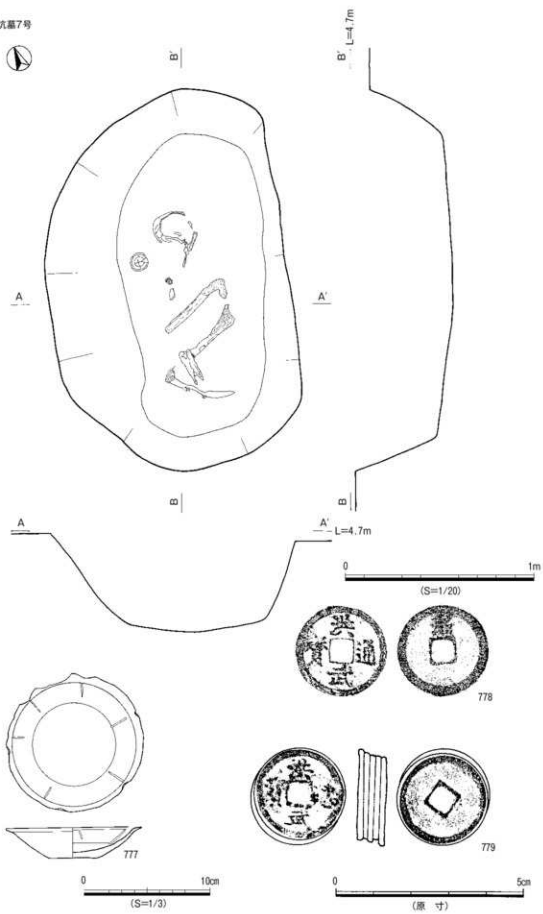
D-13区で検出された。14号同様、遺構上面は流失し

ている。半裁調査したため遺構半分の記録は残っていない。残存部で長軸約4.4m、短軸約1.9m、深さ70cmである。遺構平面形は想定できない。遺構上面約30cmに人骨が検出された。後世の流水作用により浮き上がった可能性が考えられる。

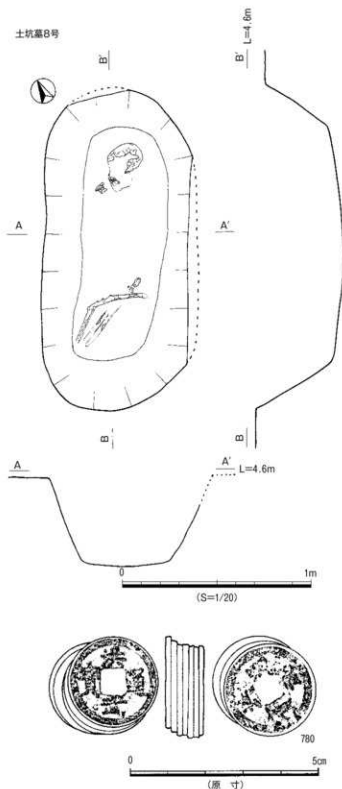
土坑墓16号 (第194図)

G-11区で検出された。平面形は、長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形を呈する。主軸は東に13°振れる。検出面からの深さは約30cmで、上面は削平されていると思われる。埋土内からは人骨と銭貨、釘が検出された。頭骨は遺構内北側に位置し、南側に下肢骨がみられる。また、釘も人骨の周囲に長方形に並ぶことから、寝棺による埋葬が想定される。埋葬姿勢に付いてまでは言及できない。

土坑墓7号



第187图 土坑墓7号·出土遗物



第188図 土坑墓8号・出土遺物

出土遺物 (第194図)

7枚の銭貨が出土した。809は3枚重なった状態で、表裏に洪武通宝が確認でき、真ん中の1枚は不明である。810~812は洪武通宝で、背に治と読める。813のみ不明

瞭である。

土坑墓17号 (第195図)

F・G-9区で検出された。平面形は、長軸2.1m、短軸1.3mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約45cmである。上面は削平されていると思われる。主軸はほぼ北である。遺構内からは人骨、銭貨、土師皿などが出土している。頭骨は遺構内北側に位置し北頭位であったことが伺える。また人骨周辺に長方形に並んで釘が検出されていることから、寝棺による埋葬であったと思われる。土師皿については完形で、釘列の外側での出土であることから棺外に副葬された可能性が高い。

出土遺物 (第195図)

副葬品は、土師器2点と青花1点銭貨が7枚が出土した。814は小皿である。側面に直径5mm程度の穿孔が2か所穿かれている。815は坏である。底面が楕円形状に歪む。内面は煤と思われる黒色の汚れが観察される。816は漳州窯系の青花の碗と思われる。高台部分は欠損している。817は5枚重なった状態で、表のみ洪武通宝が確認できる。818は2枚重なった状態で、表のみ洪武通宝と確認できる。

土坑墓18号 (第196図)

F-5・6区で検出された。遺構北側は削平により失われている。平面形は、長軸1.7m以上、短軸1mの隅丸方形を呈すると推測される。検出面からの深さは約10cmで、上面はかなり削平されている。主軸は西に16°振れる。遺構埋土内からは人骨、銭貨、土器片が出土している。遺構内北側に頭骨が位置することから北頭位であったことが伺える。また、人骨周辺に長方形に釘が並んで検出されることから寝棺による埋葬であったと考えられる。埋葬姿勢は不明である。土器片については小片のため図化できなかった。

出土遺物 (第196図)

819・820は洪武通宝である。

礎、土器集積遺構 (第197図)

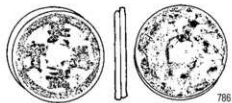
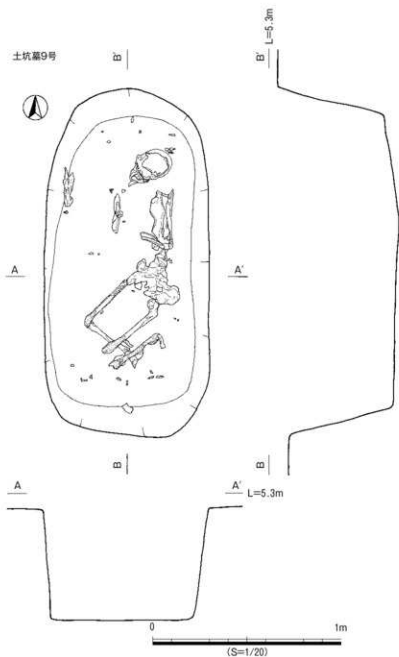
D-18区で検出された。およそ4.5m×4mの範囲に礎、土器片が集中する。また、わずかに鉄滓も混じる。遺構南東の集中部には径約80cm、深さ20cm程の掘り込みがみられ滑石製石鍋が出土している。

ビット (第198図)

ビットは、調査区内全域に多数検出された。その内遺構内に根石、礎などが確認できたものについて図化し掲載した。また、掲載可能な遺物が出土したものについては、遺構配置図中に遺構番号を付して表示し、遺物のみ掲載した。

ビット1号 (第198図)

B-34区で検出された。直径約50cmの円形で検出面か



らの深さ30cmである。底面に突き刺さるようなかたちで軽石が検出され、その上位に陶磁器片がのっている。礎石下にはさらに径20cm、深さ40cmの掘り込みが確認された。

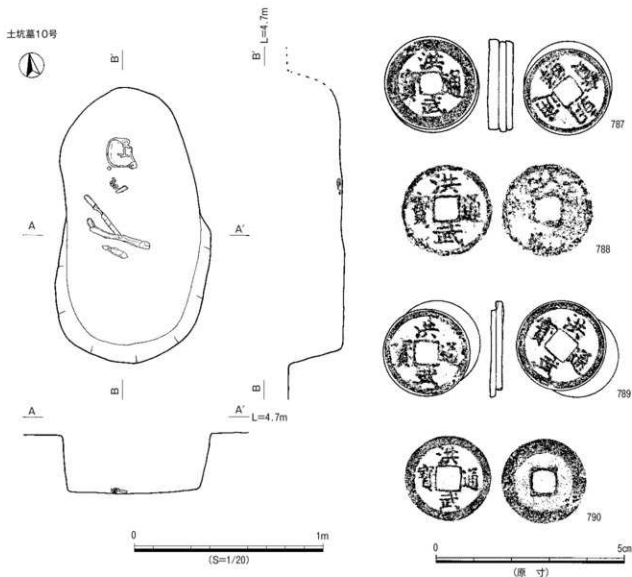
ビット2号 (第198図)

D-20区で検出された。平面形は、直径約50cmの円形で、検出面からの深さ約40cmである。底面に接するかたちで、小型のやや扁平な礎が置かれている。礎石の可能性が考えられるが、建物の柱配置復元には至らなかった。

ビット3号 (第198図)

C-20区で検出された。平面形は、長軸約65cm、短軸約50cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ約45cmである。約20cm隣にはビット4号が存在する。底面から5~10cm

第189図 土坑墓9号・出土遺物



第190図 土坑墓10号・出土遺物

上位に礫が検出された。底面には2カ所のわずかな凹みを確認できる。礫の入り込み方は、根固めの状況を想起させる。建物の柱配置復元には至らなかった。

ビット4号（第198図）

C-20区で検出された。平面形は、径約70cmの円形を呈する。検出面からの深さは約60cmで、底面に接するかたちで礫が検出された。礫は小ぶりであるが、礎石の可能性が考えられる。しかし、建物の柱配置復元には至らなかった。

ビット5号（第198図）

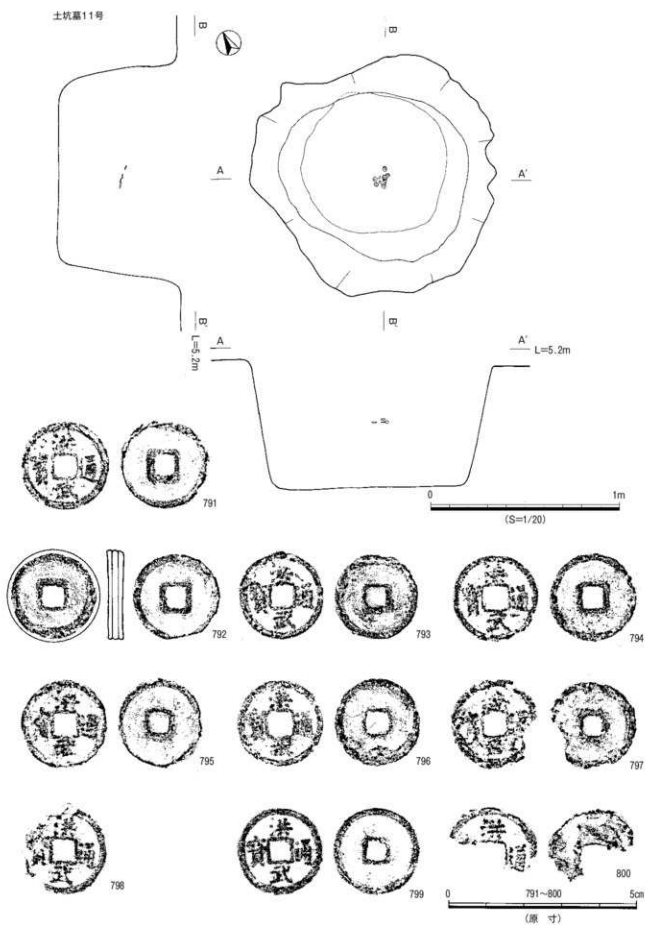
D-15区で検出された。平面形は長軸約80cm、短軸約45cmの楕円形を呈し、やや北側に偏る底部では径25cmの円形にすぼまる。遺構内には底面から40cm付近から小型の礫が5段積み重ねられている。柱のぐらつきを押しえ

る根固めの礫と考えられる。しかし、建物の柱配置復元には至らなかった。

ビット内出土遺物（第199図～201図）

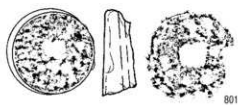
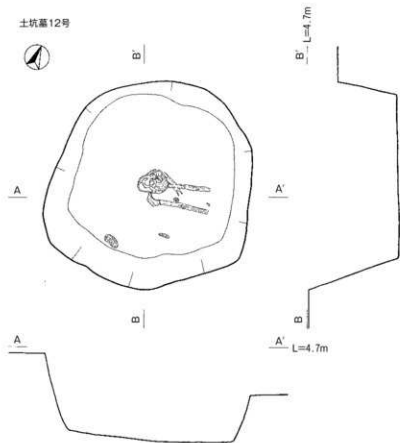
ビット6号（第99図・第199図）

B-31区で検出された。白磁の碗が4点出土した。822は口縁部で、玉縁口縁を呈するものである。825は胴部である。内面に短い拂目文が描かれる。822・825の2点については小片のため流れ込みの可能性も考えられる。823は口縁端部が外側に強く屈曲し、端部内面に稜を有するものである。内外面とも無文で、内面口縁下位と見込みに細い沈線が巡る。高台は足高台である。824は口縁が直口する形状のものである。見込みは段を有し、輪状に軸を剥ぎ取る。

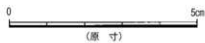
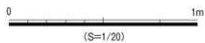
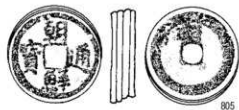
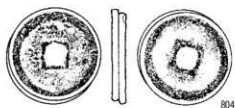
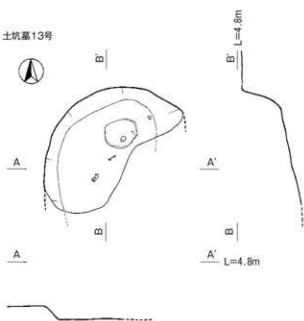


第191图 土坑墓11号·出土遗物

土坑墓12号

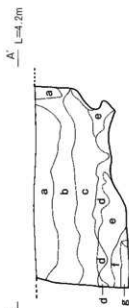
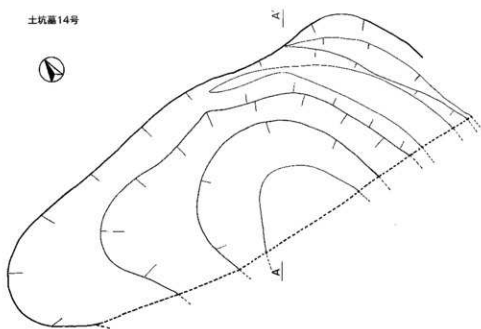


土坑墓13号



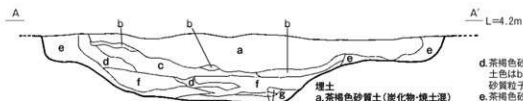
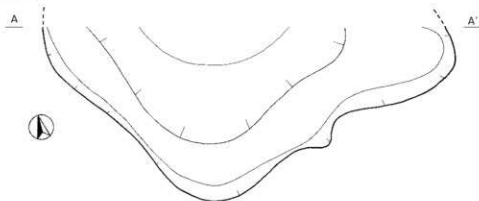
第192图 土坑墓12, 13号·出土遗物

土坑墓14号

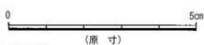
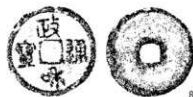
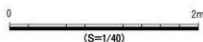


- 埋土
 a. 茶褐色砂質土(炭化物・焼土混)
 b. 暗茶褐色砂質土(炭化物・焼土混)
 c. 暗茶褐色黄色砂質ブロック混砂質土
 d. 黄色砂質土
 e. 暗茶褐色黄色砂質ブロック混砂質土
 f. 暗褐色砂質土
 g. 暗茶褐色砂質土

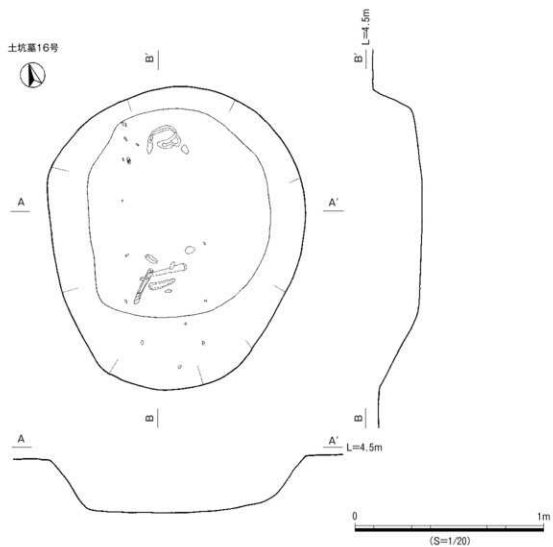
土坑墓15号



- 埋土
 a. 茶褐色砂質土(炭化物・焼土混)
 b. 茶褐色砂質土(炭化物・焼土混、
 aよりやや黄色土が混じり粘質あり)
 c. 茶褐色砂質土
 (aより炭化物・焼土が大粒)
 d. 茶褐色砂質土(炭化物・焼土混、
 土色はbとほぼ同じで
 砂質粒子が大粒)
 e. 茶褐色砂質土(炭化物・焼土混、
 dとほぼ同じで土色は
 dよりやや黄色土が多い)
 f. 黒色砂質土
 g. 黄褐色砂質土

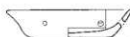
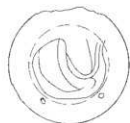
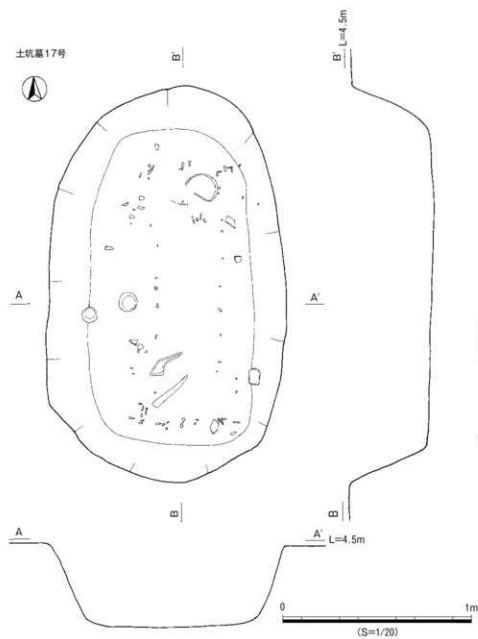


第193図 土坑墓14、15号・14号出土遺物



第194图 土坑墓16号·出土遗物

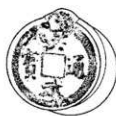
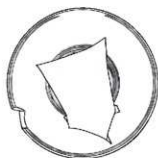
土坑墓17号



814



815



817



818

0 817-818 5cm

(原寸)

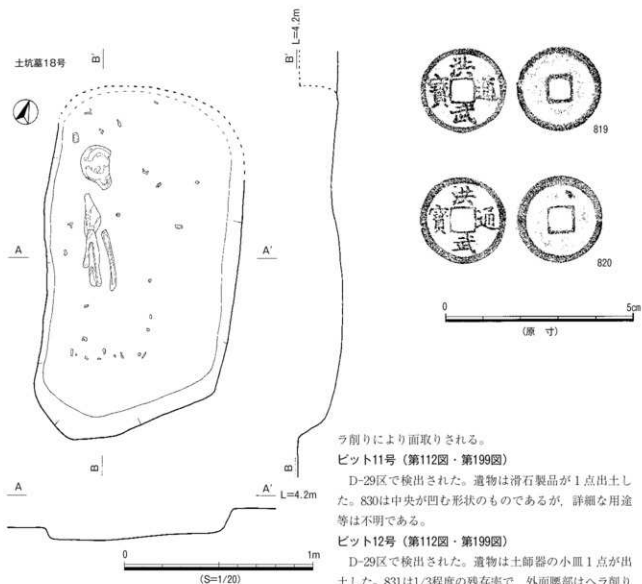


816

0 814-816 10cm

(S=1/3)

第195图 土坑墓17号·出土遗物



第196図 土坑墓18号・出土遺物

ビット7号 (第99図・第199図)

C-31区で検出された。銭貨1枚が出土した。826は錯のため判読不能であった。

ビット8号 (第99図・第199図)

C-31区で検出された。遺物は土師器の小皿1点が出土した。827は1/3程度の残存率の、内外面丁寧なナデ調整が施される。

ビット9号 (第111図・第199図)

D-30区で検出された。遺物は滑石製品が1点出土した。828は方形の形状のもので、角は面取りされる。一か所に穿孔があげられる。

ビット10号 (第112図・第199図)

E-29区で検出された。遺物は土師器の環が1点出土した。829は、1/4程度の残存率の資料で、外面腰部はヘ

ラ削りにより面取りされる。

ビット11号 (第112図・第199図)

D-29区で検出された。遺物は滑石製品が1点出土した。830は中央が凹む形状のものであるが、詳細な用途等は不明である。

ビット12号 (第112図・第199図)

D-29区で検出された。遺物は土師器の小皿1点が出土した。831は1/3程度の残存率で、外面腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ビット13号 (第112図・第199図)

E-28区で検出された。土師器の小皿が出土した。832は完形の資料で、口径9.2cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る。内面は全体的に黒褐色を呈し、外面の一部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたものを地鎮として埋納したと考えられる。

ビット14号 (第112図・第199図)

D-28区で検出された。土師器の小皿が出土した。833は体部が丸みを帯び立ち上がるが、口縁部は直線的に立ち上がる。

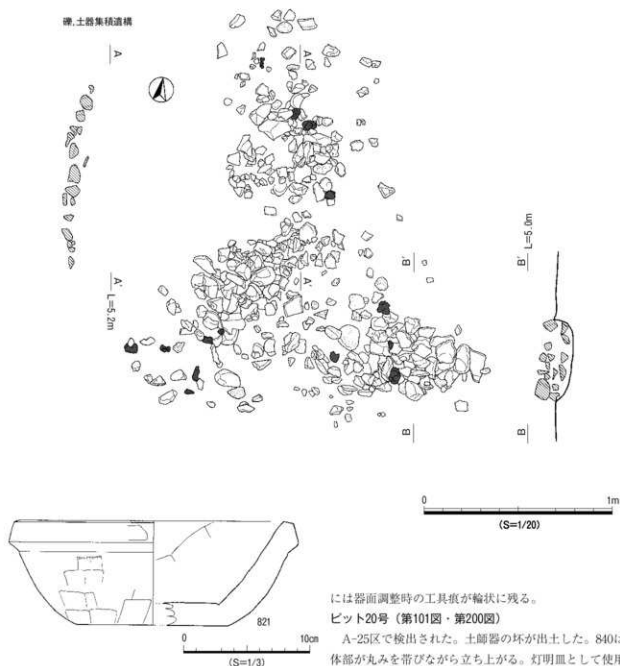
ビット15号 (第112図・第199図)

D-28区で検出された。銭貨が1点出土した。834は洪武通宝である。

ビット16号 (第112図・第199図)

C-28区で検出された。銭貨が1点出土した。835は淳祐元宝である。

礫、土器集積遺構



第197図 礫、土器集積遺構・出土遺物

ビット17号 (第112図・第199図)

C・D-28区で検出された。遺物は完形の土師器小皿が1点出土した。836は体部中央からわずかに外反する形状を呈する。

ビット18号 (第112図・第199図)

D-28区で検出された。銭貨が2点出土した。837は大中通宝。838は洪武通宝である。

ビット19号 (第101図・第200図)

A-25区で検出された。土師器の坏が出土した。839は底径6.0cmを測るもので、口縁部は欠損している。内底

には器面調整時の工具痕が輪状に残る。

ビット20号 (第101図・第200図)

A-25区で検出された。土師器の坏が出土した。840は体部が丸みを帯びながら立ち上がる。灯明皿として使用したものか、内面と外面の一部に煤が付着する。

ビット21号 (第101図・第200図)

B-24区で検出された。龍泉窯系青磁の椀が出土した。841は内面に片彫りによる劃花文が描かれるもので、外面は無文である。

ビット22号 (第113図・第200図)

D-24区で検出された。遺物は滑石製品が1点出土した。842は小形で、円錐状の形状を呈する。用途不明の資料である。

ビット23号 (第113図)

D・E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。小片のため図化できなかった。種別は不明である。

ビット24号 (第113図・第200図)

E-24区で検出された。銭貨が1点出土した。843は武・

通の文字が確認できる。

ビット25号 (第113図・第200図)

E-23区で検出された。遺物は土師器の小皿が完形で1点出土した。844はやや深さのあるもので、外面腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ビット26号 (第113図・第200図)

E-24区で検出された。遺物は土師器の小皿が1点出土した。845は2/3の残存率である。やや深さがあり、腰部はヘラ削りにより面取りされる。

ビット27号 (第114図・第200図)

D-23区で検出された。846は龍泉窯系青磁の椀である。体部外面に柵目を入れ、片彫りで周辺を一周させる。内面は片彫りの割花文が入る。

ビット28号 (第102図・第200図)

A-21区で検出された。龍泉窯系青磁の皿が出土した。847は体部が腰部で強く屈曲するもので、見込みには草花文がスタンプされる。

ビット29号 (第102図・第200図)

C-21区で検出された。遺物は、土師器の小片4点と瓦質土器の播鉢が3点出土した。そのうち2点を図化した。848・849は同一個体と考えられる瓦質土器の播鉢である。胎土は灰色を呈し、よく焼締まっている。内面は使用のため摩耗している。

ビット30号 (第103図・第200図)

C-20区で検出された。遺物は滑石製品が1点出土した。850は滑石製の鉢と思われる。

ビット31号 (第115図・第200図)

D-20区で検出された。銭貨が1点出土した。851は祥符元宝である。

ビット32号 (第115図・第200図)

E-21区で検出された。遺物は土師器の小皿の完形1点が出土した。852は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されものと思われる。

ビット33号 (第115図・第200図)

D-20区で検出された。853は漳州窯系の青花皿である。外底面は萁筒底を呈する。見込みは円状に軸が張り取られる。

ビット34号 (第104図・第200図)

D-17区で検出された。銭貨が1点出土した。854は永樂通宝である。

ビット35号 (第116図・第200図)

E-17区で検出された。銭貨が1点出土した。855は洪武通宝である。

ビット36号 (第116図・第200図)

G-17区で検出された。銭貨が1点出土した。856は元祐通宝である。

ビット37号 (第104図・第201図)

D-16区で検出された。銭貨が1点出土した。857は太

平通宝である。

ビット38号 (第104図・第201図)

D-16区で検出された。銭貨が1点出土した。858は太平通宝である。

ビット39号 (第104図・第201図)

C-15・16区で検出された。土師器の小皿が完形で出土した。859は口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.6cmを測る。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がり、内底はやや盛り上がる。

ビット40号 (第104図・第201図)

D-15区で検出された。861は鉄鍋の可能性のある铸造鉄器片である。厚さ3mm程度である。

ビット41号 (第104図・第201図)

D-15区で検出された。862は鉄鍋の可能性のある铸造鉄器片である。厚さ5mm程度である。

ビット42号 (第106図・第201図)

D-9区で検出された。863は飾り金具の一部で、六弁花形金座金具と呼ばれるものである。表面に塗金されていた痕跡が見える。(京都国立博物館 久保康氏 敬示)

ビット43号 (第106図・第201図)

D-9区で検出された。銭貨が1点出土した。864は洪武通宝である。

ビット44号 (第118図・第201図)

F-9区で検出された銭貨が1点出土した。865は通の文字のみ確認できる。種別は不明である。

古道 (第202図)

古道は、D・E-22区で1条検出された。溝13の緩やかな東側掘り込み壁に形成されている。南北に約10m延びる。幅約1mの硬化面である。

溝 (第202図～第207図)

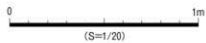
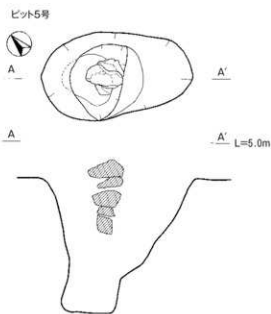
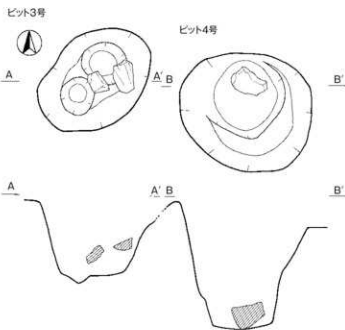
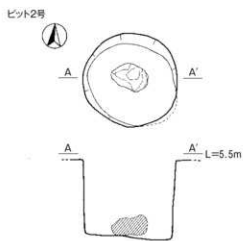
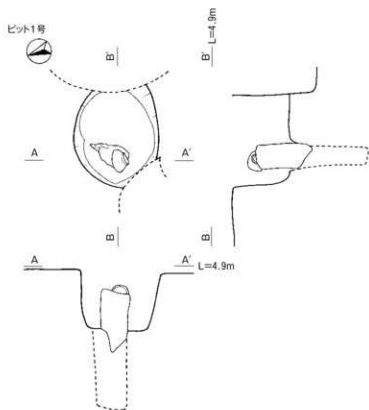
溝跡は、調査区全域で24条検出された。基盤となる層が砂質のため、掘り込みの形状を良好に留めているものは少ない。また、河川敷ということもあり遺構上面を流水作用で削平され、溝本来の深さを留めていないものがほとんどと思われる。

溝1 (第202図)

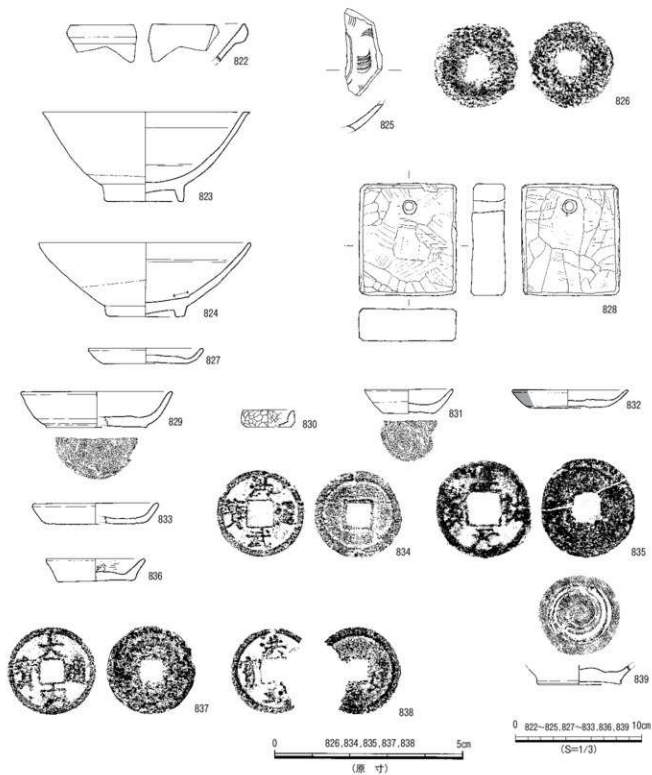
A・B-37区で検出された。南北方向に6m延びる。幅約70cm、検出面からの深さ約20cmで、断面は緩いU字状を呈する。

溝2 (第202図)

B-37区で検出された。南北方向に4m延びる。幅約60cm、検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。溝1の延長線上にあり一連の溝の可能性が高い。溝3を切っている。



第198図 ビット1～5号



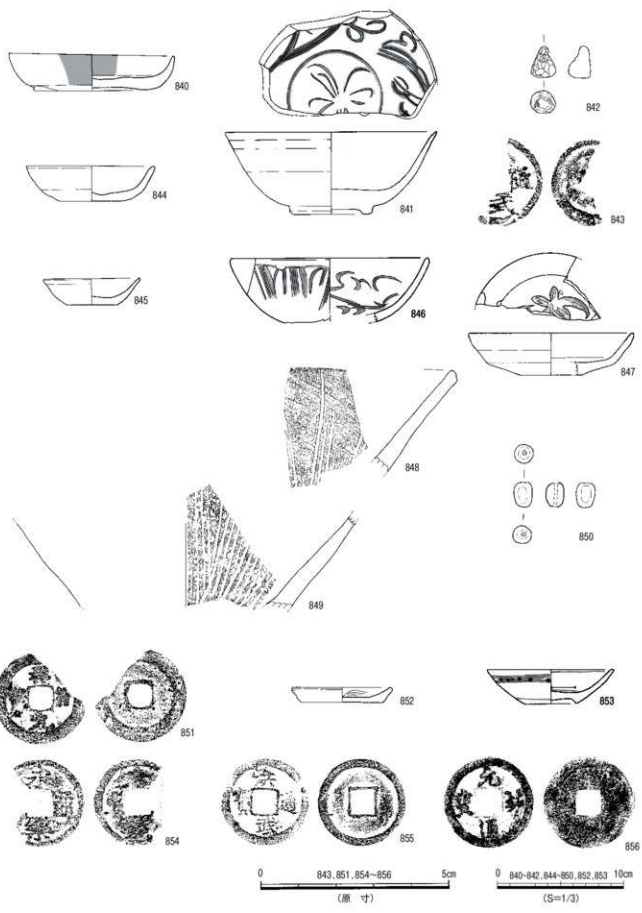
第199図 ビット内出土遺物(1)

溝3 (第202図)

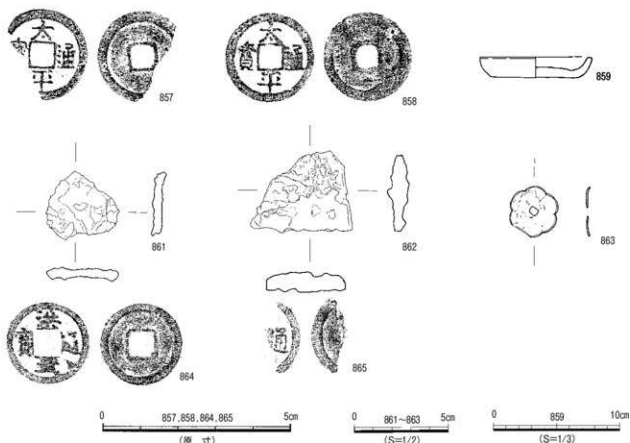
B-37区で検出された。東西方向に約7m延びる。幅約1.1m、検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。

溝4 (第202図)

C・D-37・38区で検出された。南東方向に約10m延びる。幅約1.7m、検出面からの深さ約15cm強である。



第200図 ビット内出土物(2)



第201図 ビット内出土遺物(3)

出土遺物(第202図)

遺物は、瓦が3点出土した。3点とも同一個体と考えられ、2点が接合したものを掲載した。866は布目瓦の平瓦である。中国瓦と考えられる。

溝5(第202図)

A-C-35区で検出された。南北方向に12.5m延びる。幅約1.2m、検出面からの深さ約30cm、断面は緩いU字状を呈する。

溝6(第202図)

A'-30・31区で検出された。東西方向に13m延びる。幅約0.85m、検出面からの深さ約40cm、断面は比較的明瞭なU字状を呈する。

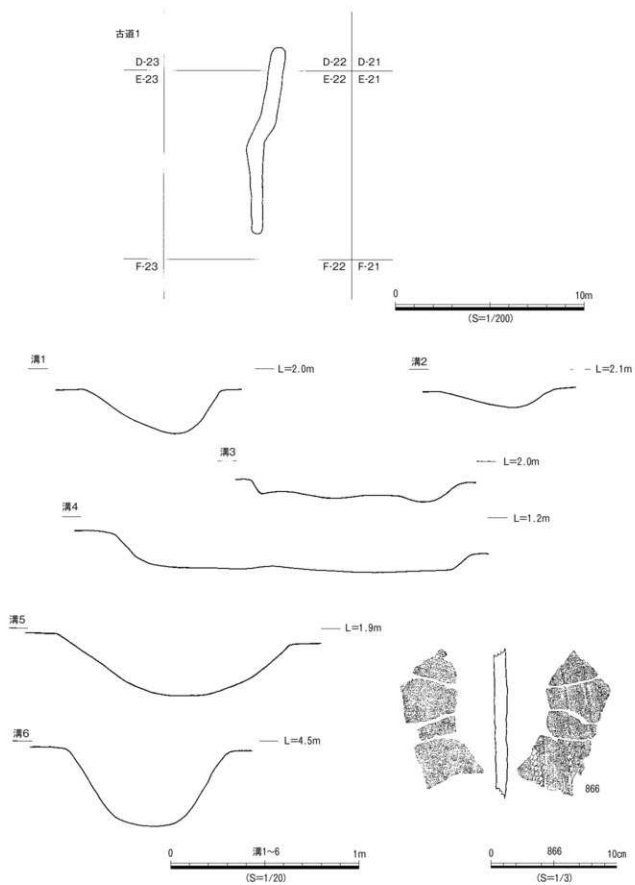
溝7(第203図)

A'・A-26~29区で検出された。A'-29区から南へ延び、A-29区で折れ東方向へ約32m延びる。幅約2.4mから6.6mで、検出面からの深さ約30cmから1.3mの深さである。断面は緩いU字状を呈する。26区から27区にかけて幅、深さともに大きくなっていく。遺物も多く出土した。

出土遺物(第203図)

遺物は、白磁43点、青磁62点、中国陶器24点、東播系

鉢6点、備前擂鉢3点、常滑甕4点、瓦質土器5点、カマイヤキ5点、土師器69点、土鍾11点、羽口、鉄滓1点、その他19点等、大量に出土している。しかし、そのほとんどは小片で、また流れ込みによる遺物であった。該期の遺物としては、土師器の小皿6点と坏13点、備前擂鉢1点を図化することができた。867~872は土師器の小皿である。867のみ口径が9.6cmとやや大きく、ほかは8.0cm~8.2cmである。5点とも、底部と体部との境はナデ調整が施され、体部はやや丸みを帯びながら短く立ち上がる。内外面の調整は丁寧な回転ナデが施される。外外面の切り離しは糸切りである。873~886は土師器の坏である。口径はいずれも13cm前後で、器高は3.2cm~3.6cmと深い。内外面は丁寧な回転ナデ調整が施されており、体部の立ち上がり丸みを帯びる877~881については底部と体部との境にナデ調整が施される。883~886は土師器の坏の底部である。体部は丸みを帯びて立ち上がる。887は備前産の擂鉢である。口縁部は外側に折り返し、逆くの字状につくる。胎土は暗褐色を呈し、白色の砂粒を多く含む。一単位7条の摺り目が入る内面は、使用により全体的に滑らかな手触りとなっている。888は鉄鍋

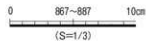
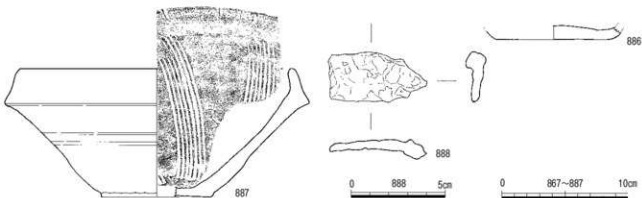
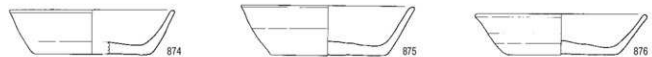
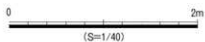
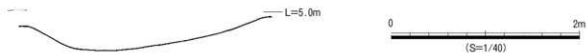


第202図 古道、溝1～6・溝4出土遺物

溝7-1



溝7-2



第203図 溝7・出土遺物

の可能性のある鋳造鉄器片である。厚さ3mm程度である。

溝8 (第204図)

D-F-26~28区で検出された。南北方向に約17m延びる。幅約40cmで、検出面からの深さ約5cm弱の非常に浅い溝である。溝は掘立柱建物跡11号に平行するように延び、建物横で建物桁方向に溝が張り出す。

溝9 (第204図)

A・B-25・26区で検出された。ほぼ南北方向に約14m延びる。幅約1.35m。検出面からの深さ約40cm。断面形は箱堀を呈する。溝は、掘立柱建物跡12号の西横に平行する。

溝10 (第204図)

C・D-25区で検出された。南北方向に約11.5m延びる。幅約85cm。検出面からの深さ約30cm。断面形は箱堀を呈する。掘立柱建物跡13号に隣接平行する。

出土遺物 (第204図)

遺物は、土師器の小片122点、白磁3点、瓦質土器9点、カマイヤキ1点、土鍾1点等が出土したが、大部分が小片で、図化できたものは1点であった。889は榑万丈産の捏ね鉢である。胎土は灰色を呈し、内面にはハケ目状の調整痕が入る。

溝11 (第204図)

D-25・26区で検出された。東西方向に約18m延びる。幅約60cm。検出面からの深さ約10cm。断面形は皿状を呈する溝北側に溝8同様の張り出しをもつ。

出土遺物 (第204図)

遺物は、土師器小片4点、白磁1点、中国陶器1点が出土し、1点を図化した。890は中国陶器の鉢である。胎土は粗く、白色の小石粒を多く含む。軸はかからない。口縁部は内湾し、内側には1条の突帯を有する。

溝12 (第204図)

B-24・25区で検出された。東西方向に約10m延びる。幅約1.1m。検出面からの深さ約25cm。断面形は皿状を呈する。

溝13 (第205図)

D-F-22区で検出された。南北方向に約15m延びる。幅約3.6m。検出面からの深さ約50cm。断面形は既ぬ箱堀を呈する。また溝内に筋状の硬化面がみられる。

出土遺物 (第205図)

遺物は、青磁や白磁等が多数出土したが、該期の資料としては青花25点、土鍾1点であった。そのうち、5点を図化した。891~894は漳州窯系の青花である。891は蓮子碗の底部である。畳付は軸刺ぎされる。892は見込みがわずかに椀頭心状を呈する碗である。胎土は淡黄色で、白濁した軸がかかる。高台から高台内面は露胎する。893は外面に草花文が描かれる碗で、見込みは輪状に軸刺ぎされる。894は底部が萐筒底を呈する皿である。胎

土は浅黄色を呈し、灰白色に濁った軸がかかる。895は土鍾である。外面には赤色顔料が塗布される。

溝14 (第205図)

D-20・21区で検出された。東西方向に約4m延びる。幅約75cm。検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。断面形皿形を呈する。

出土遺物 (第205図)

銭貨が出土した。896は皇宋通宝である。

溝15 (第205図)

A'-B-21区で検出された。南北方向に約23m延びる。幅約80cm。検出面からの深さ約20cm。断面形は箱堀を呈する。

溝16 (第205図)

A・B-18~20区で検出された。東西方向に約22m延びる。幅約1m。検出面からの深さ約20cm強。断面形は箱堀を呈する。

溝17 (第206図)

A・B-17・18区で検出された。南北方向に約12m延びる。途中で二股に分岐する。溝は、幅約1.6m。検出面からの深さ約10cm弱で非常に浅い。

溝18 (第206図)

B・C-17区で検出された。南北方向に約7m延びる。溝は、1~3mと幅の広狭がみられる。検出面からの深さ約10cmと非常に浅い。

溝19 (第206図)

B・C-15区で検出された。南北方向に約12m延びる。幅は約1.5m。検出面からの深さ約20cmである。

出土遺物 (第206図)

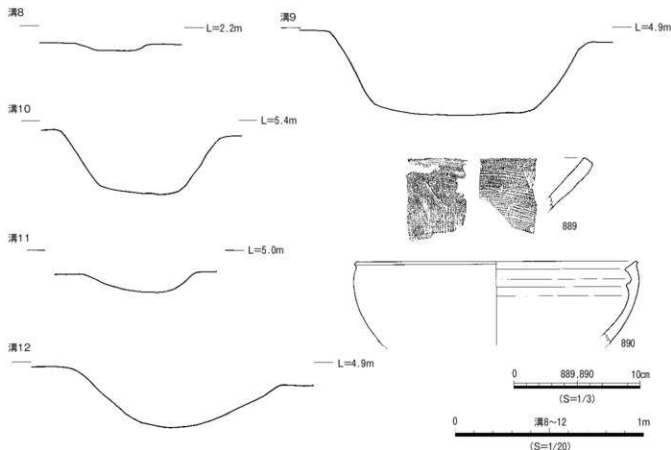
遺物は、土師器4点、白磁焼1点が出土し、そのうち2点を図化した。897は土師器の小皿である。口径8.8cm、底径6.2cm、器高1.6cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。898は白磁の椀である。口唇部内側の軸を掻き取る口売げのタイプである。

溝20 (第206図)

A-G-7~16区で検出された。東西、南北方向の複数の溝が切り合い、長大な溝を形成している可能性もあるが、切り合い関係がつかめなかったため、一連の溝として取り扱った。近世の遺物も確認できる部分もあり、一部は後世も機能していた可能性もある。A・B-12区で4条に分岐している。総延長170mあり、幅は2~5m。検出面からの深さ約65cmである。

出土遺物 (第206図)

遺物は、瓦質土器が6点と土鍾1点が出土した。そのうち4点を図化した。899~901は瓦質土器である。899・900は榑万丈産の捏ね鉢で、内面にはハケ目状の調整痕が残る。901は摺鉢である。内面には7条1単位の摺り目が入るが、使用による摩耗が激しい。902は土師



第204図 溝8～12・溝10, 11出土遺物

質の土錘である。

溝21 (第206図)

D～G-12区で検出された。南北方向に約22m延びる。幅は1～6mあり、北から南に進むに従って幅が広がる。検出面からの深さは約60cm、断面形は緩い箱型を呈する。

出土遺物 (第207図)

遺物は、土師器小片27点、青磁10点、白磁3点、備前播鉢1点、常滑甕1点、瓦質土器2点、東播系須恵器等が出土した。そのうち10点を図化した。

903～905は土師器の小皿である。3点とも内外面は丁寧なナデ調整が施される。903は口径7.0cm、底径5.0cm、器高1.5cmを測る。904は口径7.6cm、底径6.0cm、器高1.2cmを測る。905は口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.7cmを測る。906～911は龍泉窯系青磁である。906・907は碗である。906は畳付の外側を面取りし、高台内底にかけては露胎する。907は高台内底の削り出しがやや深く、畳付から高台内底は露胎する。908は見込みに花文がスタンプされる。軸は畳付を越えて高台内面までかかる。909は外面に棒状の工具による蓮弁文が描かれる。軸は畳付を越えて高台内底までかかり、輪状に軸刺ぎされる。

910は桜花皿である。見込みは輪状に軸刺ぎされる。911は盤の底部である。軸は畳付を越えて高台内底までかかる。912は備前産播鉢の底部である。

溝22 (第207図)

C・D-10区で検出された。南北方向に約16m延びる。幅は約75cm、検出面からの深さ約45cmである

溝23 (第207図)

E・F-4～7区で検出された。南西方向に約25m延びる。幅約3m、検出面からの深さ約30cm強である。

E-5区で二股に分岐する。掘立柱建物跡30・32号は、この溝に平行するようなかたちで検出された。

出土遺物 (第207図)

913は龍泉窯系青磁の皿である。見込みは円状に軸が掻き取られる。914は備前産の播鉢である。口縁帯の上角と下角が伸び、上角はさらに上方へ突出するため内側に稜を有する。1単位7条の播目が入る。

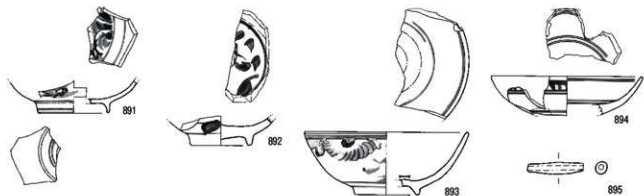
溝24 (第207図)

C・D-2・3区で検出された。南西方向に約9.5m延びる。幅約2.3m、検出面からの深さ約35cmである。前述の溝23と同一直線上にあり一連の溝の可能性が高い。

溝13



- a. にぶい褐色砂質土
- b. 暗褐色砂質土
- c. 暗赤褐色砂質土
- d. 褐色砂質土(やや粗粒)
- e. 黒褐色土(φ1mm程度の軽石が混じる)
- f. 黒褐色土(若干小石が混じる)
- g. 黒褐色土(けよりやや明るい、若干小石が混じる)
- h. 暗褐色砂質土
- i. 黒褐色土
- j. 黒褐色粘質土
- k. 暗褐色粘質土
- l. にぶい赤褐色土
- m. 暗赤褐色砂質土
- n. にぶい橙砂質土



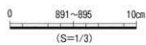
溝14 ————— L=5.5m



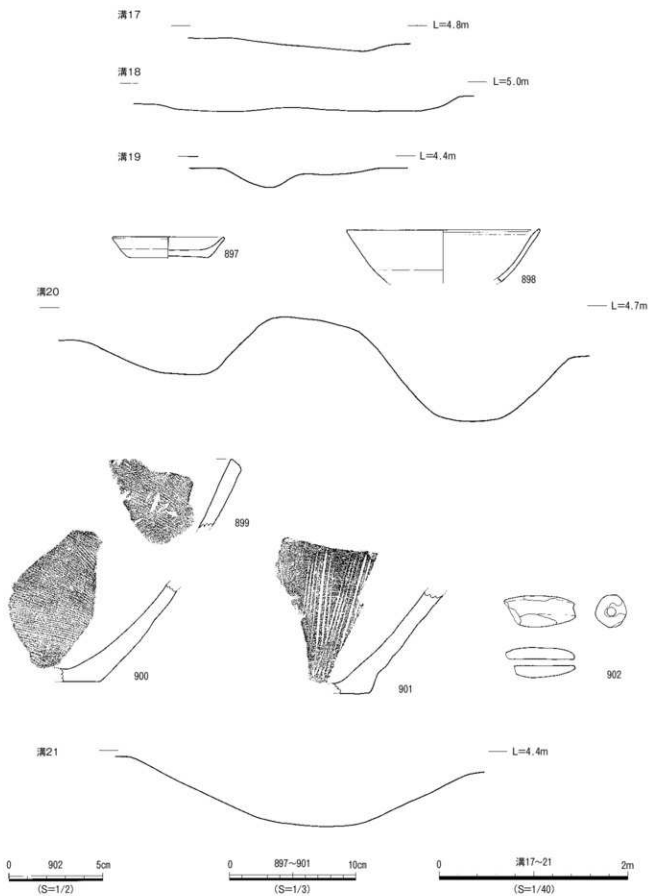
(原寸)

溝15 ————— L=4.6m

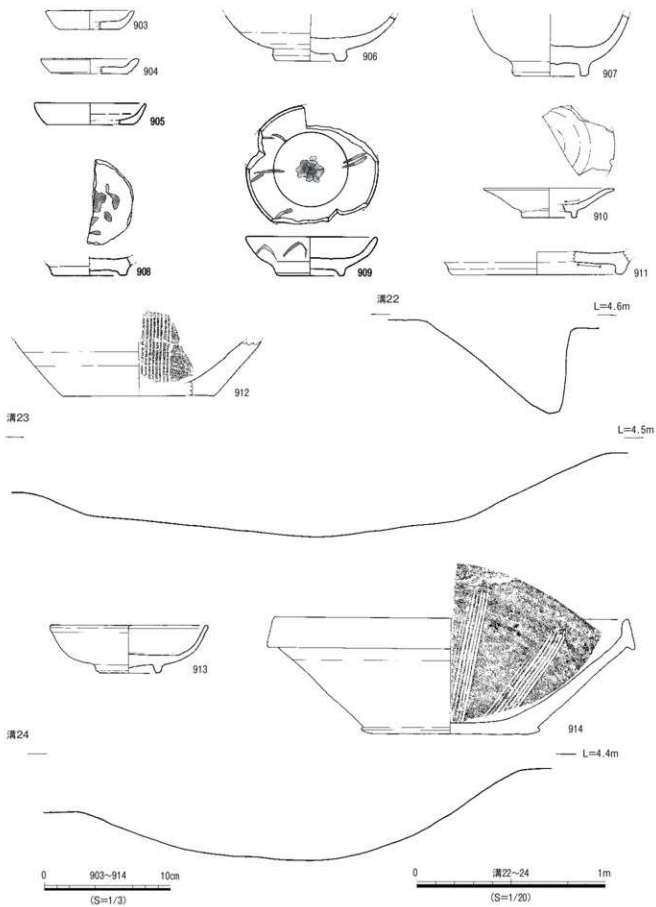
溝16 ————— L=4.6m



第205図 溝13~16・溝13. 14出土遺物



第206図 溝17~21・溝19, 20出土遺物



第207図 溝22~24・溝21、23出土遺物

(4) 遺物

土師器 (第208図915~941, 第209図942~956)

915~956は、土師器である。底部の切り離しが糸切りのものを中世の土師器として取り扱った。器種としては皿・杯、黒色土器Ⅰ類の碗、黒色土器Ⅱ類の皿、赤色土器Ⅱ類の高台付皿、小皿、赤橙色の皿がみられる。915~929は皿である。930・921・925~927は体部との境に段をもつ。925は体部内面に煤痕がある。926は体部内面から底部外面にかけて筋状のシミ痕がある。930~941は杯である。930は口縁部が大きく外反する器形で薄手のものである。939・948は体部内面から底部外面にかけて筋状のシミ痕がある。942~946は黒色土器Ⅰ類の碗で

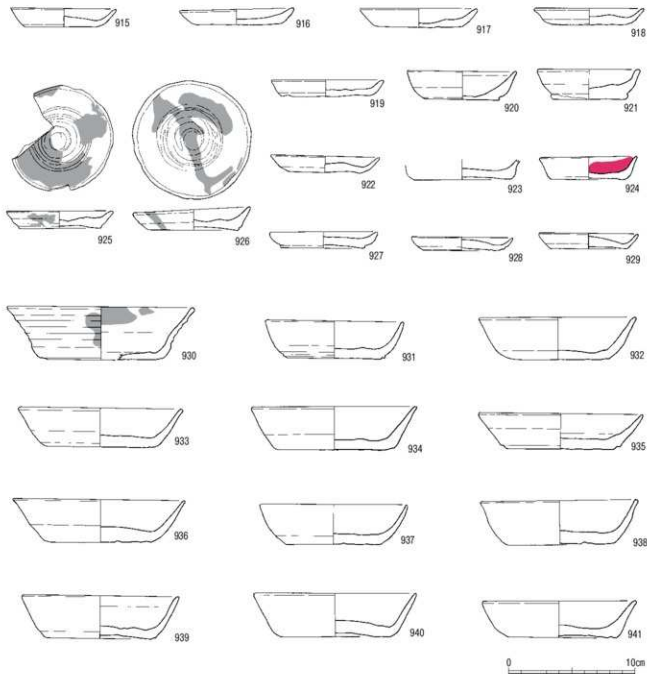
ある。943は内外面ともに丁寧なミガキ調整が施され胴部は丸みをもち口縁部は内湾する器形である。947・948は黒色土器Ⅱ類の皿である。949・950は赤色土器Ⅰ類の高台付皿と小皿である。950~956は赤橙色皿である。

土玉 (第210図957~960)

基部の上位に穿孔を施しており、上位端部には僅かに凹みがみられるが、その用途は不明である。

土錘 (第211図961~980, 第212図981~1008)

163点中、出土層位が明確で欠損部の少ない52点を図化した。961~1000は厚みが2cm未満の管状土錘である。1001は土錘を短くしたもので、球状を呈す。1002~1008は厚みが2cm以上の管状土錘である。



第208図 土師器 1



第209図 土師器2



957



958



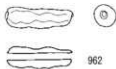
959



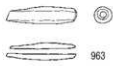
960



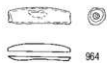
961



962



963



964



965



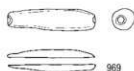
966



967



968



969



970



971



972



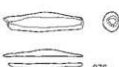
973



974



975



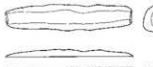
976



977



978



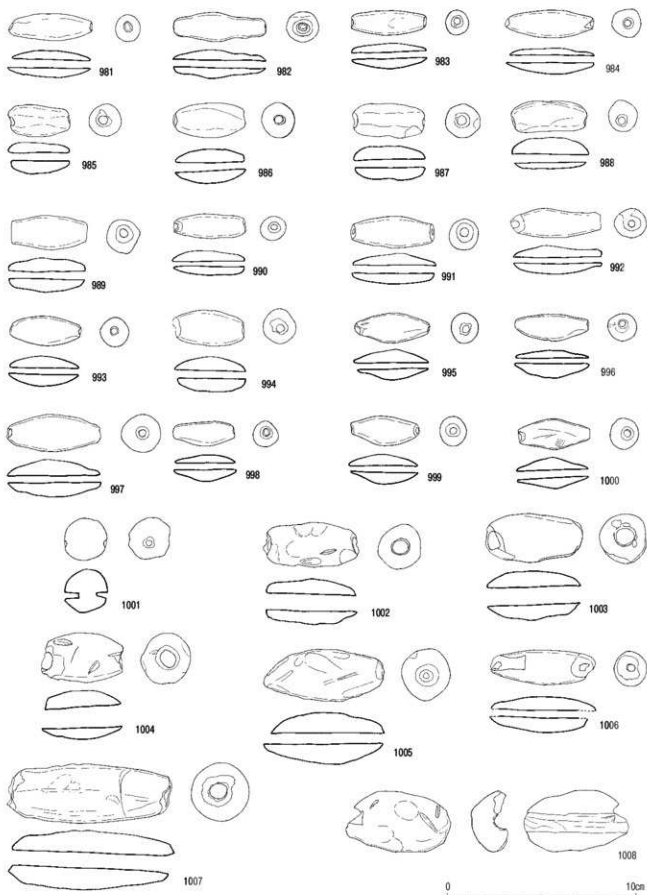
979



980



第210图 土玉・土錘 1



第211图 土錘2

輸入磁器

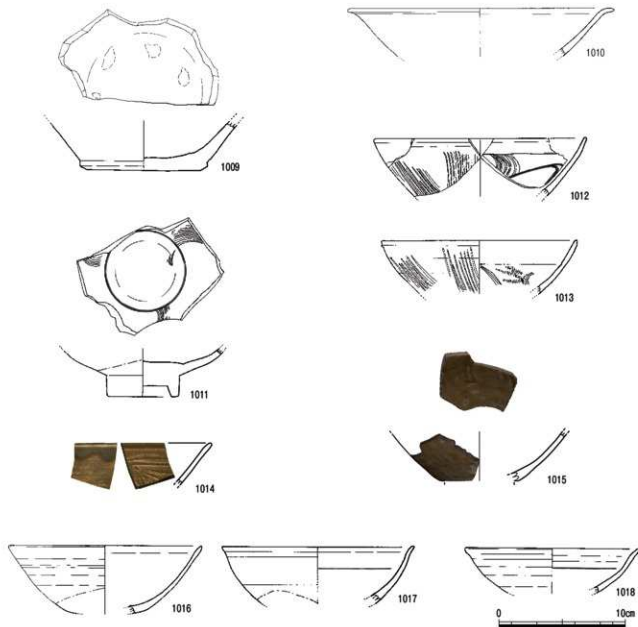
青磁 (第212～224図)

1009・1010は、大宰府分類の越州窯系青磁 (A期: 8世紀末～10世紀中頃) に比定されるものである。越州窯系青磁は、古代に相当する遺物であるが、大宰府分類に従い遺物を分けただけで、ここに掲載する。1009は、若干上げ底気味の平底である。体部最下部および底部に回転ヘラ削りの跡が残る。体部外面最下部と見込みみ三角形の目跡を持つ。体部外面下位以下は露胎である。大宰府分類の越州窯青磁碗Ⅰ～5類に相当する。1010は、外反する口縁部から胴部までである。焼成不良で軸の残りが悪いが、全体的に器面全体が茶黄色を呈し、淡黄灰色の胎土を持つことから、越州窯系とした。

1011～1015は、大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ類 (D期: 12世紀中頃～後半) に比定され、体部上位で若干内側に屈曲するものである。1011は、外面が無文である。1012は、外面に細かい縦の櫛目文を施している。1013は、外面に粗い櫛目文を施している。1014は、外面が無文で、内面にヘラ状の施文具による文様を有する。1015は外面に細かい縦の櫛目文、内面に櫛による点描文を有する。

1016～1018は、大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅱ類 (D期: 12世紀中頃～後半) に比定され、内・外面とも無文で、口縁部を僅かに外反させるものである。

1019～1023は、大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅲ類 (D期: 12世紀中頃～後半) に比定され、口縁部を僅かに外反させ、体部外面に粗い縦の櫛目文を施すものである。

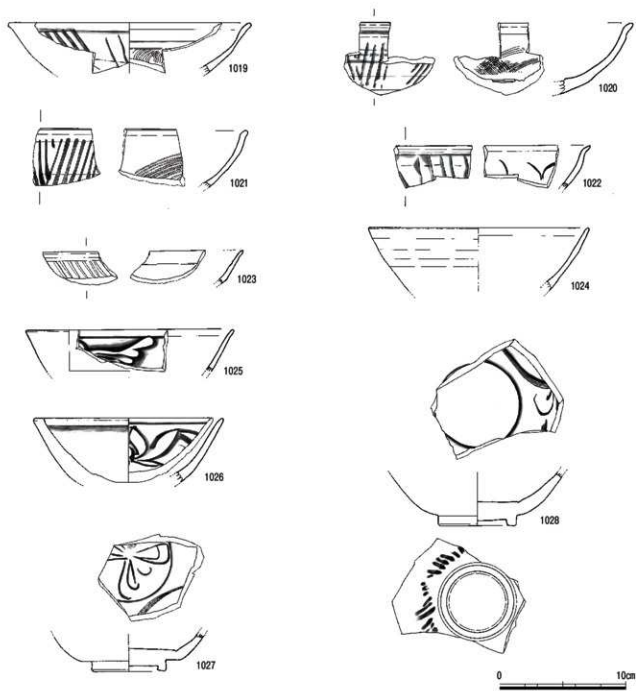


第212図 青磁 1

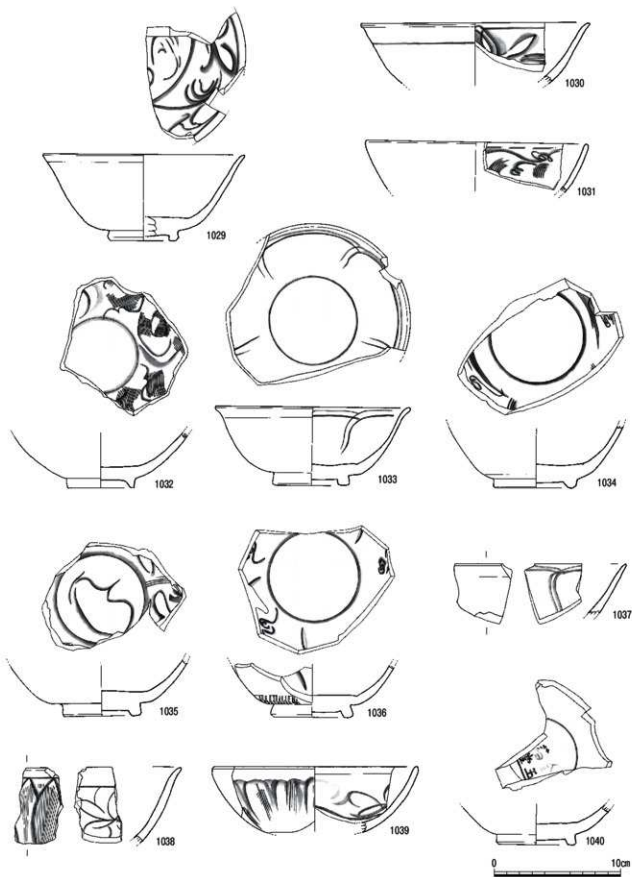
1019・1020は、内面に拂状の施文具により花文を描く。
1023は、内面は無文だが、外面の柳目文が胴部付近で意
図的に止められ段がつく。

1024～1049は、大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類（D
期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口縁
端部は丸く肉厚で、直口か僅かに外反する例が多く、胴
部下半の腰には張りがある。高台は断面四角形か五角形
が多い。高台内部は削りが若干浅く、このため底部は肉
厚となる。口縁部直下から底部外面までヘラ削りを行
い、髹付から高台内面は露胎である。1024は、内・外面

とも無文である。1025～1029は、外面は無文、内面に片
影蓮花文を有する。1030～1032は、内面に片影りて草花
文や飛雲文を入れ、空白部を柳目文で埋めている。
1033～1037は、拂刃により内面を分割し、中に飛雲文
を入れている。1033は、拂刃による分割線のみで、内面に
文様を施さない略式形式である。1035は、見込みに耳状
の模様を片影りしてある。1038・1039は、胴部外面に蓮
弁文と縦の柳目を入れ、内面に片影刺花文を施す。
1040・1041は、見込みに「金玉満堂」の印文を加える。
1042～1046は、内面に刺花文を持つ。龍泉窯系青磁椀Ⅲ



第213図 青磁2



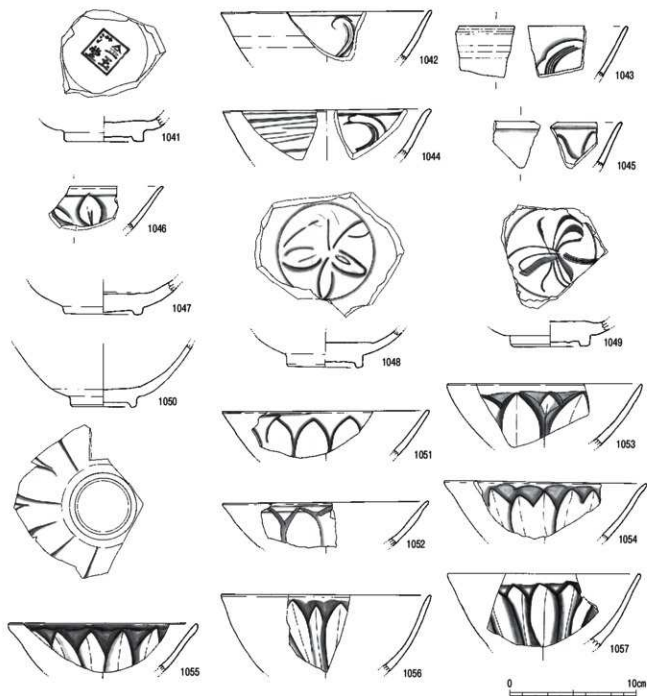
第214图 青磁 3

類の直口タイプと類似するが、底部がないので判断できない。1047～1049は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の底部である。

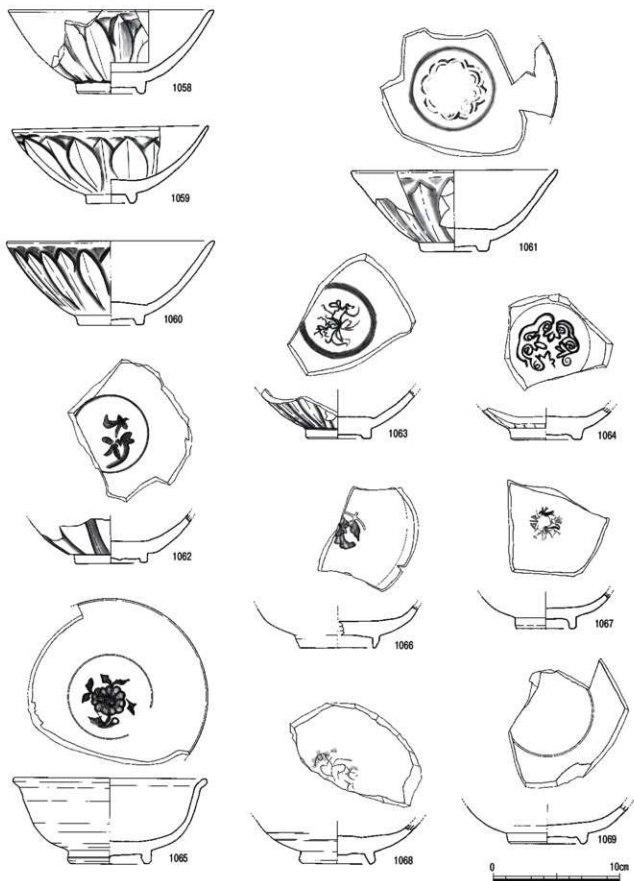
1050～1064は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（E期：13世紀初頭前後～前半）に比定されるものである。体部外面に蓮弁文を有し、口縁端部は直口か僅かに外反する。1050～1052は、片影蓮弁文で蓮弁の中心に稜はない。1053～1060は、蓮弁の中心に稜をなす、いわゆる鍋蓮弁文である。1058～1060は、口縁から高台まで残存し、

豊付から高台内面まで露胎である。1061～1064は、外面に鍋蓮弁文、見込みに草花文様が施されている。

1065～1074は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。龍泉窯系青磁碗Ⅰ～Ⅲ類の雰囲気と、龍泉窯系青磁碗上田B・D類の形状を併せ持つ過渡期の陶磁器である。1065～1068は、やや高い角高台で、高台外端を広く斜めに面取りする。高台内面は中央が凸状にふくらんでい



第215図 青磁4



第216图 青磁 5

る。見込みには、草花文様の印文を加えている。1069の形状は前述と同じタイプだが、見込みが無文である。1070～1072は、外面に蓮弁文が施されている。1073は口縁部が、1074は底部が欠損しているため、Ⅳ類より古くなる可能性がある。

1075は、福建省産青磁碗である。体部下半から高台内面まで露胎し、見込みの軸を輪状に掻き取っている。元代以降、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類に対応するものである。

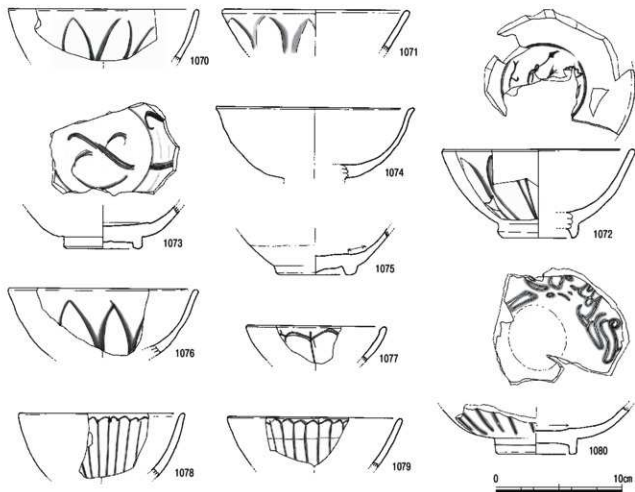
1076～1091は、上田分類のB類に比定されるものである。外面に蓮弁文を有する15世紀以降の青磁である。1076は、片切彫りにより蓮弁を表現している。1080は、内面に陽刻を加えているが、残存部分が少ないため詳細はよくわからない。1081は、見込みに草花文の印文を加えている。1091は、蓮弁文の上部に雷文を省略したような線刻が施されているが、蓮弁の線刻がはっきりしていることからB類としている。

1092～1104は、上田分類のC類に比定され、口縁部外面に雷文帯を有するものである。1092～1098は、口縁部から胴部にかけて雷文帯が残る。1093は雷文帯の下部に蓮弁文を施している。1092～1095は、角張ったはっきり

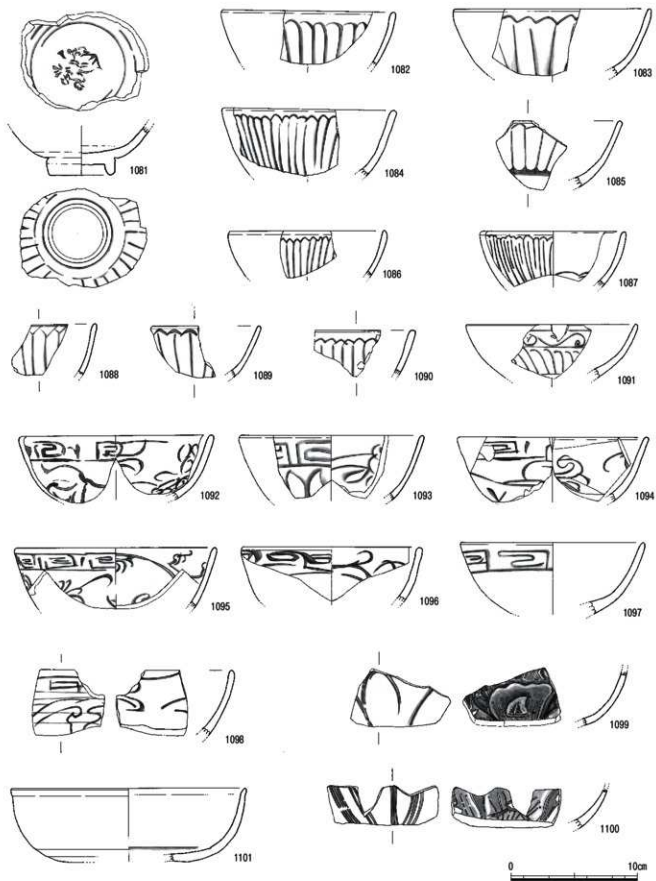
とした雷文だが、1096～1098は、曲線で簡略化した雷文である。1099・1100は、内面にラマ式蓮弁の陽刻を施す。1101は、雷文帯が見られないが、C類の器高をそのまま低くした器形であるため、C類の大槓と考えられる。1102～1104は、見込みに印文を加えている。

1105～1116は、上田分類のD類に比定されるものである。口縁部が外反し、高台外面まで施軸され、高台内面は露胎である。貫付の軸は削り取る。1105・1106は、見込みに草花文の印文を加えている。1106は、内面にも草花文の陽刻を施している。1107～1112は、見込みの軸を円状に掻き取っている。1107は、体部内面を8分割し、その中に草花文が入る陽刻を施している。1113は、見込みの軸を輪状に掻き取っている。1114～1116は、底部が欠損するものである。1116は、透明感の強い軸が薄くかかるため、体部の回転ヘラ削り跡が見える。

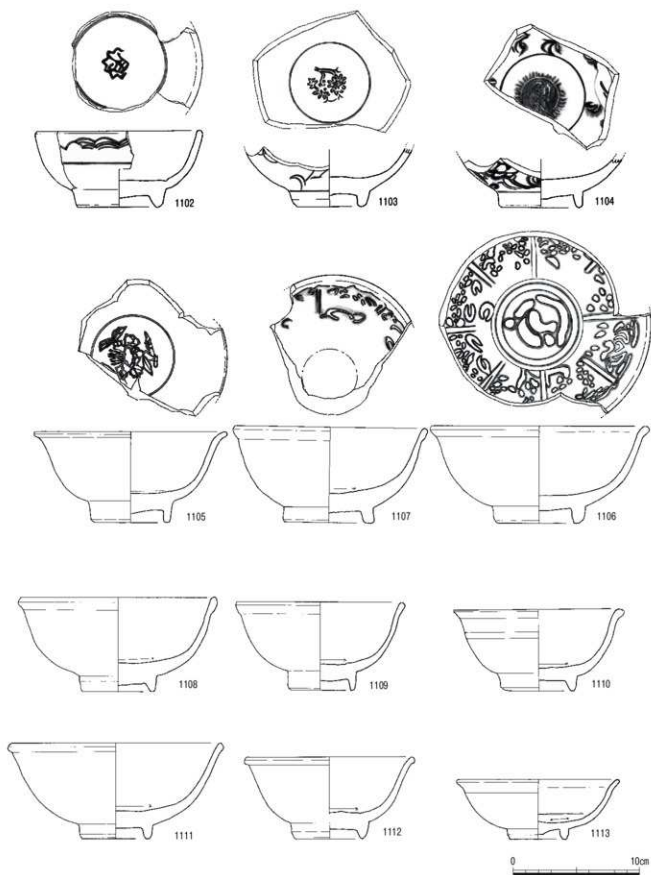
1117～1124は、上田分類のE類に比定され、口縁部が内湾するものである。1120・1121は、無文のためにE類に置くが、内湾が緩やかなためC類の可能性もある。1122～1124は、口縁部が欠損しているため、D類の可能性もある。



第217図 青磁6



第218图 青磁7



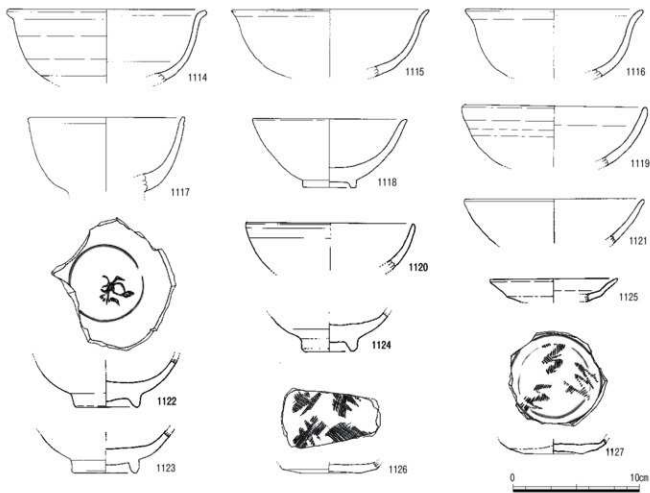
第219图 青磁8

1125・1135は、大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。1125は、体部外面下半は露胎で、内・外面とも無文である。1126～1128は、体部外面下半は露胎で、内面にジグザグ状の柳点描文を施している。1128は、ヘラによる文様が施されている。1129～1135は、全面施釉後、底部外面の軸を掻き取っている。1129・1130は、内面にジグザグ状の柳点描文を施している。1131～1135は、柳点描文にヘラによる文様も加えている。

1136～1141は、元代までの皿である。1136～1139は、体部中位で屈曲し口縁部は直に引き出す、大宰府分類の龍泉窯系皿Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。1136・1139は、底部の軸を掻き取り、見込には柳目の草花文を施す。1140は、大宰府分類の龍泉窯系皿Ⅳ類（G期：14世紀初頃～中頃）に比定されるものである。高台を有するもので、内・外面とも無文である。1141は、福建省産の皿で、龍泉窯系Ⅳ類に対応するものである。体部下半から高台内面まで露胎し、見込みの軸を輪状に掻き取っている。高台内面と見込みに赤化した

部分がある。

1142～1160は、明代の皿である。1142～1147は、口縁が外反するタイプの皿である。1142は、高台内面の軸を輪状に掻き取っている。1143・1146は、高台内面が露胎している。1143は、見込みの軸を円状に掻き取っている。1144は、高台内面と見込みの軸を円状に掻き取っている。1145は、高台内面の軸を円状に掻き取っている。1147は、高台内面が露胎し、見込みに草花文の印文を加えている。1148～1151は、口縁が直口するタイプである。1149・1150は、高台内面の軸を輪状に掻き取り、内面に棒状の工具で放射状に模様を描き、見込みに印文を加えている。1151は、畳付から高台内面が露胎で、外面に回転ヘラ削りの跡が見られる。1152～1157は、稜花タイプの皿である。1152～1155は、見込みに印文を加えている。1155は、見込みに双魚紋が施されている。高台内面には、水銀朱による「大」の文字が書かれている。顔料の分析については、第4章に示している。1156は、内面を花卉状に深く削り、立体的な造形である。白磁の1258と形状が似ている。1158～1160は、葎筒底を持つ皿である。これらの葎



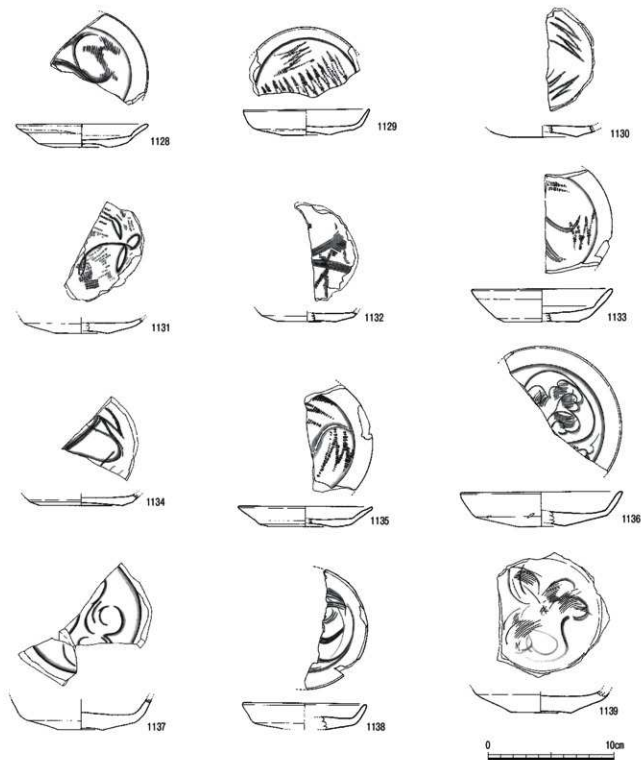
第220図 青磁Ⅸ

筒底は全て露胎である。

1161～1167は、青磁の浅形碗と小碗である。1161は、大宰府分類の龍泉窯系浅形碗Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口径15.8cmで、畳付から高台内面は露胎である。1162は、大宰府分類の龍泉窯系小碗Ⅱ類（E期：13世紀初頭～後半）に比定されるものである。外面に菊蓮弁文を有する。1163～1165は、大宰

府分類の龍泉窯系小碗Ⅲ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。全面施釉後、高台端部周辺の釉を掻き取っている。掻き取られた境は、赤色に発色している。1163は、外面に菊蓮弁文を有する。1166・1167は、分類ができなかったもので、外面に蓮弁を持つ小碗である。

1168～1172は青磁の坏である。1168は、大宰府分類の



第221図 青磁10

龍泉窯系Ⅲ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定される坏である。見込みの幅が広いことから坏とした。Ⅲ類の特徴である高台端部の掻き取り部分が赤く発色している。1169は、大宰府分類の龍泉窯系Ⅳ類（G期：14世紀初頭～中頃）に比定される坏である。1170～1172は、外面に蓮弁を持つ坏である。

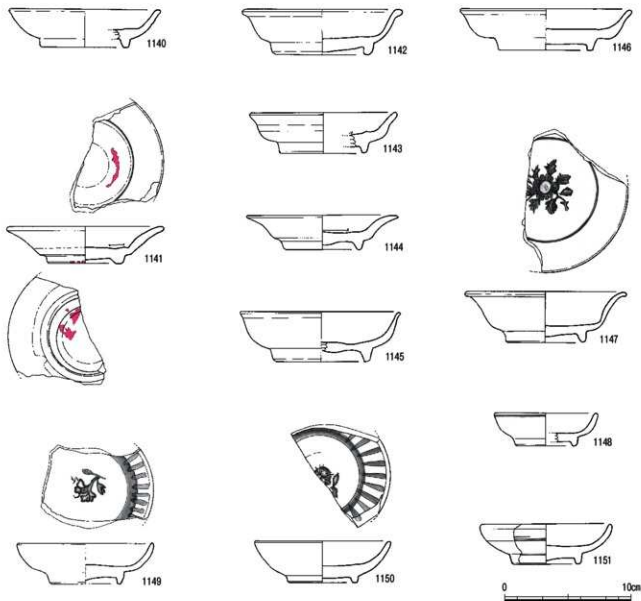
1173～1181は青磁の盤である。おもに明代に製造されたと考えられる。1173・1174は、高台を持ち、1175・1176は、蕃筍底となる盤である。1177は、内面全体にヘラ彫りが施されている。1178は、口縁部の鈎が上方に向けた盤である。1177と同様に内面全体にヘラ彫りが施されている。1179は、口縁部のつばが外側に開いた盤である。内面に線刻による文様が薄く施されている。1173・1180

は、口縁が稜花となっている。1181は、器肉が薄く、折口皿と考えられる。

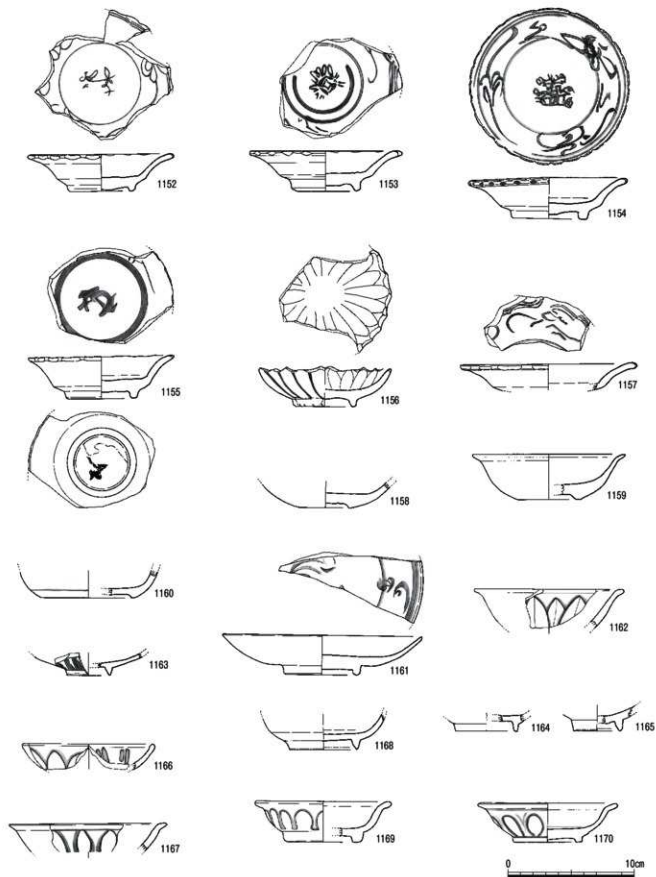
白磁（第225～231図）

1182は、大宰府分類の白磁碗Ⅰ類（A期：8世紀末～10世紀中頃）に比定されるもので、小振りで上質の玉縁を持つ口縁部である。芝原遺跡からは、2点出土している。

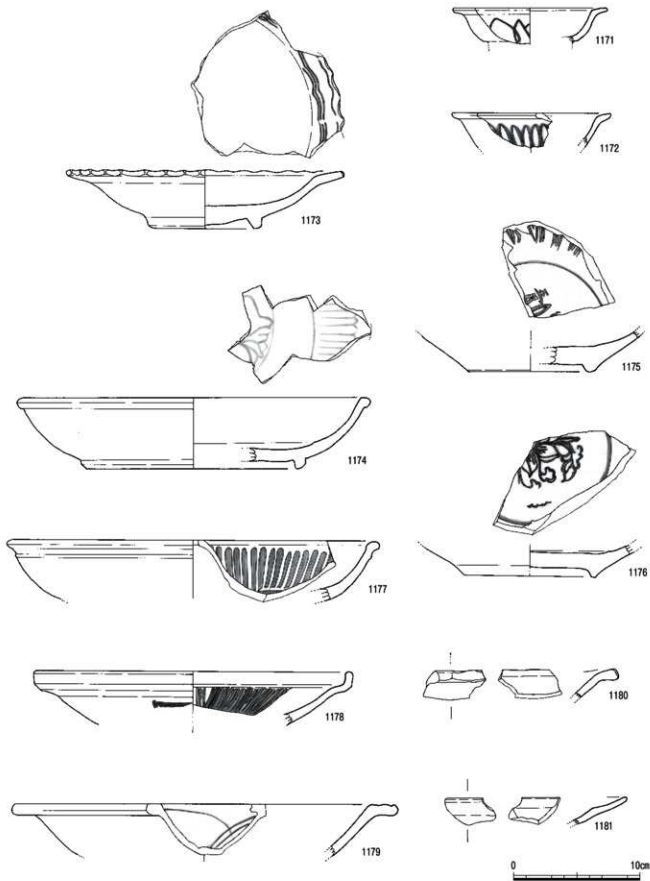
1183・1184は、大宰府分類の白磁碗Ⅱ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。高台部外面は直に、内面は斜めに削り、斜めの面には削り工具のすじ目を残している。胎土には微細な黑色粒を含み、体部外面下半以下は露胎である。1183は、見込みに段を1段持つ。



第222図 青磁11



第223图 青磁12



第224图 青磁13

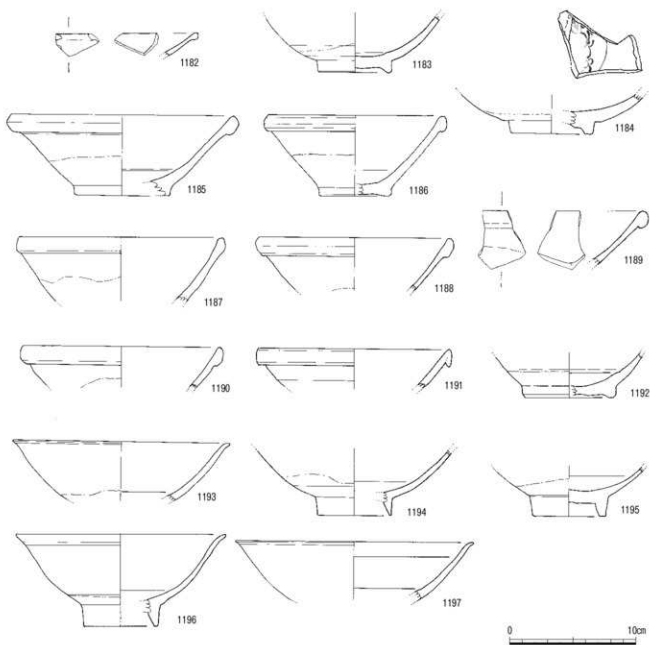
1185～1192は、大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。肉厚な玉縁状の口縁部を有し、体部の器内が比較の厚いものである。体部外面下半から高台内面まで露胎である。1185は見込みに段を1段持ち、1186は、見込みに段を1段と沈線を持つ。高台は幅広く削り出しが浅いため、底部の器内も厚くなっている。1187～1191は、口縁部から体部上半まで、1192は底部である。

1193～1200は、大宰府分類の白磁碗Ⅴ類（C期：11世紀後半～12世紀前半、嘴状の口縁端部を持つⅤ-4類はD期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。口縁部を水平あるいは水平に近い角度で外反させ、高台は細

く高く直立するものである。1193～1196は、内・外面とも無文で、見込みに1本の沈線を持つ。1197・1198は、見込みと内面体部に2本の沈線を持つ。1199は、嘴状の口縁端部を持ち、内面に短い櫛目文が施されている。1200は、内面から見込みまで櫛目文が施されている。

1201は、大宰府分類の白磁碗Ⅵ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。直径12.8cmの中型碗で、器高は低く浅形を呈する。口縁部は弱く外反し、内・外面とも無文である。

1202は、大宰府分類の白磁碗Ⅶ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるものである。体部は高台より直線的に伸び、ロート状を呈する。体部上半は外方へ開き、



第225図 白磁 1

口縁部は僅かに外反し、口縁部に輪花を有する。

1203～1207は、大宰府分類の白磁碗Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）に比定されるもので、見込みの軸を輪状に掻き取ったものである。体部は、斜上方に直線的に開き、口縁部は外反する。1205・1206は、内面上部に沈線を有する。1207は、見込みの軸の掻き取りがなく、内面に柳目文を施していることから、Ⅷ類の中では古相を呈す。

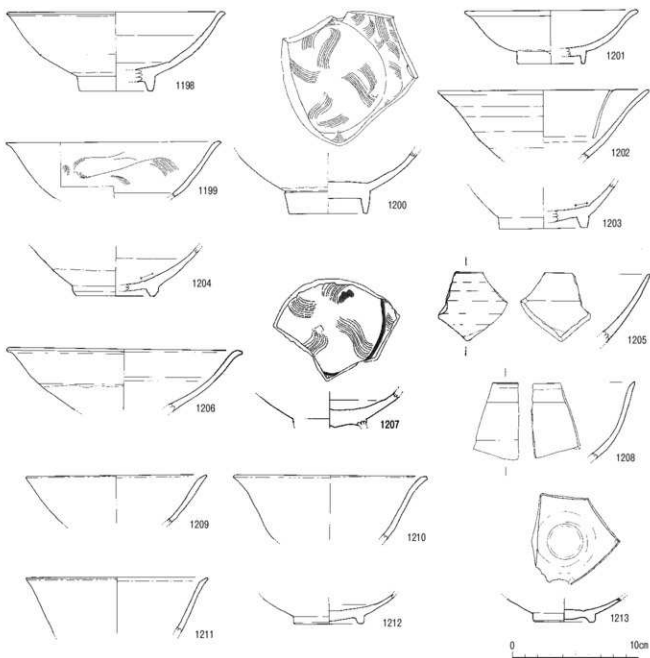
1208～1213は、大宰府分類の白磁碗Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部周辺を施軸後に掻き取る、いわゆる口壳の碗である。1212は、見込みに高台径より広い圈線を持つ。全面

施軸であるが、豊付と高台内面の一部には施軸が届いていない。1209と同一個体である。

1214～1219は、14世紀～15世紀の白磁碗である。1216は、見込みに目跡が四か所残る、完形の碗である。1217は、体部外面下半は露胎し、見込みの軸を輪状に掻き取っている。

1220は、大宰府分類の白磁皿Ⅱ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるもので、口縁部が断面三角形の玉縁状になっている。体部外面下半以下は露胎である。芝原遺跡で白磁皿Ⅱ類はこの1点のみの出土である。

1221～1225は、大宰府分類の白磁皿Ⅲ類（C期：11世紀



第226図 白磁 2

後半～12世紀前半)に比定されるものである。高台はやや高く、口縁部は直口もしくは僅かに外反する。体部下半から高台内面まで露胎である。1221～1223は、見込みの軸を輪状に掻き取っている。1224・1225は、見込みの軸の掻き取りが見られない。焼成時、最上段に重ねたものと考えられる。1225の内面には砂粒が付着している。

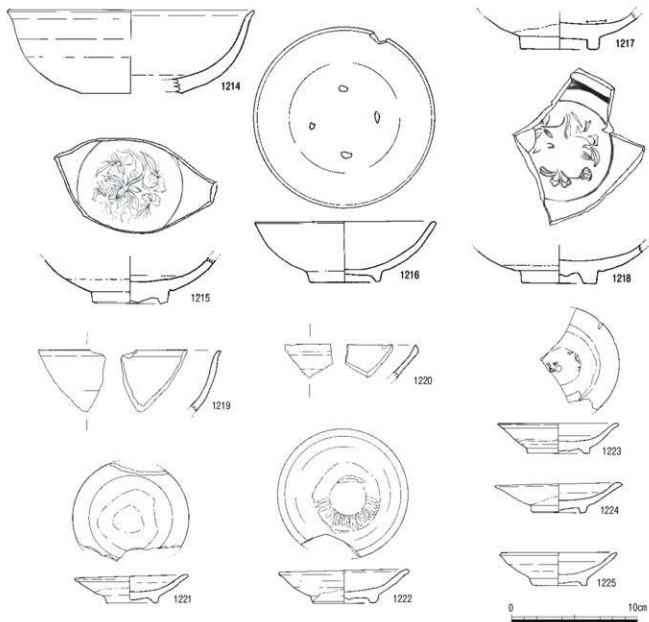
1226・1227は、大宰府分類の白磁ⅢⅥ類(C期:11世紀後半～12世紀前半)に比定されるものである。口縁部が直口で、底部が僅かに突き出している。1226・1227は、体部上位で内湾し、屈曲部内面に沈線状の段を有する。微細な黒斑が胎土に混じり、黄色味の軸が施される。

1228・1229は、大宰府分類の白磁ⅢⅧ類(D期:12世紀中頃～後半)に比定されるものである。口縁は直口で、

体部は鈍角に内側へ屈曲する。1228は、見込みにヘラ描きで草花文を施している。

1230～1241は、大宰府分類の白磁ⅢⅨ類(F期:13世紀中頃～14世紀初頭前後)に比定されるものである。口縁部の軸を掻き取った、いわゆる口売の皿である。1230・1231・1233～1241は、全面施釉で、1232は底部が露胎する平底の底部である。1230・1234は、底部の軸を板状の工具でのぼしている。1237～1241は、口縁部を朝顔型に外反させている。

1242～1260は、Ⅸ類以降の白磁皿である。1242～1250は、森田D群に比定されるものである。1242～1244は、高台に四か所挟り込みを入れた割高台で、見込みに四か所の目跡が残る。1245は、挟り込みを五か所入れた割高



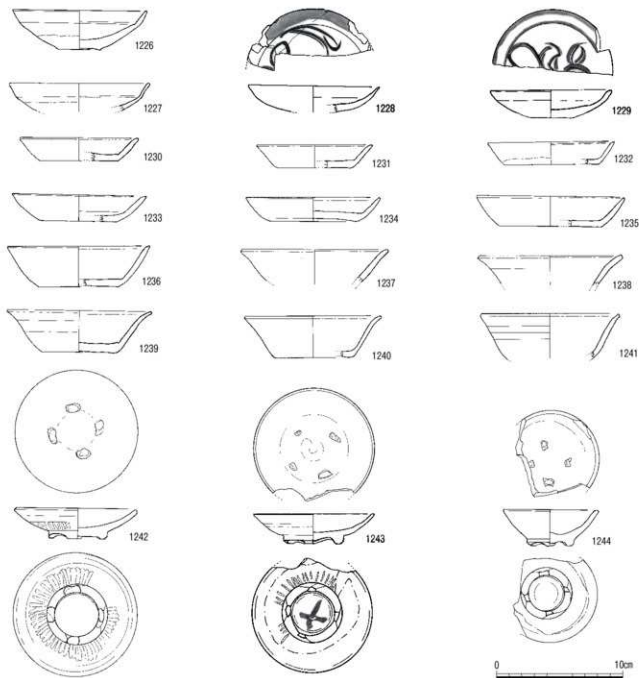
第227図 白磁3

台で、目跡も五か所残る。1246・1247は高台に挟り込みがなく見込みに目跡もない。1248は、高台に挟り込みはないが、見込みに目跡が四か所残る。1249は、外面下半の露胎部分に黒色を塗るものである。1250は、体部中位で屈曲し、その後緩やかに外反する。

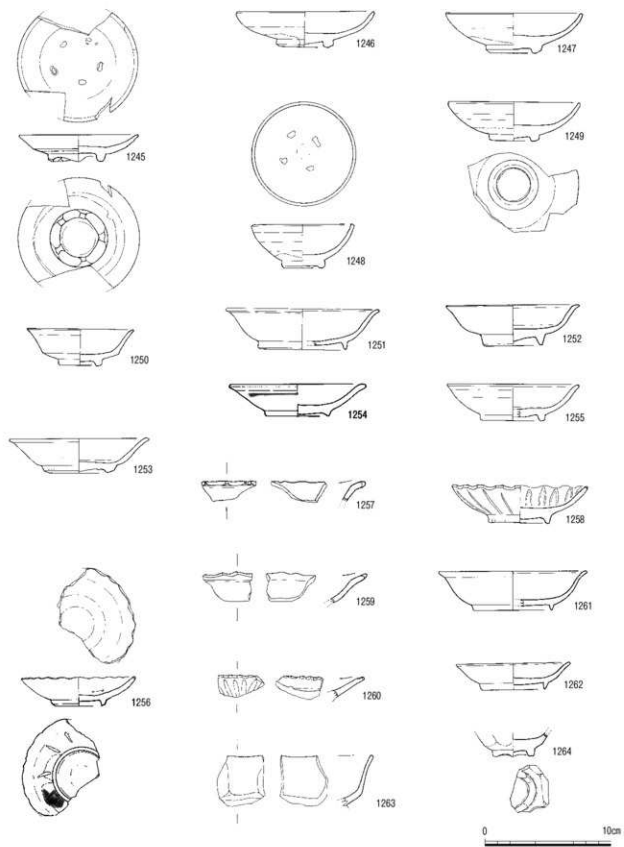
1251～1260は、森田E群に比定されるものである。1251～1255は、高台を持ち、口縁が外反するタイプである。1256～1260は、稜花皿である。1256は、体部外面下半から高台内面まで露胎し、見込みの軸を輪状に掻き取

る。1258は、内面を花卉状に浅く削り出し、立体的な造形である。青磁1156と形状が似ている。

1261～1264は、白磁坏である。1261・1262は、壺付の周辺に砂粒が付着している。1263・1264は、底部が露胎し、胴部が八角形を呈する多角杯である。1265～1267は、壺である。1265は、白磁の壺である。口縁端部を丸く折り曲げ、内面まで施軸がされている。1266は、白磁の水注か壺の首部から肩部である。内面まで施軸がされている。1267は、青磁の小型壺である。外面に草花文の線刻



第228図 白磁 4



第229图 白磁5

が、内・外面に厚めの軸が施されている。

1268～1272は、瓶である。1269は、小型瓶の口縁部である。1268・1270は、口縁部を丸く折り曲げた瓶か耳壺の口縁部から肩部である。1271は、大型瓶の底部である。底部外面の一部と畳付から高台内面までが露胎である。1272は、小型瓶の底部である。全面施軸後に畳付の軸を掻き取っている。

1273～1279は、口径が約9cm～15cmの小型の鉢である。1273・1275・1276は、口縁部が内湾するものである。1273は、内面が露胎する。1274・1277は、体部上半から内側に屈曲し、内面縦方向に等間隔の凹みを持つものである。1278は、平底で底部は露胎する。1279は、白磁の胎土を持つ残存部が全面露胎の口縁部で、口縁部の膨らみ部分に直径0.5cm程度の穴が残る。口縁部形成時に残されたものと考えられる。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類とも考えられる。

1280は、燗台の天蓋か壺の上蓋と思われる。表面は青磁軸が施軸されているが、裏面は露胎する。

1281～1286は香炉である。1281・1282は同一個体と思われる。1281・1283・1284は高台の脇に形骸化した3足がつく。1283は内面下半が露胎する。1286は、高台に扶り込みが三か所ある。

1287～1291は、小形環である。器壁は非常に薄く、口縁部は外反する。近世に相当する遺物もあるが、白磁の範疇としてここに掲載する1287は、見込みの軸を輪状に掻き取っている。1288～1290は、口縁部が鋭く外反している。1291は、外面に太めの線刻が縦に施されている。

青白磁(第231図)

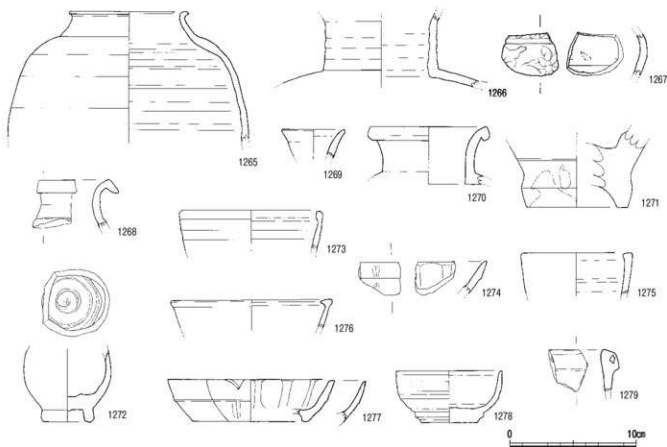
1292～1294は、小壺の蓋である。内面は露胎である。1292・1293は、上面に草花文を型押しされている。1294は上面に菊座状の文様を有している。

1295～1299は、合子である。1295は、型造りによる合子の蓋である。天井部には草花文が型押しされ、側面は無文、内面は露胎である。1296～1299は、型造りによる合子の身である。胴部下半と受け部は露胎である。1296～1298は、側面に菊花文を有している。

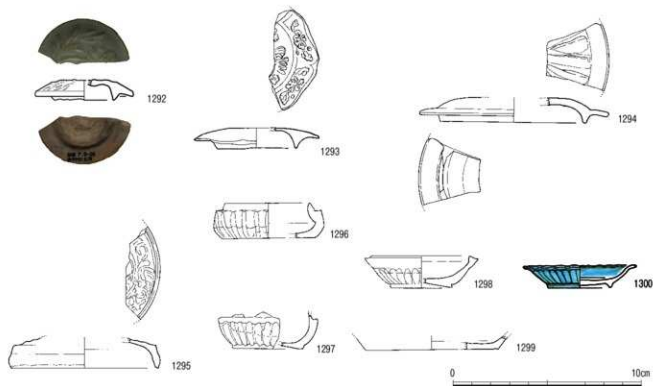
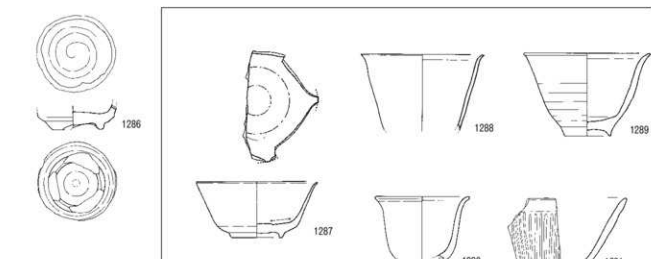
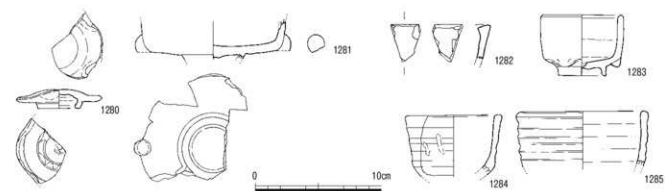
1300は、景德鎮産の翡翠軸の施された稜花の小皿である。高台から高台内面まで露胎である。体部外面には型造りによって菊座状の文様が浮き出ている。

青花・赤絵(第232～238図)

1301～1304は、小野分類の碗B群(H期:14世紀後半～15世紀前半)に比定されるもので、端反りの碗である。1301・1302は、内面と外面の口縁部に界線があり、貫入



第230図 青磁・白磁



第231图 青磁·白磁·青白磁

が見られる。1303は、桜花碗である。1304は、景德鎮窯系の端反り碗である。

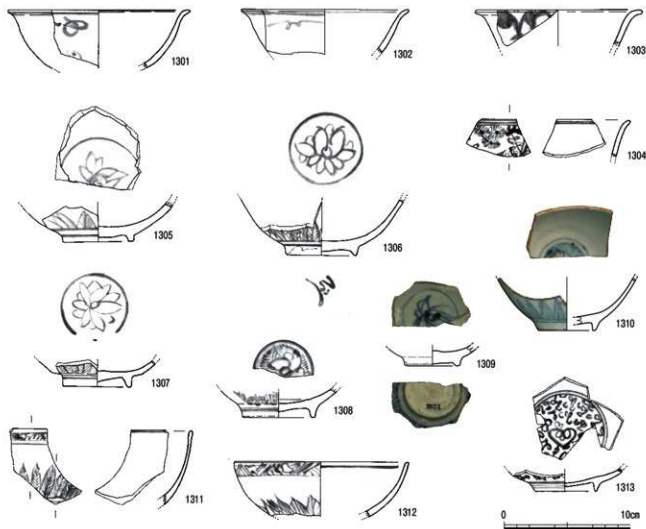
1305～1325は、小野分類の碗C群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるもので、いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。広く開いた胴を持ち、内面見込みが高台内に凹む器形となる。1305～1314は、外面胴部に芭蕉葉文が描かれている。1306～1308は、見込みに蓮花文を持つ。1306は、高台内面に梵字を持つ。1309は、見込みが緩やかに盛り上がっているが、外面に芭蕉葉文が描かれていることからC群に含めた。1310は、見込みに法螺貝が描かれている。1311は、外面口縁部に波濤文帯が描かれている。1312は、外面口縁部に禪文帯が、1313・1314は、外面胴部と見込みに渦文と丸を三つ結合した文様で描かれている。1315・1316は、見込みに花卉文が、1317～1320は法螺貝がそれぞれ描かれている。1317・1318は、外面胴部に簡略化された芭蕉葉文が描かれている。1321は、腰部から角度をつけて立ち上がり、口縁が外反する碗である。外面に1313と同じく丸を三つ

結合した文様が描かれている。1322～1325は、外面全体に波状の文様を描いている。1322は、見込みの軸を輪状に掻き取る。1325は、見込みに外面と同じ波状文様を描いている。

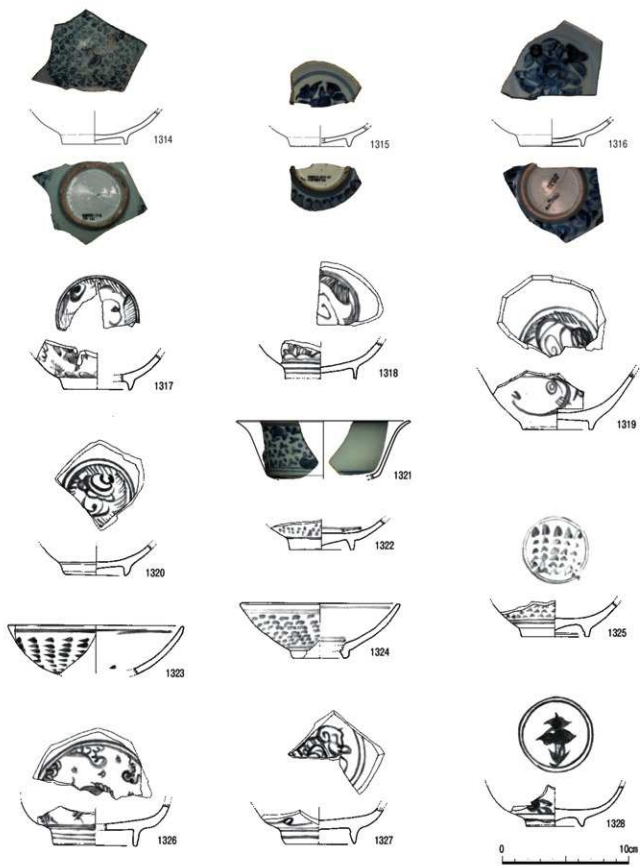
1326・1327は、小野分類の碗D群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるものである。見込みを平坦に広くとった大きな高台を持ち、胴は直線的に少し開いている。

1328～1341は、小野分類の碗E群（K期：16世紀中頃・後半～17世紀前半）に比定されるもので、見込み部分が緩やかに盛り上がる、いわゆる「饅頭心」の碗である。1329は、外面胴部に唐草文を持ち、見込みの軸を輪状に掻き取っている。1330は、見込みに山水人物が描かれ、高台内面に「萬福攸同」が記されている。1332は、外面口縁部に雷文帯、胴部に唐草文を持ち、見込みに牡丹唐草、高台内面に梵字が描かれている。1341は、外面に草花文が描かれている。

1342～1344は、界線のみ施されている無文の青花碗で



第232図 青花 1



第233图 青花2



第234图 青花3

ある。

1345～1352は、小野分類の皿B群（I期～K期：15世紀中頃～17世紀前半）に比定されるものである。高台を持つ端反りの皿で、砂敷きで焼成され、畳付に砂粒が付着している。1346～1348は、外面胴部に唐草文、見込みに獅子が描かれている。1350・1352は、外面胴部に渦状の密な唐草文、見込みに十字花文が描かれている。

1353～1359は、小野分類の皿C群（J期：15世紀末～16世紀前半・中頃）に比定されるもので、基筒底を持つ皿である。1353～1356は、口縁がかかる内湾気味におさまるもので、見込みに人形化した「喜」「福」「寿」を記している。1358は、外面胴部に芭蕉葉文を描く。1359は、口縁が外反する基筒底皿である。文様は1350と類似し、外面胴部に渦状の密な唐草文、見込みに十字花文が描かれている。

1360は、小野分類の皿F群（K期：16世紀中頃・後半～17世紀前半）に比定されるものである。丸く内湾する胴から斜めに鈎がつく、いわゆる「鈎皿」と呼ぶもので、畳付をヘラで削り、軸を掻き取る。

1361～1368は、分類できなかつた皿である。1364は、畳付に砂粒が付着し、高台内面が露胎する皿である。

1365は、稜花皿で、内・外面とも胴部を八分割し、その中に花卉を描いている。見込みに蓮花を描く。畳付に砂粒が付着している。1366は、景德鎮窯系の皿、1367・1368は、景德鎮窯系の小皿の底部である。

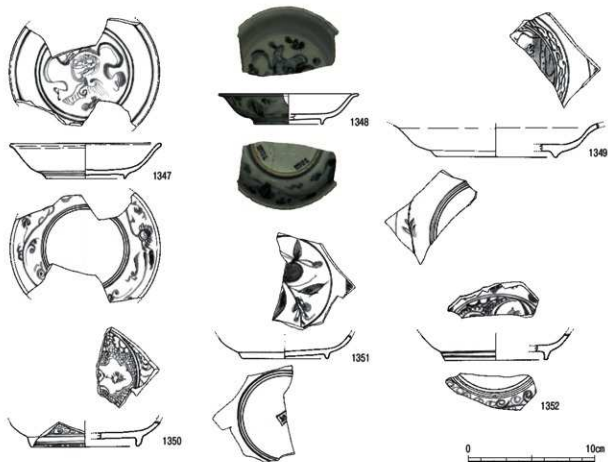
1369～1375は、青花の大皿である。1372は、口縁部が外反するものである。1370は、稜花の口縁を持つ。1369・1373は、口縁が直口する大皿である。1369は、漳州窯系で、外面に花唐草文、内面に点描文と草花文を施している。1371・1374・1375は、大皿の底部である。

1376～1379は、景德鎮産の赤絵の皿である。1377は、呉須赤絵で、白濁した透明釉を施し、茶色や黒色で松や小鳥が描かれている。1378は、赤絵碗の胴部である。

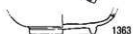
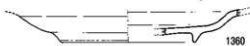
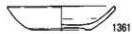
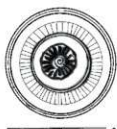
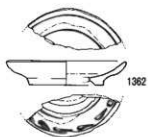
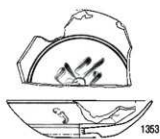
1380・1381は、青花の鉢である。1381は見込みに「喜」を描いている。

1382・1383は、蓋である。1382は、全面施釉後身受けの軸を剥ぎ取っている。1383は、軸を剥ぎ取った身受けに、白化粧土を塗付し、露胎部分を隠している。

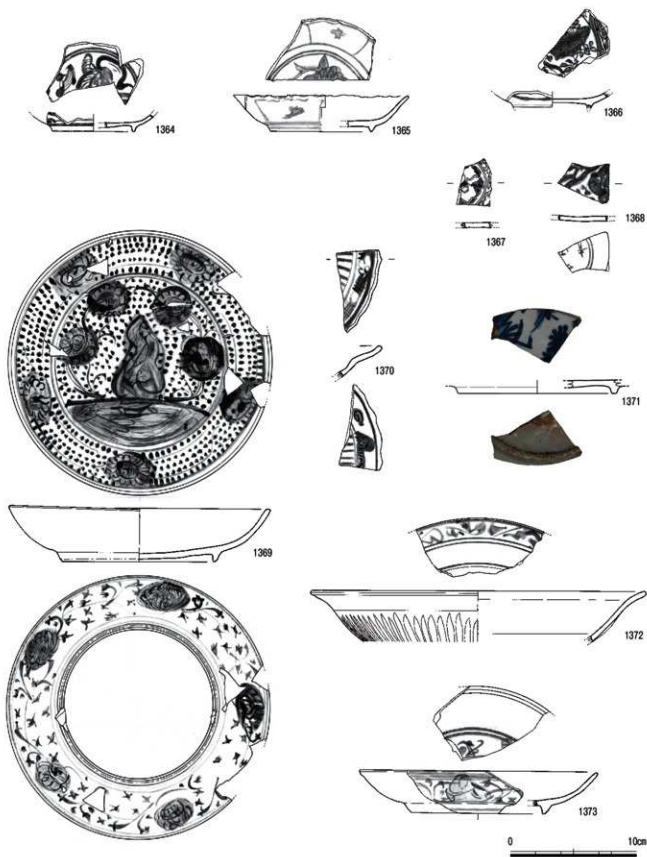
1384は、徳利の胴部から胴部にかけてである。内面は露胎で、外面胴部には牡丹唐草文が描かれている。



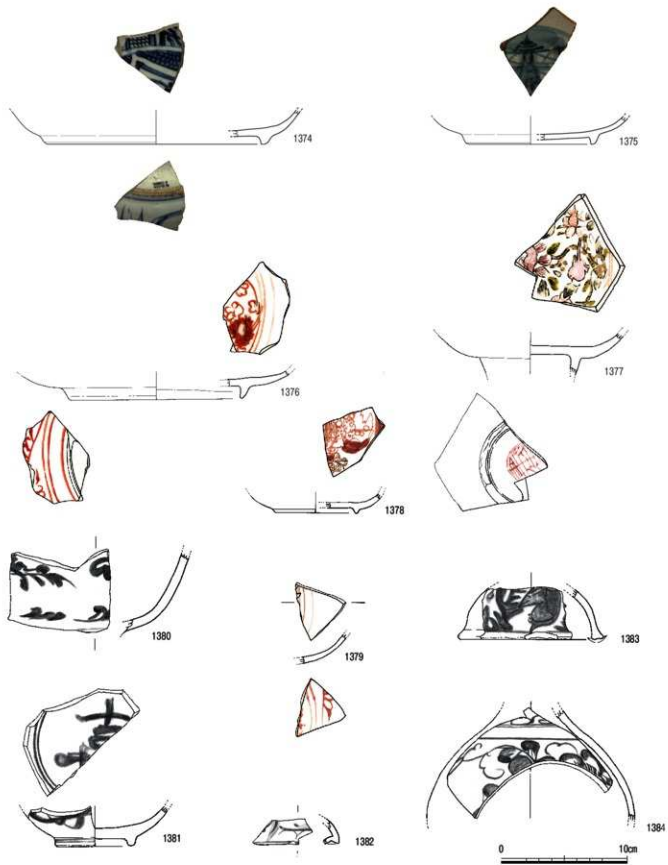
第235図 青花4



第236图 青花5



第237图 青花6



第238図 青花・赤絵

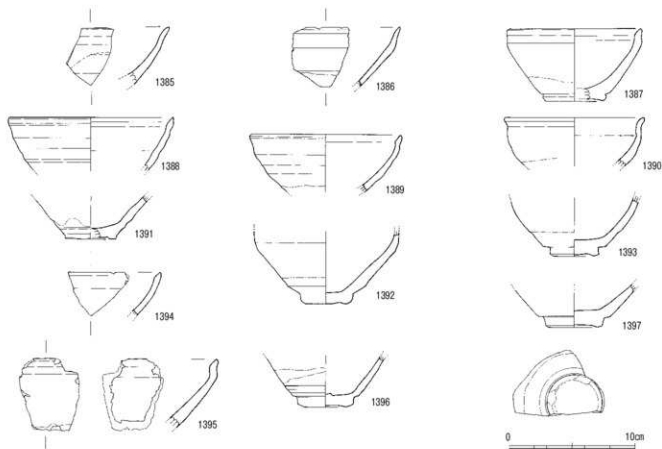
中国陶器

天目碗 (第239図)

1385～1393は黒釉の天目碗である。1385は体部が直線的に延び、口縁部はわずかに外反するが、口縁下位に浅い凹みをつくる。1386は体部が直線的に開き、口縁下位で角度を変えて立ち上がるもので、口縁部はわずかに外反する。1387は高台盤を水平に削るもので、体部は直線的に開き、口縁部で軽く屈曲して開く。高台は上げ底状に削られる。1388は体部が直線的に開き、口縁部は弱く屈曲する。1389・1390は体部が丸みを帯びるものである。1389は建窯産と思われる資料で、口縁下位の屈曲は弱い。1390は口縁下位が強く屈曲する。1391～1393は底部である。1391は高台盤から体部が直線的に立ち上がる。1392は高台盤を斜めに深く削り、そこから角度を変えて体部が直線的に延びる。1393は高台盤が水平に削られ、高台は上げ底状をなす。1394～1397は褐釉のかかる資料で、1394・1395は口縁部である。1394は口縁下位が、わずかに凹む。1395は体部が直線的に延び、口縁下位で角度を変え口縁部で屈曲して外反する。1396・1397は高台盤を水平に削られる底部である。高台は上げ底状に削られる。

盤 (第240図)

1398～1410は黄釉盤である。胎土はざらつきのある粗い胎土で、黒色や白色の粒子を多く含む。1398～1400は鈎状の口縁部である。1398は口縁部上面から内面にかけ施釉され、外面は露胎する。口縁端部には目跡が残る。1399は鈎状の口縁部上面及び下面の釉は拭き取られ、端部には目跡が残る。1400は口縁部の上面、下面ともに施釉され、端部に重ね焼きの目跡が残る。1401は内面と外面口縁部下位に白化粧がかかり、内面には鉄絵が描かれる。1402は内面に黄釉がかかる。1403は胎土が軟質の福建産の資料である。外面は無釉で、内面のみ黄釉がかかるが、還元がかかり発色が悪い。1404～1407は底部である。1404・1405は同一個体で、内面に黄釉がかかり、鉄絵が描かれる。1406・1407は白化粧土に黄釉がかかり、内面に鉄絵が描かれる。1408～1410は他の器種の可能性も考えられる資料であるが、ここでは盤として報告する。1408は、口唇部も含め内外面に褐釉が施釉される。胎土は褐色を呈し、緻密で混入物はほとんどみられない。口唇部には目跡が残る。1409は口縁部が内湾する形状を呈し、端部は外側に折り曲げておさめる。胎土は緻密で灰色を呈する。口唇部も含め残存部は褐釉がかけ



第239図 中国陶器 1

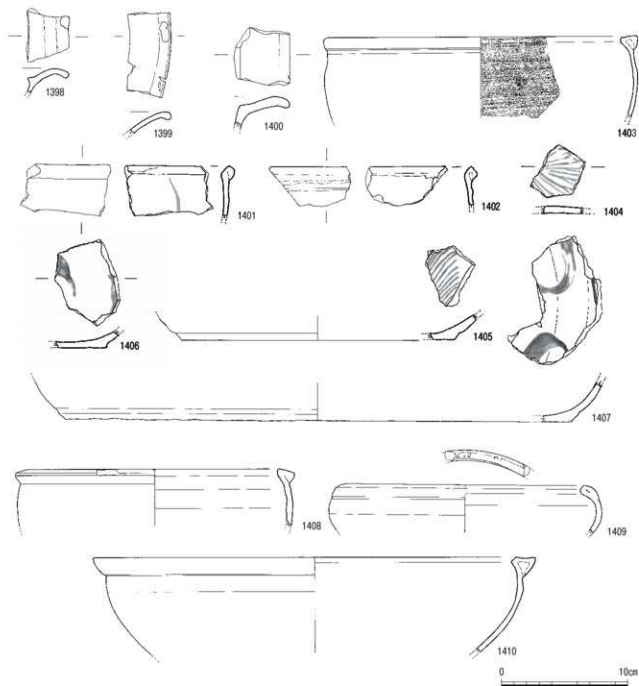
られ、口唇部には目跡が残る。1410は口縁端部を外側に折り曲げ、断面三角形状につくる。軸は褐釉を内面口縁部下位から外面にかけてかけたあと、口唇部の軸を掻き取る。胎土は灰褐色を呈し、緻密であるが黒色と白色砂粒を多く含む。

鉢 (第241図)

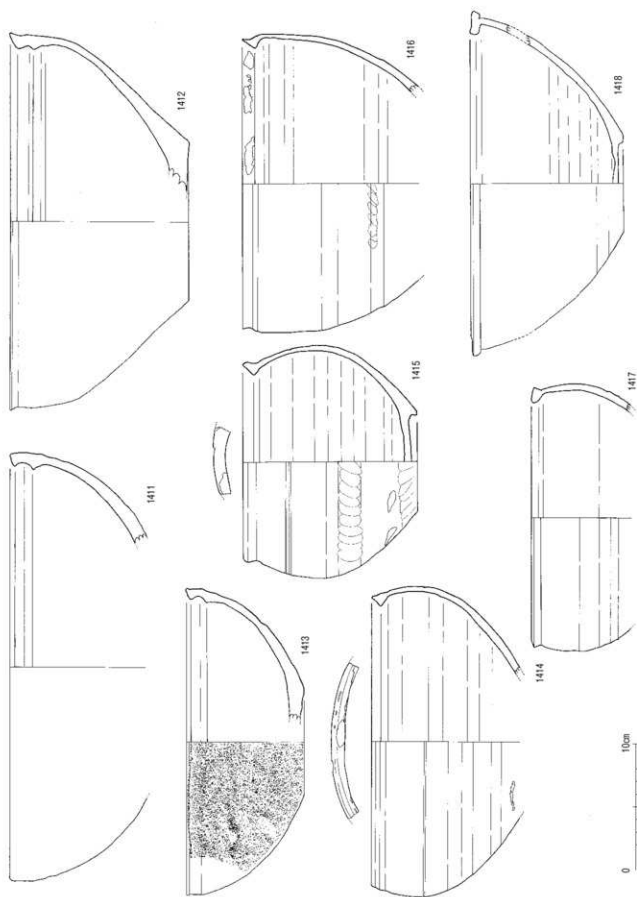
1411~1413は、胎土が粗く、1mm前後の白色砂を多く含むので、色調は灰褐色や赤褐色を基調とする。体部は丸みを帯び、底部は平底をなす。口縁部が内側にせり出し、内面には1条の突帯を有する。1411・1413は無釉

の資料である。1412は口縁部内外に灰白色の釉がかかっている。1413の外面には、平行タテキの痕跡が残り、内面にはあばた状の凹みが観察される。

1414~1416は口縁部が内側に斜行し、口唇部と外面腰部に目跡が残る。胎土は灰褐色を主体とし、褐色もしくは透明の釉が薄くかかる。1414は体部上位に、1415は体部中位に影らみを有するが、1416は体部上位でわずかに影らむ程度である。底部は残存していないものもあるが、萁筒底状をなす。1415は外面下位にヘラ状工具による削りが施され、工具痕が残る。1417は胎土が橙色を呈し、白色砂粒を少量含む。釉は外面腰部までかかり、白



第240図 中国陶器 2



第241图 中国陶器3

濁する。1418は褐釉が総軸で薄くかかるもので、胎土は灰黄褐色を呈し緻密である。底部は萁筒底状を呈する。

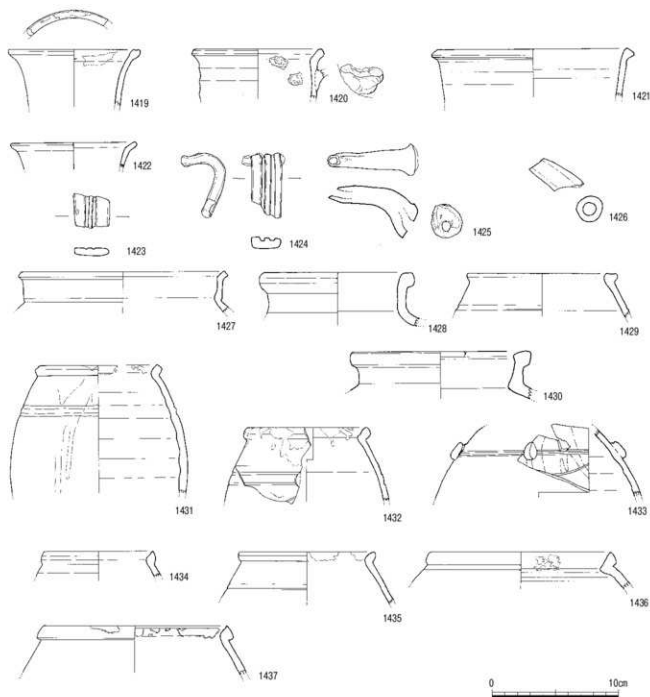
水注 (第242図)

1419~1422は水注の口縁部である。1419は鈍い黄褐色の胎土に透明釉がかかる。口唇部の釉は掻き取られ、口唇部と口縁部内面に目跡が残る。1420は橙色の緻密な胎土に、黄褐色の光沢のない釉がかかる。外面に把手の付け根が残存する。1421は鈍い黄橙色の緻密な胎土に、透

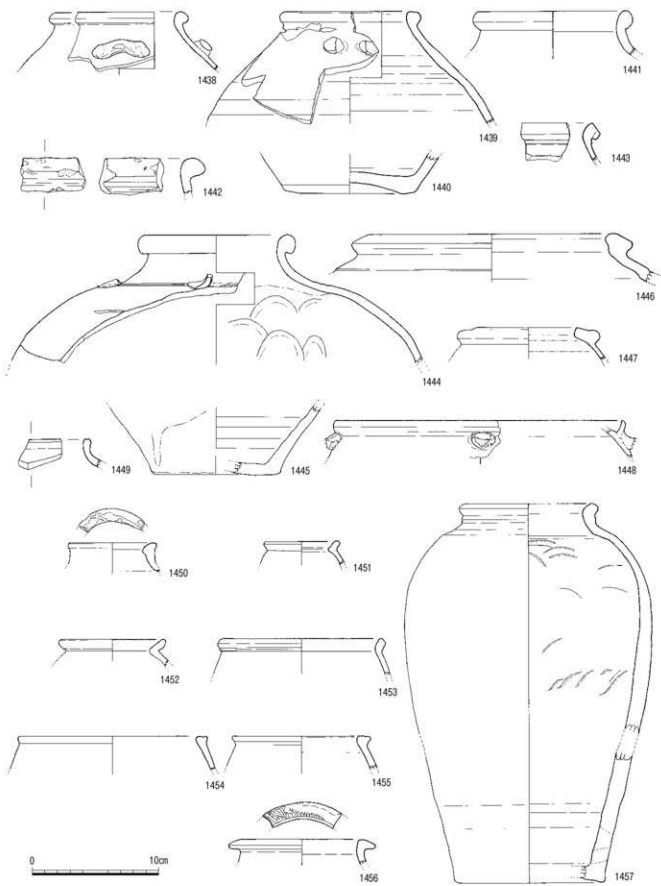
明釉がかかる。口縁端部は外側に折れ曲がり、断面三角形状となる。1422は胎土が灰褐色を呈し、褐釉がかかる。口縁内面は斜行し、稜を有する。1423・1424は水注の把手である。外側に2条の溝を有する。1425・1426は水注の注口部である。

壺 (第242~244図)

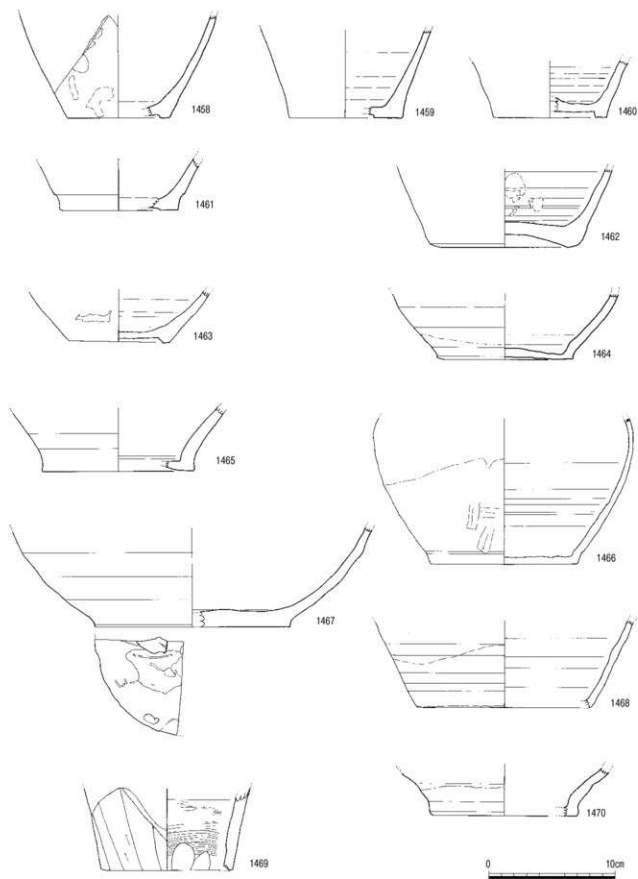
1427~1449は耳壺である。1427は胎土が緻密で灰褐色を呈し、光沢の少ない暗茶褐色の釉がかかる。口縁部は



第242図 中国陶器 4



第243图 中国陶器 5

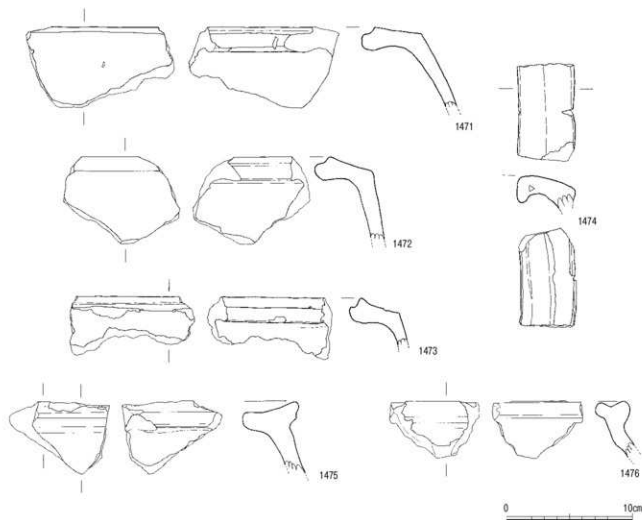


第244图 中国陶器 6

外側に折り曲げて断面四角形状をなし、頸部は直立する。1428は口縁部が玉縁状を呈する。胎土は灰褐色でざらつきがあり、白色砂粒を多く含む。内外面に褐軸がかかる。1429の胎土は粘質を帯び、灰褐色を呈する。軸は口縁内面から外面にかけて黄褐色の薄い軸がかけられ、口唇部は軸剥ぎされる。1430の胎土は灰色を呈し、微細な白色砂粒を多く含む。軸は黄白色の軸が内外面にかかり、口唇部は掻き取られる。1431～1435の胎土は、灰褐色、黄橙色を主体とするもので、微細な白色砂粒を含む。胴部外面上には褐色の軸がかけられる。口縁部はくの字状に屈曲し、口唇部には目跡が残る。肩部には2条の横沈線や波状沈線が巡り、横耳がつく。1436・1437は、灰黄色や鈍い黄橙色の緻密な胎土に、光沢のある褐軸がかかる。口唇部には目跡が残る。1438～1444は口縁部が玉縁状につくられる資料である。1438～1448は外面に横耳がつくもので、1439は1440と、1444は1445と同一個体の底部である。4点とも、胎土は緻密で白色の微細な砂粒を含む。軸は、1438が黒軸、1439は褐軸、1444は黄褐色の軸で、外面と内面上部にかかる。また、1438・1439の口

唇部は軸は掻き取るが、1444は掻き取らない。1444の外面には目跡が残る。1442・1443は胎土が粗く、白色や黒色粒子を含む。1442は無軸で、1443は黄褐色の軸が外面と内面上部にかかる。1446・1447は口縁部断面が長い三角形で外面下方が膨らみ、内行した幅広い縁帯となる。縁帯外面は凹面を有する。胎土は緻密で、白色粒子が入る。

1448は口縁部がY字を呈し、蓋受け部をつくる。外面口縁下位には縦耳が付く。胎土は灰白色を呈し、緻密で白色砂粒は含まれない。軸は、外面に褐軸がかかる。1449は短頸の壺の口縁である。胎土は褐色で緻密であるが、白色粒子を含む。軸は化粧土のような白濁した軸が外面にかかり、口唇部は軸剥ぎされる。1450～1457は無耳壺と思われる資料である。1450は頸部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁部内面は斜行し貝目が残る。胎土は砂質であるが緻密で、灰褐色を呈する。1451～1453は口縁部がくの字状に外側へ屈曲する。胎土は砂質であるが緻密で、1451・1453は微細な白色砂粒を含む。軸は残存部は内外面にかかり、1452は褐軸、1451・1453は白濁した



第245図 中国陶器 7

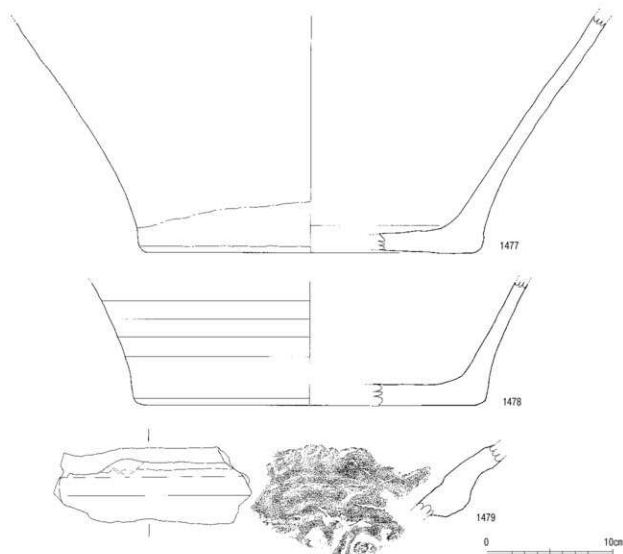
軸がかかる。1454・1455は口縁部が断面逆三角形を呈する。胎土はそれぞれ橙色、灰褐色をなし、緻密である。1456は口縁部が外側に強く屈曲するものである。胎土は緻密で灰褐色を呈する。軸は黒褐色の軸が内外面にかかり、口唇部は掻き取られ目跡が残る。1457は図上復元を試みた資料である。胎土は灰褐色を呈し、黒色および白色粒子を含む。軸はやや光沢のある黄褐色の軸が、内面上位と外面にかかり、外底面は露胎する。口縁部は緩やかに外反し、体部は長胴状、底部は上げ底状を呈する。器壁は厚く、胴部内面上位には、タタキ成形時の当て具痕が残る。

1458~1470は、水注または壺の底部である。1458~1461は高台を有する底部である。1461は高台脇に段を有する。1462は上げ底状の底部である。1463は萁筒底を呈する底部である。外面下位には目跡が残る。1464~1467は平底の底部である。1467は外底面に目跡が残る。

1469~1470は底面が欠損しているため底部の形状は不明である。1469の外面下位は面取りされており、内面は横筋状の工具痕が残る。

壺 (第245・246図)

1471~1476は壺の口縁部である。胎土は赤褐色系を呈し、白色砂粒を多く含む。軸は灰黄色で白濁しており、発色も悪い。内外面に薄く施軸し、口唇部は掻き取る。1471~1473は口縁部が内側へ屈曲し、外面に稜をつくる。1474は口縁部が内側へ屈曲し、端部は下方へ垂れる。1475・1476は口縁部が二叉に分かれ、Y字状を呈する。1477・1478は壺の底部である。平底で、外面には砂が付着する。1479は壺の底部としたが、詳細な器種等不明な資料である。胎土は灰褐色で粗く、白色砂粒を含む。軸はかかっていない。

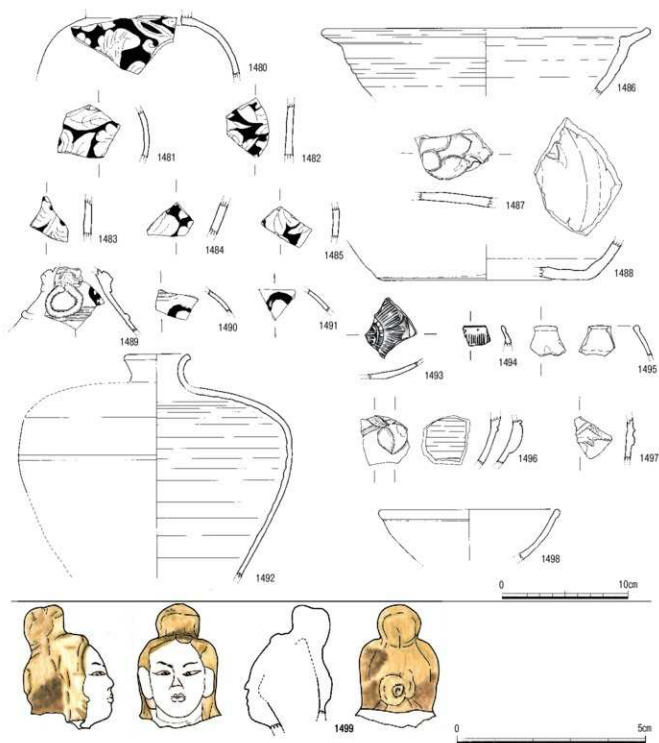


第246図 中国陶器 8

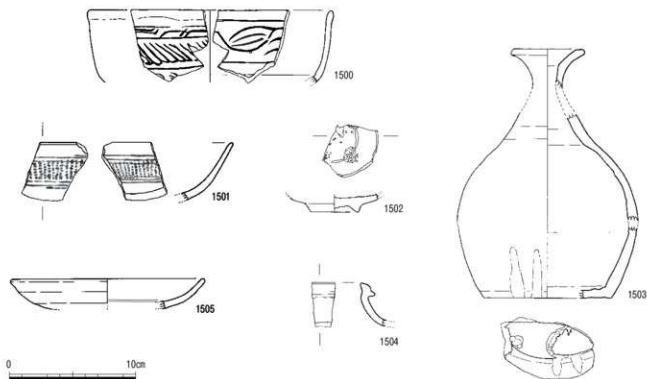
その他 (第247図)

1480～1485は梅瓶である。磁州窯系の資料と考えられる。鉄軸をかけた素地の上に、白化粧土をかけ、それを掻き落として文様を描く白地剔花の技法により唐草文が描かれる。胎土は緻密で、灰褐色を呈する。1486～1488は華南三彩の緑釉陶器で、盤である。3点とも同一個体と思われる。胎土は緻密であるが軟質で、灰白色を

呈する。軸は外底面のみ露胎する。内面には線刻により花文が描かれる。1489～1491は産地不明の緑釉陶器である。胎土は緻密であるが、微細な白色粒を含む。外面は緑釉の上から鉄絵が描かれ、内面は露胎する。頸部には輪状の突帯と獅子頭(?)が張り付けられる。1492は瓶もしくは小口の壺と思われる。胎土は浅黄色を呈し、緻密である。軸は外面と内面上位まで黄釉がかかる。頸部



第247図 中国陶器 9



第248図 朝鮮陶器・ベトナム陶器

は短く、口縁部はゆるやかに外反する。体部は肩部で強く屈曲し、下方にむかって窄まる。外面肩部には稜が巡る。1493は皿と思われる資料である。高台はなく、平底である。内面は文様が描かれるが、線彫りに褐釉がかけられたものであるか、黒象嵌に褐釉がかけられたものであるかははっきりしない。胎土は緻密で、黄灰色を呈する。1494・1495は小壺とした。1494は白象嵌に褐釉がかかるもので、内面は露胎する。胎土には微細な白色粒が混入する。1495は灰黄色の緻密な胎土に、内外面に鉄釉がかかる。1496・1497の胎土は緻密であるが、砂質である。微細な白色砂粒を含み、灰白色を呈する。外面には文様が貼り付けられ、透明釉がかかる。内面は露胎である。1498は陶器の椀である。胎土は鈍い黄褐色を呈し、微細な白色砂粒を含む。口縁端部は外側に折り曲げて小形の玉縁状をなす。薄い黄褐色の釉が内面と外面腰部までかかる。産地は不明である。1499は仏像の頭部と思われる。頭髮部分には褐釉がかけられ、目と眉は鉄絵で描かれる。胎土は灰白色を呈し、緻密である。型作りである。

朝鮮陶器・ベトナム陶器（第248図）

1500～1504は朝鮮陶器である。1500は高麗青磁の鉢である。胎土は灰色で、内外面には白土による象嵌で文様が描かれる。内面は一部、赤土の象嵌も施され、その部分は黒く発色する。1501・1502は李朝の資料である。1501は椀である。胎土は灰白色で、内外面に白象嵌によ

る文様が描かれる。1502は胎土が灰色を呈する椀の底部である。見込みには目跡と重ね焼きの際の高台の痕跡が残る。1503は口縁部がラッパ状に開く壺利である。図上復元を試みた資料である。胎土は灰白色を呈し、外面に黒釉がかかる。内面はタタキ成形による当て具痕が残る。外底面には貝目が残る。1504は壺の口縁部と思われる資料である。胎土は黒褐色で、無釉である。口唇部は内側が高く、外側は溝状につくられる。

1505はベトナム陶器の皿である。胎土は灰白色で陶胎である。内面と外面腰部まで化粧土をかけ、その上に具須で文様を描く。

瓦器

瓦器椀・皿（第249図）

1506～1511は和泉型の瓦器椀である。1506は完形。1507はほぼ完形に復元できた資料である。外面にはミガキが施されず、ナデ調整が行われる。内面は幅の広いヘラ状工具により横方向のミガキが施されるが、雑である。暗文は平行線状で、まばらに入る。高台は貼り付け高台で、断面三角形状を呈する。

1512～1515は皿である。椀と同様に外面にはミガキはみられず、内面にのみ幅の広い工具により施される。暗文は平行状に入る。

中世須恵器

東播系須恵器（第250図）

1516～1521は東播系の捏ね鉢である。1516～1520は口縁部で、端部は玉縁状をなし、炭素で焼されるため黒色を呈する。胎土は灰褐色を呈する。1521は底部である。内面は使用により滑らかになっている。

カムイヤキ（第250・251図）

徳之島に所在する南島系中世須恵器窯の製品である。胎土は小豆色を呈し、やや粗く白色砂粒を含む。1522～1525は壺の口縁部である。1523は外面に波状沈線が廻る。1526～1531は壺の肩部である。タタキ成形により制作されていると思われるが、1526は内外面とも当て具の痕跡を丁寧にナデ消している。1529は内面の一部に格子目状の当て具痕が残る。1530・1531は肩部に二条の沈線と、その間に波状沈線が廻る。1532～1538は壺または壺の胴部、1539は壺の底部、1540は壺の底部である。1532・1533は同一個体で、外面に平行タタキ、内面に格子目タタキが残る。1534・1535も同一個体で、外面に平行叩きが残るが、内面は格子目タタキのあとへら状工具によりナデ調整が施されるため、沈線状の横筋が入る。1536～1538・1540の4点も同一個体である。外面は平行タタキ後ナデ、内面は格子目タタキ後へら状工具によるナデ調整が施され、沈線状の横筋が残る。

棒万丈産（第252図）

1541～1547は棒万丈産と考えられる資料である。胎土は灰色を呈し、微細な白色砂粒を含むが大きいものはみられない。1541～1543は捏ね鉢である。内面はハケ目状

の調整痕が入る。1543は捏ね鉢としたが、鍋の可能性も考えられる資料である。1544～1547は壺である。外面には格子目タタキが残り、内面はハケ目状の調整痕が残る。1544・1545は頸部がくの字状に強く屈曲する。1546は胴部である。1547は底部で、平底となる。1545を除いた3点は同一個体と考えられる資料である。

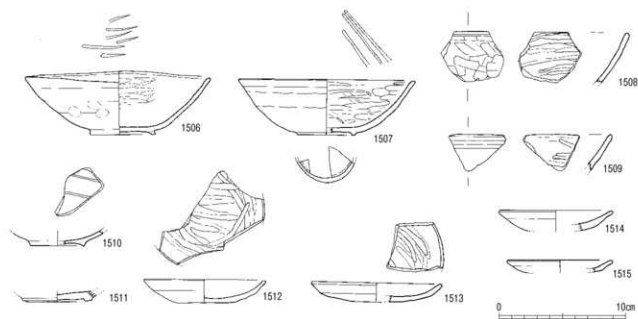
その他（第253図）

1548～1552ははっきりとした産地が不明の資料である。1548は壺の頸部、1549・1550は胴部、1551は底部である。胎土は灰色を主体とし、白色砂粒等はほとんど含まれない。タタキ成形で制作されており、外面には格子目状や綾形状の当て具痕が残る。内面は当て具の痕跡をナデ消している。1552は壺の底部である。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を含む。内面はタタキ成形の当て具痕をナデ消している。外面は胴部下位までタタキ成形を施し、その後、底面脇を2cm程度ナデ消す。

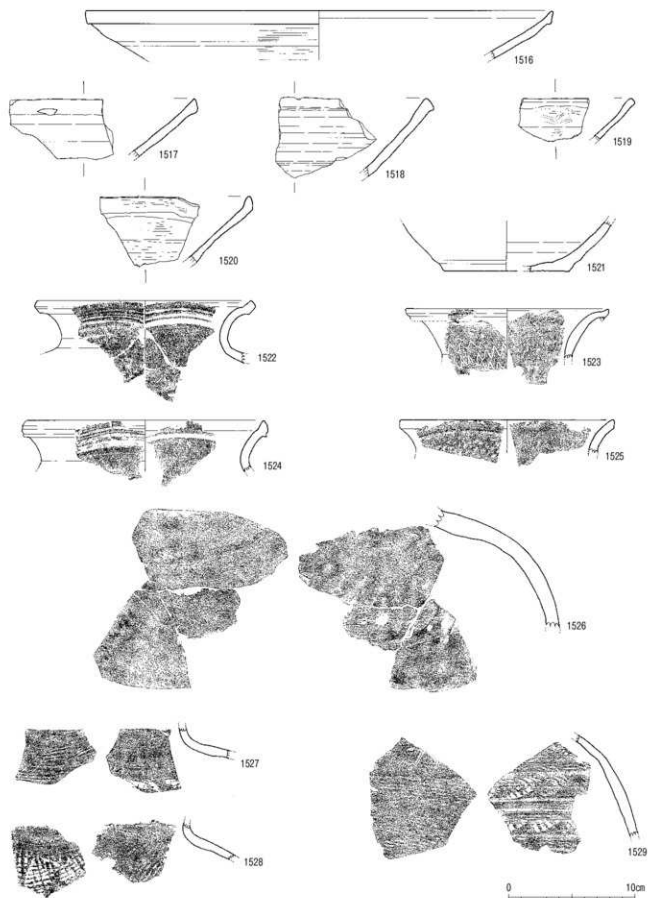
中世陶器

瀬戸・美濃（第254図）

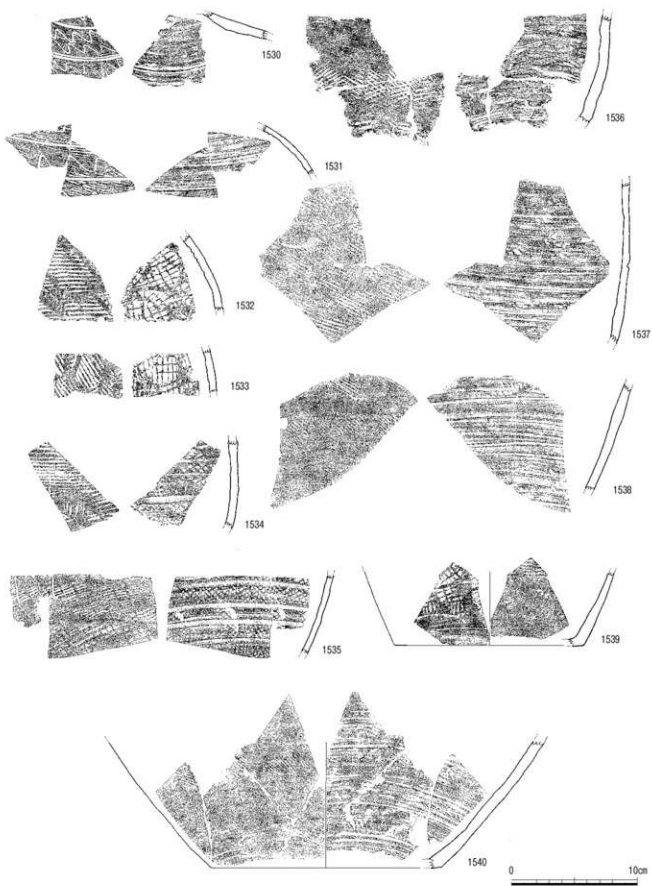
1553・1554は天目碗である。1553は、胎土は淡灰黄色を呈し、微細な黒色砂粒を少量含み、ややざつとした質感をなす。軸は褐軸が内面と外面腰部までかかる。高台は上げ底状に、高台脇は水平に削られる。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁下位で内側に屈曲し、口縁端部は背反する。1554は黄天目である。体部は丸みを帯び、口縁下位で弱く屈曲して外反する。1555～1557は御皿である。胎土は灰白色で、密である。内面から外面中位まで白濁した軸がかかる。内面には格子状の卸目が刻まれ



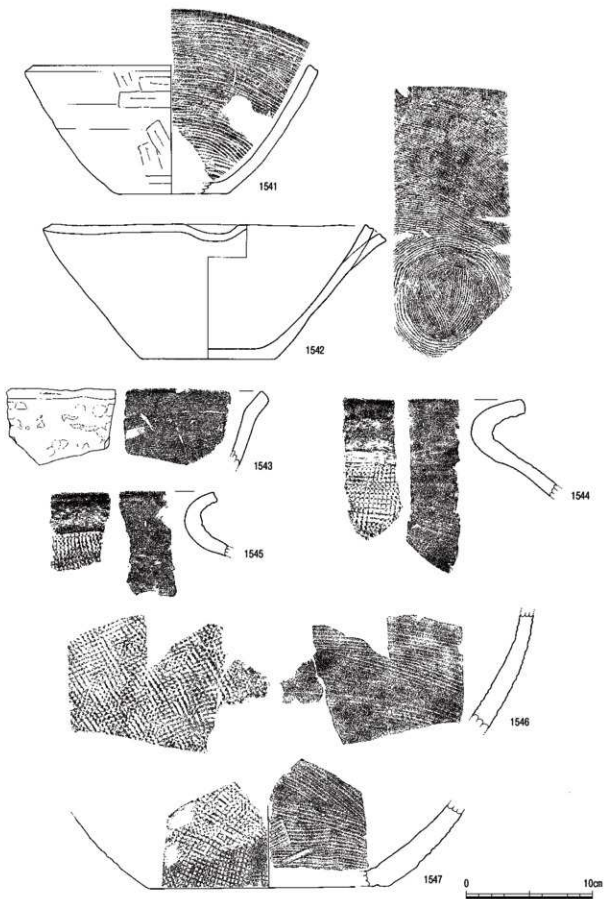
第249図 瓦器



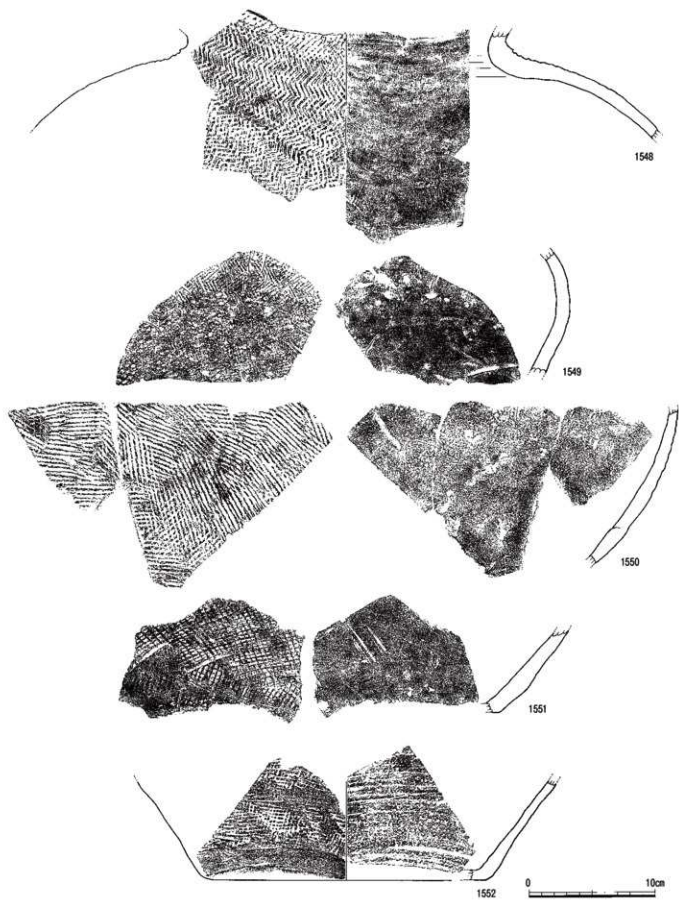
第250図 中世須恵器 1



第251図 中世須恵器 2



第252図 中世須恵器 3



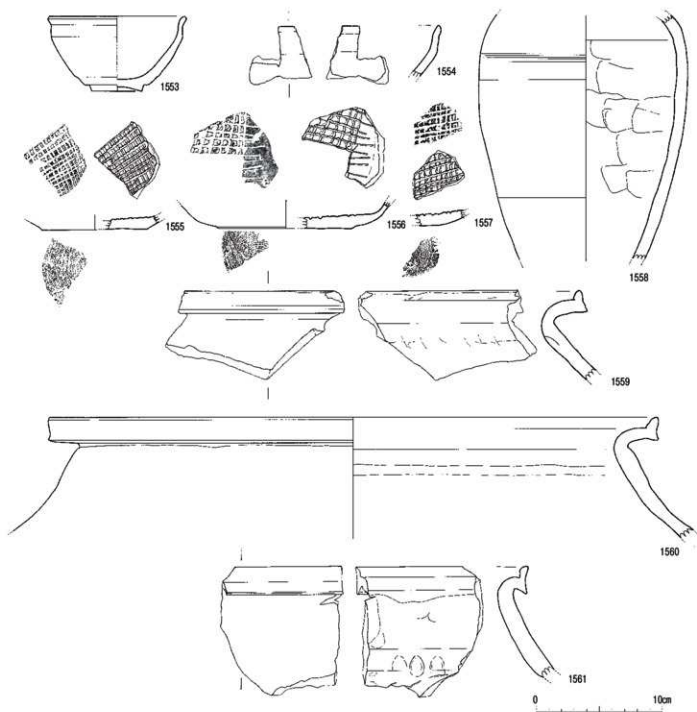
第253图 中世須惠器 4

る。外底面は糸切りの痕跡が残る。1558は瓶子である。陶片の一片は、近世の溝状遺構7号によって破壊されたと考えられる土坑14号の中から出土しているが、その他はその周辺から散乱した状態で出土した。また、溝状遺構7号内からは、人骨も検出されており、近世の溝状遺構により破壊された土坑墓の副葬品としても考えられるが、元位置をとどめていないため一般遺物として報告する。胎土は灰白色で、密である。軸は外面に灰緑色の軸がかけられ、内面は露胎する。肩部下位に3条の沈線が巡る。内面には幅の広い横方向のナデ調整が観察され

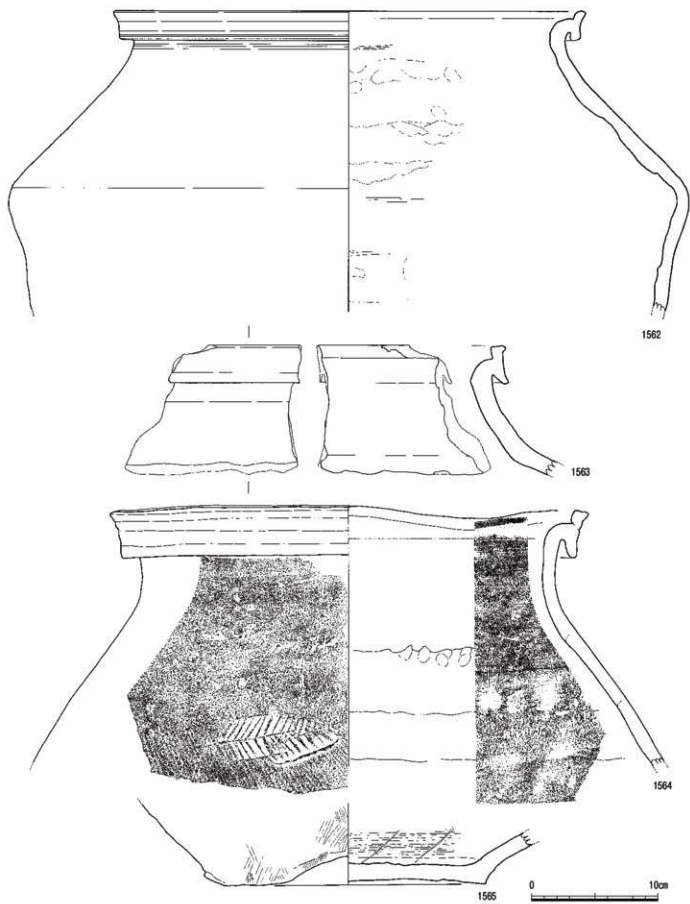
る。

常滑 (第254・255図)

1559～1565は常滑焼の甕である。胎土は灰色、灰黄色、灰褐色、灰赤褐色で、白色砂粒を多く含む。軸はかからず焼き締めであるが、外面上位は窯の中で灰を被り、灰黄色や灰緑色の自然軸がかかる。1559～1564は口縁部である。1559・1560は口縁部がし字状を呈し、端部は上方へ伸び、下方の伸びはわずかである。口縁帯は約1.5cmを測る。1561～1564は口縁部がN字状を呈し、口縁端部



第254図 中世陶器 1



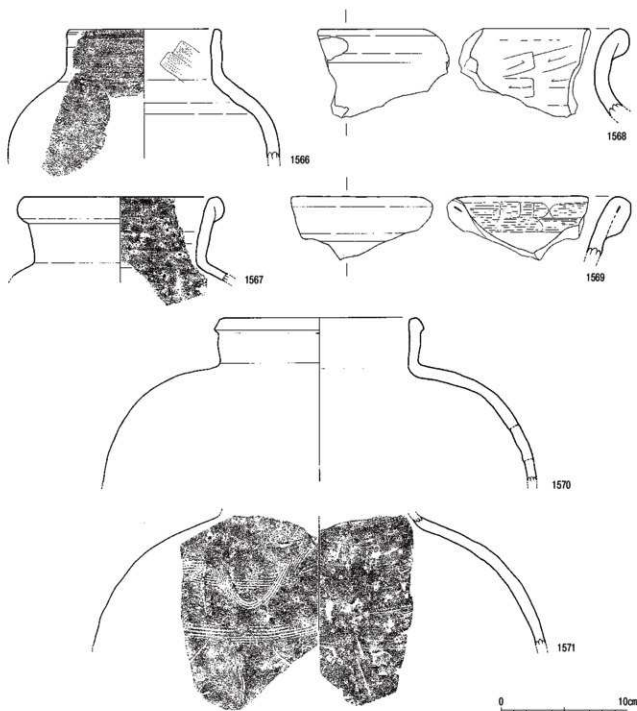
第255图 中世陶器 2

が上下に伸びる。1561の口縁帯は2cmを測る。1562は胴部が肩部で強く屈曲する。口縁帯は約2.5cmを測る。1563は口縁帯中央が凹むもので、幅は約3cmを測る。1564は肩部に矢羽根状の押印文が押される。口縁部はさらに上下に伸びる。口縁帯中央は凹み、段を有し、幅は約4cmを測る。1565は底部である。

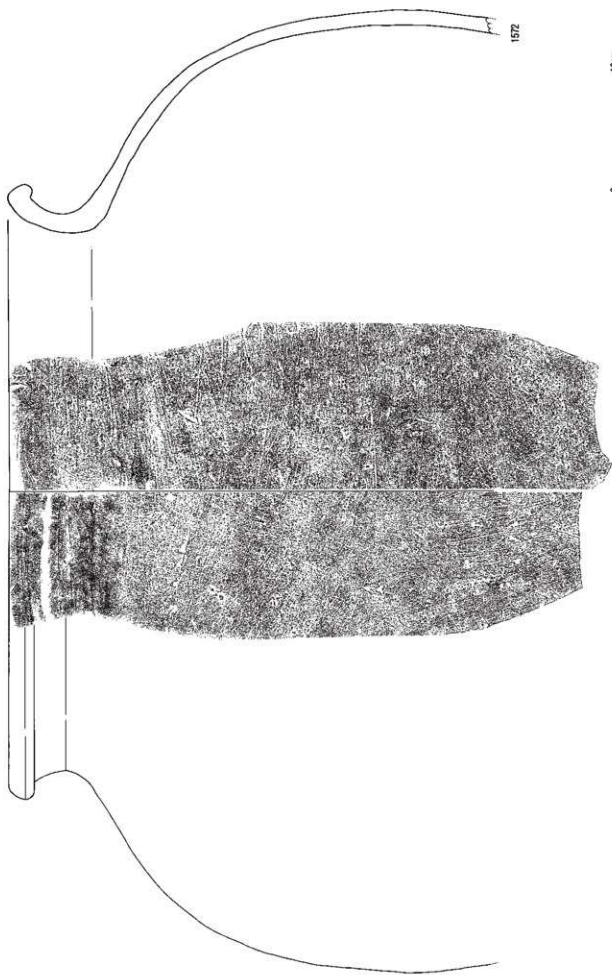
し、白色、黒色の砂粒や1～2mm程度のやや大きめの小石を含む。焼き締めで内外面は赤褐色の色調を呈し、外面には灰黄色の自然釉がかかる。1566・1567は薄口小壺である。口縁部は上方に直口する。1567の口縁部は小形の玉縁状となる。1568・1569はわずかに外反する口縁部で、端部は折り返して玉縁をなす。1570は口縁部がわずかに肥厚する。1571は肩部である。浅い横沈線と波状沈線が入る。1572は大壺である。胎土は灰白色で、内外面の色調も灰色を呈する。ヘラ状工具による器面調整

備前 (第256～259図)

1566～1572は壺である。胎土は灰色、赤褐色を主体と



第256図 中世陶器 3

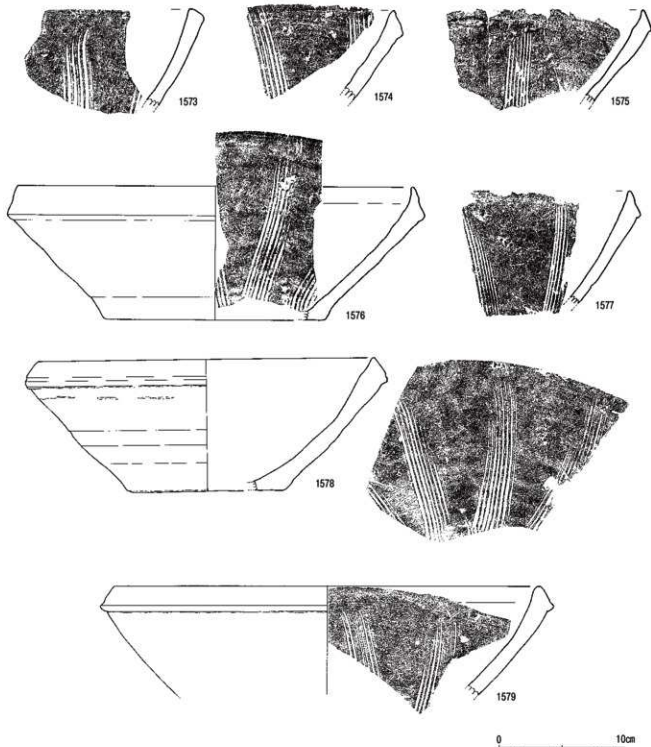


第257图 中世陶器 4

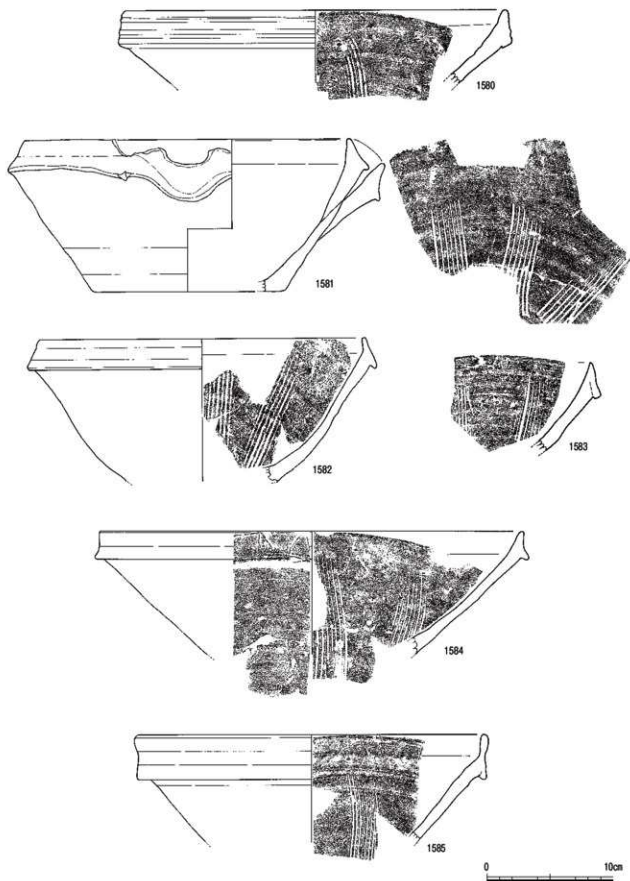
が内外面に施され、横筋状に観察される。

1573～1585は摺鉢である。胎土は赤褐色系で、白色の砂粒を含む。釉はかからず焼き締めで、内面や口縁外面に自然釉がかかるものもみられる。1573の口縁部は、やや肥厚し、口唇部は外傾する。摺り目は1単位6条である。1574～1579は口縁部が変形を呈するもので、口縁部

は外傾し、上角端と下角がわずかに尖って突き出す。摺り目は1単位7～8条である。1580～1585は口縁部上角と下角の突出が強く、口縁内面と口縁外面中央に屈曲部を持つ。下角が下垂する。摺り目は1単位6～8条である。1585は口縁部上角の上方への伸びが大きいもので、下角も下垂する。口縁帯中央にはナデによる浅い凹みを



第258図 中世陶器 5



第259図 中世陶器 6

有する。播り目は1単位8条である。

瓦質土器 (第260~265図)

1586~1630は瓦質土器である。産地等の詳細は不明である。

1586~1598は播鉢である。内面には粗い播り目が放射状もしくは斜位に入り、使用により器面があばた状になったものや滑らかになったものがみられる。口縁部を外側に引き出してつくられた片口を有するが、欠損しているものもある。胎土は瓦質のものやや焼成不良で土師質のものがみられる。1586は内面上位に短いハケ目状の調整痕が斜位に残る。

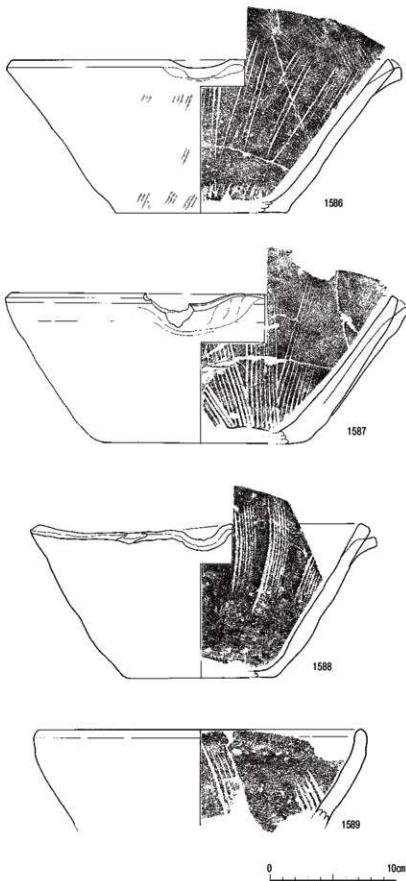
1589は口縁が内湾するもので、播り目も斜位に入る。1592は小さく深さの浅い資料である。1593~1596は播り目の下に、ハケ目状の器面調整の痕跡が残る資料である。1594は外面に縦杉状のタタキ目も残っており、内面の播り目も粗く、体部もやや内湾することから播鉢でない可能性も考えられる。

1599は内面に播り目を有するもので、胴部に鈎と思われる突起が巡る。外面には煤が付着していないことから、火にはかけていないものと思われる。外面下位にはハケ目状の器面調整の痕跡が縦に観察される。

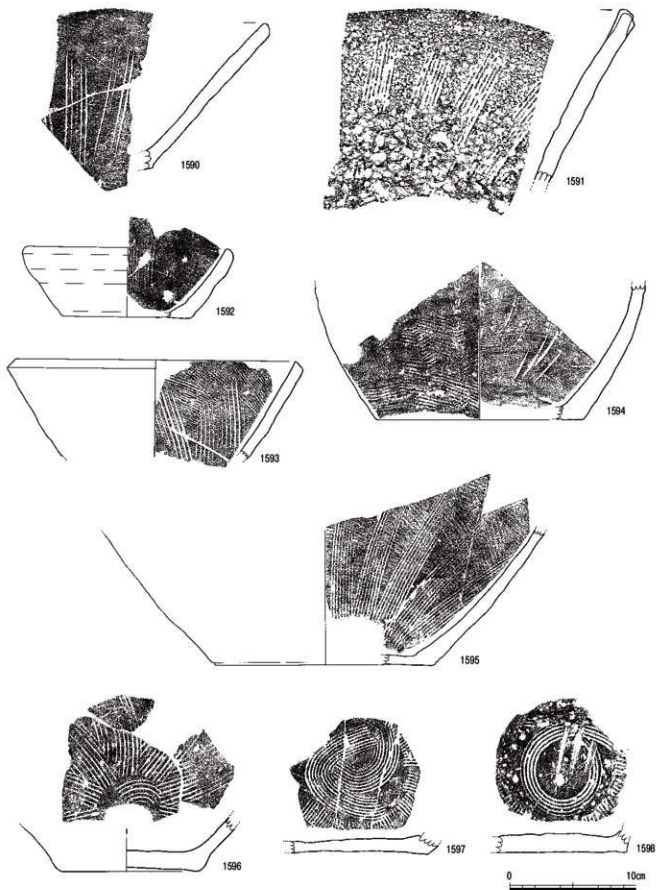
1600~1602は茶釜である。外面には花文がスタンプされる。肩部には縦耳が対で付き、胴部中央には鈎が巡る。

1600は胎土が鈍い黄橙色を呈すが、1601と1602は灰色系の色調で、外面は炭素で燻され黒色を呈する。1600の鈎の上下には煤が付着する。1603・1604は羽釜である。胎土は灰白色で瓦質である。1603は鈎に接して縦耳が対で付く。

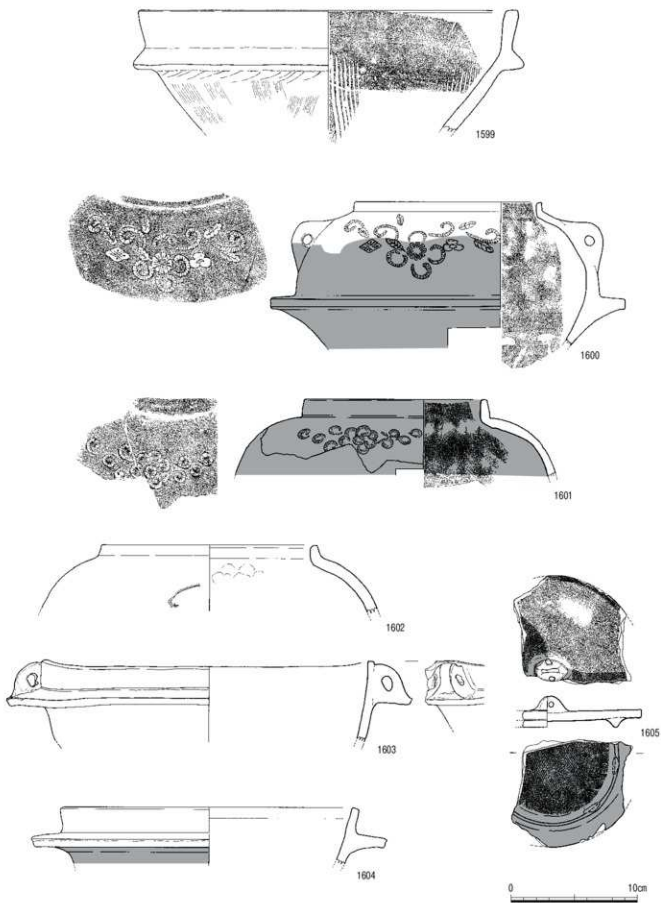
1605は茶釜の蓋である。上面および下面にはハケ目状のナデ調整の痕跡が残る。上面中央にはアーチ状のつまみが付く。



第260図 瓦質土器 1



第261图 瓦質土器 2



第262図 瓦質土器 3

火鉢（第263～265図）

1606～1627は火鉢である。1606～1609は、□と×を組み合わせた幾何学文様がスタンプされる。1606・1607は体部が丸みを帯び、口縁部は内湾する。内面はハケ目状の調整痕が残る。外面は幾何学文様を挟んで2条の突帯が巡り、1606は下位にも煤が付着する。1609は体部は丸みを帯びるが、口縁部が直口するもので、風炉と思われる。1610～1622は、深鉢形の資料である。口縁部は肥厚するものとしらないものがあり、さらにやや内湾するもの、直口するもの、やや外反するものがある。内面はハケ目状の工具痕がこのものが多く煤も付着する。外面には1条～4条の突帯が巡り、その間や上下に花文や幾何学文様がスタンプされる。1611は胎土に微細な金雲母が入り、外面には横方向のミガキが施される。1623～1627は底部である。さまざまな形状の脚部があるが、基本的には3足である。内底面はハケ目状の調整痕が残るものがみられ、煤も付着する。1626は外面に横

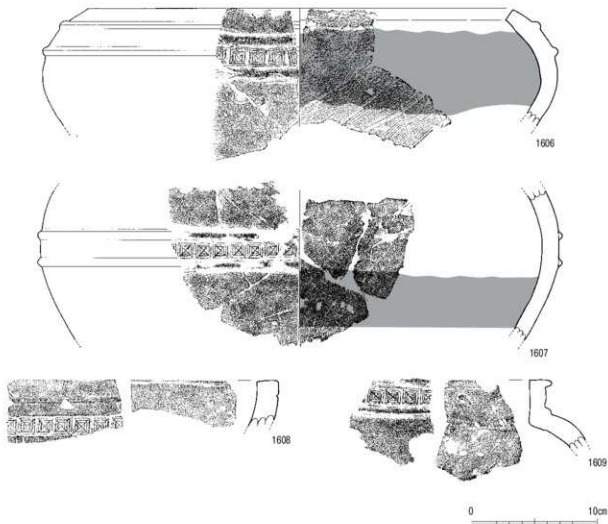
方向のミガキが施される。1627は方形の形状を呈するものである。火鉢として取り扱ったが、他の器種の可能性も考えられる。外面にはミガキが施される。

1628～1630は内底面に煤が付着することから、火消し壺等の蓋と思われる。1628・1629の外面には花文がスタンプされる。

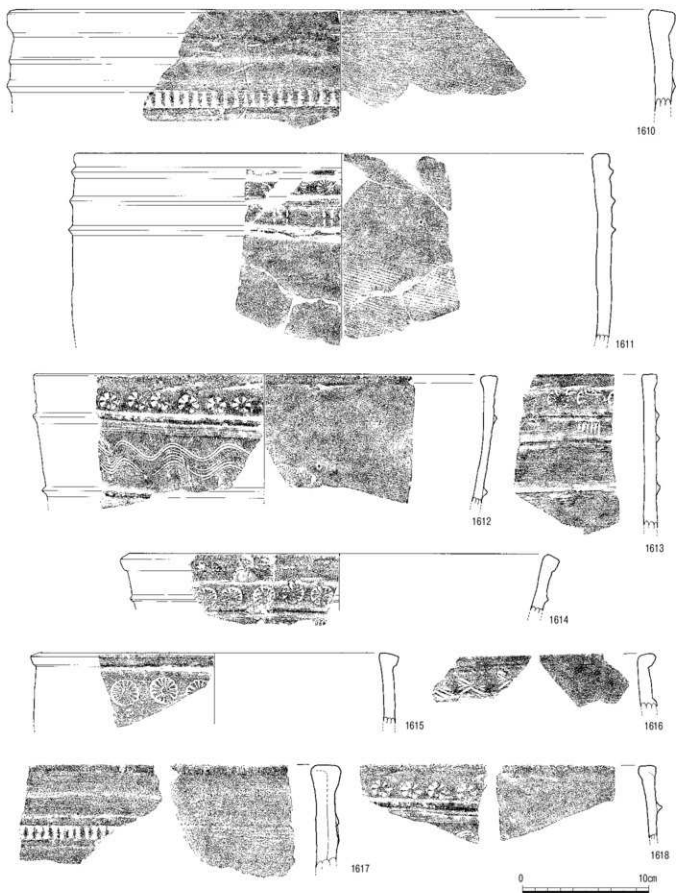
土師質土器（第266・267図）

かまど（第266図）

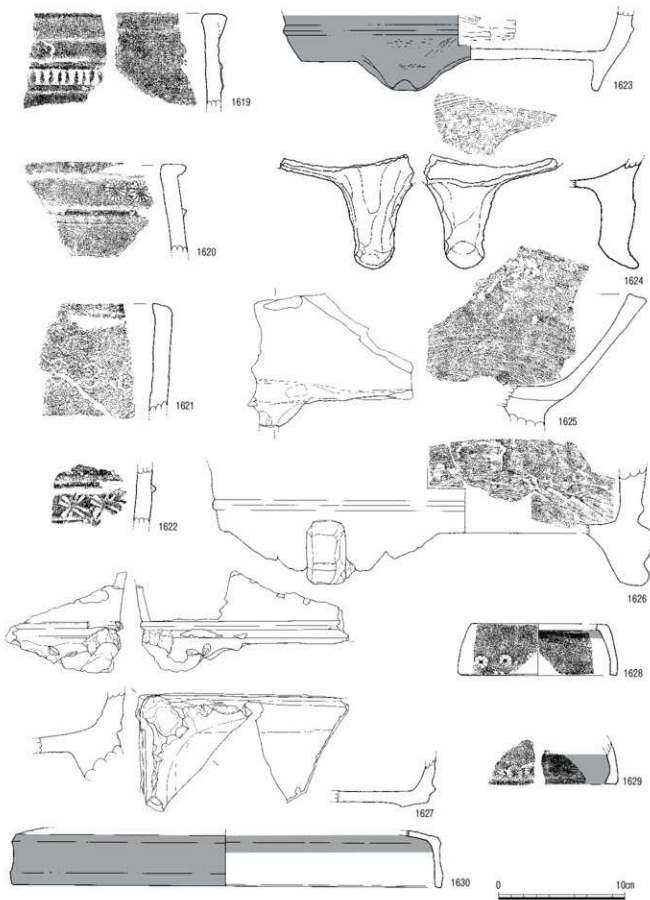
1631は筒形を呈する移動式のかまどである。内面上位に突起が3か所つく。上端には半円状に抉り取られた空気孔が1か所観察される。外面上位に1条の沈線が巡り、内面はヘラ状工具による調整痕が残る。1632は外形が方形、内形が筒形の移動式かまどである。外形と内形の間は中空となる。内形の内側は、ハケ目状の調整痕が横位に残り、突起が3か所付く。胎土には微細な金雲母が入る。上面には☪に喜助の押印がある。



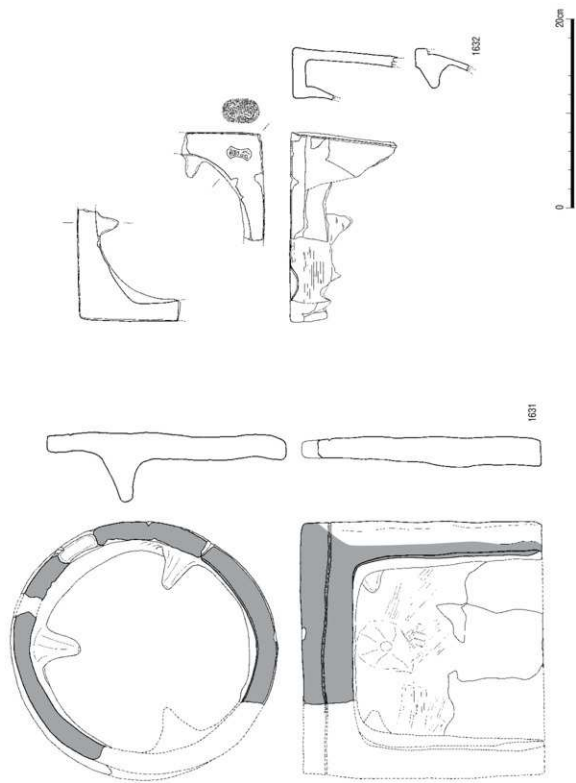
第263図 瓦質土器 4



第264図 瓦質土器 5



第265図 瓦質土器6



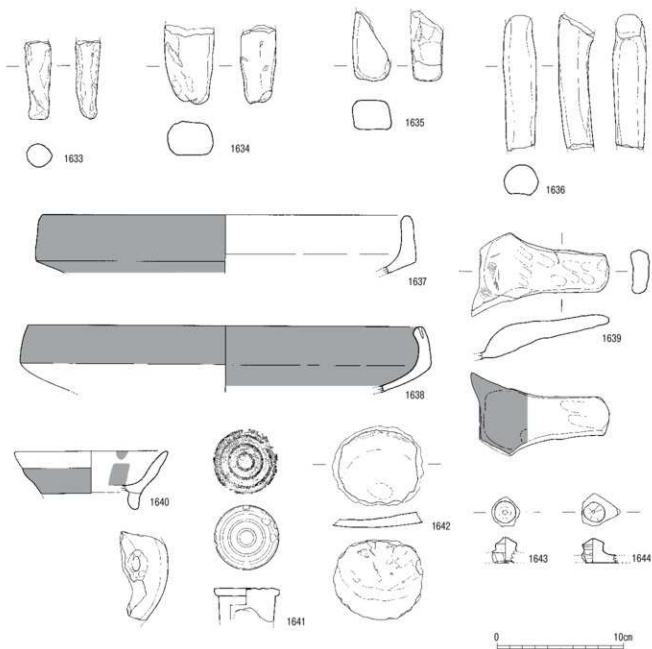
第266圖 土師質土器 1

土師質土器 (第267図)

1633～1636は、土師質土釜の脚部と思われる資料である。土釜には3足の脚が付き、その一部と思われる。1633・1636は断面が円形形状を呈し、1633は先端が外側に反る。1634・1635は断面が隅丸形状を呈するものである。1637～1639は培烙である。中世に相当するものとして報告するが、近世に相当する資料である可能性も残る。1637・1638は外側面に煤が付着する。1639は培烙の把手である。1640は3足付きの坏である。詳細な用途は不明である。

その他 (第267図)

1641は土師質の資料で、上面に同心円状の低い突帯を有するものである。下部は棒状を呈するが、中心は穿孔される。タタキ成形の当て具のようでもあるが、詳細は不明である。1642は瓦質土器の底部を転用したメンコである。1643・1644は宝珠状を呈する蓋のつまみ部である。産地、材質等も含め詳細は不明である。



第267図 土師質土器2・その他

瓦 (第268図)

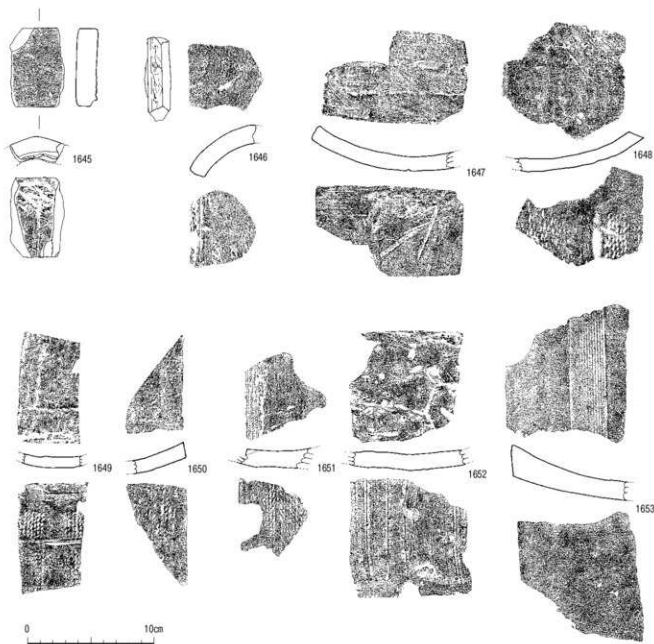
1645～1653は中国産の瓦である。胎土は緻密で、灰色系を呈し須恵器質であるが、色調は灰白色を呈するものほか黄橙色系のもみられる。1645・1646は丸瓦である。1645は長さが非常に短い資料である。1646の左側は切り離しの痕跡が残る。1647～1653は平瓦である。1647～1652は模骨に布を巻き、粘土を叩き伸ばし製作し4分割したもので、内面には布の圧痕が明瞭に残る。外面は縄目叩きが施されるが、縄目をヘラ状工具でナデ消す資料とそのままする資料がみられる。1653は中国瓦

でない可能性が考えられる資料であるが、産地不明であるためここで報告する。胎土は鈍い橙色で、やや粗い。内面に木目と思われる圧痕が残る。外面も丁寧なナデ調整が施され、なめらかな仕上がりととなっている。

滑石製品 (第269～271図)

石鍋 (第269・270図)

1654～1664は石鍋である。ノミ状工具により加工されており、外面には縦位の工具痕が細かく残るものが多い。1654～1656は、浅鉢形のもので、体部は丸みを帯び口縁



第268図 瓦

部はやや内湾する。外面口縁下位に鈎が巡る。1654は胴部中位に2か所、貫通しない穿孔が入れられる。1657は口縁部が内湾しないもので、外面口縁下位には低い鈎が巡る。1658の体部は逆ハの字状に開く。1659～1661は穿孔があげられた口縁部である。1662は鈎部である。体部は丸みを帯び、外面には斜位のノミ痕が残る。1663・1664は底部である。1663は底部と胴部の境に、1664は底面に穿孔があげられる。

二次加工品（第270～271図）

1665～1686は滑石製品の二次加工品と思われる資料である。製品として完成されたもの他、加工途中で廃棄されたものも見られる。用途については不明のものが多い。1665～1670は、石鍋の耳部や鈎部分を二次加工したもので、円形もしくは楕円形の馬連状を呈する。1665は蓋状の形状をした資料である。1667はつまみの中央に穿孔を有する。1670は馬連状を呈する二次加工品としたが、他の用途も考えられる資料である。1671～1677は、滑石を棒状に加工し、表面に縦や横、斜めの沈線を刻んだものである。詳細な用途は不明である。1677は石鍋の胴部を転用したものである。上端を丸く加工している。1678～1682は楕円もしくは筒状に加工された滑石に円穿

孔があげられた石錘状の資料である。1678は上面に沈線を刻む。1683は方形状に加工した滑石の3辺に抉りを入れた資料である。1684は上端に加工した資料である。右側面は口唇部にあたる。1685は楕円状に加工した滑石の一端に穿孔を施す。

石製品（第271図）

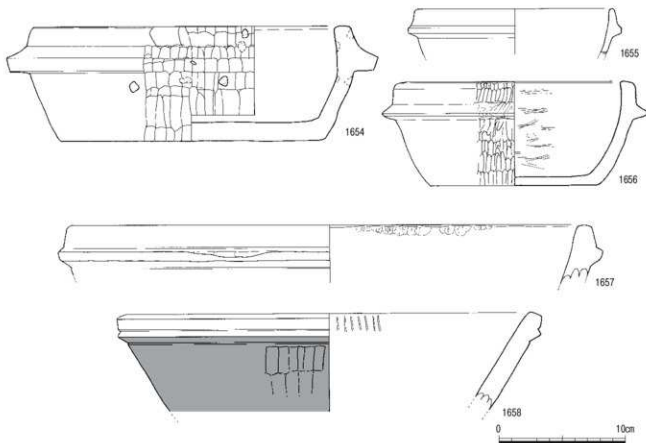
1686は、石製品である。方形を呈する薄い板状の石の中央には、つまみ状に削り出された方形の突起が付く蓋であるのか、詳細は不明である。

砥石（第272図）

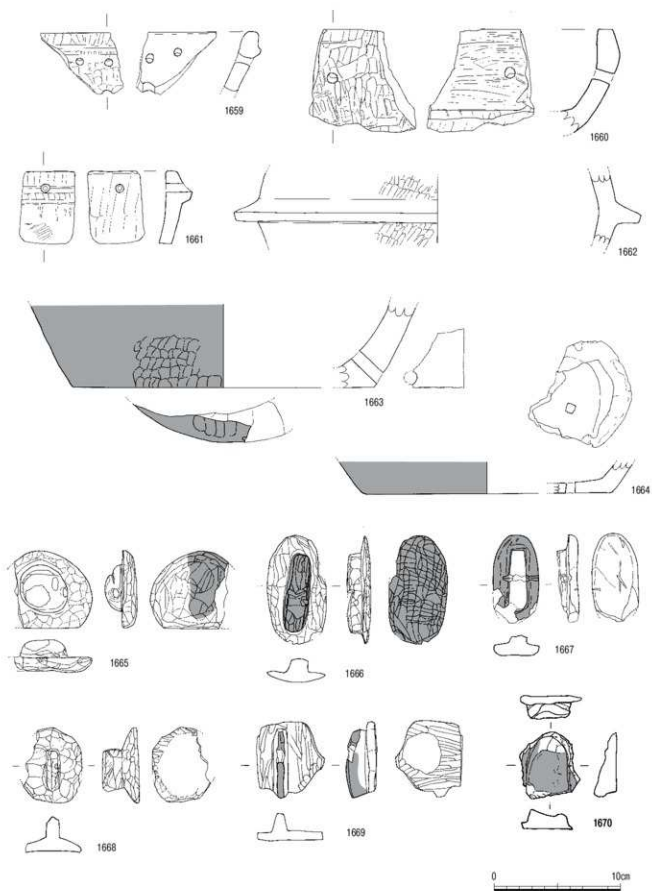
1687～1695は砥石である。これらの詳細な時代は不明であり、中世の範疇で報告するが、近世の可能性も考えられる資料である。1688は、上面と下面の中央に溝状の凹みを有する資料である。1694は下げ砥である。砥石の一方に吊り下げのための穴があげられている。

五輪塔（写真図版69）

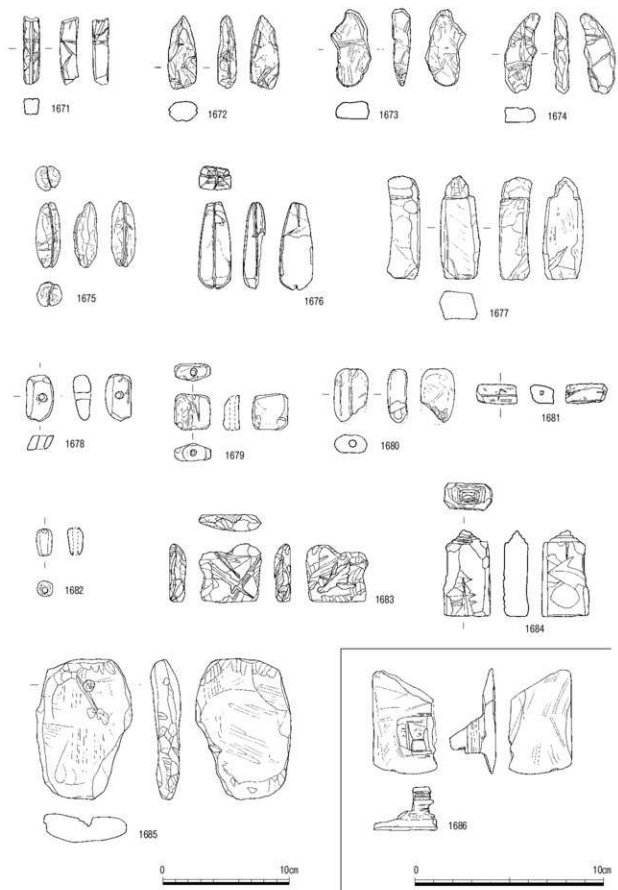
本遺跡の表層からは、五輪塔が出土している。本体の位置はとどめておらず、一か所に寄せられた状態で発見された。写真で掲載することとした。



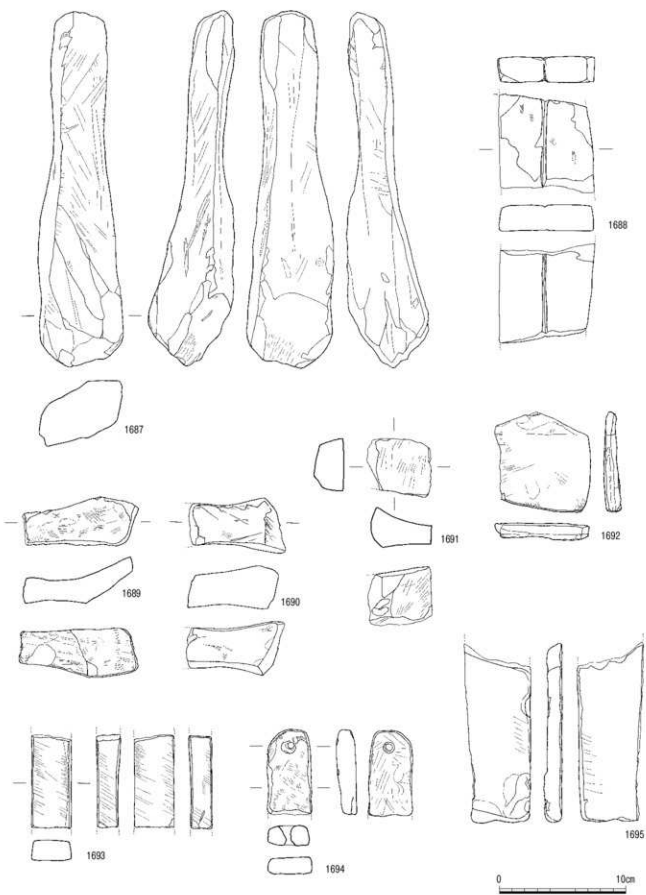
第269図 滑石製石鍋



第270図 滑石製石鎗・滑石製品



第271図 滑石製品・石製品



第272图 磁石

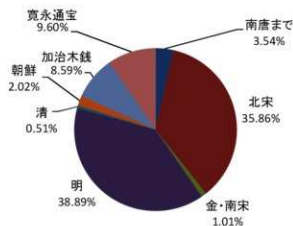
古銭

芝原遺跡では、284枚の古銭が出土した。内訳としては、遺構内遺物が124枚、一般遺物が160枚である。第273～277図では、一般遺物の古銭104枚の拓影を示す。尚、錆や腐食の影響で、複数枚癒着した状態で出土している古銭は、結合した状態のまま1枚とカウントし、結合枚数については、観察表に掲載している。また、解説不明の古銭についても、出土区等の情報を観察表に掲載している。

銭貨名が判明した古銭で、铸造王朝別の構成を見てみると、明銭が77枚で全体の約39%、北宋銭が71枚で全体の約36%を占める。南宋銭は、金の古銭を含めて2枚で、約1%にすぎない。唐銭は出土数7枚で約3.5%、清銭1枚で0.5%、朝鮮銭4枚で約2%、寛永通宝の割合は、9.6%程度になる。

注目される古銭としては、16世紀から17世紀頃、薩摩国で铸造されたといわれている加治木銭が17枚出土した(掲載箇所は観察表参考)。明銭の洪武通寶の銭文をそのまま用い、背面に「治」を鑄出している。内訳としては土坑墓内から10枚、一般遺物として7枚出土している。芝原遺跡周辺では、隣接する渡畑遺跡や万之瀬川上流の上水流遺跡、加世田川畑の花抜園墓地からも加治木銭は出土している。

判明古銭時代別割合



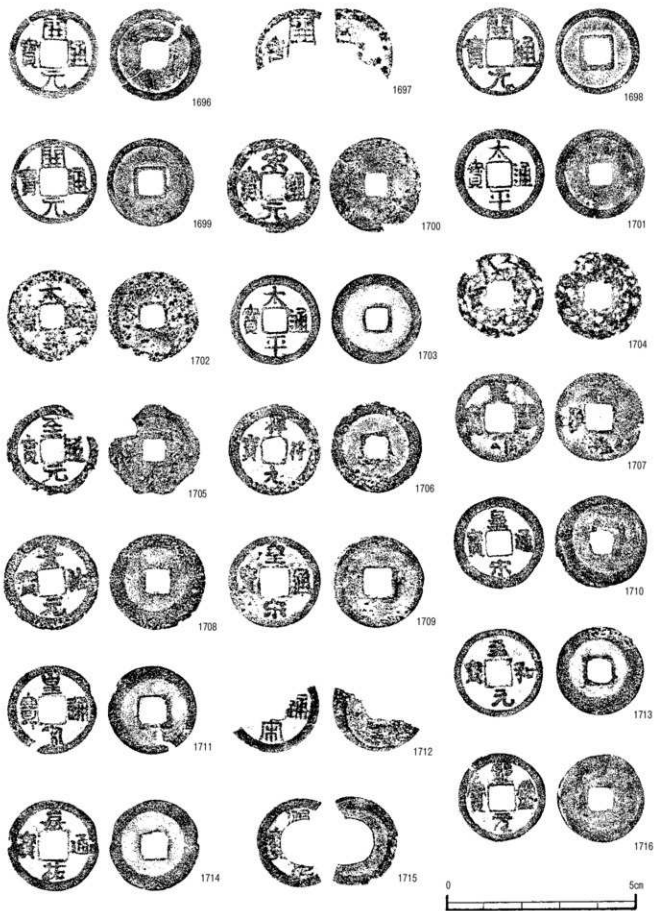
出土枚数として一番多いのは、明銭の洪武通寶で70枚出土しているが、約半分の34枚が土坑墓内からの出土である。洪武通寶の模範銭である加治木銭も半分以上が土坑墓内からの出土であるのに対し、北宋銭は71枚中4枚しか土坑墓内から見つかっていない。これは、芝原遺跡では、北宋銭と明銭の使用目的に変化があることがうかがわれるものである。

また、江戸幕府の鎖国政策以降にあたる、1662年初鑄の康熙通寶が、1枚ではあるが出土している。

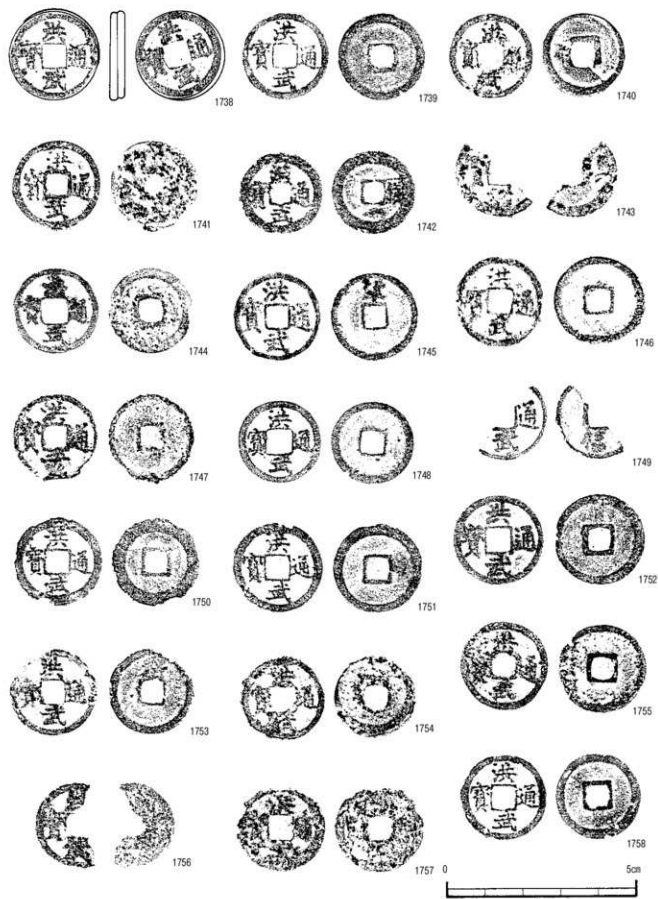
西暦別出土古銭一覧表

銭貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数	
開元通寶	621年	唐	武徳4年	6	熙寧重宝	1071年	北宋	熙寧3年	1	
	960年	南唐			元豊通寶	1078年	北宋	元豊元年	6	
乾元重寶	758年	唐	乾元元年	1	元祐通寶	1086年	北宋	元祐元年	4	
宋通元寶	960年	北宋	建隆元年	1	紹聖元寶	1094年	北宋	紹聖元年	4	
太平通寶	976年	北宋	太平興國元年	8	元符通寶	1098年	北宋	元符元年	2	
至道元寶	995年	北宋	至道元年	2	大觀通寶	1107年	北宋	大觀元年	2	
咸平元寶	998年	北宋	咸平元年	1	政和通寶	1111年	北宋	政和元年	4	
景德元寶	1004年	北宋	景德元年	2	正隆元寶	1157年	金	正隆2年	1	
祥符通寶	1009年	北宋	大中祥符元年	2	淳祐元寶	1241年	南宋	淳祐元年	1	
祥符元寶	1009年	北宋	大中祥符元年	5	大中通寶	1361年	明	明朝建国前	1	
天聖元寶	1023年	北宋	天聖元年	3	洪武通寶	1368年	明	洪武元年	70	
景祐元寶	1034年	北宋	景祐元年	2	永樂通寶	1408年	明	永樂6年	6	
皇宋通寶	1028年	北宋	寶元元年	8	康熙通寶	1662年	清	康熙元年	1	
至和元寶	1054年	北宋	至和元年	1	朝鮮通寶	1423年	朝鮮	世宗5年	4	
嘉祐通寶	1056年	北宋	嘉祐元年	1	加治木銭		薩摩		17	
嘉祐元寶	1056年	北宋	嘉祐元年	1	寛永通寶	1636年～	江戸	寛永13年	19	
治平元寶	1064年	北宋	治平元年	1	近代銭				3	
熙寧元寶	1068年	北宋	熙寧元年	10	解説不能				83	
									出土総数	284

※初鑄年、西暦は「日本出土銭総覧」を参考にしている。



第273图 古钱 1



第275図 古銭3